
(11/14 エヴァ更新)エヴァ、ハルヒ、空の軌跡短編集

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(11/14 ハヴァ更新) ハヴァ、ハルヒ、空の軌跡短編集

【Zコード】

N1133L

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

2011年 アスカ誕生日記念LAS短編「最高のプレゼントー」を公開しました。

アスカの誕生日は12/04ですが、諸事情により先行公開させて頂きました。

七五三記念LAS短編を公開しました。

〈お知らせ〉

8/5の運営から歌詞に関する告知を受けてしばらく非公開にしていましたが、適正に直して再公開しました。それに伴い作品の整理

を行いました。

こちらの作品は2009～2010年に他の投稿サイトに投稿していた物も含まれますが、諸事情により投稿サイトの管理人様に事情を話してこちらで掲載させて頂く事になりました。

新世紀エヴァンゲリオン小説の他に空の軌跡、涼宮ハルヒの憂鬱、犬と猫「晴れたり曇つたりシリーズ」の小説もあります。

作品に関するお知らせ・お勧め小説

↙曲の歌詞をイメージした作品について↙

2011年08月05日に「じファン（小説家になろう）」のゴーザ向けに、

【重要】歌詞掲載ガイドライン というお知らせが届きました。

http://blog.syosetu.com/index.php?item_id=538

この短編集の作品にはいくつか歌詞をイメージした作品がありますが、

自分の文章で書いたものは一次創作と認められ削除の対象とはならないと書かれています。

その知らせを受けて、今回は歌詞をイメージした作品は削除せずに残す事にいたしました。

私が曲の歌詞をイメージした場合には、本文冒頭や後書きにイメージした曲名を書いて公開しています。

ですから、もし私の知らない歌や歌詞や作品の文章と偶然の一致が起こつてしまつたらごめんなさい、故意ではありません。

短編集でも誤解されそうな危険性の高いポエム形式の作品は公開を停止しました。

また、他の連載作品でもハッピーバースデーの歌やハレ晴レコカイ→白石稔Ver.のメロディーを削除するなどガイドラインを守るために努力しております。

また、商業作品を参考にした場合にも、「チルドレンのためのエヴァンゲリオン」前書きのように空の軌跡を参考にしましたと書いて

います。

＜お勧め小説・クレームの多かつた作品の削除＞

二次創作を始めて2年経ちました。

これを機会に読者の方の声を反映させたコーナーを作りました。

私は主観的、短期的に物事の善し悪しを判断するのは好きではありません。

長い間たくさんの方に良かつたと言われた作品タイトルのみを紹介したいと思います。

（2010年度に書かれた作品のみとします）

2010年 シンジ誕生日記念LAS短編 破られたシンジ宛てのラブレター

2010年 七夕記念LAS短編 一番星に憧れて
残暑記念ハルキヨン小説短編 気分は最高っ！

2010年 クリスマス記念ハルキヨン短編 涼宮ハルヒの消失・
後日談 ～サンタの贈り物～

残念ながら、ヨシュエスのお勧めはありません。

2011年度は頑張ります。

作者・朝陽の主観的「隠れた名作」

LAS小説短編 レイとアスカ ～楽しい恋、辛い恋～

また、惣流アスカの更迭の外伝旧第2話や、夏休み記念ギャグ作品など、キャラ崩壊がひどすぎるなどの苦言が殺到した作品も公開停止にしました（汗）

長編の外伝短編作品は、重複連載にならないように長編の本編へ組

み
込
み
ま
し
た。

L A S 短編 早く身長が伸びたい！

僕は碇シンジ。

第三新東京市にすむ中学二年生だ。

昔から気になつてゐる女の子が側に居るんだ・・・・。

その子の名前は惣流アスカ。僕の家の隣に住んでいる幼馴染。僕の両親とアスカの両親は、僕たちが生まれる前から親しい付き合いをしてきた。

だから赤ん坊の頃から僕とアスカは一緒に居ることが当たり前だつたんだ。

アスカはドイツ人の父親と日本人の母親の間に生まれたハーフだつたから、

小さい頃は目の色や髪の色が違つつていじめられていた。

でも、僕はアスカの蒼い目やキラキラとした金色の髪もかわいいと思つたから、

いつも学校から泣いて帰つてきたアスカにそつといつてあげたんだ。そうしたら、アスカはいつも二コ二コして僕の側を離れないようになつたんだ。

僕の両親もアスカの両親も仕事で忙しくなることが多かつたから、晩御飯はどちらかの家で食べたり、テレビやゲームも同じ部屋で、お、お風呂も小学校に上がるまで一緒だつた。

学校でもベッタリだつたから、よく友達にはアスカはシンジの奥さんだつてからかわれる。

幼馴染のアスカを女性として意識し始めたのは中学校に上がつたころだつたかな。

アスカも僕の事をいろいろ気にかけてくれて、いい感じ……なんだけど、僕には悩みがある。

もともとアスカは活発な子だから、男の子がやるような遊び、サッカーとかに参加するようになつて、

さらに牛乳も大好きで、小学校高学年のころにはグングンと背が伸びて行つたんだ。

中学一年生になつた今でも、アスカの方が僕より身長が高い。

「ねえ、シンちゃん。お菓子が無くなつたから新しいの出してよ」

アスカは僕の家のリビングで、ソファーに寝転がり、ポテチをかじりながらテレビを見て居た。

タンクトップにショートパンツと言つ露出の多い服装は、田のやり場に困つてしまつよ。

「もう、夜も遅いし家に帰つて宿題をした方がいいんじゃないの？」

「えー、今日泊めてよ。ウチも今夜両親いないし」

僕はアスカのこの言葉にあせつて、体中から汗をたらしながら大声で言い返した。

「と、泊まるつて、父さんも母さんも居ないんだから、絶対ダメだよー。」

「僕たち、もう中学生なんだよー付き合つてもいない男女が一緒に泊まつたりしないのは当たり前じやないか！」

僕がそう言つと、アスカは身を乗り出してその可愛い顔を僕に近づけてきた。

「じゃあ、付き合えばいいじゃない。この前も返事を先延ばしにしてなかつたっけ？」

「そ、それは僕の身長がアスカに届いてから……」

僕はアスカに聞こえないような小さな声でボソボソと言い返すしかできなかつた。

下を向いてうつむいていると、アスカは台所にある戸棚の側に立つていた。

お菓子の入つている引き出しほ、踏み台がないと取れない位置にある。

アスカは椅子では無くて、古い木の踏み台を使おうとしているみたいだけど……。

いけない、確かあの台は相当古くなつてもう捨てようと思つて出していたものだ。

怪我でもしちゃ大変だ。僕は急いでアスカの下に駆け寄つた。

「アスカ、その台は……」
「なあに、シンちゃん？」

台に乗つたアスカが僕の方を見ようと後ろに振り返る。

そしてバランスを崩してアスカは正面から僕に倒れこんできた。体が折り重なる。

アスカの体は意外と軽い。そして柔らかい。甘いにおいがする。僕がアスカの倒れる衝撃に慄いた（注1）時に閉じた目を開くと、至近距離にアスカの柔らかそうな唇があつた。

アスカは僕と目が合つと、突然僕の顔を両手でつかんで、唇同士を遭遇させた……つまりキスをしてしまつたんだ。

何秒くらいキスをしていたんだろう。僕らは夢のよつな体験から目を覚ますと、お互の体を解き放した。

「えへへ。シンちゃんとキスしちゃった。」

「アスカは真っ赤な顔で上目遣いで僕の事を見ている。とてもかわいい。」

「こつなつたら僕も覚悟を決めて言つしかない。」

「アスカ、順番は前後しちゃつたけど、ほ、僕と付き合つてくれないかな？」

アスカはそのかわいい唇に指を当てるて考え込むような仕草をして、こつ答えた。

「あれ？アタシの身長を追い越すつて話は？」

「え？わかつてたの？」

「普段からシンちゃんの事見てたらわかつちやつ」

はは、すっかりお見通しか。アスカにはかなわないよ。

アスカは僕の後ろにまわつて、腕を僕の首に巻き付けて背中からギュッと抱きついてきた。

「シンちゃんはこれから背が伸びて行くんだから、こんなことができるのも今のうちね。」

今日、僕とアスカは幼馴染に別れを告げて、彼氏彼女と言つ関係になつた。

注1 條へ むののべ。ヒトモビックするヒトの意味。

＜後書き＞

甘いレモンを書いたり書かざるものとなってしまった。
ネタは漫画版ヒカルのコージンの説明を参考してアスカとシンジ
の身長の差を見て思つきました。

多重クロスLAS短編 犬系男子と猫系女子。

「Jの作品は新世紀エヴァンゲリオンと英雄伝説空の軌跡と犬と猫さんの作品「晴れたり曇つたりシリーズ」との多重クロスです。

「はーつ、ダルいわねえ」

「おいおい。そんなどらしない姿勢でお姫さんが来たらどうするんだよ」

「うつさいわね、こんなひどい雨じゃ誰も来ないわよ」

イヴはアイトの小言にふくれた顔をしながら寝ていた体を起こし、カウンターに座りなおした。

この赤い髪をツインテールに束ねたルビー色の瞳を持つ気が強そうな少女はこのレストラン、海猫亭の店長兼コック兼看板娘。海猫亭は元々宿屋の食堂だったのだが改装して、レストランとして再スタート。まだ始まつたばかりで客足もそう多くない。

よつて豪雨の中わざわざ食べに来る客も居ないと言うイヴの推理は正しかつた。幼馴染のアイトも外仕事ができず暇を持て余してきているのだが……。

「なーんでアイトと二人つきりなのよ。フィル君は来てくれないの？」

「あいつはドブ掃除のバイトがたくさん入つて稼ぎ時みたいだな」

イヴは数年前に移民船に乗つてこの街イシュワルドにやつてきた少年、フィルに一日ぼれしていた。

面食いなイヴなのだが、女の子のよくなかわいい顔の少年に引かれたのだ。本人は男っぽく見られたいと思つてゐるみたいだが。

「あーもつ最低、ビショビショ」

「アスカ、早く着替ないと風邪引くよ」

「そうそう、早く脱がないと！」

「こきなつこいで脱毛出しちゃダメだよ、エスティル」

宿屋の方から騒がしい声が聞こえる。この豪雨で濡れ鼠になつた旅人の四人組のようだつた。

イヴの母親であり宿屋の女将であるイザベラが部屋まで案内していのだらう。騒がしい声は遠ざかつて行つた。

「どうやら彼らの夕食をつくることになつたんだな」

「そのよつね。面倒くさこわ」

イヴの答えにアイトはため息をつく。料理と言つてもレーベックの問屋で仕入れた料理を温め直して出すだけだらう。自分でも料理を作れと言いたかったが、言つても無駄だらうと思つた。こいつのは本人が自覚しなければならぬ。

「アイト、ぼーっと立つていで掃除でもしてよ。テーブルにぼこりがたまつてゐじゃない」

「はあ？俺は客だぞ。何で掃除なんか」

イヴに雑巾とモップを押し付けられた。アイトは自分の家に居た方がマシだつたなと思つた。ひるまい姉から逃れるためこじりつて来たのこ。

「食事が終わつてもダラダラこじり面倒のは廢とせぬわないので。時間が無いから急いでね」

「仕方ないな」

宿屋に泊る四人組がそろそろ部屋で荷物の整理などを終えて出て来るころだ。時間が無いのは本当の事だ。

アイテムはテキパキと掃除をこなした。騎士団に所属するアイテムにとっては掃除は朝飯前だ。掃除を終えると同時にくだんの四人組が店に入つて来た。

イヴは入つて来た客の中でシンジに目を付けた。

「お、かわいい男発見……でも「アツあか。あんな生意氣やつな女の「ジ」が良いんだわ」

イヴはシンジの側に寄り添つてゐるアスカを見ていらだたしくため息をついた。こつちは一人身だつて言うのに、畜生。そんなことをイヴが思つてゐると、エステルが店の中に立つてゐるアイトに声を掛けた。

「あーお腹空いた。ウェイターさん、席に案内してよ」「えっ、俺?」

エステルに店員と勘違いされたアイトを見てイヴは吹き出しそうになる。アイトは弁明するのを諦めて四人をテーブル席に案内する。

「ふーん。さえない店ね」

「アスカ、ダメだよ本当の事言つちやー！」

アスカの嫌味とシンジのダメ押しによつてイヴの短い堪忍袋の緒は速攻切れた。

「イヴの店をバカにしたわね！」
「だーつ。イヴ落ち着けつて」

アイトがいきり立ったイヴの肩を抑え込んでなんとかカウンターの中に座らせようとする。シンジは自分の自爆に気づいてオロオロするだけ。エシュアはため息をついてへたり込んでいた。

「お腹空いたー。早く何か食べさせてよー！」

空気を全く読めない『おつにゃん』娘のエステルが大声でその場の緊張感をぶち壊しにした。アイトがメニューを片手にテーブル席に近づく。

イヴはある程度怒氣を抜かれてカウンターに座り込んだ。

「わー。何から食べよっかな」

「えーっと何を選ぼうかな」

「シンジは全く優柔不断ね。どうせたいしたことないんだろ？」「アタシと同じのを頼めばいいじゃない」

アスカの嫌味にイヴはこめかみをひくつかせていたがなんとか自制していた。

「じゃあとりあえず、アルナダそばとイシュワルド御飯、ヤイナそばを3人前ずつね」

「ええつ！？」

「何よそれ、シオちゃんより食べるんじやない

アイトとイヴはエステルの注文に驚いてしまった。友だちである女冒險者のシオもたくさん食べるが、その3倍ぐらいの量を注文したのだ。温めるだけの料理ならまだいいが、本格的に料理するなら一人ではとてもさばききれない。

「どうぞ。お待たせしました」

アイトはたくさん料理が乗ったトレーを持ってテーブル席に次々と運搬していく。エヌテルの側には空の食器が山のようくに積まれている。

空の食器を回収するのも一苦労だった。とてもイヴ一人ではこなせない仕事だろう。

「アイトが居てくれて助かったわ」

「さすがにあれだけの量をイヴに持たせるわけにはいかないからな」

二人の和やかな雰囲気をぶち壊しにしたのはテーブル席から聞こえるアスカの嫌味だった。

「どの料理もおいしくない。よくこんなのをたくさん食べられるわね」

イヴは我慢しきれなくなつて、テーブル席にツカツカと歩いて行つた。

「イヴの料理に文句があるつていうのー」

「ありまくりよーそばだつて御飯だつてどうせ出す時に温めただけなんでしょう? 何よ庭の井戸水つて! 小麦粉をそのまま客に食べさせるなんてバカじやないの?」

「イヴはバカじやないもん! 大学だつて出てるんだからー!」

「アタシだつて大学を出ているわよ」

下らない言い争いが始まった。確かに最初にアスカが指摘した事は正しい意見なのだが逆切れしたイヴはそれ以外の点でアスカと争い

始めた。

疲れた表情を見せて見守る他のメンバーにヨシュアが助け船を出した。

「何かゲームをやって決着をつければどう?」

「それはいいわね。じゃあ王様ゲーム方式で、ポーカーをやりましょう」

「ちょっと、勝手に決めるんじゃないわよ。イヴは大富豪がやりたいわ」

「ふふーん、逃げるんだ」

「受けて立つわよ!」

イヴはアスカの挑発に乗り、シンジたちを巻き込んでポーカー大会が始まつた。

「ちょっとーーアンタ、イカサマしたわね!なんでブタばかり続くのよー!」

「ふふーん。そんなこと知らないわ。これでスコアのトップはイヴのものね」

アスカはポーカーは大得意だったのだが、予想以上の札の悪さに悪戦苦闘したまま、健闘したが2位で終わってしまった。

アスカはとても蒼い顔をしていた。シンジが予想通りビリになつてしまつたら、紙に書かれたあの『王様の命令』が実行されてしまう。シンジがポーカーにとても弱い事はよく知っている。お願い!シンジをビリにさせないで、とアスカは祈つていた。

「ついてないな。俺がビリか」

アスカの祈りが通じたのか、シンジはブービーでアイテムがビリにな

つた。アスカはほつと胸をなでおろす。

イヴが紙を開くと、『一位の人と最下位の人は早朝浜辺でラブラブデート』と書かれていた。

アスカが紙を開くと『ブービーの人は一位の人に何かプレゼントする』と書かれていた。

「げげっ！ なんてこと書いてるのよ！」

「やつたあシンジにプレゼントしてもらえる」

イヴがアスカに抗議をするが、幸せいっぱいになつたアスカは全然聞いちゃいない。イヴは罰ゲームのつもりで書いたのだが、喜ぶアスカを見てがつかりとした。

ちなみにヨシュアが開いた紙には『三位の人は四位の人にキスをする』と書かれていた。

翌朝。イヴとアイトは浜辺を一人で歩いていた。それを尾行する四つの影もゆっくりとついて行く。

「なんでアイトと歩かなきゃならないのよ」

「俺もこんなこと言われるなら、お前と付き合わなきゃよかつたよ」

「デートをすっぽかすのが悪いんじやない」

イヴは不機嫌そうに足元にある石を蹴りあげる。

「いきなり平手打ちで別れ話だぜ？ あの時は事情があつたって何度も言つてるだろ？ が」

「アイトがみんなに優しいんだもん」

「え？」

「イヴはアイトの優しさを一人占めしたかったの。だから用事なんてすっぽかして来てほしかった」

「『めんよ、俺、お前がそう言つ氣持ちだと知らなかつたから……』

アイトがイヴの肩を抱いて顔を近づけて行く……

「アイト、ストップ！」

「え？」

「遠くからのぞいている四人、出て来なさい。『ご飯作つてあげないからね』

すると浜辺にエステルが姿を現した。諦めてアスカたち三人が続いて出て来る。

「えへへ、見つかっちゃつた！」

「まったく、油断も隙も無いんだから」

「『めん。今夜も御飯つくつてよ、ね？』

「……まあ今日のところは許してあげるわ」

イヴはアイトの方をチラッとみて少しだけ顔を赤くして言った。

「アンタ、これからはもう少しマシな料理を作りなさいよね。温めるだけの料理なんて、レストランの人気が出ないわよ」

「わかつてゐるわよ。イヴにかかれば料理なんてちよろいんだから……」

「今日もウェイターの仕事が必要になりそうだな」

六人は仲良く海猫亭への道を歩いて行つた……。

LAS小説短編 テートじゅなくて暇潰しなのよー

「アスカ、ミサトさんが水族館の入場券を一枚くれたんだ。」

「ふーん、それで？」

「あ、だから……その……」

「ま、来週の日曜は暇だから付合いであげてもいいわよ」

アタシがそうこうとシンジのやつは玩具を買つてもらつた子供のように喜んでこる。

バカね、あれじゃあ、はしゃいでいるのが丸わかりじゃない。

アタシはシンジの鼻先に人差し指を付きつけて言つてやつた。

「勘違いしないでよ? これは『テートじゅない』の。暇つぶしよ、ひ・ま・つ・ぶ・し!」

「うん、分かつてるよ」

アタシがそう言つてもシンジの顔は緩み切つている。全く、分かっているのかしら?

アタシは部屋に戻つて今度の『暇つぶし』に備えて洋服の衣装合わせ。

鏡に映る自分の顔はまるでときめこてこいる少女のよつたな顔だった。

アタシが何度もほおを叩いても元に戻つてしまつ。
もう一シンジのやつにこんな顔を見せたらなめられやうじやないのよー！

「まあ、シンジにしては上出来よね。綺麗な魚も見えるし、デースポットの定番じゃない。」

シンジの顔がみるみるうちに赤くなつていいくこと、アタシは自分の失言に気付いた。

「暇つぶしにもまあ、悪くは無いわー！」

アタシは慌ててそう言になおした。シンジは相変わらず「ヤーヤーヤ」している。全くもうー！

休日の水族館はカップルの他に家族連れでも賑わつて人混みで溢れ返つていた。

「シンジが迷子になつたら困るから、仕方が無いから手を繋いであげるわー！」

「アスカ、真っ赤な顔をして怒つているのー！」

「違うわよー早く手を出しなさいよー。」

アタシはそう言しながら自分の顔が火照っているのを感じた。

シンジは腫れ物でも触るかのよつと手を握つて来るんだけど……。

これじゃあ簡単に引き離されちゃうじゃない！

アタシはシンジの肩に自分の肩を寄せて強引に自分の腕を組み入れた。

「熱帯魚つきれいねー。」

「うん、いろいろな模様があつて見ていて飽きないね。」

「うわあ、大つきい魚ね。」

「うわあ気持ち悪い。何、この魚。」

「深海魚だね。光の届かない所で暮らしているからこんな姿になるんだ。」

シンジは水族館の中を歩いている間、四半世紀前のロボットのよつとしない動きをしていた。

これじゃあアタシがシンジを脅かしてこむつて見えちゃうじゃない！恥ずかしつたらありやしないわ。

お昼を食べてから最後にイルカショーを見た。やつぱりどこの水族館もイルカショーは目玉みたいね。

事前にチケットを買つていないとイルカに触れないみたいだからアタシは諦めていたんだけど、シンジのやつがチケットを買つてくれたみたい。

あれ？この水族館のチケットってミサトがくれたって言つてなかつたつけ？

その時は違和感の原因に気が付かなくて、イルカに触れたつて單純に喜んでいたけど、帰る時にその事に気が付いて顔の表面温度がまた上昇してしまった。

「アタシ、来週の日曜日も偶然暇なんだよね」

「アスカは委員長と遊びに行つたり忙しいと思つたんだけど、日曜日は暇なの？」

「割とね」

「何が、ミサトさんがまた映画のペアチケットが2枚余つたつて言つてたと思つよ」

ふーん、白々しい言い訳をしちゃつて。アタシの方もそりやおか

しことは思つてゐるけどさ。

「ミサトって加持さんとよりを戻したつて聞いたけど、データキャンが無いのね」

「た、たぶん加持さんもミサトさんも仕事が忙しくて都合が合わないだけだと思つよ」

次の日曜日にシンジと見た映画は『豪華客船沈没』と言つ映画だった。

たくさんの乗客が乗つた豪華客船が沈没してしまつ映画で、主人公の新聞記者の男性が離れた足場に飛び移つたり、天井にぶら下がつたりとアクション性が高い。

特に結婚したばかりの奥さんを抱きかかえながら跳ぶシーンには見惚れてしまった。

「アスカ、映画館の中では迷子にならないけど、なんで僕の手を握るの？」

「冷房が利きすぎて寒いからよつー。」

その週の水曜日、アタシは学校でヒカリに週末の予定を聞かれた。

「ねえアスカ、今度の日曜日に一回でいいからトーントークしてくれない？」

「え？ 何でアタシが知らない男とのトークしなくちゃいけないのよ」

「コダマお姉ちゃんが勝手に約束しておきちゃつたらしいのよ。アスカを紹介して欲しいって言われて」

ヒカリは必死に手を合わせて頬みこんでくるけど、アタシは首を縦には振らなかつた。

「アタシは日曜はその……いろいろ予定があつて忙しいのよ」

「アスカは先週も先々週もそんなこと言つてたね？ もしかして、碇君と？」

「なんで、バカシンジが関係するのよ！ ネルフの仕事よ、仕事！」

「ふーん、じゃあ碇君に聞いてみよっかしら」

したり顔でそう言つヒカリにアタシは黙り込むしかなかつた。

来週の日曜はどんな『暇つぶし』をしようか、アタシはドキドキしていた。

水族館、映画館と来たら次は遊園地かな？

お化け屋敷でシンジのやつに抱きついてやつたり、一つのジュー
スを一人で飲むとか言つたらシンジはどんな顔をするかしり、樂
しみね。

でも、アタシがいくら待つていてもシンジは誘つて来なかつた。

シンジ、今日はもう土曜日の夜だよ、誘つてくれないと間に合わ
なくなつちやつよ。

アタシは不安やうな表情でシンジの顔を眺めていたと思つナビ、
シンジはアタシの方を見ようともせずに一人で考え込んでいた
いだつた。

シンジがたいして喋ららずに暗い表情で部屋に入つて行く後ろ姿を
見送ると、アタシはミナトに聞いてみる事にした。

「シンジつじば、陰気な顔しちやつじうしたの？」

「里口シンジさんはお母さんの命日で呪令と一人でお墓参りに行
くのよ」

「アホくせ、会つのが嫌なら断ればいいじゃん」

「嫌でも無いみたいだからやつかいなのよ」

そう言つて立ちあがつたミナトはシンジの部屋のドアを少しだけ

開けて何や？シンジと話してくる。お互に小さく声でリビングから
じや聞こえない。

アタシは何と無しに自分の携帯電話をこじりてヒカリに電話をかけた。

「ヒカリ、明日のデートの件だけ今から大丈夫？」

「ええつ、明日は碇君とデートじゃないの？」

「あいつ、用事があるんだってわ。だから暇になつたのよ

「やうこわいとなつて、向いひは喜んで〇〇すると思つんだが…

…

次の日アタシがテートから戻つて家に帰ると、シンジが椅子に腰かけてチョロを弾いていた。

聴き終わつたアタシがリビングに姿を見せて拍手すると、シンジは驚いてアタシの方に振り向いた。

「結構つまいぢやない

「小ちこ頃からやつていてこの程度だからね」

「シンジの事見直したわ

本当はかなりシンジの事を見直したんだけどねと心の中で呟いた。

アタシは話ながら奥の部屋に入つて寝つ転がつた。

「夕飯を食べて来るんだと思ったよ、意外と早かったね

「つまらないから逃げて来ちゃつた」

「相手の方が驚いたんじゃない?」

嘘よ。本当は相手がキスしようとか下心丸出しで迫ってきたから怖くなつて逃げて來たの。

あと……シンジの作る夕食を食べ逃したくないと思つたし。

アタシがお風呂からあがると、シンジはワビングで電話を受けていた。

アタシは下着にTシャツ一枚と言ひスタイルで話しかけた。

「//サト?」

「うん、遅くなるから先に寝ててつて」

「じゃあ今夜は一人つきりつてわけね

アタシがそう言つて、サインを作つて、ウインクしてやると、シンジは慌てた表情になった。

そして、アタシはそのままシンジに、じり寄る。

「ねえシンジ、キスしようか？」

「ええっ、なんでー!?」

まだシンジに本当の気持ちを打ち明けるのが怖い。シンジはアタシに好意を持ってくれる事は分かるけど、今の関係を壊したくない。

だからまたアタシはあの言葉の魔力に頼つてしまつ。

「暇つぶしよ、暇つぶし」

「King Of University?」

「そうだ、碇。この大学で行われている男子の人気投票だ。知らないのか？」

そう言ってケンスケは僕を呆れた顔で見た。

僕は碇シンジ。第三新東京大学に通う一年生だ。

第三新東京大学は学部の数も多くて門戸も広い。

中学校の頃からの友達のケンスケとトウジも学部が違うけど同じ大学に入学できている。

「碇も出てみないか？結構いい線行くと思ひぜ？」

「そんな、僕なんか目立たないよ」

「意外とかっこいいだけじゃなくて、母性本能をくすぐるような感じも人気があるんだぜ」

「センセもあかんに似て女子みたいに可愛い顔してるやないか」

ケンスケもトウジも、僕の顔が女性っぽいってしようからかうんだ。

僕はもっと男らしくなりたいのに。そう、僕にはもっと男らしくなりたい理由があるんだ。

「惣流もきっと投票に参加すると思うぜ」

「せやせや、大学中の女子のほとんどが参加するって話や」

惣流アスカ。僕の小さいころからの幼馴染で憧れの女性でもある。僕は小さいころに隣に引っ越してきたアスカに一目惚れしてしまつ

たんだ。

でも、僕より背が高く、金髪蒼眼の彼女は僕を幼馴染としてしか見てくれていな。

「惣流は碇が出場すれば、きっと碇の名前を書くと思うナビ、碇が出ないんじゃ他のやつの名前を書くしかないんだろつな」

そういうつてケンスケは意地悪そうに笑うけど、僕は挑発に乗るまいとこらえていた。

「そいや、惣流は最近渚のやつと仲が良かつたんぢゃうか?
「渚も出場するつて言つてたな。あいつのルックスならいい所まで行くんぢゃないか?」

渚カラル君は高校生になつてから僕たちと知り合つた友達だ。
楽器の演奏も僕よりつまいし、かつこよくて女の子にも、もててい
る。

アスカとカラル君は周囲からお似合いのカップルだと言われることもある。

そのたびに僕の胸は痛むんだ。

「きっと、惣流は渚の名前を書くんぢゃないか?」

そのケンスケの言葉を聞いたとき、僕の我慢も限界を迎えた。

「……じゃあ、僕も出るよ
「よしあ、じゃあセンセの名前で登録しておへでー」

トウジが嬉しそうにそう言つて駆けだして、その場に残つたケンス
ケは僕の前で含み笑いをしている。

「くつくつく……」それで碇の写真の売り上げも倍増だ

やつぱりそのつもりだつたか。

僕はケンスケにハメられたことがわかつたけど、出場するからにはカラル君に負けたくなかつた。

アスカに何か男らしい所をアピールして見てもらわないと。そう考えた僕は投票までの間に努力をすることにした。

「ねえ鈴原、なんで碇君は突然音楽サークルを辞めてラグビー部に入つたの？」

「なんや、男らしくなりたいなんて急に言いだしたんや」

洞木さんも僕の様子を見て、トウジに何やら聞いているみたいだつた。

彼女も僕たちの友達で、特にアスカの親友でもある。

洞木さんからアスカに僕の様子も伝わつていると思う。そりやあ僕なんかが試合に出れるわけ無いけど、自分も強いつて見せるには練習している姿を見せるのが一番だと思つたんだ。でも、アスカ本人はなかなか見に来てくれない。残念だけね。

ラグビー部に所属して、そんなに日は経つてないけど僕は一生懸命頑張つたから少しは体つきも逞しくなつたみたい。

体力や筋力もそうだけど、特訓や練習試合を重ねるうちに闘争心が周りのみんなに触発されたのか僕にも芽生えるようになつた。

『King Of University』の投票日になつた。エントリーした人がアピールするためのコンテストが開催されるみたいた。

この大会は報道部のサークルが仕切つていて、毎年大学の外からのお客様やマスコミが取材に来るほどの大きな大会だつたみたいだ。

僕は初めて知つて驚いて緊張したけど、ここまできたら負けたくないと思つてステージの上に堂々と上がる事が出来た。

アスカは……客席から僕の方を見ている。隣には洞木さんも居る。僕にはアスカの表情があまり明るくないよう見えた。僕がコンテストに出たことに失望しているのかな。

でも、コンテストでアピールできればきっとアスカが僕を見る目も変わってくれるはずだ。

ステージの上で一人ずつ紹介されて行く。僕も堂々と振る舞えて悪くないと思う。

……黄色い歓声を投げかけてくれる女の子たちも居たし。

「それでは、今年のサプライズイベントは出場者同士による相撲大会です！」

司会者が告げると会場は騒然となつた。このイベントを企画するサークルの田玉であるイベントは毎年内容が変わる事が楽しみの一つとなつてゐる。

今回は事前準備が要らないと言わされてホッとしていたけどいくらなんでも相撲とは驚いた。

ステージの上に即席の土俵が用意される。もちろん正式なものではないので実際のものよりも小さ McCoy 土俵だ。

僕は運命のいたずらなのか、カラル君と対戦することになつてしまつた。

今までの僕はこんな争い事にはしり込みしていたけど、負けたくないと言う気持ちが湧きあがつていた。

ラグビーで鍛えたのが影響したのか、なんと僕はカオル君を突進で押し出し、勝つてしまつた。

会場からも歓声や僕を褒めたたえる声が聞こえて来る。

さすがに僕は優勝できなかつたけど、なぜかカラル君よりは順位は上だつた。

僕は満足感に包まれながらも会場を後にして、アスカと洞木さんの所に向かつたんだ。
でも、そこには気まずそうな顔をした洞木さんしか立つていなかつたんだ。

「あれ？ アスカは先に帰つちやつたの？ てつり僕に投票してくれると思ったのに」

「碇君、ショックを受けないで聞いてくれる？」「

そう言って洞木さんがアスカの投票用紙を見せる。そこには『渚カヲル』と名前が書かれていたんだ。

心臓の血が逆流するような感じにとらわれた。

僕は洞木さんを突き飛ばしてその場を走り去つた。
洞木さんが悲鳴をあげて地面に叩きつけられても、僕は振り返りもしなかつた。

その時の僕はただただイライラしていたんだ。

家に帰つてもイライラは収まらなかつた。
自分の部屋に閉じこもつた僕を母さんが心配して声をかけてくれたけど、僕は答えなかつた。

それどころか、僕はせつかく母さんが作つてくれた夕食をテーブルから全て叩き落としたんだ。

お皿が碎け散る音が響いて、母さんはとても驚いた顔をしていた。
でも、僕はやっぱりショックを受ける母さんを放つて、自分の部屋に籠つてしまつた。

父さんが帰ってきて、怒られた。

何を言わっても黙っていた僕は家から叩きだされた。

僕はそれでも怒りがおさまらないくて、家の庭に出させていたプラスチック製のゴミ箱を形が変形するほど蹴りつけていた。

隣の惣流家の二階の部屋の電気が消えて人が階段を降りて来る気配がする。

多分、アスカだ。僕は逃げなくてはいけないと思いながらも、足は鉛のように重く動かないように感じた。

そうこうしている間にアスカが僕の前に姿を現した。

「シンジ……アンタ、コンテストの会場でヒカリを投げ飛ばしたんだってね……そしてシンジのママからアタシのママに電話があったけど……泣いていたみたいね」

アスカの言葉が自分の胸に突き刺さる。
僕は一の句も告げる事が出来なかつた。

「今のシンジは強いと思う。でも人を傷つける強さなんて、本当の強さなんかじゃない！ 間違つた強さよ！」

「アスカ……僕は……」

「アタシは今までのシンジが好き。無理に男らしくならなくとも、相手のことを思いやる優しいシンジが昔から大好きだつたの」

「でも、アスカはカラル君のことが好きなんじゃ……」

「あれはシンジが優勝したら、アタシがシンジの側に居る事が難しくなつちやうじやない、だから渚の名前を書いたのよ」

そう言って照れたアスカはとつてもかわいかつた。

「素直にシンジのことを好きって伝えられなかつたアタシが悪かつたのね。そんなアタシに罰を頂戴

「

アスカは唇を僕に向かつて突き出した。キスが罰だつて？アスカの言い分に僕は苦笑しながら……唇を重ねた。

ショッぱい……まさかアスカは泣いていたの？……荒れる僕を見て。僕は、僕なんかのために涙を流してくれた幼馴染の恋人を一生守つていこうと固く心に誓つた。

そして、母さんと洞木さんには謝罪とアスカとの交際報告を同時にすることになつたんだ。

母さんも洞木さんも僕のしたことを許してくれて、アスカのことも祝福してくれた。

「あーあ、僕も一回ぐらい King Of University で優勝してみたかったな～」

あれからしばらくして僕が冗談混じりにそういうと、アスカは笑顔でこう答えた。

「アンタはアタシにとつての King Of University になつてるわよ」

ある晴れた日の事。

アスカとシンジは第三新東京市の商店街へ手作りチョコレートの材料を買いに来ていた。

「それにしても、アスカがチョコレートを作りたいだなんて驚きだよ」

「ま、まあちょっとした心境の変化よ」

アスカとシンジは店で買った手作りチョコレートに必要な材料と金型などの器具を半分ずつ分けて手に持つて専門店を出ようとすると、入ろうとしたヒカリとすれ違った。

マズイところを見られた、とアスカは急いで立ち去ろうとしたが、ヒカリに気付かれてしまつ。

「あらあー！アスカじゃないのー！やっぱり今年は本命の手作りチョコレートをするって話は本当だったのね！」

赤い顔をして何も答えられずに固まってしまったアスカ。

「へーえ、そうだったのか」

まるで他人事のように咳くシンジに、ヒカリは盛大な溜息をついてそれ以上何も言わずに店の中へと入つていった。

2010年 バレンタイン記念LAS SSS

バレバレュカイ

初めての手作りチョコレートに挑戦するというアスカは、絶対に失敗はしたくないからと「」と素直にシンジに頭を下げて頼みこんだ。

シンジは今までになく腰が低いアスカに驚きを禁じ得なかつた。

それが自分以外の男性に渡されるチョコレートだとしても、真摯なアスカの態度に心を打たれたシンジは、チョコレート作りに喜んで協力する。

コンフォート17の葛城家のキッチンに戻つて、さつそくチョコ作りのために材料を広げたアスカは、その一つをつまみ上げて不満そうな顔でぼやく。

「『ラクラクテンパリングの素』って、何か手抜きをしているようでイヤなのよねー」

「でも、チョコレートを固める温度調節は僕たちのような初心者には難しいって店員さんにも言われたじゃないか。失敗したくないんだろう?」

「う、うん……やっぱり初めての手作りチョコが失敗作なんてイヤ
だし……」

顔を赤らめて恥じらうアスカを見て、シンジはアスカの手作りチョコレートをもらえる幸せな男を羨ましく思つた。

少し暗い表情になつたシンジに違和感を感じながらも、アスカはシンジの助力を得てチョコレート作りを進めていく。

アスカにとつてはタイミングの悪いことに、そこへ仕事が珍しく終わったミサトが上機嫌で帰つて来た。

「たつだいまあ～！……つてウソお！？アスカが台所に立つてゐる！驚天動地、晴天の霹靂だわ。明日の天氣はきっと伊勢湾台風並みの大荒れね」

「何よつ！失礼ね」

「いやあ、昨日の夕食でアスカが手作りチョコを作りたいって言いだした時は冗談かと思つたし……」

ミサトのからかうような口調にアスカは腰に手を当てて言い返す。

「アタシはもともとしつかりとした性格なのよーズボラでガサツでいい加減なミサトは自分が一生できないもんだから、そう思つのよ」

「そ、そんなことないわよ。あたしだつてチヨコの一つも「つべりい……」

「はんー。ミサトのクッキーは最悪だつたわよね、シンジ？」

アスカに話をふられたシンジは『まずやつてミサトに向かって頷いた。

「ヒドーー、シンちゃんまでそんなことこのの?..」

ミサトは「あー」に手を当ててムンクの舌のよつにしてシンジに向かってほやいたが、シンジはそれでも肯定の意見を覆そとほしながらつた。

「オープンから取り出す時、乱暴にするからクッキーが全部くつちやつてたし、焦げたり生焼けだつたり……極めつけは味よーなんで塩とかワサビとかハバネロとか入つてるのよー！」

「だから、ロシアン風にしてみたんだつて」

そう言つてヒーまかし笑いを浮かべて手を招き猫のよつにクイクイつと動かすミサトを見つめるアスカとシンジの表情は冷やかだった。

形勢が圧倒的に不利と見たミサトは話題の方向性を変えることにする。

「今年は加持のヤツにチヨコノートあげるのやめたんだつて？」

ミサトの発言にシンジは耳を疑つた。

去年のバレンタインの本命チョコは加持さんだつたとアスカは公言していたはず。

てつまつこのチョコレートも加持のためだと思つていたシンジはその相手を考え出す。

やつぱり学校に居る誰かか？

ケンスケとトウジの顔が真っ先に浮かんだが、シンジはそれはありえないだろうと否定した。

するとサッカー部のキャプテンで中学生探偵として有名な後輩のあの男の子かな？

バスケ部の主将で顔はゴリラみたいにゴツイけど、常に成績上位10位以内に入っている同級生の彼？

去年、コンテストで優勝した僕たちがいつも外食に行つて定食屋の息子さんの人かも知れない。

シンジがアレコレ考へていると、むうに悪いユースが彼の耳に飛び込んできた。

「義理チョコも止めて本命一本に絞るなんて、アスカもついに本気になつたのね」

「よ、余計なお世話よつーあシンジ、次はどうすればいいのよつ

？」

「う、うん、ココアパウダーを入れて後は冷やせば……」

冷静さを失つて怒鳴り散らしているアスカには気がつかなかつたが、ミサトにはシンジが落ち込んでいる様子が見て取れた。

「ま、明日までの辛抱よ、シンちゃん……」

ミサトは誰にも聞こえないような小さな声でそう呟くと、わめきたてるアスカを黙らせるためにそつと彼女に耳打ちをする。

「アスカ、そんなに騒ぐと、シンちゃんにバレバレ」

アスカはそれつきり黙り込み、シンジの顔をチラチラと盗み見しながら火照った顔でチョコ作りを進めた。

次の日の朝。

シンジはやっぱりアスカの様子がおかしい事に気がついた。

風呂の温度が熱い温いと文句をさつぱり言わないし、何よりもシン

ジと同じシャンプーの香りをさせていた。

過去にアスカに「ひどく叱られてから、けつしてアスカの専用シャンプーを切らすこと無かったのに。」

朝食に出した納豆や小骨の多い魚も文句を言わずに食べ、いつも残しているホウレンソウのお浸しも完食している。

ミサトはそんなアスカの様子を見て、ニヤリと笑みを浮かべてアスカの耳元で囁く。

「バ・レ・バ・レ」

「……意地を張らないって決めたのよ」

小声でぼそぼそと囁き合いつみサトとアスカを見て、シンジは時計を気にしていた。

そろそろ家を出なければいけない時間だからだ。

「……アスカあー、僕は先に行ってるよー」

「待つて待つてシンジ、もうちょっとで用意できるから」

いつもは1人で勝手に先に行っていると言つてるアスカが今日に限つては執拗にシンジを引き止めた。

「お待たせつ」

息を切らして玄関に姿を現したアスカに、シンジは習慣のよつて言

葉を投げかける。

「忘れ物はない？」

「あ、いけない、チョコレート、チョコレート……」

アスカは慌てて自分の部屋に戻つてチョコレートの入つた、キレイにラッピングした箱を持ってカバンに入れる。

「アスカ、すっかり舞い上がつてゐな……」

アスカとシンジが2人で外に出ると、アスカは顔を下に向けたまま、動かなくなつた。

「どうしたの、アスカ？」

シンジが心配そうな様子でアスカに声をかけると、アスカは震える声でしゃべりだす。

「アタシ……今日学校に行くのが怖いの」

「怖い？」

「今日、チョコレートを渡そうとしている相手はね、アタシが好きだつて言つたことのない相手なの。だから受け取つてくれるかどうか……」

シンジはいつも勝気なアスカがここまで怯えている事に驚愕した。しかし、唾を飲み込んでシンジは勇気を出してアスカに笑いかける。

「じゃあ、僕がその人に受け取る様に頼んであげるよ。……多少無

理をしても、アスカがその事で悲しい思いをしないようだ」

「ありがと、シンジ。まだ、ちょっとだけ怖いから、学校に着くまでアタシの手を引いてくれる……？」

シンジは震えるアスカの手を包み込むように優しく握る。

「もつと、力を入れて、離れないようにギュッ」と……

「仕方ないなあ、みんなに見られて誤解されると困るから、人目の無いところまでだよ？」

シンジはアスカの手を引いていつものペースで通学路を歩いていく。

「~~~~~ ~~~~~」

アスカはすっかり明るい笑顔で、何かの曲をハミングしながら軽い足取りでスキップしていた。

シンジはアスカの豹変ぶりに苦笑いを浮かべたが、アスカが元気になってくれたなら気にしないことにした。

「なんやシンジ。ついに惣流とそんな関係になつたんか」

「朝から夫婦」つこか

ケンスケとトウジに手を繋いでいるところを田撲されたシンジは、パツとアスカの手を放した。

「ふ、一人とも、この事はみんなに黙つていてくれないかな?」この

事が知られたら、アスカは好きな人にチョコレートを渡せなくなるんだ」

シンジの隣で真っ赤な顔をしてシンジの顔を見つめているアスカを見たケンスケとトウジは、やつてられないといつたりアクションを浮かべシンジに返事をする。

「へイへイ」

「わかったわかった」

昇降口についたシンジは、自分より先にアスカが下駄箱を開けるのを見て目を丸くした。

「よーし、何も入っていないうつね」

「アスカ、何で僕の下駄箱を調べるの？」

「そ、その、アンタはエヴァンゲリオンのパイロットだし、命を狙つて爆発物とか入れられてたら、アンタはボケボケだから引っ掛かると思ってアタシがチェックしたの！」

とつものことながらひどい訳だ、とアスカは目を閉じる。

「あはは、そんなことあるわけないじゃないか」

シンジのノホホンと能天氣な反応に、アスカはホッと胸をなでおろした。

教室についてからのアスカは、ピリピリとしたさつきを放っていた。

特に最近転校してきた霧島マナに対しては、一挙動を見逃さないようずっとこちらみつけている。

マナの方もアスカの差すような視線を感じて生きた心地がしなかつたという。

「霧島さん、何かアスカを怒らせるようなことしたのかな……」

シンジが見当はずれな理由でマナの背中を眺めていると、不機嫌な顔のアスカがシンジに話しかけてくる。

「アンタ、昼休み屋上で待つていなさい！」

「う、うん……」

アスカの鋭い目つきにシンジは委縮してしまい、心臓をつかまれるような思いだつた。

アスカが立ち去つた後、シンジは安堵と不安が入り混じつた溜息を吐いた。

シンジの側から離れたアスカは青い顔をしてヒカリに相談している。

「やつぱりシンジの方もマナのことが気になつていてるんだわ……」

「ア、アスカ、きっと大丈夫よ……」

ヒカリがそう言つて励ましている時、さらに悲劇が起つた。

ケンスケとふざけていたトウジがアスカの机に激しく激突し、アスカの力バンを思いつきり踏みつけてしまった。

教室中に響き渡るアスカの悲鳴。

アスカの作ったチョコレートの入った箱は無残にもへこんでしまった。

死人のような顔色をして、グッタリと倒れこんでしまったアスカ。

「す・ず・は・ら――――――――！」

「か、堪忍してや委員長――ふ、不可抗力や――」

トウジは鬼のような顔をしたヒカリに嵐のよつなビンタ攻撃をくらい、顔は真っ赤に腫れあがった。

「アスカ……」

石像と化してしまったアスカに、シンジは心から悲しそうな視線を向けた。

チャイムが鳴り響き、昼休みの到来を告げる。

昼休みはトウジたちと中庭で昼食を食べる約束をしていたシンジだつたが、アスカが暗い表情でゆっくりと重い足を引きずつて屋上に行く後ろ姿を見えた。

それを見たシンジはタイミングを見計らつて屋上に行くことにする。

顔を腫らしたトウジとケンスケは快くシンジを送り出してくれた。

シンジが屋上に行くと、端っこに暗い顔をして黙り込んでいるアスカが潰れたチョコレートの箱を手にして立っていた。

シンジがアスカの前に駆けつけると、アスカは赤い顔をしながら無言でシンジにチョコレートを差し出す。

「……これ……つぶれちゃつたけど、アンタに……」

「アスカ……もしかして、チョコレートを渡す僕の前で作つてたの？」

「えへへ……、とんだ間抜けよね、アタシも。……バレバレだつた？」

アスカがペロッと舌を出してシンジに問いかけると、シンジは首を横に振つて否定する。

「全然気がつかなかつたよ。僕は鈍感だから。……『ごめんね』

右手で箱を受け取つたシンジは満面の笑顔を浮かべて、箱ごとアス

力を正面から抱きしめた……。

その一人の様子を物陰からそっと眺めていたトウジとケンスケヒカリとマナの4人は顔を見合させてほくそ笑んだ。

「まつたく、アスカと来たら、私たちにはバレバレだつたわよね？」

「あーあ、碇君にバレンタインのチョコをあげるなんて言わなきゃよかつた。私つたらすつかり踏み台じゃないの」

「まあまあ、ええやんか霧島。これでワイたちもあの2人を見てもどかしく思つ」とも無くなつたんや」

マナをいさめるトウジから視線を外し、ケンスケは雲一つない空を見上げてポツリと呟く。

「今日も晴れ晴れとした天気だな……」

前と変わらぬように見えるコンフォート17の11階にある葛城邸。

ミサトさんと僕とアスカが家族として暮らしていた、コンフォート17で唯一埋まっていた部屋。

綾波の乗った零号機が自爆して第三新東京市の中心部が壊滅した時も、エヴァ量産機が攻めてきてネルフのジオフロントが崩壊した時も、この建物は運良く戦火を免れていた。

本当に全く変わっていないのは建物だけだった。

ベランダから見下ろせていた第三新東京市の美しい街並みも、今は巨大な湖の広がる廃墟になってしまっている。

僕らの通っていた第三中学校も、ミサトさんと街を見下ろした展望台も、アスカが初めて僕に心を開いてくれたジオフロントの庭園も、全てガレキになってしまっている。

僕もアスカも、ここに戻ってきてから外の景色を眺めるのが嫌になつて、もっぱらテレビやゲームをして過ごしていた。

学校もエヴァも使徒も無くなつてしまつたし、他には荒れ果てて人がすつかり居なくなつた街を歩くことぐらいしかできない。

体のいい軟禁状態だ。

もちろん、僕たちが狙われることがあるかもしないから警備上の理由があるのかもしない。

ミサトさんは僕らと違つてネルフの戦後処理とかいろいろやる」とあるみたいだけど、夜には家に戻つてきてくれる。

残り少ない僕達と一緒に居られる時間を惜しんでいるかのようだ。

そう、僕達はこれから別れて人生を送ることになったんだ。

一番大きな理由はネルフが今月の末で解体することが決定した事。

僕達だけじゃ無くて、ネルフのみんなもバラバラに散つて行くことになったんだ。

ミサトさんは使徒戦の功績が評価されて戦略自衛隊の女性指揮官になるんだって。

加持さんは日本政府も弱みを持っていたみたいで、スペイの罪には問われないことになつて、戦場カメラマンを目指すこと。

冬月さんは京都の娘さんの家に帰つて穏やかに老後を過いですつて話していた。

父さんは……人類補完計画に加担した者として、しばらく収容所に入れられるみたい、でもしばらくしたら出てこれるようだけど……。

リックさんはNPO団体の技師として世界各地の支援をして行くつて、リックさんはNPO団体の技師として世界各地の支援をして行くつて話してた。

「マヤさんは大手パソコン会社に就職して、来月から田向さんと一緒に働くって話。

青葉さんは居酒屋でアルバイトをしながらヨージシャンティビューを田指すつて息巻いてた。

綾波は消毒液や包帯の匂いに慣れてしまったから、看護士を田指して、今は家に籠つて看護資格の勉強をしているみたいだ。

そして、僕とアスカは……。

今日も夕方の決められた時間にインターホンが鳴る。

「今日もお届けにあがりました」

「ありがとうございます」

僕は配達してくれたネルフの元諜報員の人にお礼を言つて食材を台所に運び込む。

アスカも運んでくれるのを手伝つてくれているのが、僕にとつては嬉しい。

前だつたら僕のことを無視して、ソファに寝つ転がつてファッショソ雜誌でも眺めていたんだろうけど。

「今日は何を作るの？」

「やつだね、今日は冷やし中華と豚肉サラダにしてやつが」

「うん、じゃあアタシは……茹でる方ね」

僕は毎日アスカとミサトさんの食事を自分で作りたいと思ったから、ネルフの人にお願いをした。

この近くのスーパーや商店街はとつぶに人が居なくなっているから、わざわざ配達してもらつてしているんだ。

「じゃあ僕は、キャベツの千切りを……つと」

僕は手慣れた手つきでまな板の上でキャベツを素早く切り出した。ミサトさんやアスカに料理を押し付けられて始めたけど、今となつては「いんの朝飯前だ。

アスカは少し感心した田つきで均等にキャベツを切りそろえた僕を見つめていた。

こんなこと、毎日やつていれば誰でも身に着くと思つただけど……照れぢやうな。

やがてミサトさんが帰つてきて、僕達家族の夕食が始ま。

僕達が家族としての絆を取り戻したのは、つい最近のことだ。

式号機に乗つたまま量産機にやられたアスカのダメージは相当のも

のだったし、ミサトさんも戦略自衛隊の隊員に受けた傷が元で何度も死線をさまよつた。

僕は力ヲル君を殺したショックから完全に立ち直れなくて塞ぎこんでいたんだけど、あの赤い世界にアスカと一人で取り残された時、綾波から母さんの伝言を聞いたんだ。

「人間、生きていれば幸せになるチャンスはいくらでもあるわ」

その言葉を聞いた僕は、心の中で何かが変わった気がして、そして赤い世界は崩れ去つて、みんな元に戻つたんだ。

エヴァや量産機が消えてしまつたこと以外は。

僕はみんなに生きていもらいたくて、必死にそれだけを願つていた。

そうしたら、みんな生きていたんだ、加持さんも父さんも。

でも、アスカやミサトさんは瀕死の重傷を負つて入院生活が続いた。

僕は一人に元気になつて欲しくて、毎日お見舞いに行つていた。

やつと二人同時に退院して、ここに戻つてこれたのがつい最近のこと。

もう一度家族をやり直したいって言つ僕の気持ちを一人とも分かってくれた。

夕食の片づけが終わつて、僕とアスカがリビングでゲームをしよう

とじてこると、ついに見かねたミサトさんが僕を呼び止めた。

「一人とも、いい加減に荷物の整理を済ませちゃいなさい。大した量じゃないんでしょ？」「う？」

僕とアスカはミサトさんの言葉に顔を辛しげに歪ませた。

もう少しで引っ越すのはわかっている。

ネルフが解体されたらアスカはドイツに帰国してしまったんだ。

荷作り何かしたら、その事をまざまざと実感させられてしまう。

自分の部屋ではいつもの日常を保つことでの事から田を戻らしたかった。

意氣地無じだと言われても。

ミサトさんに急かされた僕とアスカは部屋に戻つて荷造りを行うことになった。

元々僕の持っていた荷物は少ないので、早く終わってしまった。

でも、アスカの荷物はもっと少なかつたんだ。

意外だつて？……それには理由があるんだ。

アスカは僕にシンクロ率を抜かされたころから、僕を憎んでしまつ

たことがあるんだって。

それまでは、僕のことを、その……少しは好意を持っていてくれたみたいで……。

初めて会った時に着ていたワンピースとか、ユニゾンの時に来ていた服とか僕の分までこいつそり取つて置いたらしいんだけど……。

僕はミサトさんに褒められて有頂天になつているのを見て、その想いが逆方向に変化してしまつたんだって……。

部屋の中をめちゃくちゃ荒らしたのはもちろんのこと、ワンピースや服とか、僕の写真とか全部切り裂いて捨ててしまつたんだって。

「『めんねアタシ、シンジとの思い出を全部捨てちやつた……』

「つづんアスカの事に気がつかなかつた僕が悪いんだよ

お互い暗い顔をして謝りだす始末。

でも僕は今だからアスカに渡せるものがあるのを知つていた。

そして、ついに決断の時が来た。

「アスカ、これ……ヘッドセットが無くなつて、頭が寂しいんじやないかと思つて……」

僕が差し出したのはピンクのリボン。

エヴァに執着していた頃のアスカにはとても渡せるものではないと

思つていた。

だつて、アスカはヘッドセシットを肌身離さず着けていたんだから。
学校でも、家でも。

「ありがとう……」

アスカは嬉しそうにリボンを頭に付けて僕に向かつてウインク。

「どう、変じやないかな?」

「と、とつとも可愛くなつたよ」

数日後、いよいよネルフ解体が間近に迫つた休日、ミサトさんは飛行機で北海道に行こうと言いだした。

僕とアスカは家でゆつくりしていたかったのに。

千歳空港に降り立つと、今度は電車に乗る。

一体ミサトさんは僕らをどこへ連れて行くんだ？

しばらくすると、車窓から見事なひまわり畑が見えてきた。

看板には『日本一のひまわり畑』『ひまわりまつり開催中』などと書かれている。

「ああ、ここで降りるわよ

僕達はミサトさんに続いて駅を降り、入園料を払ってゆっくりとひまわりの咲き誇る畠のあぜ道を歩いて行く。

「……あなたたち、これからどうするか決ました?」

ミサトさんが振り返りざすに前を向いたまま聞いた。

「アタシは、ドイツに戻つたら、何か乗り物を動かす仕事に就きた
いと思つてる」

「じゃあ、パイロットとかドライバーとかね。シンちゃんは?」

「僕は……あんまり学校の成績もよくなかったし、働きながら料理
専門学校に通おうと思つています」

僕達エヴァンゲリオンのパイロットの三人は、ネルフから給料と、
多額の退職金がもらえるはずだった。

でも、ネルフが解体されることになつて……僕達はやつと生活でき
るほどのお金しかもらえなかつたし、普通の社会人として暮らして
行くしかできなくなつたんだ。

アスカが日本国内に引き続き住むと言つ便宜を図る権限も、ネルフ
には残されていなかつた。

「ねえ、シンちゃんにアスカ。あたしは上手く言えないんだけどさ、
一緒に同じ方向を見つめ続けていれば、いつか叶うことがあると
思わない?」

ミサトさんに言われて僕とアスカは意味をいまいち理解できずに首をかしげた。

「ひまわりってさ、ずっと太陽の方を向いて頑張っているんじやない、これってあたしたちに似ているんじやないかな」

ミサトさんの言葉を聞いて僕はやつとミサトさんが僕らをここに連れて来た理由が分かった気がした。

「ミサトさん、僕はずっと前を見つめ続けて頑張ります」

「アタシも明日の方を向いて進んでいくわ」

僕達がそう答えると、ミサトさんはやつと僕達の方を振り返って、笑顔を見せた。

「……ねえ、そのリボン、じばりくは付けていてもらいたいけど、いつか外してもいいからね」

帰り道、僕がアスカにそう言つと、アスカは少し考え込んだ後、

「そうね、そうさせてもらうわ」

アスカは嬉しさと悲しさの入り混じった表情でそう答えたんだ。

それから一週間もたたないうちこ、アスカはドイツへと帰国して行つた……。

僕がアスカと別れてから十五年後。

ドイツの公園で僕は物陰に隠れながら、金髪に青い目をした小さな少女の姿眺めていた。

そして、その子の頭には古びてくたびれたリボンが付けられている。

間違いなくアスカの娘だ。

彼女は誰かを探しているらしく、公園の中をキョロキョロと見回していた。

ああ、今すぐ物陰から出て、あの子を抱きしめたい。

でも、それは許されない事だった。

そうしたらきっとアスカは僕を憎むに違いない。

なぜなら……。

それは……。

「ああ～！パパみつけ！」

「何やつてるのよ、シンジーもつべつとつまく隠れなきよー。」

「だつて、せつぱんがわいそうになつたし

おもひやを掛けて親子かくれんぼ勝負の真っ最中だったからね

2010年 お友達誕生日記念LAS短編 明田の方を向いて（後書き）

本当は悲劇的な結末で終わる予定だったのですが、LASにしたいために強引なオチで終わってしまいました。ごめんなさい。

平成22年2月22日記念LAS短編 恋はバランス

碇シンジと惣流アスカは共に第三新東京市の第壹高等学校に通う高校一年生。

一人の家は隣同士。地価高騰の割を食つたのか元は一つの土地であった場所を半分ずつ碇家と惣流家が購入した。

そのような事情から家の建物同士の距離はとても近く、双方の家族同士の関係もかなり親密になっていた。

お互いの部屋のベランダが繋がつているほど密着しているシンジとアスカの間柄が幼馴染と言つ関係になるのには問題が無かつた。

さらに去年の中学三年生の夏休みに一人は恋人同士という称号に昇格したのだ。

互いの家族はもちろん、友人や教師といった周囲の人々もこのカッフルの誕生を祝福し微笑ましく見守つていたのだ。

シンジとアスカ自身もこのまま愛を深めていはずれは誰もがうらやむ仲の良い夫婦になれると思っていた。

恋はバランス（例えばシンジ君の憂鬱な一日）

しかし、一人が無事同じ高校の入学試験に合格し入学を果たしてから半年後。

アスカは校庭の隅にシンジを呼び出し、別れ話を切り出したのだった。

「アタシ、今度渚のやつと付き合つことにしたから。アンタとの関係も解消させてもらいうわ」

「え？ どうして？」「？」

シンジは突然のアスカの宣告に頭が真っ白になつて間抜けな返事しか返すことができなかつた。

アスカはぼう然とした表情のシンジを悲しそうな目で見つめた後、目に力を入れシンジをにらみつけるように話し始める。

「アタシと渚のデートを邪魔されても困るから、明日からアタシと
アンタは幼馴染でもなんでもないただの顔見知り。いいわねっ！」

本気でアスカが別れる気だと理解したシンジは、慌ててアスカの腕にしがみつく。

「僕、アスカに何か嫌われるようなことをした？ 昨日のデートのときだつて、そのティアラを買つてあげたら喜んでいたじゃないか！」

そう言われたアスカは、頭に付けたティアラを触りながら不満そうにシンジに鋭い視線を向ける。

「アタシが本当に欲しかったのはこれじゃないのよ……」

アスカが冷たい声でそう言い放つと、シンジは涙を浮かべて俯いてしまう。

「冷たいね。アスカは僕のすることならなんでも喜んでくれたのに……変わってしまったんだね」

シンジはそう吐き捨てるごとく、腕で零れる涙を拭きながらアスカに背を向けた。

そしてアスカの方を振り返ること無く、手で顔を覆いながら走り去つて行つた。

その後の姿はだんだんと小さくなつて行く……。

シンジの姿がすっかり見えなくなつた後、ぽつりとアスカは呟いた。

「変わってしまったのはアンタの方よ、シンジ……」

アスカも教室に戻つてカバンを取りに行つて家に帰るつと校舎の方向を振り返ると、アスカの行く手に怒つた顔をした綾波レイが立ちふさがつていた。

「ねえアスカ、シンちゃん別れるつてビビつこいつーー。」

レイはシンジの従兄妹で、シンジの事をシンちゃん呼んでいた。

シンジの後を追つて入学したのか同じ高校の、しかも同じクラスに居る。

「……レイ、盗み聞きは良くないわ」

アスカがそう言つてレイをなじつても、レイの顔はピクとも動かない。

「アスカが相手だから、私はシンちゃんの事を諦めたのーーそんなのつてないよー！」

レイに噛みつかれそうながらこだまされたアスカは暗い瞳でレイを見つめると、ポツリと言葉をもひす。

「じゃあ、シンジはレイにあげるわ」

「バカっ！」

そう叫んでレイはアスカに平手打ちをした。

アスカのほおが真っ赤に腫れあげる。

しかし、アスカの手は赤くなつたほおよりも胸を抑えている。

「アタシはもうシンジとは別の道を歩きだしてしまつたのよ……後悔をしていないと言つたら嘘になるけど、進まずにいる方がよっぽど後悔すると思つ」

顔を苦痛にゆがめたアスカがやつとのことで言葉を紡ぎ出すと、レイはその言葉の意味が理解できたのか口を固く結んでアスカの元から立ち去つた。

アスカが教室に戻ると、すっかり人気が無くなつた教室で渚カヲルが待つていた。

今日告白したばかりなのだが、待つてくれたのだらう。

カヲルは今までたくさんの女性を虜にしてきたアルカイックスマイルを浮かべてアスカに話しかける。

「シンジ君との話は終わったのかい？」

アスカはカヲルのスマイルに対し反応を示さずに冷静に答える。

「ええ、多分アンタに迷惑をかける事は無いと思つわ」

カヲルは少々残念そうな表情になつて溜息を吐く。

「……僕はシンジ君の代わりになることはできないよ」

その言葉にアスカは辛そうな顔で首を横に振る。

「いいの。シンジと同じような人と付き合つて、また後悔したくな
いから」

それを聞いたカヲルはアスカと腕を組もうと手を伸ばす。

しかし、アスカは反射的に避けようとしてバランスを崩し、カヲル
がアスカを押し倒す形で倒れこんでしまった。

カヲルは上半身だけなんとかアスカから引き離すと、そのままの体
勢でアスカに話しかける。

「一時的接触を避けるんだね君は。恋人同士では普通の事じやない
のかい？」

アスカはカヲルの顔を直視できずに伏せたまま謝りつづとする。

「そ、そうね。慣れていないからごめんなさい」

その言葉を耳にしたカヲルは少し苛立つた表情になる。

「……シンジ君とはもう何年も手を繋いでいたのに?」

「アイツの事はもう言わないで」

そこへ教室に近づいて来る足音が聞こえてきた。

その足音の主は勢い良く、閉まっていた教室のドアを開ける。

「忘れ物、忘れ物つと」

そして、カヲルがアスカを押し倒していくと言つ体勢を見て驚きの声をあげる。

「うわっ! ? 楽と惣流! ?」

鼻歌交じりで入ってきた男子生徒はそう叫んで全速力で立ち去った。

カヲルは少し困った顔をして完全にアスカから離れて立ち上がる。

「これで明日からきっと僕と君は恋人同士だって噂が流れるね」

「なら、手ぐらい繋がないとまずいわね」

アスカは恐る恐るカヲルの手を握った。

だが体の震えは隠すことができない。

それはアスカからカヲルにまで伝わってきた。

首を振つてカヲルはアスカの手を振り払い、アスカに微笑みかける。

「……いやなら無理しないでいいんだよ」

「……『めん』」

カヲルに沈んだ様子で謝った後、アスカは取り繕うかのよつた愛想笑いを浮かべてカヲルに話しかける。

「じゃ、じゃあ今日はアタシの家でアンタに料理を『こちそつするわ』

アスカの言葉にカヲルは笑顔になつて承諾する。

「……それはいいね。好意に値するよ」

* * * * * 一方その頃* * * * *

アスカから別れの言葉を告げられたシンジは、一目散に自分の部屋に戻り、制服のまますり泣いていた。

泣きはらしたシンジの姿に驚いたユイは、部屋で泣いているシンジのことを思い、大きなため息をつく。

「まさか、あんなに仲の良かつたシンジとアスカちゃんがこんなこ

とになるなんて……」

そういうば、今朝いつものようにシンジを起こしに来たアスカの表情が何かを思いつめたかのように固かつたことをコイは思い出した。

さらに、アスカの頭に付けられていたものが高価そうなティアラだったことに気がついて、コイは息を飲んだ。

そして、ポツリと呟く。

「まさか……」

青い顔をして落ち込んでいるコイの耳にチャイムの音が届く。

玄関には険しい表情を浮かべたレイが立っていた。

「あら、レイちゃん……。家にまで来るなんて珍しいわね」

「シンちゃん、帰ってきますー？」

鬼気迫るレイの雰囲気にコイもただ事ではないと感じた。

レイとコイの一人は盛大な足音を立ててシンジの部屋に入る。

やつと涙が枯れ果てたのか、シンジは疲れた様子でベッドに倒れ込んでいた。

「シンちゃん……。いつたいアスカと何があったの？」

レイがそう話しかけるとシンジはうつ伏せになつた体勢のまま顔を

向けようとせずに投げやりな様子で答える。

「別に何も無いよ……。アスカが僕のことを嫌いになつたんだろ……」

…

「そんなはずない！アスカが何の理由も無くシンちゃんを嫌いになるなんてありえない！」

レイは鋭い声でシンジの言葉を即座に否定した。

コイはシンジの机の引き出しの中から白い紙の端がはみ出しているのに気がついた。

かなり慌ててしまおうとした様子が気になる。

「あら？ これは何かしら？」

コイが引き出しを開けると、黄色い消費者金融のチラシと同時に借用書が出てきた。

チラシには『いつも一戸建て・悪徳金融・金利一ヵ月間0円』と書かれている。

しかし借用書には、元金15万、入会金手数料10万と印刷されていた。

それを叩撃したコイは貧血でも起こしたかのよつとへたり込んだ。

レイがチラシと借用書を見ると、ワナワナと震えだす。

「どうこうとか説明してももうつかない…」

胸倉をつかまれたシンジはガタガタ震えながら昨日のアスカとのデートでの顛末を話し始めた。

昨日のデートでアスカが宝石店のショーウィンドウを見て、いつかこんなティアラを付けてみたいとポツリと呟いた。

それを聞いたシンジは電柱に貼つてあった消費者金融のチラシを見て、デートの後にすぐに15万を借りて買い物に行つたらしく。

「だってさ、借り入れは10万からだつて言われたし、来月のお小遣いを合わせれば、ちょうど15万ぐらい行くかなって思つて……」

「あのねえ……」

レイはこめかみを押さえながら怒りを抑えている様子だった。

「シンちゃんは確か、自分のチョロを買つたためにお金を探めていたんでしよう…？ なんでいきなりそんな高額のプレゼントをしちゃうのよー！」

「だってさ……。アスカの頼みは何でも聞きたいと思つ……」

シンジの呟きを聞いて、レイは自分の予感が当たつていたことを確信する。

「シンちゃんが、高校に入つてからずっとアスカの顔色ばかりうかがつてビクビクしてたよね？」

図星を突かれたのか、シンジはギクリと肩を震わせた。

「アスカ、もてるもんね。中学時代の知り合いは、シンちゃんが彼氏つてこと知つているけど、高校から一緒になった人たちはそんなこと知らずに、アスカにアタック掛けてくるよね。特に渚君とか」

「僕は渚君みたいにカッコ良くないし、運動もできないし、頭も良くないし……。自信が無かつたんだ……」

シンジの独白を聞いてレイとユイは溜息をつく。

「シンジ。だからと言つてアスカちゃんの言つことを何でもかんでも聞くのはやり過ぎよ。そんな無償の愛を与え続ける存在なんて、……わざと母親ぐりこよ」

「やうだよ、シンちゃん。大丈夫、シンちゃんはきっと渚君に勝てるわ」

心強いレイの言葉にシンジは思わず疑問をもらす。

「…………？」

「だって、シンちゃんはアスカの事、たくさん知つてるし……。渚君、凄い音痴だもの」

「はあー？」

レイの言葉にシンジは思わず素つ頬狂な声をあげてしまった。

* * * * * 一方その頃* * * * *

アスカの家の食卓では、カラルが席に座つてアスカの料理の出来上がりを待つていた。

キョウコは料理を作るアスカとアルカイックスマイルを浮かべて待つて、カラルを見て溜息をつく。

シンジは自分の息子のように可愛がっていたキョウコはカラルのことをどうも好きにはなれなかつた。

カラルがアスカの部屋に入ろうとするが、『今日はATTフィールドが張つてあるから入れない』などと言つて訳のわからないことを言ってまでカラルをリビングに押し止めた。

「ごめんね、これでも飲んで待つて

アスカはそう言つてカラルの前にコーヒーを置く。

側には角砂糖が3個添えてあるのを見てカラルはほんのわずかだけ顔を歪めた。

「アスカ、ハチミツを入れ忘れてるわ

「あ、ありがとう、ママ」

アスカはキョウコに指摘されると、習慣のようになにハチミツを鍋の中

に入れる。

「どうやら料理はカレーのようだ。

アスカは3人分のカレーを作ると、カヲルの前、自分の席、キョウコの席へと並べていった。

カヲルはカレーを一口食べると、また少しだけ顔をしかめた。

「どう？ ちょっと甘すぎた？」

アスカがそう聞いて、カヲルが否定しようとする直前に、キョウコは爆弾を放り込む。

「『じめんなさいね、アスカちゃんの料理は、コーヒーもカレーも完全にシンジ君専用になっているから』

惣流家のリビングの空気が凍りつき、音を立てて崩れて行くような感覚をアスカは感じた。

カヲルはついに耐えきれなくなつたかのようになスマイルを壊して憤慨したような顔になる。

「そうですね。惣流さんのシンジ君への愛は僕にとって重すぎたようです」

そう言ってカヲルは勢い良く席を立ちあがつて、玄関から惣流を立ち去つて行つた。

「ママっ！ なんてこと言つのよー、待つてよ、渚ー！」

アスカの言葉を背に、ムシャクシャしたカヲルは前を見ずに駆けようとしたところ、同じように辛そうに顔を伏せて駆けだしてきたレイと思いつきりぶつかった。

「痛つ〜〜！！」

「「めん……大丈夫だつたかい？ あ、白……」

転んだレイは顔を赤くして慌ててスカートを手で押さえた。

* * * * * しばりくした後* * * * *

カヲルとレイが肩を組んで惣流家の前から立ち去った後、レイとコイの説得を受けたシンジがアスカに謝りに惣流家を訪れていた。

「「めんアスカ。僕はアスカのことを信じてあげられなかつたのが悪いんだ。アスカはずつと僕のことだけを見ていてくれていたのに」

「分かつてくれればいいのよ。アタシも、シンジが自分のことを信じてくれていなかつた不安だつた……。あの時アタシが口に出したティアラをすぐに買つてきたシンジを見て怖くなつたのよ……」

玄関でお互いに見つめ合つシンジとアスカの後ろで、安心したようにキョウコがパンパンと手を叩く。

「さあさあ、シンジ君も夕食がまだでしょ？ アスカが作ったカレーがあるわよ。ハチミツがたっぷり入った甘口のカレーよ」

「わあい」

シンジは少年のような笑顔になつて、惣流家のリビングへと飛び込んだ。

アスカがカレーに入れるハチミツの量は、8年間のアスカとシンジの喧嘩の賜物なのだ。

シンジは笑顔でアスカと一緒にカレーを食べていたが、アスカの頭に変化が起きている事に気がついた。

「あ、またそのリボン、付けてくれたんだ」

「やつぱりアタシはシンジが幼稚園の頃にくれたこのリボンが落ち着くのよ」

アスカが自信満々にそう言い切ると、シンジはホッとした表情を見せた。

「シンジ君。あのティアラは二人の結婚式に使うことになつたから、安心していいわよ」

サラッとしたキョウウコの言葉に、アスカとシンジは食事をのどに詰まらせそうになつた。

二人とも顔を赤くしてチラチラと隣に座るお互いの顔を見る。

食事をしているアスカの左腕はシンジの右肩に伸ばされていた。

*****おまけ*****

ゲンドウはシンジが借りてしまったお金の決着を付けるため、消費者金融『悪徳ローン』へ足を運んでいた。

「15万だ。これで借金は完済のはずだらう。」

ゲンドウにそう言われた金融会社の社長は高そつた皮の椅子に腰かけながらゲンドウをにらみつける。

「入会金10万と、脱会金50万がかかると、111ミクロンの文字で書いてありますでしょう？」

するとゲンドウはポケットから色つきサングラスを取り出して掛ける。

「何か、問題があるのか？」

そして、ドスの効いた低い声でもう一度社長に聞き返した。

「も、問題ありません……」

「冗談いー。」

「しつかりしてくだせえ！」

取り巻きの暴力団風の社員達も社長と一緒に怯えだした。

「では、帰らせてもらひつわ」

ゲンドウは悠然と入口から消費者金融のあるビルを立ち去つて行つた。

ビルから出たゲンドウはサングラスを外すと、ホッとして息を吐きだす。

「とつても緊張しちやつた……。コイもひどいよなあ、こんな役目を僕に押し付けて……」

碇ゲンドウ 48歳。

その素顔はナルフ幼稚園の雇われ園長先生だった。

金融会社の社員にまぎれて一部始終を観察していた加持刑事は、同僚の葛城刑事に後にこうつ漏らしたと言つ。

「今はヤクザ顔でも園長ができる時代なんだな……」

平成22年2月22日記念「AS短編 恋はバランス（後書き）」

この作品は2009年11月26日に作成した中編予定の作品の一話を作り変えた話です。本当は、アスカとシンジの理想的な愛の形を指し示すシリアルなストーリーで終わる予定だったのですが、ゲンドウに可愛いセリフを言わせたいために消費者金融の話を追加してしまいました。

きっかけは、友達との悪ふざけだった。

アタシはクラスメートの田中アオイと一緒に、今年の4月1日はどんなウソをつこうか企んでいた。

小さじでウソじや物足りない、もつとみんなで笑えるような事をしたい。

テレビでバラエティ番組を見たという田中アオイは、アタシにその番組と同じような事をしてはどうかと提案してきた。

それは、うぶな男性に突然女性の方から好きだと告白する事。

アタシもその番組を見て笑っていたから、罪悪感も薄れていたのかもしねれない。

真面目なヒカリは、そんな誰かを傷つけるようなウソはいけないと怒っていた。

でも、アタシはヒカリの忠告を振り切って実行してしまった。

今でも反省はしている、でも後悔はしていない。

だって……。

4月バカシンジ

いつも、騒がしくヒカリと大喧嘩している鈴原。アタシはヨウコとアオイと相談して、獲物となるターゲットを教室の中でも物色し始めた。

その友達で軍事マニアで何を考えているか分からぬ相田。

アタシ達3人の目を引いたのは、教室の隅の自分の席で暗い顔をしてうつ伏せに顔を伏せている碇だった。

陰気なオーラを常に漂わせ、下に向けて一人で孤立しているところ

しか見た事が無い。

必要なこと以外はクラスの誰とも喋らず、もちろん友達も居ない、どっちかと言うとたまにいじめられている存在。

この碇をからかつたら、どんなに面白いかというのがアタシ達3人の間で意見が一致した。

「いってらっしゃい、アスカ」

「GO！ GO！ アスカ」

アタシは悪友2人の声援を背に受けて、碇の席へと向かった。

アタシが近づいても、碇のやつは顔を机に伏せたまま、ピクリとも動かない。

「起きなさいよ、碇」

アタシは碇にそう声をかけたけど、碇のやつはじつと動いようとしない。

「ちょっと、何無視しているのよー。」

声を荒げてアタシがそう言つと、碇はやつと起き上がりつてアタシの顔をぼう然と見つめる。

「え？ 僕を呼んだの？」

「そうよ、アンタに声をかけたのよ」

アタシが腰に手を当てる、そつ言つと、碇のやつは驚いて目を丸くする。

「ええっ！？ 惣流さんが僕に…？」

叫ぶ碇の表情は、これまで見た事が無かつた。

コイツ、人並みに感情表現が出来るじゃないの。

でも、碇はすぐにいつも陰気な表情に戻つてポツリと呟く。

「……何か用？ 用が無ければ、僕に声をかけるはずないよね」

うわ、本当に暗いやつね。

ただ、ここでは話を止めたら何も面白くないと思ったアタシはもう少し積極的に話す事にした。

「そんなこと無いわよ。アタシ……前からアンタと話したいと思つてたんだけど、なかなか声をかける事ができなかつたのよ

伏し目がちに恥ずかしそうにそつ言つアタシの姿を、碇はじつと見つめている。

ふふ、アタシにすつかり騙されている。

成功を確信したアタシは後の手で、ヨウノとアオイに向かってペースサインを送つた。

もちろん、2人も声を押さえて笑っている。

しかし、次に碇の口から出た言葉にアタシは耳を疑った。

「僕も、ずっと惣流さんと話したかったんだ……」

「ええっ！？」

アタシが驚きの声を上げて、碇の方を向くと、碇はボソボソと話し始める。

「小さい頃から、僕の隣の家に、とってもかわいい女の子が住んでいるって知ってたけど……僕は自分の部屋の窓から、惣流さんの姿をそつと眺める」としかできなかつたんだ……」

アタシは碇に言われて、やつとお互いの家が隣同士だつて事に気がついた。

「惣流さんは明るくて、いつもたくさんの友達に囲まれていて、僕の憧れだつたんだ」

いきなりべた褒めされて、アタシも氣恥かしさで顔が火照つて行くのを感じた。

「僕も惣流さんみたいになりたいって、幼稚園でも、小学校でも、ずっと姿を田で追つてた。どんな時も、惣流さんは輝いて見えたんだ」

硬直して黙っているアタシに向かつて、碇はアタシがさらに恥ずかしくなる事を言い続けた。

「ア、アタシはそんなに……」

真っ直ぐに向けられた称賛の言葉に、アタシはそれ以上何も言えず、自分の席に戻った。

その後の授業中もアタシは落ち着かない気分だった。

胸を押されてチラチラと碇を盗み見するアタシの姿に、『ウカ』とアオイは驚いている様子だった。

そりやそりや、もしかして一番戸惑っているのはアタシ自身かもしない。

なんで、あんな陰気な碇なんかにときめかなきやならないのよ。

放課後、帰る時になつてアタシはまた碇に声をかける。

「一緒に帰らない？」

アタシのこの言葉に、碇だけでなく、周りのクラスメイト達も驚いた様子になる。

これは、当初の計画通り。

エイプリルフールのウソの仕上げなのよ。

でも、アタシは碇を騙しているのか、自分を騙しているのか分からなくなつた。

今まで、アタシの事を美人だと成績優秀だとそう言つ事で誉められたことはあるけど、アタシ自身の性格で褒められた事はありなかつた。

碇は困惑気味にアタシを見上げて答える。

「……僕なんかと帰つても面白くないよ。たいしたこと喋れないし

どいつも暗くて内罰的な碇に、アタシは腹が立つてきた。

「こつまで下向いているのよ、顔を上げなさいよ！ 前を見て歩きなさい。」

アタシに怒鳴られた碇は怖がりながらも顔を上げた。

「うん……」

「ね、いともと違つてしまつ」

アタシがそう話しかけると、碇の表情は少しだけ明るくなつた。

相変わらず固い顔だつたけど、アタシの嫌な陰気な顔じや無くなつたみたい。

帰り道、アタシは碇と並んで歩きながら話している。

「アンタさ、何か得意なこととかないの？ 誰でも一つくらい取り柄があるつていうじやない

「……そんな、僕は勉強もあまりできないし、人を喜ばせるような

面白い話もできないし」

そつまつて碇はまた自信をなくしたように俯いてしまった。

アタシはなんとか碇にその顔を止めさせようと話しかける。

「別に、好きな事で続いている事でもここのよ」

「続いている事と言えば、チョロかな」

碇が呟いた言葉に、アタシは手を打つて反応した。

「それよー、今日これからアンタの家に行つて、チョロを聞かせて
もらひつわー。」

「ええつー。？」

アタシは自分の家に戻ると、すぐに着替えて隣の碇の家へ向かつた。

呼び鈴を鳴らすと、碇が慌てて玄関のドアを開ける。

碇の家に入ったアタシは、質素なリビングやダイニングキッチンの
様子を見て違和感を感じた。

この家には女つけが無いように感じたからだ。

「アンタ、もしかしてパパと2人で……？」

「うん、母さんは小さい頃、病気で死んじやつたんだ」

碇の話を聞いたとき、アタシは碇がなぜ今まで陰氣だったのか少しわかつた気がした。

「アタシも、小さい頃、パパが家を出て行っちゃったんだ」

なぜ碇にこんな話をしてしまったのか分からぬ。

多分、アタシと碇は似た存在で、たまたま逆の生き方を選んだだけなんだろ?と思つたからなのか。

アタシはママを悲しませなこよつに時には空気で明るく過ぐして
いた。

「じゃあ、惣流さんも知つてこるよつな曲を弾いりつかな」

碇が弾いた曲は無伴奏チョロ組曲と云つアタシもどいかで聞いたよ
うな曲だった。

アタシが笑顔で拍手をすると、碇は氣を良くしたのか、早弾きなど
目を見張るよつなテクニックまでアタシの前で披露した。

「やるじゃない、立派なもんよ」

「母さんに言われて始めたんだけどね、誰も止められて言わなかつ
たから」

「継続は力なりよー、アンタのチョロは凄い、アタシ感動しちゃつ
た!」

アタシがそう褒めると、碇は今までアタシが見た事の無いよつな明

るい笑顔を浮かべた。

「今まで、誰も褒めてくれる人が居なかつたから、嬉しいよ」

その後、アタシは碇に夕食まで「馳走になつてしまつた。

「『』のハンバーグ、ママが作ったのよりおいしく！」

「そんなん、大げさだよ」

アタシに褒められた碇は照れ臭そうな顔をしてたけど、とっても嬉しいだつた。

すっかり碇の家に長居してしまつたアタシは碇のパパに会つたんだけど、とっても厳しそうな人だつた。

でも、ぎこちない表情で、「よかつたな、シンジ」って声をかけていたところを見ると、悪い人じや無くて、ただ不器用なだけなんだと思つた。

やつぱりこのパパじゃあ、褒められるつて感じがしないのかな、と苦笑したけど。

「惣流さんのおかげで、僕も笑えるつて気がついたよ……ありがとう」

そう言って穏やかに明るい笑顔を見せるよつになつた碇に、アタシもお願いをする。

「アタシも、今までママにさえ自分の弱さを見せられなくて、寂し

かつたの。……アンタにだけは、アタシの涙を見せていい?」

「……うん、僕で役に立てるのな?」

アタシは嬉しさのあまり碇の胸に飛び込んでしまい、この田から突然アタシ達は恋人同士になつた。

そして次の日。

手を繋いで登校してきたアタシとシンジを見て、三ウロやアオイ、ヒカリを始め、クラスメイト達は騒然となつた。

「アスカ、4月1日はもう終わったのよ?」

そう言って困惑する三ウロ達にアタシは堂々とのりけ話を切り出した。

「アタシはね、シンジの魅力に気がついてあげられたのよ。シンジつてば、チョロを弾く時の姿はかつこいいんだからー。ハンバーグを作るのも上手いのよ」

そして、アタシはシンジとお揃いのお弁当箱を取り出して見せつけるように突き出す。

「今日も早起きして、一緒にお弁当を作つて來たんだからー。」

「ええーつー?」

「ウ！」とアオイが大声を上げた。

シンジは照れ臭そうに「アスカ、恥ずかしいよ」と頭をかいて苦笑している。

「碇君って、そんな人だったの？」

「ウ！」が物欲しそうにシンジの方を見ている。

アタシはシンジの肩に幸せそうに抱きついて宣言する。

「もう、シンジはアタシのものなんだからねー アンタ達には渡さないわよー。」

アタシはたまにシンジをバカシンジと呼ぶ事がある。

アタシのウソに騙されて自分から告白してしまったなんて、シンジは本当に大バカだ。

でも、アタシもバカなウソをついたのは認めるけどね！

ふふ、シンジが本当の事を知つたらがっかりするだろ？から、このウソはお墓まで持つて行くつもりよ。

エヴァンゲリオン量産機との戦いで激しく傷ついたアスカ。

彼女はその戦闘前からベッドに寝たきりのままの状態でもあつたため、体はすでにボロボロであつた。

そしてさらに彼女の左半身には痛々しい包帯が巻かれてる。

戦いの後彼女はしばらく医療施設の整っているネルフ本部の病院に入院していたが、退院の時期になつても彼女は日本に残ることを強く希望した。

周囲の人間はアスカがシンジにそれほどまで好意を抱いているのかと誤解していたが、アスカの瞳は憎しみに満ちていた。

大きな栗の木の下で

碇シンジと二人きりで暮らしたい。

アスカがゲンドウ亡き後のエルフのトップになつた冬月に申し出た希望はただ一つ、それだけだった。

冬月はアスカの要望を笑顔で聞き入れ、第一新東京市に新しい住居まで用意した。

しかし、アスカはまだ自分一人では体の自由が利かない身。

介護の人間を付けようかと冬月は申し出たが、アスカは頑なに断つた。

冬月はアスカの態度に折れてシンジに全てを託す事にして、自分の仕事に集中することにした。

人里離れた山の奥の方にある一軒家。

アスカが静かに暮らしたいと言つ事で、警備上の観点からも広い庭

のある家が選ばれた。

外から家の様子はほとんど見て取れない。

この好条件にアスカは思い切りほくそ笑んだ。

一人の同居が始まった初日から、アスカによるシンジへの『復讐』の日が始まった。

「アタシは納豆が嫌いだつて、何度言えば分かるのよー。」

夕食の席でもアスカは何かにつけてシンジを怒鳴りつけていた。

「アスカ、そんなに暴れるとせつかくくつ付いた肩の傷口が開いちやうよ。」

「うるさい！ これもあの時アンタがすぐに助けに来なかつたからじゃないの！」

シンジはその一言をアスカに言われると逆らえない。

アスカが一人で戦っている時、シンジはベークライトで固められた初号機の前で呆然としていた事があるからだ。

「アタシの怪我が完全に治るまで、アンタはアタシの側で奴隸のように世話をするのよ！ アンタのせいで怪我をしたんだから当然でしょ！」

アスカは怒った様子でシンジにそう宣言すると、シンジは全てを受け入れたかのように悲しそうな笑みをこぼすだけ。

次の日もその次の日も、アスカの怒鳴り声が部屋に響き渡る。

「「」のバカっ！ いつまでアタシの風呂のお湯の温度を覚えられな
いのよー！」

「そんなこと言つたつて……仕方無いだひー。」

シンジが口答えするのでアスカの方もムキになつて暴れてしまつ。
そして、相変わらずシンジは朝食にアスカの嫌いな納豆などの食べ
物を出してくる。

アスカはさりにシンジに対し厳しい態度を取るようになつていた。

そんな生活がしばらく続いたある日、シンジはマヤに呼び出されて
ネルフ本部へ来ていた。

新しく新設された自分の研究室にシンジを招き入れたマヤは穏やか
な笑顔でシンジに話しかける。

「「」めんね、シンジ君。仕事が忙しくてなかなか構つてあげられな
くて」

マヤはリツコ失踪の後、冬月にMAGIの管理を全て任せられるなど、
ハードスケジュールをこなしていた。

「どう、シンジ君。アスカちゃんと一人で楽しくやつている？」

「え、ええ……」

シンジはさう答えたが、その笑顔はとてもおかしかった。

そして、シンジの瞳はとても悲しげだった。

その微妙に暗い雰囲気を、マヤはシンジから感じ取った。

「……もしかして、シンジ君、アスカちゃんと上手く行っていないの？」

マヤが真剣な眼差しでそう聞いて詰めるが、シンジは慌てた様子で首を横に振る。

「そんな事ありません。」

「ねえ、正直に話して。私の方でアスカちゃんの世話をしてくれる人を探すから」

「いえ、いいんです

「じゃあ、私がアスカちゃんにシンジ君に我がままを言わないうに頼んでみる」

「止めてください。」

必死に止めようとするシンジ、マヤは溜息をついた。

「ミサト」き後の一人の保護者はマヤになつている。

「……とにかく、何か辛い」とがあつたら私に何でも相談してね

「……はい

そう言つて部屋を出て行くシンジの姿はとても悲しげだった。

シンジの様子がやはり気になつたマヤは、翌日に空調関係の点検と称して業者を一人の暮らす家の中に潜入させて盗撮カメラを付けた。

そして……カメラに映し出される映像はマヤが危惧していた通りのものだった。

アスカは何かにつけてシンジを怒鳴りつけている。

シンジは奴隸のようにペコペコ頭を下げて平謝り。

決してシンジに笑顔を見せる事の無いアスカ。

張りついた愛想笑いだけが顔に張り付いているシンジ。

極めつけはアスカの口からたびたび漏れてくる言葉だった。

「いい？ アタシはアンタに復讐するためにここに居るの！ 怪我が完全に治るまで責任を取つてもらうわよ！」

この一人を側に居させてはいけない。

マヤはこれは早く手を打たないと考へた。

思い悩む彼女の居る部屋にやってきた突然の訪問者はレイだった。

「伊吹三佐、お元気ですか？」

「レイちゃん？ 久しぶりね

そういうえば今日はレイの体の定期検診の日だった事をマヤは思い出した。

レイの体をチェックするのはリツコの役目だったが、それもマヤが引き受けている。

「美術学校の方はどう？」

「問題ありません、毎日が楽しいです。……伊吹三佐、何か困つていらぬですか？」

そつ質問され、マヤはさらに困った顔になった。

普段から腹を割って話す相手もないのに、マヤはレイの体の検査中、ずっと齒んでいたアスカとシンジの事について話していた。

「……………やうですか、惣流さんと碇君が……」

「私は早く一人を引き離すべきだと想つのよ……」

マヤがそつ言つて溜息を吐くと、レイは赤い瞳でマヤを見つめながら強い口調で宣言する。

「…………私が惣流さんと碇君の気持ちを確かめます。それまで待

つていてください」

大きなスケッチブックを抱えたレイがシンジとアスカの暮らす家に姿を現したのはその翌日の事だった。

「伊吹三佐に碇君の家の庭に立派な大きな栗の木があるって聞いて来たの。ついでに二人の様子を見てくるようになって」

突然の訪問に驚くシンジとアスカに向かって、レイは理由をそう話した。

「そ、そりなんだ、じゃあゆっくりと見て行くといいよ」

シンジはとまどった笑いを浮かべながら、レイを栗の木が良く見える部屋へと案内する。

そこは空き部屋としてベッド以外ほとんど物が無い状態だった。

レイが部屋に入つて行くと、アスカは怒った顔でシンジの首を絞めた。

「アンタ、この前ネルフ本部に行つた時、マヤに変な事を喋つたんじゃないでしょうね！」

「ぐ、そんな」としてないよ！」

レイが部屋のドアを開けて顔を出すと、アスカはパッとシンジから手を放した。

「……トイレでまじ」。」

「あ、右行つた奥だよ」

シンジが指し示した方向にレイは歩いて行った。

「……仕方無いわね。変な報告をされても困るし」

その後アスカが暴れる様子は無く、カメラを通して監視していたマヤはとりあえずホッと胸をなでおろした。

しかし、これは一時的なものにしか過ぎないとマヤは分かっていた。

マヤがハラハラしながら様子を見守つていると、シンジがレイにタ食のメニューを提案している。

「今夜は綾波が来てくれたから、一ソニクラーメンにしようか?」

そうシンジが尋ねると、レイは首を横に振る。

「私はハンバーグが食べたい」

その言葉を聞いてシンジは思わず顔をしかめた。

「それ以外で何か食べたいものはない?」

シンジは遠回しに拒否したが、レイは意見を変えない。

「私はハンバーグが食べたい」

さつきよりも大きな声が辺りに響く。

そのレイの声はアスカの耳まで届いたのか、アスカは嫌悪感をあらわにする。

「……わかったよ」

シンジは諦めた様子でハンバーグの材料を買いに外出した。

「……一体どうこうつもりよ……」

レイと二人きりになつたアスカは思わずレイをにらみつけながらそう呟いた。

「あなたの方こそ、どうこうつもり?」

言い返されたアスカは言葉に詰まり、黙つて部屋に入るレイを見送つた。

家に戻つてきたシンジは急いでハンバーグを作る準備に入る。

「久しぶりだから、上手く作れるかわからないよ」

「それでもいいの」

そう言つてハンバーグを作るシンジの手は緊張から小刻みに震えていた。

これは、レイにハンバーグを食べてもらうためからくるものではな

かつた。

怯えるシンジの視線の先にはアスカが固い表情をして座っていた。

焼き上がるハンバーグの音、そして鼻孔をくすぐる匂い。

シンジがアスカと暮らし始めた直後にも一度ハンバーグを作った事がある。

しかし、アスカはハンバーグを特に表情も変えず能面のような顔で食べていた。

その姿にショックを受けたシンジはそれから一度とハンバーグを作つていなかつた。

夕食が始まり、シンジはドキドキしながらアスカの方に視線を送る。

「碇君、おいしいわ」

「あ、ありがと……」

レイの言葉に少しシンジは救われたような感じでシンジは再びアスカの顔色をうかがつた。

だけどアスカは表情一つ変えずにハンバーグを口に運んでいた。

シンジはガックリとした様子で夕食の後片付けをしている。

レイはじつとアスカの顔を見つめている。

アスカがそれに気がついてレイをにらみ返す。

「何よ?」

「別に何でもないわ……」

レイはそう言いつと部屋へと戻つて「行く。

その後アスカは落ち込んでいるシンジに声をかけず、夜は更けて行つた。

夜中になつても眠れなかつたシンジは、レイの泊つている部屋の明りがまだついている事に気がついた。

シンジはレイに気がつかれないよつとドアを薄く開けて中を覗き込む。

「綾波……、こんな夜中に絵を描いてるの?」

シンジは真剣な様子でスケッチブックに向かつているレイを見て、邪魔してはいけないと思いそのまま部屋を離れた。

そして翌日。

朝食の席にレイはスケッチブックを抱えて現れた。

シンジとアスカは怪訝そうな顔でレイの事を見つめている。

「綾波、大きな栗の木の絵は描けたの？」

シンジの言葉にレイは首を横に振る。

「違うわ。よく見て惣流さん、碇君」

レイがそう言ってスケッチブックを開く。

そこには美味しそうにハンバーグを満面の笑みで頬張るアスカの姿と、それを穏やかに微笑んで見守るシンジの姿が描かれていた。

「（…）これがアタシだつていうの……」

そう呟いたアスカの蒼い瞳から涙がこぼれ落ちた。

シンジも絵の中のアスカの笑顔を食い入るように見つめていた。

レイは涙を流しているアスカに向かつて話しかける。

「惣流さん、あなたはもう碇君を許してあげているんでしょう？責める事に疲れているんでしょう？ なんで素直に碇君に言つてあげないの？」

「だ、だつて……許してあげるって言つたら、シンジがどつかへ行つちやうと思つたから……」

アスカはそう言つと、つににその蒼い瞳からせきを切つたよつて涙をあふれさせる。

「……え？」

シンジは驚いた様子で声を上げた。

「だつて、アタシはシンジにひどいことしてきたし、こんなガリガリに瘦せたアタシなんて放つて、他の子の所に行くに決まってる……例えば、アンタとか……」

アスカの独白を聞いたシンジも必死に頭を下げて謝りはじめた。

「「めん！……僕もアスカの怪我が治らないように、わざとアスカを怒らせて暴れさせるようなことをしたんだ！元気になつたらこんな情けない僕を放つてドイツに帰っちゃうと思つたから……」

シンジの独白を聞いてアスカも涙が途切れるほど驚いた様子になる。

アスカとシンジは黙つて見つめ合つた。

お互ひの瞳には憎しみも、悲しみもすでに存在していなかつた。

「惣流さん、碇君、私はもう一枚絵を描いてみたくなつたの。……お願いできる？」

レイが描きたい絵は、幸せそうな恋人達の風景だと言つた。

シンジは大きな栗の木の下で、アスカを膝の上に乗せて抱き寄せた。

アスカも出来るだけ身をかがめて、シンジに顔を近づけようとしている。

その体勢のまま、レイが下書きを終えるまでじつと一人は待つてい

た。

「アスカ、窮屈な思いをさせちゃって」めんね

「ううん、あひヒシンジの身長は伸びて、アタシを追い抜いたやつ
だひひし、こんな今のうちだけよ」

レイが描き上げた一枚田の絵は、その後『大きな栗の木の下で』と
題名を付けて、美術コンクールに出品された。

美術の勉強を始めたばかりのレイの腕では受賞は無理だったが、そ
の絵は大切な宝物として碇家のリビングに飾られることになる。

LAS小説短編 大きな栗の木の下で（後書き）

「Jの作品は2009年に製作した短編「裸の大将 第三新東京市訪問編」をリメイクした短編「あなたが彼といら理由」を読者の方から頂いたご感想を参考にして、さらにリメイクした短編です。書き始めから5ヶ月。自分なりに満足できたとは思います。

ナルフの病棟の303号室[®]

惣流・アスカ・ラングレーといつ名札がかけられた病室を訪れるものはほとんど居ない。

彼女の保護者役を買って出た葛城ミサトは、アスカが病室に運ばれた日に一度だけ顔を見せたきりだつた。

同僚のチルドレン達も一度も病室を訪れる事は無い。

唯一、赤木リツコが部下の伊吹マヤを従えてたまに病室に入るだけ。

僕の補完計画

しかし、今日は赤木リツコ以外の訪問者が303号室を訪れた。

入ってきたのは学校の制服姿のシンジ。

生命維持装置しかない殺風景な病室の様子を気にすることなく、シンジは人形のようにベッドに横たわるアスカの姿を暗い瞳で見下ろしていた。

それからどのくらいの時間が経ったのだろう。

機械類の電子音しか聞こえない室内の静寂を破ったのはシンジだった。

「アスカ……、起きてよアスカ……」

シンジはアスカが横たわるベッドにゆっくり近づくながら呟いた。

「なにいつまでもそんなトコで寝ているんだよ。みんな死んじゃつたんだよ、綾波も渚も、加持さんも……」

そこままで言つとシンジはアスカの腕をつかむ。

「アスカつ、起きろつてば!」

するとシンジはアスカの腕に温もりがまつたく感じられない事に気がついた。

慌ててアスカの脈を取る。

しかし全く反応がない。

いつの間にか生命維持装置の機械音も止まっていた。

シンジの顔はいよいよ真っ青になつた。

「僕には！ アスカしか居ないんだよー 前みたいに笑つたり怒つたりしてよ！」

全く呼吸をしていないアスカの胸にシンジは顔をうずめてさうに叫ぶ。

「僕をバカにしたり、毒突いたり、余計なおせつかい焼いたりしろよー！」

ついに耐えきれなくなつたシンジの瞳から涙があふれ出す。

「僕は守りたかった！ アスカがこんな抜け殻になつてしまつ前に！」

「……それは本当の気持ちなのね？」

病室のドアが開いて、ミサトが姿を現した。

シンジは振りかえること無くベッドに横たわるアスカを抱き上げながら答える。

「はい……。僕はアスカが好きなんだつてはつきりと気がつきまして……。もう遅いけど……」

「まだ遅くはないわよ。」

「えつ？」

シンジが驚いて振り返ると、セイには微笑む//サトと……。

見覚えのある赤いインター/フロイス・ヘッドセツト。

赤みを帯びた金髪。

淡い黄色のワンピースを身に纏った少女。

惣流・アスカ・ラングレーが顔を真っ赤にして恥ずかしそうにうつむいていた。

「ど、どうこう」とですか//サトちゃん…」

「シンジ君、あなたが抱きしめているモノを良く見てみなさい」

シンジが抱いているものを確認すると、抱きあげられたせいで顔の部分を覆っていた金髪がすっかり分けられていた。

あらわになつた顔をみると、それは精巧に作られたマネキンだと理解した。

「アスカ……」

「シンジ……」

シンジはマネキンを投げ出すと、素早い動きでアスカに飛びついた！

「ちょ、ちょっとシンジ……」

「アスカ……、生きてる……。本当に良かつた……！」

シンジは堪らずアスカの心臓に耳を押し付けていた。

今までのアスカの性格ならシンジを撥ね退けていただろ。

しかし、逆にシンジを抱き寄せるアスカを見てミサトはアスカに質問をする必要ないと感じた。

アスカもシンジを受け入れたのは一目瞭然だからだ。

冷静さを取り戻したシンジはアスカの肩をしつかり抱き寄せながらも、少し憤慨した様子でミサトをにらみつけた。

険悪な雰囲気を察したミサトは慌ててシンジに向かって弁解を始める。

「実はね、この前シンジ君が倒した使徒が最後の使徒だったの……。それで、アスカは役目を終えてドイツに帰る事になったのよ」

「ええっ！？ アスカは帰ってしまうんですか！」

ミサトの言葉にアスカの肩を抱くシンジの手に力が入った。

「シンジ、痛い」

「あ、う、うめん」

シンジはアスカに謝り少しだけ力を緩めるが、アスカの事を放そつとはしなかった。

「ミサトはそんなシンジを見て少しあきれたように溜息をついた。

「大丈夫よシンジ君。アスカが日本に残ると言えば、残れるよつになつたから」

そのミサトの言葉を聞いたシンジはホッとして一気に体の緊張を解いた。

「でも、シンジ君とアスカがこのまま仲違した状態のままだと、アスカも意地を張つてドイツに帰るつて言い出すかも知れない。そこで加持のやつが策を練つたわけ」

そこまで話すとミサトは少し不機嫌そうな顔になる。

「ミサトさん、何を怒つているんですか？」

「あのバカ、敵を欺くにはまず味方からとか言つて、あたしに対しても死んだふりをしてたのよ！ しかも碇司令やその部下の剣崎君まで使って！」

「ミサトはもう言つてうなだれて、少し氣恥ずかしそうに呟く。

「おかげであたしはさ、帰つて来た加持に涙を流して抱きつゝ羽田になつちやつたわけよ」

思わず噴き出してしまつたシンジをミサトがジト目でにらみ返す。

「シンジ君もでしょ」

そしてミサトはアスカの方を見て嬉しそうに微笑みかける。

「それにしても良かつたわ。アスカの振りをしたマネキンに向かつてシンジ君が自分の気持ちを吐きだしてくれて」

今度はシンジの方に向かつてウイーンク。

「隣の部屋のモニターで、シンジ君の様子をアスカと一緒にみてたけど、アスカも感激して涙を流しててね。すぐにでもシンジ君の所に行きたいと言つのを引き止めるのが大変だったのよ」

少し強がって冷静に見えるように振る舞つていたアスカの顔が茹でダコのように真っ赤になってしまった。

シンジはそんなアスカの表情を見て胸をときめかせ、優しくアスカの髪を撫で始めた。

「さて、作戦も無事に成功したし、加持やあなた達のお母さんにも報告しないとね。心配しているだらうから」

「「お母さん?」」

シンジとアスカがユニークンして尋ねると、ミサトはしまったと口を押さえたが、すぐに愛想笑いを浮かべる。

「加持の考えた作戦の肝はね、シンジ君とアスカがお互いに頼る相手が一人しか居ないと思いこませる事だったのよ。だからあたしに

自分が死んだつてウソをついて、あたしの心を不安定にしてあたしが落ち込んでいるアスカを慰められないようにしたり、シンジ君に厳しい事を言わせるように仕向けた。そしてレイにも碇司令に頼んでシンジ君の事を知らない振りをさせて絶望させようとした

ミサトの言葉にシンジは少し気まずい顔になる。

「確かに、僕はアスカが少し怖かつた。だからミサトさん、綾波が目の前に居たらすがつていたかもしない……」「ごめん、アスカ」

「ううん、アタシも加持さんが生きてたら加持さんにすがつてばかり居たと思う……でも、多分それは恋じや無くて憧れのよつな気持ちだったのよ。大人になりたくて無理に背伸びしてた」

アスカはそこまで言つとまた照れ臭そうにシンジの瞳を上目遣いに見つめる。

「アタシはもつと自分の年相応の相手を見つけるべきだったのよ。例えば……シンジとか」

黙つて見つめあう二人の沈黙を破る様に病室のドアが開き、複数の人数の足音が響く。

シンジとアスカが入口の方に顔を向けると、そこには碇ユイ、惣流キヨウコを先頭に、ゲンドウ、コウゾウ、リツコ、オペレーターの三人、加持とレイが大挙して押し寄せていた。

みんな拍手をして口々に祝いの言葉を述べる。

「シンジ、そして惣流君。今までエヴァンゲリオンパイロットとし

ての任務、『ご苦労だつた。ただいまを持つてチルドレンを解任する。そして……おめでとう』

ゲンドウの言葉にシンジとアスカは満面の笑みを持つて答える。

「「ありがとう」」

どうやらゲンドウは最後の使徒を殲滅させた後、ゼーレが動き出す前にエヴァンゲリオン初号機と式号機から急いで碇ゴイと惣流キヨウコをサルベージしたようだ。

コアの無くなつたエヴァンゲリオンはただの巨大な人形同然であり、ゼーレの人類補完計画は頓挫してしまつた。

肝心なところで失敗してしまつたキール議長にゼーレの議員達は失望し、その後は全く足並みが揃わず、ネルフのゲンドウにされるがままになつてしまつた。

ゼーレはすつかり弱体化し、もはや人類補完計画を実行するだけの力は無くなつてしまつた。

ネルフもその任務を終えて解散し、ゲンドウはその体格を生かして見習い職人として復興が急ピッチで行われる第三新東京市の工務店に再就職した。

惣流キヨウコもミサトも第三新東京市の職場に就職し、新たな住居はコンフォート17において碇家を真ん中に葛城家と惣流家が隣り合う形になつた。

ネルフが解体され、コンフォート17も民間に払い下げられることになったのだ。

ユイは専業主婦となり、シンジとレイ、働いている惣流キヨウコに代わってアスカの三人の面倒を見るようになっている。

再び中学校が始まり、楽しそうに登校するシンジとアスカとレイの三人。

そしてそれを幸せそうに見送るユイ。

そんな光景を眺めている銀髪で赤い瞳をした少年の姿があった。

彼は渚カヲル。

祖父の家がある第三新東京市に引っ越ししてきたのだった。

第三新東京市にある高校を受験するため、故郷を離れて上京してきました。

「……結局人類補完計画は発動されてしまったんだね。でも、これがシンジ君の望んだ世界だなんて意外だったね。僕は辛かつた使徒との戦いの事も、彼は帳消しにするかと思ったのに」

「だつて、今まで辛い思いをしてきたから、僕はみんなの事が好きになれんだと思うからだよ」

そう呟くシンジの声が聞こえたような気がしてカヲルは後ろを振り返った。

しかし、そこにまつむじ風が一陣、舞い上がつただけだった。

アタシは、出会った時からシンジの事を好きだったわけじゃなかつた。

それどころか、さえない暗いやつだと思っていた。

でも、ユーブンの特訓をした後から少しずつシンジに対するアタシの気持ちは変わつて行つた。

あの時のアタシは自分の事しか考えて居なくて、シンジに会わせるつもりなんて無かつた。

だから、シンジとファーストにユーブンの組み合せを変更するとミサトに言われた時はショックだつた。

またアタシは仲間外れ。

どうせ今までずっと一人でやって來たし、最初から上手くいかないものだつたと、アタシも諦めていた。

でも、シンジはファーストよりアタシと組みたいと言つてきた。ファーストよりアタシが良いつて。

そしてシンジはアタシに無理をしないで欲しいとも。

アタシがエヴァンゲリオンのパイロットに選ばれた時から周りの人達は常に結果を出せと言い続けて來た。

努力しても結果を出せなければ、役立たずとまで言われた。

シンジにそう言われた時、アタシは無駄な努力をするなと言われたような気がして、怒鳴り返してしまつた。

でも、よく考えてみるとそれは誤解だと分かつた。

シンジはアタシが苦しんでいる事を感じ取つてくれていたんだと。

だけどアタシはシンジに對して素直に謝る事もお礼を言う事も一言も言つ事が出来ないでいた。

アタシはいつかシンジに素直な気持ちを伝えられるようにシンジとの同居をミサトに申し出た。

でも、シンジと一緒に暮らすよつになつてから、アタシはシンジに

当たり散らすよくなつてしまつた。

シンジつてば内罰的で暗い顔をして謝まつてばっかりだから。

そんなシンジの顔を見ているとイライラしてくるのよね。

だけど、シンジがアタシのために色々してくれてている事は知つている。

ハンバーグもかなり上手くなつたよね。

でも、アタシはいまだにシンジに一言も自分の気持ちを伝えていたかった。

このままじゃ、シンジはアタシに愛想を尽かしてしまつんじやないか。

アタシは手紙でシンジに感謝の気持ちを伝える事にした。

シンジへ

毎日アタシを起こしてくれたり、ご飯を作ってくれたりしてくれてありがとう。

アタシは優しくしてくれるシンジが大好きだよ。

……

「大好き」つて……ラブレターじゃない！

ちょっと大胆すぎるかな……でも、素直な気持ちを書くつて決めたんだし……。

「アスカー、ご飯できたよー」

シンジの呼ぶ声が聞こえる。

アタシは手紙を机の引出しにしまってリビングへと急いだ。

破られたラブレター

（2010年 碇シンジ誕生日記念LAS小説短編）

学校から帰ってきた僕は、さつそく部屋の掃除に取り掛かる。

ミサトさんもアスカも部屋の掃除を全くしてくれないから、自然と僕が掃除をしなければならなくなつた。

同居人にアスカが増えた事で、僕は掃除をしなければいけない部屋が一つ増えた。

でも、僕は嫌だとは思っていない。

ミサトさんやアスカが僕と一緒に同居をして掃除をさせてくれるのは、少なからず僕に好意を持つていてくれるってことなんだと思うから。

アスカの部屋を掃除していた僕は、引き出しから紙切れがはみ出しているのに気がついた。

僕はその紙切れの事がとても気になつて仕方がなかつた。

アスカの秘密を勝手にのぞくのはいけない事だと解つてているけれど

……僕は興味を抑えきれなかつた。

これは……僕宛てのラブレター……！？

アスカが僕の事、優しくつて大好きだつて……。

手紙を読んだ僕はとても幸せな気持ちでいっぱいになつた。

僕もアスカに告白した方がいいのかな……。

でも、この手紙を見た事がアスカに知られるまづいよね。僕も手紙でアスカに自分の思いを伝える事にした。

「アンタ、今日はやけに機嫌が良さそうじゃない？」

僕は夕食に思いつきり大きなハンバーグを作った。

アスカもおいしそうに食べててくれたし、好感触だ。

僕はアスカがラブレターを渡してくれる日を楽しみに待っていた。でも次の日、僕とアスカの仲が険悪になる出来事が起きてしまったんだ。

いつも定期的に行われているシンクロテスト。僕はアスカにいい所を見せようと頑張った。もうアスカの足手まといにはならないと。

「シンジ君、ユーハーナンバーワン！」

僕はミサトさんの言葉に笑顔で答へんだけど……。

「シンジに負けるなんて！」

ネルフの廊下でそう言つて荒れるアスカの姿を僕は見てしまったんだ。

「何見てるのよ、バカシンジ！」

アスカに怒鳴られた僕は逃げるよつにその場を立ち去つた。

アタシはシンクロ率をシンジに抜かされたと聞いて目の前が真っ暗になつた。

エヴァンゲリオン試号機のパイロットとして選ばれた時からアタシは常にトップで居る事を要求された。

アタシの代わりのパイロットはいくらでも居ると周りの大入達に脅

されることも何回もあった。

バカにされないように大学を卒業しても、みんなはアタシを惣流博士の娘としてしか見てくれない。

何の努力もしないシンジがアタシのシンクロ率を抜いたと聞いてアタシは腹が立つた。

どうしてシンジが！

小さい頃からエヴァのパイロットとしての厳しい訓練を受けていたアタシより、何でシンジの方がシンクロ率が高いのよ！

ミサトのマンションに戻つても、アタシのシンジに対する怒りは收まらなかつた。

「こんな手紙なんか、シンジなんて大嫌い！」

アタシはシンジに宛てて書いた手紙を細かく引きちぎって「ミニ箱に捨てた。

シンジがご飯を作つたと呼びに来ても、お風呂を沸かしたと言いに来ても、謝りに来ても、アタシは背中を向けて答えようとした。

アタシが無言の抵抗をしていると、シンジは諦めてアタシの部屋から出て行つた。

しばらく時間が経つて、すつかり夜中になつた。

「お腹空いたな……」

アタシは眠れないまま、ベッドに座り込んでいた。

「アスカ、入るわよ」

そう言つて部屋に入つて来たのはミサトとリツコだった。

「何でリツコまでここに？」

「あたしが説明してもアスカは信じないと pensé」

ポカンとしているアタシに向かつてミサトは心配した。

「アスカ、確かにシンクロ率はエヴァンゲリオンの攻撃力や防御力を高める効果があるけど、実戦で問われるのはパイロットの判断や操作能力よ」

「そうそう、シンクロ率が全てじゃないのよ」

リツコとミサトにそう言われてアタシは何で一人がアタシの部屋までわざわざ来てくれたのか分かった。

その後もリツコは細かいデータをあげて、エヴァとシンクロ率の関係を丁寧に説明してくれた。

リツコの説明を聞いたアタシはエヴァのパイロットとしての自信を取り戻してすっかり落ち着いた。

「じゃあシンジ君に謝つて仲直りするのよ」

「ごめんね、あたしが余計なこと言つちやつたせいで」

リツコとミサトの二人はとつぶにアタシの事をお見通しか。
明日の朝、シンジが起こしに来たら謝ろ。……。

僕はいつものように朝食を作つてアスカを起こしに行くんだけど、気が進まなかつた。

アスカはきっと僕の事を怒つてゐるから。

アスカの部屋に入った僕は、破られた紙くずが入つていたゴミ箱を見てしまつた。

あれは確かアスカが僕宛てに書いたラブレター？

アスカは僕をそこまで嫌いになってしまったんだ……！

胸が痛んだ僕は、そのままアスカの部屋を飛び出して食卓へと戻つた。

そうしたら、怒った様子でアスカが部屋から飛び出してきた。

「シンジ、何でアタシを起^さすに部屋を出て行^はっちゃうのよ。」

「アスカは僕の事、嫌いになつたんだろう？ 僕を見てい^るヒイラ
イラするつて！」

「それは、シンジが内罰的でウジウジした顔をして^るからよ……」

「僕宛てのラブレターを破り捨てたんだろう！？

「……シンジ、アタシの机の引き出しを開けて……！」

「い、ごめん」

「そりゃあ、昨日はかつとなつて手紙を破り捨てたけど……でも、
アタシ、シンジの事は嫌いじゃない……いえ、好きよ

「でも、僕は……」

そう答えると、僕は突然アスカに顔をつかまれて唇にアスカの唇を
押し付けられた。

これってキス……！？

女の子の唇つてこんなに柔らかいんだ……。

僕が初めてのキスの感触に酔いしれていると、アスカはゆっくりと
僕から体を離した。

「……アスカ、本当に僕なんかでいいの？」

「何よ、アタシが好きでもない相手にキスすると思つてたの？」

「でも、僕はそんなに頭も良くないし運動もできるわけじゃないし、
そんなにかつこ良くないし……」

「それは、シンジがウジウジ下を向いて^るからよ。シンジってか
つこ良いと思うわよ

「僕が？」

「もつと明るく笑つていればいいのよ。アタシ、シンジの笑顔が好きよ」

「そ、そうなの？」

「アタシのワガママにも付き合つてくれるし、アタシのために、飯も作つてくれるし……」

「何か、あんまりかつこ良くないな……」

「そんなことない、マグマの中に飛び込んでくれたシンジは十分力ツ」「良かったわよー」

「や、そう？」

「おー一人さん、ノロケはそのへりこにして朝一はんを食べて準備しないと学校に遅刻するわよー！」

「ミサト？」

「うわー、ミサトさん！」

いつの間にか一やー一やと笑いを浮かべたミサトさんが僕達の後ろに立っていた。

「行つてきますー！」

僕はアスカに手を引かれて通学路を走つてこる。

「アスカ、こんな所を見られて平氣なの？」

「別に構わないわよ。後、これから内罰的になるのは禁止ね

「どうして？」

「だつて、アタシがつまらない男の彼女になつた事になつちやうじやない」

「でも、自信がないなあ」

「そうね、今日は放課後、シンジの誕生日プレゼントの服を買つて行きましょー！ あんなダサいTシャツ変えなきよー！」

今日は僕の誕生日。

アスカからはTシャツ以上に大切な物を受け取った。
自信を持つて胸を張つて歩くつて事を。

2010年 七夕記念ヨシュエス短編 七月七日の殺意

＜ツアイス地方 エルモ村＞

七月のある日、エステル達はエルモ村を遊撃士協会の仕事で訪れた。

「夏は暑いから、温泉より海の方に観光客が集まると思ったのに、賑やかね」

「エルモ村でお祭りをやつているみたいだよ」

ヨシュアの指摘の通り、エステルが辺りを見回すと、村の至る所に籠の葉が飾り付けられていた。

「これがキリカさんの言つていた七夕祭りか……」

「籠の葉に願い事を書いた紙を吊るすと、空のお星様が叶えてくれるつて言つけど、僕達は知らなかつたよね」

「あたし達にはエイドス様がいるように、カルバードの人達にも信じる神様がいるんだね」

エステルはそう言つて、街の中を見回して探し物をしているようだつた。

「何を探しているの？」

「……好きな相手の名前を紙に書いて吊るすと、恋が実るつて言つ籠の葉はどこにあるのかな？」

「えつ？」

突然エステルにそんな事を尋ねられたヨシュアは、衝撃を受けたよ

うに固まってしまった。

「ヨシュア？」

「あ、そうだね……紅葉亭のマオさんには聞けばわかるんじやないかな？」

ヨシュアの答えを聞いたエステルは元気に紅葉亭へ向かって駆けだして行く。

なんとか自分を取り戻したヨシュアだったが、ショックを受けているのかとてもゆっくりとした足取りで歩いて行く。

「おや、ヨシュアじゃないか。エステルなら奥の庭にある笹の葉に短冊をかけに行つたよ」

「そ、そうですか……」

マオはヨシュアの焦つたような様子を見て、穏やかに笑いだした。

「ははあ、エステルが誰の名前を書いたのか気になるんだね？」

「そ、そんなことは……」

「ハツハツハ、もつとびつしりと構えて居なさい！ あの子がヨシュア以外のこの名前を書くわけがないだろ？」「…」

「ぼ、僕もエステルのところに行つてきますー！」

ヨシュアがエステルの居る紅葉亭の奥の庭にたどり着くと、エステルは藍色の短冊を笹の葉に吊るし終わるところだった。

ヨシュアの姿に気が付くと、エステルは笑顔でヨシュアのところにやって来た。

「ふう、七夕の日に間に会つてよかつた。エルモ村に来る途中に何も無くて幸いだつたわ」

「あの短冊には僕の名前が書いてあるの？」

「ううん、違うよ」

あたむりとヨシュアの言葉を否定したエステルに、またヨシュアはショックを受けて胸を押さえた。

「キリカさんに言われたんだけど、あたし達のところの仕事で忙しかったじゃない？だから、今日は紅葉亭に泊まつてゆっくりしようよ」

「やうだね……」

力の無い様子で答えたヨシュアの顔をエステルは不思議そうにのぞきこんだ。

「どうしたのヨシュア、元気無いよ？」

「落ち込む事があつてね……」

「ふーん、そんな沈んだ気分もさ、お祭りを回っていたら吹き飛ぶよ、ねえ行こうつー！」

ヨシュアはエステルに手を強引に引かれて祭りでござわうホールモ村の中を回つてみる事になつた。

エステルに手を引かれながらも、ヨシュアの中ではある考えが頭の中でグルグルと回つていた。

「エステルは誰の名前を書いたんだろう……」

「ヨシュア、何をブツブツ言つてるの？」

「……ねえエステル、アガットさんの事はどう思つ？」

「アガット？ そうね、厳しいけどたまには優しくしてくれ、頼りになる先輩かな？ ……どうしてそんな事を聞くの？」

「いや、別に……ちょっと気になつたからさ。じゃあオリビエさん

は？」

ヨシュアはその後エステルに思いつく限りの男性の名前を挙げて印象を聞いてみたが、要領を得なかつた。祭りを楽しんだエステル達は、温泉で疲れを取る事にして、男湯と女湯に別れた。

ヨシュアはエステルが女湯に入ったのを見届けると、急いで紅葉亭の奥にある笹の葉へと向かつた。

「確かに、あそこにある紫の短冊がエステルがつけてたやつだよね……」

いけない事だとは知りつつも、ヨシュアはエステルの書いた名前を確認せずにいられなかつたのだ。

おそるおそるヨシュアが短冊を見ると、そこには『ジン・ヴァセック』と書かれていた。

「ジンさん……！」

憎しみを込めてそうつぶやいたヨシュアは、興奮を抑えるため何回も深呼吸をする。

人のあまり来ない建物の陰で落ち着いたヨシュアは、天を仰いで自分で自分をバカにして笑う。

「やっぱりエステルは包容力のある男の人が好きなんだね。僕なんかジンさんに比べたらまだ子供だ……」

部屋に戻つたヨシュアはカシウス家に来た当初のように思い詰めた表情で座り込んでいた。

そこに湯上りのエステルが戻つて來た。

「はー、気持ち良かつた。ヨシュアも露天風呂に来ればよかつたのに。……あの時とは違つて人も居たし、悲鳴なんかあげないからさ」

エステルは返事をしないヨシュアを不思議に思つて、近づいて行つた。

そして、ヨシュアの異変に気がついた。

「あれヨシュア、お風呂に入つていないの？……どうしたの？」

「……エステルは僕にただ同情していただけなんだよね。勝手に好きになつた僕は迷惑だよね」

「ヨシュア、何を言つてるの？」

「エステルは、ジンさんが好きだつて分かつたから……だから短冊に名前を書いて吊るしたんだろう？」

ヨシュアの涙声交じりの言葉を聞いてエステルは困つた表情でおでこを押さえた。

「ヨシュア、それは激しく勘違いよ。あれはキリカさんが書いた短冊を笹の葉につけてくれつて依頼されたわけ。ヨシュアだつてあたしに注意したじやないの。依頼人の秘密をもらすなつて」

「キリカさんの依頼だつて……？」

そう自分に言い聞かせるよつとつぶやいたヨシュアは体の力が抜けてしまつたり込んだ。

そして、ヨシュアの瞳から涙がこぼれ出す。

「は、はは……ホツとしたら何で涙が出てくるんだろう」

エステルは顔を赤らめながらヨシュアに話す。

「ミ、ミシュー……あたし達も一人で短冊を笹の葉に吊るしに行こうか？」

「でも、僕達はエイドス様を信仰しているわけだし……」

「空の神様同士、きっと友達だからって許して下せるわよー。」

エステルに手を引かれてマオに短冊をもらひために階段を降りて行くヨシュア。

その表情は祭りの時は真逆のとても満ち足りた輝く様な笑顔だった。

2010年 七夕記念LAS短編 一番星に憧れて

＜第三新東京市 公園＞

「何よシンジ、こんな所まで連れて来て」

「アスカに話したい事があつてさ」

学校から一人がコンフォート17にある葛城家に帰宅してしばらく経つた後。

シンジはアスカを散歩と言ひ名田で誘つて外に出た。

アスカは終始面白くなさそうな顔でシンジの後ろを付いて行き、二人は公園にたどりついた。

ここはシンジとアスカにとつて特別な場所だった。

二人は出会つた直後は距離を置いていたのだが、使徒を倒すために協力しなければならなくなつた時に、シンジがアスカに歩み寄つたのがこの公園。

それから度々シンジがアスカに大事な話をする時にはこの公園が定番となつていた。

シンジはしばらくの間黙り込んだままだつた。

アスカの方もじつとシンジが話すまで待つてゐる事にした。

時刻はちょうど夕暮れ時。

「アスカつて、一番星が好きなんだよね？ 前にそう話してくれたじゃないか」

「そうね、夜空で一番最初に光る星 たいていは金星の事だけど」

アスカが返事をしてくれた事に安心したシンジはゆっくりと本題を切り出した。

「昨日のシンクロテストで、僕が一番になつたりして『メン』何を謝つているのよ」

シンジの言葉を聞いたアスカの顔が険しいものになつて行く。

「今度のシンクロテストは、アスカが一番になるよつとするから」「アタシをバカにしてるの！？ アタシはアンタのおじぼれで一番になつたつて、全然嬉しくないから！」

アスカは怒つて思いつきりシンジのほおを叩いた。

シンジのほおに赤い手形が刻まれる。

ほおの痛さに崩れ落ちそうになるシンジに背を向けてアスカは公園を出て行こうとする。

そのアスカの腕をシンジはつかんで必死に引き止めた。

「離しなさいよ…」

「離れない、だつてこのままアスカに嫌われたらいやだから…」

アスカはシンジの肩を足蹴りにして腕をほどくつとするが、シンジの意志は固く、一筋縄ではいかなかつた。

「痛い！」

「お願ひ、話を聞いてよ…」

いつもより強情なシンジの行動に、アスカの方が折れた。

「わかつたわ、話を聞くから手を離しなさいよ……本当に痛いんだから」

「あ……『じめん』

アスカから手を離したシンジは意を決して目をつぶしながら大声で叫ぶ。

「僕がシンクロテストを頑張るようになったのは……アスカを守りたいと思つたからなんだ！」

「バカシンジが、エースパイロットのアタシを守る？」

「僕はアスカの事……好きになつてしまつたから……」

「ふん、アンタもどうせアタシを外見で判断してるんでしょ、言い寄る男はみんなそう。やっぱアタシは加持さんみたいな……」

そこまで言つたアスカは、優しくシンジに手を撫でられて言葉を止めた。

「アスカが加持さんを好きでもいい。でも、僕は気がついたんだ。アスカがずいぶんと無理をしている事に」

「アタシは別に……」

「自分の弱い所を隠して見せないような……強がつている気がするんだよ」

アスカはシンジの言葉を聞いて下を向いて黙り込んでしまつた。

「アスカは本当はもつとかわいい子じゃないのかなと思つたら、なんかこう……守りたい、好きだつて気持ちが強くなつて」

「……それじゃあいつものアタシがかわいくないみたいじゃないの」

アスカはそう言つてシンジの手の甲を思いつめつねつた。

「アタシの事、かわいいつて言つてくれたのはシンジが初めてだから正直戸惑つているわ」

「突然、変な事を言つて『メン』

「謝る事はないわ」

顔をあげてアスカは星空を眺めている。

シンジもアスカにならって同じように星空を眺めた。すでに一番星以外の星もたくさん空に輝いている。

「やっぱり、たくさん星が輝いているから星空っていいのよね」

「そうだね、一番星一個だけじゃ寂しいよね」

「アタシさ、ドイツではいつも他人に負けないようにしてた。だって、周りのみんなはアタシを見下すような態度を取っていたから」

「アスカは負けず嫌いだからね」

「好きで負けず嫌いにならんじゃない！ アタシは一番になる事で対抗していたのよ。でもアタシが上に行けば行くほど、みんなの心は離れて行つた」

そこまで話すと、アスカは自分をあや笑いつつに天を仰いだ。

「当然よね、今度はアタシが見下す方になつていたんだもの。エヴァのパイロットとしても、シンジやファーストよりも自分が上だつて思つていた。最低よね」

「アスカ、どつちがエースパイロットだなんて関係無いと思つよ。あの分裂する使徒だつて、二人で力を合わせて倒したんだからや」

シンジの言葉を聞いて、アスカはゆつくりと頷いた。

「うん、アタシは別にもエースパイロットじゃ無くてもいいのよ。シンジとファーストと一緒に使徒を倒せれば」

アスカがシンジに向かつて微笑むと、シンジも安心して嬉しさに充ちあふれた笑顔になる。

「アタシもね、式唱機がマグマの底に沈みそうになった時、シンジが助けてくれた事とか思いだしたの。あの時のお礼をあらためて言わせてもらうわ、ありがとう」「ど、どういたしまして……」

アスカに見つめられたシンジは顔が真っ赤になつた。

そんなシンジの顔を見て、アスカはからかうような表情になる。

「ま、一番の座を奪われた時は初号機をプログラナイフで刺してやろうと思つたりしたけどね」

「それは怖いよ」

「でも、アタシはまだ加持さんを一番の男性だと思っているけどね」「それでも構わないよ、僕がアスカを好きだつて事に変わりはないし」

アスカはシンジの手をつかんでコンフォートへの帰り道を歩いて行く。

「あーあ、お腹がすいちゃつたわ。早く家に帰つてタジ飯作つてよ……つて何泣いているのよシンジ?」

「アスカに嫌われないで本当によかつた……」

「情けないわね、そんな事でメソメソして……」

口ではそう言つてもアスカは嬉しそうな表情を浮かべて持つていたハンカチでシンジの涙をそつと拭つた。

その後コンフォート17に戻つたアスカとシンジは、一部始終をのぞいていたミサトとペンペンにからかわれ続けた。

僕は泳ぐのが苦手だつた。

小さい頃から見ていた不思議な夢も原因なんだ。

目の前で誰かがおぼれて沈んで行くという夢を何回も見た。

「人間は浮くようにはできていないんだ」

体育の水泳の授業の時間はとても嫌で逃げてばかりいた。

先生も諦めてサジを投げるくらいだつた。

無気力な毎日を送っていた僕の元に、ある日父さんから手紙が来た。父さんの元へ行つた僕は、エヴァンゲリオンという巨大なロボットのパイロットにさせられてしまった。

僕が戦わないと人類が滅亡するって言われても良く分からなかつた。ただ、流されるように僕はエヴァンゲリオンに乗り込んで使徒という怪獣みたいなものと戦つた。

いや、あれは戦いじゃなかつた。

僕はただ痛い思いをしただけで、使徒は勝手に倒されていた。

こんな辛い思いをするなら逃げ出したいと思つたけど、おじさんのところへ戻つてもみじめな思いをするだけ。

でも、そんな沈んだ僕の心をつかみ上げてくれる、そんな人と会えた。

「シンちゃん、ちょっと散らかつているけど、我慢してね

「これがちょっとですか……」

僕の上司の人で10歳以上年離れたお姉さんみたいに接してくれる人。

ミサトさんは僕の本当のお姉さんになつてくれたんだつて思つた：

……そう錯覚してしまった。

机の上に置かれた『サードチルドレン監督日誌』。

そこには僕のエヴァの操縦に関するデータが細かく書かれていた。ミサトさんは、僕をエヴァのパイロットとしか見ていない……。こうなつたらエルフの、いや、父さんの『駒』らしく散つてやうつと使徒と思いつき戦つた。

でも、僕は初めての使徒との戦いに勝つてしまつた。いくら周りのみんなに褒められても僕の心は浮き上がり散つて来なかつた。

……そして、僕は重たい心と体を本物の水の中に沈めてしまおうと、ミサトさんの家を飛び出した。

僕が向かつたのは第三新東京市で一番景色の綺麗な湖と観光パンフレットに書かれていた芦ノ湖だつた。

時刻はちょうど夕暮れだつた。

水面が茜色に染まる幻想的な景色を見れるなんて来てよかつたと思った。

非常警戒が解除されてまだ数時間しか経っていないからなのか、遊覧船を含めて人の気配はしなかつた。

僕もリニアレールの運転が再開した部分から、運休中のバスに乗りずっとここまで長々と歩いて來た。

「さあ、あと少しだね……」

僕は自分に言い聞かせるようにそつそつと、転落防止の柵を乗り越

えて、湖の中に向かって思いつきり飛び込んだ。

体は肩まで沈み込んだけど、僕はもがいて水面に顔を出している。

……どうして？

僕はおぼれて湖の底に沈むはずじゃなかつたの？

それでもだんだん手足の力が抜けて行く。

そんな僕の耳に届いたのはヘリコプターの音と、誰かが飛び込む水の音だつた。

「ミサトさん……」

ミサトさんは真っ直ぐ僕のところに向かって泳いでくる。

僕はミサトさんに抱きかかえられて浮いているんだ……。

僕はネルフ本部に連れ戻されたけど、不思議と小言の一つも無べ／＼ミサトさんの家へ戻る事になつた。

自分に割り当てられた部屋の隅で僕はずつと座り込んでいた。すると、そんなに時間も経たないうちにミサトさんが家に戻つて來た。

ミサトさんは紅茶色の髪をした、外国人みたいな青い目をした女子を連れて來ていた。

「シンジ君、紹介するわ。惣流・アスカ・ラングレー、あなたと同じエヴァンゲリオンのパイロットよ。レイが怪我をしているからドイツ支部から來てもらつたの」

「よろしく

「ひ、うん」

突然、同僚のパイロットを紹介されて僕は何だか分からなくなつた。

「これから、シンジ君がバカな事をしないように」アスカに側にいて
もううづから

「ええつ、僕が、この子と一緒に？」

「そ、アスカの部屋はあっちだから」

「ダンケ、ミサト。アタシもホテル暮らしさ嫌だつたからさ」

僕の目の前で、ミサトさんとアスカの話はまとまって行く。

「あの惣流……さん？」

「何よ？」

「僕と同じ家でいいの？」

「アメリカではルームシェアリングぐらい当たり前よ」

アスカの態度に僕は拍子抜けしてしまった。

「じゃ、私はネルフに戻るから一人とも仲良くね」

ミサトさんはそう言い残して家を出て行ってしまった。

「アンタ、ミサトに甘えて迷惑を掛けんんじゃないわよ」

「僕がミサトさんに甘えてるつて？」

「机の上に置きっぱなしにした芦ノ湖のパンフレット、それがアンタからミサトへのSOIじやないの？」

アスカに指摘されて僕は気がついた。

僕は死にたいと言ひながらミサトさんに助けを求めていたんだつて。
そしてミサトさんは差し伸べた僕の手を……引き上げてくれたんだ。

……沈んでいた僕の心が、浮き上がつてくるのを僕は感じた。

またミサトさんとの、さらにアスカを加えた3人の家族としての生活が再開した。

アスカは僕に料理や掃除、家事全般をやることを強制した。

体を動かしていれば暗い事も考えなくなるつて。

学校から帰つたら家事をしなくちゃいけなくなつた僕は、確かに落ち込む暇が無くなつた。

「アスカって、僕にキツく当たるけど、ひょっとして僕の事嫌いなの？」

「別にそんなこと無いけど、アンタがバカシンンジだからよ
「そつか、別に嫌われているわけじゃないんだ……」

それでもアスカはいつも僕に対して厳しいとは思った。

ハンバーグはもうちょっと火を通す焼き方をした方がいいとか、お風呂はぬるためにしろとか、下着はネットに入れて洗濯しろとか……。さらに僕が下を向いて歩きすぎだと、同じ上着を何日も着るなんか、もっと大きな声で話せとか、たくさんご飯を食べるとかお節介なぐらいだつた。

数日後、零号機とアスカのシンクロテストの最中にネルフの発令所に警報が鳴り響いた。

新しい使徒が出現してこちらに向かつてくるんだつて。

アスカは零号機とまだシンクロできなかつたから、僕が初号機に乗つて

出撃する事になった。

父さんは何も言わずに僕を戦場に送りだす。でも、父さんの事が信じられなくとも僕がここに居るためにはエヴァに乗るしかない。

あれ、何で僕はここ居たって思うんだが？
答えはわかっている。

ミサトさんとアスカと一緒に居たい気持ちが芽生えて来たから。

「エヴァンゲリオン初号機、発進！」

ミサトさんの号令で初号機が地上に向かつて射出されて行くのがわかる。

地上に出た瞬間、ミサトさんから通信が入った。

「避けて！
「えっ？」

僕はミサトさんの言葉の意味を考える間もないまま、視界一面が真っ白な光に包まれた。

熱い……「こしがまるで沸騰しているんじゃないかと思いつぶらいい体中がヒリヒリした。

そして、胸の辺りが苦しい……息が苦しい……まるでおぼれてしまつたみたいだ……！

……僕の前で、また誰かがおぼれていると重い夢を見た。

いや、おぼれているんじゃない、人がここの溶けて行っているんだ。

エヴァに乗るよになつた僕には解つた。

じゃあ、僕の目の前で溶けているのは誰なんだ？
夢が覚めて行く……。

「目が覚めた？」

「アスカ……」

目を開けると、そこにはアスカが立っていた。
部屋の中を見回すと、ここには病室。

ゆつたりとした服を着て、ベッドに寝かされていたのが分かった。

「アンタ、泣いているみたいだけビ、どうしたの？」
「えつ？」

僕はアスカに言われて、目じりに涙がたまっている事に気がついた。

「何でだろう……」

「まあいいわ、ほら、おむすびを持ってきたから食べなさいー！」

アスカが僕の前に差し出したおむすびは形がガタガタになっていて、
器用なアスカが作ったものとは思えないほどだつた。

「これって、もしかしてミサトさんが作つたの？」

ミサトさんが作つた料理を食べたら命にかかるから、確認のため
に聞いてみると、アスカは顔を赤らめてボソボソと話す。

「う、うるさいわね、アタシは日本に来て初めておむすびを知つた
んだから仕方が無いじゃない！」

「ありがとう、でも僕はあんまり食欲が無いから……」

「そんなこと言つと、今夜の作戦中にお腹が空いて倒れちゃうわよ

！」

「えつ……エヴァは無事だつたの？」

「数時間後に修理が終わるみたい。ミサトやリックは大忙しよ」

「また、エヴァに乗らなくちゃいけないのか……」

僕は自分の体が震えてくるのを感じた。

本能的に死を悟つたあんな体験は一度としたくない。

「僕はもうエヴァには乗りたくない……」

「そんなこと言って、逃げちゃダメよ」

「アスカはあんな痛い目に合つた事が無いからそんな事が言えるんだ！」

「バカシンジ、そんな甘い事言つくな！ ミサトやリックもアントを信じて頑張つてるのよ！」

「もういい、放つて置いてよ。」

僕はアスカを追い出すように、手を振りまわした。

でも、アスカはそんな僕の手をグッとつかんで僕に向かつて呼びかけた。

「逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ！」

「どうして、アスカは僕を見捨てないんだよ……父さんみたいに……」

僕がヤケクソ気味にそう叫ぶと、アスカは落ち着いた暗い声でポツリと呟いた。

「……それは、アントがアタシにそつくりだから

「えつ？」

「おむすび、食べなさいよ

アスカはそう言って僕の病室を出て行った。

僕はアスカの作ってくれたおむすびを食べないわけにはいかなかつた。

お茶が無くて食べにくいと思つたけど、そんなことは無かつた。

僕の目と鼻から水が止めどなくあふれて来たから。

「はは、味が良く分からないや……」

僕はそう言いながらアスカの作ってくれたおむすびを食べ続けた。

作戦のため招集された時間になる前に、僕はプラグスーツを着てミサトさんとアスカが待つブリーフィングルームに顔を出した。

「シンジ君、やつてくれるのね

「アンタ、吹つ切れたの？」

ミサトさんとアスカに向かつて僕は無言で強くうなずいた。

「アスカ、おむすびありがと」

「ど、どういたしまして」

僕はこんなふうにお礼を言つたのは生まれて初めてかもしれない。アスカは照れ臭そうに顔を少し赤くしてそっぽを向いていた。

「それではこれから『ヤシマ作戦』の内容を説明するわ

ミサトさんがきつとした顔になつて、作戦の内容を僕達に説明

する。

長距離・大出量のライフルを使って強力なレーザーを撃つて使徒を倒す事。

シンク口率の高い僕が射手を担当して、アスカは使徒が攻撃してきた時のために盾を持つて防ぐ事。

「もし僕が外したらどうなるんですか？」

「その時は急いで2発目を撃つしかないわね。でも、ライフルの再充填には20秒近くかかるのよ」

「さつき、盾は17秒しか使徒の攻撃に耐えられないって……！
それじゃあ、アスカが！」

僕がそう言つてアスカの方を見つめると、アスカは落ち着いた様子だった。

「大丈夫、アタシはシンジを信頼しているから」

そして僕達は作戦開始時刻になるまで、一人きりでパイロット控室で待つことになった。

お互に座り込んで黙つたままだつた。

アスカも緊張しているんだつて僕にも分かつた。

部屋の空気が張り詰めている。

でも、僕はアスカに声を掛けずにはいられなかつた。

「アスカは何でエヴァに乗るの？」

「負けたくないからよ」

「何に？」

「アタシがエヴァから降りたら、きっと何もすることが無くなっちやう。そしていつもウジウジと悩んでいるんだわ」

「僕もここに来る前はそうだった、いや、最近までそうだったと思

う

アスカは強い子じゃなかつたんだ。

必死に暗い思考の海に沈んでしまわないよう、浮きあがろうと必死にもがいているだけなんだ。

僕はそう思った。

「時間ね、アタシ先に行くわ」

アスカは僕より早く出口のところに立つて、そして振り向いた。

「アンタはアタシが守るから」

バイバイ、と軽く咳いてアスカの後ろ姿は消えて行った。まるで最期の別れみたいで僕はとても嫌だった。

「シンジ君、私達のエネルギー、あなたに預けるわ

ミサトさんは戦略自衛隊や日本中の企業・研究所、そして国連の軍隊が持つていた電気や電池を集めてライフルのエネルギー源にしたんだつて。

でも、1発目を外したら、2発目は……日本中を停電させてでも電気を集めないといけない……いや、それもあるけど僕はアスカが心配だった。

「電圧上昇中！」

「冷却システム作動します！」

エヴァに乗っている僕の耳に発令所に居るネルフの大人達の慌ただしい声が聞こえる。

「最終安全装置解除！」

「撃つて、シンジ君！」

ミサトさんの合図を聞いて、僕はライフルの引き金を絞った！ライフルから撃たれたレーザーは使徒に向かって命中した！だけど、信じられない事に使徒は倒せなかつたんだ。

「ATフィールドを貫通して使徒にダメージを与える事はできましたが、倒すには至らなかつたようです！」

「シンジ君、第2射急いで！」

通信の向こう側の発令所が動搖しているのが分かる。僕達に気がついた使徒がこちらに近づいて来るのが見えた！そして使徒からレーザー攻撃が打ち出され、僕は思わず目を瞑つてしまつた！

「うわああああ！」

でも、僕が覚悟していた熱線はやつて来なかつた。

僕を守るようにアスカの乗る零号機が盾を持って攻撃を防いでいる！

「アスカ、アスカー！」

僕の目の前でアスカの持つ盾が溶けて行く。

「早く、早く！」

「後5秒！」

発令所から聞こえる声に僕はショックを受けた。
このままじゃ、アスカが持たない！

「きやあああああ！」

ついに盾が溶けてしまい、アスカの悲鳴が僕にも伝わってくる！

「アスカあ！」

「今よ！」

僕が撃つたレーザーは使徒を撃ち抜き、使徒は今度こそ倒れたみたいだつた。

そして崩れ落ちる零号機。

初号機で僕は零号機のエントリープラグを引き抜き、アスカを助けようと自分も初号機を降りて向かう。
でも、自分一人の力では零号機のエントリープラグのハッチは簡単には開けなかつた。

「こんのおおおー！」

それでも僕は普段では考えられない力を出して、何とかハッチを開く事が出来た。

「アスカ！」

「う……シンジ？」

僕が呼びかけると、エントリープラグの中に居たアスカはゆっくりと目を開いた。

「よかつた、無事で。……また会えてよかつた

僕は一人で立ち上がる事が出来ないアスカに肩を貸して抱え上げながら歩き出した。

「出発前にバイバイなんて悲しい事言わないでよ

僕はそう言ってアスカの肩をつかむ手に力を入れる。

「今の僕達にはエヴァに乗る以外何も無いかもしねないけど……いつか自分のしたい何かが見つかると思うんだ」

アスカは黙つてうつむいたままだ。

「それに……アスカがエヴァのパイロットを辞めても、僕もミサトさんと一緒にアスカの側に居るよ。その僕達……家族だろ？」

「……ありがとうシンジ、でもアタシがパイロットを辞めても、アントンタがパイロットを辞めても、2人ともパイロットを辞めても一緒に居られない」

僕がアスカの言葉に戸惑つていると、アスカの方から僕に囁きかけて来た。

「だから、2人でパイロットを続けるのが良いと思うのよ

アスカの言葉に答えるように、僕はアスカの肩を握る手に力を入れた。

それから僕とアスカは2人でいろいろな場所に出かけるようになつた。

僕にとつて嫌な場所だつた芦ノ湖で遊覧船に乗つたり、ネルフのプールを貸し切りにしてもらつたり……。

今まで僕はプールが嫌いで仕方無かつたけど、アスカに泳ぎを教えてもらう事になつた。

始めは基本のバタ足から、アスカに手を引いてもらつて僕は泳ぐ事が出来た。

「シンジつたら、アタシのおっぱいばかり見ていやらしい

「だつて……その、目の前にあるから……」

「シンジが泳げるようになつたら、アタシのおっぱいを生で見せてもいいわよ」

そんな事を言われて、僕は気が動転してしまつた。

慌てふためく僕を見て、アスカは大笑い。

僕はそれからも泳げるよう一生懸命努力した。

……決して、アスカの胸を見たいわけじゃない。

なんで、僕は自分に言い訳しているんだろう。

「シンジ、見て見て！ スーパージャイアントストロングエントリ
ー！」

火山の火口付近に使徒の幼生が見つかった。

アスカの乗る式号機が溶岩の中に潜つて使徒を捕獲する事になつた。

「あーあ、早く終わらせてシャワー浴びたい」

アスカは軽い調子だけど、僕は胸がざわめくのを感じていた。
そして、僕の嫌な予感は的中した。

「な、何よこれー！」

「使徒が羽化を始めたんだわ！」

「使徒捕獲作戦を中止、使徒殲滅作戦に切り替えるわよアスカ！」

「了解！」

アスカは溶岩の中で使徒と戦う事になってしまった。

使徒の外皮は相当堅いのか、プログナイフでは歯が立たないで居た。
そんな時、ミサトさんからの通信が聞こえた。

「アスカ、熱膨張よ！」

「冷却水を全て1番のパイプに回して！」

「はい、先輩！」

アスカはミサトさんの指示通り使徒の口に冷却パイプを突っ込んで
使徒をプログナイフで引き裂いた！

「パターン青、消滅しました！」

「ナイス、アスカ！」

ミサトさん達の歓声が僕の耳にも届いて来た。
でも、僕の目の前でとんでもない事が起こった。
式号機を引き上げていたパイプが音を立てて一気に引きちぎれたら
だ。

「アスカ！」

僕はそう叫んで、沈んで行く弐号機を助けようと、溶岩の中に顔をつけて飛び込んで行つた。

そして奇跡的に弐号機の腕をつかんで引きあげる事が出来た。アスカを助けられてホッとした僕は、急に目まいがしてそのまま気を失つた。

「目が覚めた？」

気が付くと、僕は浴衣を着たアスカにひざ枕をしてもらつていた。ここはどこかの旅館の部屋のようだつた。

僕は畳の上で寝ていた。

「アンタが溶岩の中に飛び込んだ時、凄い力のATフィールドが発生して熱を防いだらしいわ。それでアンタは精神力を使い果たして気を失つたみたい」

「そうだったんだ……」

僕がそう呟くと、アスカは突然僕の頭を両手でグリグリとし始めた。

「このバカシンジ！ 2人とも溶岩の底に沈んじゃうところだつたのよ！」

「ごめん、体が勝手に動いちゃつて……」

「ううん、謝る事無いわ。……アタシ、自分の体が沈んで行くのを感じて、死んじゃうのかと思った。でも、急に体が浮き上がるのを感じて……シンジが腕をつかみ上げてくれたのが分かつて……嬉しかつた」

アスカの声が涙混じりになるのを聞いて、僕は起き上がりアスカの顔を見つめた。

目を潤ませて僕を見上げるアスカの顔はとても可愛かったんだ。

「お礼にアタシのおっぱいを見せてあげるね。温泉で温まつたから大きくなつたと思つんだ……」

そう言つてアスカは浴衣を脱ぎうつとする。

僕は唾を飲んでのどを鳴らしてアスカを見つめていた。

「なんてね、嘘よ」

アスカはしつかりとノースリーブの洋服を着ていた。

僕はホツとしたような、がっかりしたような気持ちになつてため息をついた。

「アハハ、本気にして？ 残念賞を上げるから元気出しなさいよ」

そう言つとアスカは僕に顔を近づけて、軽くほっぺたにキスをした。

……アスカが、僕にキス？

こんなかわいい子にキスをしてもらえるなんて！

この時僕の心は空へと舞い上がるような、そんな気持ちになつた。

「シンジつたら、浮かれすぎよ」

僕はよっぽどだらしのない顔をしていたんだろう、アスカにそう言われてしまった。

次の日から僕は学校でも前を向いて、クラスのみんなにも元気にいさつをするようになった。

今まで僕は下ばかり向いて自分の人生をつまらないものだと思い込んでいたんだ。

それから僕はアスカと協力して次々と使徒を倒して行った。
そして、白黒の縞模様の球体が空に浮かんでいるような姿の使徒がやつて來た。

この時の僕は自信に充ちあふれていた。
間違いの元はそれだつたのかもしない。

「僕が突撃して反応を見ます！」

すっかりナイト氣取りになつた僕は、アスカに危険な目に遭わせたくないと言つ気持ちが強くなつていた。

「ちょっとシンジ君？ アスカの式号機が追いつくのを待ちなさい！」

僕はミサトさんの命令を無視して使徒に向かつて突き進んだ。
すると、足元が沈み込んで行く感じがした。
空に浮かんでいる球体の影だと思ったのは、真つ暗な底なし沼のようなものだつたんだ。

「シンジ！」

アスカの乗る式号機が全力で僕の所に近づいて来る！
でも、黒い影はすでに僕の足元の周りの広い範囲に広がつていた。
とでも引きあげられる距離じゃない。

「来ないで、アスカまで巻き込まれる…」

「でも…」

そう言つてゐる間に初号機の機体はどんどん沈んで行く。

「シンジ、行かないで！ママのようにアタシを置いて行かないで！アタシを一人にしないで！」

最後にアスカの叫び声を聞いた気がした。

そして、僕の視界は黒く染まって行つた…。

「……ねえ君、起きなよ」

気が付くと、僕は電車のような場所に居た。

座席に座つてゐる僕の前に僕そつくりの人影が立つて僕を見下ろしてゐた。

「君は誰？」

「君は僕さ、もう一人の碇シンジ」

僕は夢でも見ているような気分になつた。

「人は何人の人格を持つてゐるんだよ、そのうちの一人が僕さ」

多重人格と言う話は聞いた事がある。

でも他の人格と話したなんて聞いた事が無い。

「僕は君の本当の気持ちを知つてゐるんだよ」

僕の目の前に居るもう一人の僕はとても暗くて冷たい目をしてゐた。

「世の中に僕の居場所なんて無い、生きていても辛いだけ。交通事故なんかに巻き込まれて死んでしまっても構わないと思つていい」「違う、僕はもうそんな事を思つていい！」

「それは君が辛いことから目を反らして、幸せな事を数珠のようにな紡いで生きているからだよ」

「生きていれば嫌なこともあるよ。……でも生きててよかったですと思つ時もきっとあるつて信じていろんだ」

僕がキッパリとそう言つ返すと、目の前に居たもう一人の僕の目が赤く光り出した。

「僕を受け入れたら楽に死ねたのにね。残念だよ」

騙されるところだった。

「こいつはもう一人の僕なんかじゃない！」

得体のしれない怪物だ！

赤い目をした僕そつくりの人影は僕を床に押し倒すとのしかかつて僕の首を絞めて来た！

「死にたくない……！」

僕はかすれた声でそう呟くと、突然僕の首を絞める腕の力が緩んだ。起き上がった僕は思いっきり咳き込んだ。

「きもちわるい……」

気が付くと、僕はエントリー・プラグの中に居た。

まるで霧が晴れたかのように幻の風景が消えていた。

そして、エヴァが何かを握りつぶしているのが分かった。

……多分、使徒の「アだ。

僕は今までの使徒戦の経験からそう確信した。

でも、使徒を倒したのにこの真っ黒な世界は消えていなかつた。

LCLが濁つて来つて息苦しい。

生命維持装置が危険域を指して、アラームを発してゐた。

「LCLのまま、おぼれるみたいに死んじやうのかな……」

僕はそう呟いて、絶対に嫌だと思った。

生きて帰つて、またアスカに会いたい。

アスカも、一人は嫌だつて泣いていた。

僕は浮きあがらうと必死に泳いだ。

アスカに習い始めたばかりだけど、一生懸命思い出した。

でも、僕はそのうち力が尽きて行くのが分かつた。

「アスカ、もう疲れたよ……」

そう呟つて僕が諦めかけた時、僕は誰かに抱きしめられているのを感じた。

エヴァの中から出て来た誰か。

僕の目にはシルエットのようなものしか見えなかつたけど、僕には母さんだと分かつた。

……そして思い出した。

小さい頃の僕の母の前でLCLに溶けて消えてしまったのは母さんだつて。

母さんが動かしているエヴァはどんどんと水面に向かって浮上していくのが分かる。

よかつた、母さんまでカナヅチじゃなくて。

「ありがとう、母さん」

地上に戻つてまた氣を失つてしまつていた僕は、アスカに抱きつかれているのが分かつた。

「アスカ……？」
「シンジ……！」

アスカは泣き笑いのよくな顔で、むりに僕にきつく抱きついて、ほおを押し付けて来た。
ほっぺたと胸のあたりに柔らかくてくすぐつたい感触。
抱きしめられるつてこんなに気持ち良い事だつたんだ……。
僕はしばらくアスカに抱きしめられるまで居た。

「アスカ、嬉しいのはわかるけど中学生に許されるのはキスまでだからね」

ミサトさんにそう言われたアスカは真つ赤な顔をして僕から体を離した。
抱きしめられて気持ちよかつたのに、残念。

「シンちゃんも、アスカに手を出しちゃダメよ」
「はい、でももう一度アスカを抱きしめちゃダメですか？」
「いいけど、胸に顔をうずめたりしちゃうのはまだ早いわよ」
「そんなことしません！」

僕はニヤケ顔のミサトさんにそう言つて、アスカを手招きして正面から抱き寄せた。

今度は抱きしめられるんじゃなくて、僕の方から抱きしめる側だつた。

おそるおそるアスカの腰に手を回すと、アスカは嫌がらずに受けでいてくれてホッとした。

「ねえシンジ、キスしたいの……」

ミサトさんの家に戻つて一人きりになつた僕にアスカはそう言つて來た。

「アスカ、どうしたの突然？」

「シンジはアタシとするのは嫌なの？」

「そうじゃないけど……慌てている感じがしてさ」

「そうね、ムードつてものも必要よね」

僕はアスカが何かに追われているかのようにキスをしようといだしたのが気になつていた。

まるで、別れの時が迫つてゐるみたいだつた。

そんなのは僕は嫌だつた。

これからもずっとアスカと居るんだから。

「じゃあ、使徒を全て倒し終わつたらキスしようか？」

僕の提案にアスカは頷いてくれた。

「アタシ、最後の使徒を倒したその日にシンジとキスするんだ……」

アスカは顔を赤らめて自分に言い聞かせるように呟いていた。

僕はなぜキスを先延ばしにしてしまったのかと、ちょっと後悔していた。

でも、やつぱりムードって言つものも大切だしだった。幸せいっぱいだと思つていて自分の心の隅に、黒いもやがかかつているような気がした。

「ミサトさん、もしかして初号機の中には母さんが居るんですか？」

僕がミサトさんにそう尋ねると、ミサトさんは驚いた顔をした。

「何でシンジ君がその事を……」

ミサトさんの顔色は真っ青になつた。

「僕は思い出したんです、小さじ頃の記憶を。……僕は見ていたんです、実験で母さんがここに溶けてしまつ瞬間を」

「……ごめんな、シンジ君」

「何でミサトさんが謝るんですか？」

「シンジ君とアスカのお母さんが居なくなる原因を作つたのは、私の父だから……」

ミサトさんは僕にミサトさんのお父さんが提唱した“E計画”と言うものを話しだした。

専門的な事を話されても僕にはよく分からなかつた。

僕が印象に残つたのはアスカのお母さんが魂だけ式号機に捕らわれてしまつて、アスカのお母さんは気がふれたようになつてしまつたと言つ話だつた。

「「めんなさい、」めんなさい……」

僕の目の前で泣きじゃくるミサトさんは、突然発生したクレバスに落ちてしまったかのようだつた。

前に僕はミサトさんに助けられた、今度は僕がミサトさんを助ける番だ。

「ミサトさんは悪くないですよ」

僕はミサトさんに元気を取り戻してもうれるように笑顔で話しかけた……。

ミサトさんの話によると、アスカは式号機に自分のお母さんの魂が宿っていると言う事に気が付いていなかった。

僕はアスカは一人じゃない、お母さんが見守っていると言つ事を教えてあげたかった。

でもそれはアスカに昔の辛い思い出を思い出させる事になつてしまふ。

僕とミサトさんはアスカにいつか伝えるべきだとは思つたけど、どのように打ち明けたらいいか悩んでいた。

そんな日々を送りながら何体か使徒を倒した後、鳥のような使徒が襲来した。

今度は『ヤシマ作戦』とは逆に、アスカが射手で僕が防御を担当する事になつた。

前に倒した使徒のようにレーザーで攻撃していくものとばかり僕達は思つていた。

でも、そうじゃなかつたんだ。

使徒の放つたレーザー光線は大きく曲がりくねつて僕の初号機を飛び越えて、後ろにいるアスカの式号機に突き刺さつた。

「きやああああ！」

「武号機パイロットの精神グラフが大きく乱れています！」

アスカの悲鳴と発令所のみんなが慌ててている様子が聞こえてくる。僕は使徒の光線を受け止めようと使徒と武号機の間に割つて入るけど、光線は蛇のように曲がりくねつて僕を交わして通り過ぎる。

「ママ、行かないで！ アタシを置いて行かないで！」

混乱している様子のアスカの悲鳴を聞いて、僕はショックを受けた。この前僕が戦つた使徒みたいに、人の心に攻撃するタイプなのか！

「アスカ、落ち着いて！」

いくら呼びかけてもアスカに僕の声は届いていない。

「フフフ、アハハハハ……」

アスカの様子がだんだんおかしくなつて来た。

僕は早く使徒を倒さないといけないと思つて焦つっていた。

「シンジ君、まだポジトロンライフルのエネルギーは貯まつていないわ、あと10秒待ちなさい！」

僕はそんなミサトさんの言葉を全然聞いていなかつた。

持つていた盾を投げ出して、武号機の代わりにライフルの引き金を絞る。

エネルギー不十分で発射されたこちらの攻撃は、使徒のATTフィールドに阻まれてしまつた。

「ダメです、効いていません！」

「うわあああ！」

僕はヤケになつて何回も引き金を引いてしまつた。

「シンジ君が落ち着かなくてどうするのー！」

ミサトさんの制止を振り切つてさらに何回も引き金を引いたけど、こちらのライフルからは何も出なかつた。

「はあ、はあ……」

辺りが静かになつて、僕はやつと自分が何をしたのか気がついた。

「ミサトさん、アスカは？」

「……笑いが止まってから何の反応も無いの」

「そんな！」

式号機の映像確認すると、アスカはぐつたりとした様子でうなだれていた。

「ライフル、エネルギー再充填開始！」

「発射準備完了まで後30秒！」

それからの30秒は僕にとってとても長くきついものに感じられた。

「撃つて、シンジ君ー！」

ミサトさんの号令と共に僕はライフルの引き金を絞ると、フルパワ

ーのレーザーが使徒に向かつて飛んでいく。

それは前と同じようにATフィールド」と使徒のコアを貫いて、使徒は殲滅された。

使徒から式号機に向かつて発せされていた光線も止む。

使徒との戦いが終わった後、アスカは303号室に運び込まれた。アスカの体には全く怪我は無かった。

それでもアスカは眠つたままだった。

アスカの目は開いている、でもその青い目は何も見ていない。

アスカの心は、暗い海の底に沈んだまま、浮き上がって来ないんだ。完全な精神崩壊を起こしていると、ネルフのお医者さん達はサジを投げた。

最後の使徒を倒したから、問題は無いと言つていたけど……。

僕はアスカを助ける事を諦めることなんてできなかつた。

今度は僕がアスカの手を引いてあげるよ。

だつて、僕は一人で泳げるようになつたんだから。

僕はアスカの手を思いつきり握りしめた。

それでも、アスカからの反応は無かつた。

「どうしたら、アスカの目を覚ます事が出来るんだろう？」

僕は必死にその方法を考えた。

アスカは、きっとおぼれてしまつている状態なんだ……。

そんな相手に対してする事と言えば……！

僕は寝ているアスカの口に向かつて思いつきりキスをした。

……そして、アスカの青い瞳が動いて、僕の事を見つめた。

「約束、叶える事が出来たのね」

「うん」

僕はアスカの言葉に短くそう返事をして、アスカを抱き上げた。

本作品は、TV版本編第九話「瞬間、心、重ねて」と第十話「マグマダイバー」の隙間のエピソードに当たる話です。

使徒迎撃専用要塞都市である第三新東京市の中心部は、ネルフ本部の施設やエヴァンゲリオンの射出口、兵装ビルなどが建てられて無機質な印象を与えていた。

しかし、中心部を取り囲む旧市街地は温泉街である箱根の情緒を色濃く残して居た。

第3使徒サキエルの出現により、街を出て疎開していく市民達で街の建物の半分は空き家となってしまったが、逆にネルフの仕事の関係で移り住んで来るものも多かった。

江戸時代から異なる地域から集まつた人々を結束させるために行われる行事、それはお祭り。

ネルフも市民との交流を重視して、夏祭りには多額の援助金を出して、シンジ達エヴァンゲリオンパイロットの3人も祭りに出席する事は義務とされた。

「アタシ達って、ネルフの広告塔にされているみたいじゃないの」

浴衣を着せられ、下駄を履かされたアスカは落ち着かない様子でそうぼやいた。

髪は束ねられて、ポーテールになっている。

「まあまあ、使徒と戦うだけが仕事じゃないってことよ」

ミサトは見事に紫色の浴衣を着こなして、清楚な魅力を醸し出して
いる。

長い黒髪に和風の浴衣が似合っていた。

「家でのだらしないミサトからが想像できませんね」

「ビールの飲み過ぎで出っ張つたお腹を隠すのにとっても好都合な服

装

「2人とも皮肉を言つ程に心を開いてくれて、お姉さん嬉しいわ…

…」

一緒に歩くシンジとレイの言葉に、ミサトは笑顔を多少引きつらせ
ていた。

「うつさいわね、私も出る所は出でいるのよ、帯で胸が抑えつけら
れて苦しいんだから」

「そんなの、アタシだつて同じよ」

「セカンドは違う。……パットを胸に入れて碇君を挑発しているだ
け」

「えつ、そうだったの！？」

レイに指摘されたアスカは怒りの矛先をシンジへと向ける。

「アンタ、何をガッカリしているのよー スケベシンジー！」

「いつも挑発しているのはアスカじゃないか」

「はいはい、ケンカしないの。市民サービス何だから、スマイルス
マイル」

にぎやかな人々の声。

神社の境内に並ぶ夜店の数々。

楽しそうに遊ぶ子供達や手を繋いで歩く恋人達の合い間に縫つよう

「ミサトと3人のチルドレンは歩いて行く。

「あーあ、みんな楽しそうにしているのにつまんない」

「交流の盆踊り大会の後、自由時間にしてあげるから文句を言わないの」

アスカは祭り会場に入つてから不機嫌そうな表情をしていた。
その原因を作つていたのは、シンジだつた。

「バカシンジのやつ、アタシの浴衣姿を見て一言も言わないんだから」

シンジが「浴衣が似合つてゐる」とか「かわいい」とか言えばいく
らかアスカの表情は和らいだものになつたのかもしれないが、シン
ジは鈍感だつたし、アスカも素直では無かつた。

「あ、そうだ綾波、その……青い浴衣が似合つてゐると思つよ
「そう」

思つ出したよつて言つたシンジの言葉に、レイはそつけなく答えた。

「な、なんでファーストのやつをこきなりほめるのよー。」

アスカはそう言つて自分の大きなリボンで縛つてポニー テールにし
た髪を苛立つて思いつきり引っ張りながら歯ぎしりをした。

「あぢやあ、シンジ君がそこまで鈍感だつたとは、私も予想外だつ
たわ……」

見かねたミサトは、シンジを呼び寄せて耳打ちする。

「いきなり何でレイの事をほめたの？」

「リツコさんに綾波を褒めてと言われたのを思い出したからです」

「……はあ、シンジ君はどこまで鈍いのかなあ、アスカの事も考えなさいよ」

「あつ」

あきれた顔のミサトに言われて、シンジははじめてその事に気がついたようだ。

「じゃあ、今から急いでアスカの事を褒めに行きます！」

「待ちなさい、そんなガチガチに緊張しながら言つても、アスカはますます怒っちゃうわよ。だから私も前もってシンジ君に頼むのを止めておいたのに」

「どうしましょう、ミサトさん」

「いくなつたら、怒りが過ぎ去るのを待つしかないわね」

アスカは顔から湯気が出ているのではないかと思ひぐらい真っ赤な顔をして怒っていた。

「アスカ、これから盆踊りで市民の皆さんの前で踊るんだからそんな鬼みたいな顔してないの」

「別に、怒つてなんか無いわよー」

その後アスカは営業スマイルを浮かべて、盆踊りをこなして行つたが、シンジを見つめるアスカの目は全然笑つて居なかつた。シンジはビクビクしながらアスカの方にチラチラと視線を送つていた。

「お疲れさま、じゃあ自由時間にしていいわよ

ミサトがそう言つと、アスカは弾かれたように駆け出そうとする。しかし、そんなアスカの腕をシンジは捕まえる事が出来た。アスカが慣れない浴衣や下駄を履いて、動きが遅かったと言つのも幸運だったのかもしれない。

「ちょっと、いきなり何をアタシの腕をつかんでいるのよー。」「あ、ごめん」

アスカに怒鳴られてシンジは慌てて手を離した。そして立ち去るつとしたアスカの手を、またシンジはつかもうとする。

「あつ……」

「いつたい、何なのよー。はつきり言ひなさいよー。」

アスカの苛立ちは頂点に達している。

シンジは勇気を振り絞つてアスカに向かつて顔を真つ赤にして叫ぶ。

「僕、アスカと仲直りしたいんだ！」

「ハア？」

「で、でも僕、どうやつたらアスカが機嫌を直してくれるか分からなくて」

「そんなの自分で考えなさいよ」

アスカはあきれたような顔でため息をついた。

「そうね……じゃあ今日は全部シンジのおじつなら考えてあげてもいいわ」

とつあえず、許してもらえそうな様子にシンジはホッと胸をなで下ろす。

「じゃあ、綾波も誘つて……」

シンジがそういつと、アスカの目つきが厳しくなったのを見てシンジは慌てて言葉を止める。

そんなシンジの反応を見て、アスカも自分が大人げないと思つたのか、不本意だがレイと一緒に祭りを回る事を提案する。

「仕方ないわね、じゃあファーストのやつも一緒に……」

と言つたアスカとシンジが辺りを見回すと、レイはすでに側には居なかつた。

「あ、あんな所に……」「

「ファーストって相変わらず何を考えてこるのか分からないわね」

遠く離れた場所にあるお面を売つている店で、レイはウルーラマンと面ライダーの両方を手にとつて悩んでいた。

付き合わされてこるマサトは退屈そうに欠伸をしてくる。

「僕達もあそこに行こうか?」「

「いいんじゃないの、ファーストは自分の世界に入つたりやつしているみたいだし」

「ヒカリ達もきっと来ていると思うから、夜店を回りながら探ししますよ」

「もしかして、委員長やトウジやケンスケの分まで僕がおこるの?」「当たり前じゃない、アタシに許してもらいたいんでしよう?」

「うん……それはそうだけビ……」

予想外の出費にシンジは顔が青くなつた。

「とりあえず、お腹が空いたから何か食べたいわね……あそこのお店からいい匂いがする」

アスカはそう言つて焼きそば屋を指差した。

「うん、焼きそばを売つてあるんだね」

「日本のお祭りには他にどんなお店があるの？」

そうアスカに尋ねられると、シンジは困つた顔で首を横に振つた。

「僕はお祭りのお店とか、分からんんだ」

「だつて、アンタは日本にずっと住んでいたんじゃないの？」

「……1人でお祭りに行つてもつまらないと思つたから」

シンジの憂鬱そうな表情を見て、アスカはマズイ事を言つてしまつたと思つた。

「とりあえず、焼きそば屋に行くわよ。グズグスしてないでついて来なさい！」

「う、うん」

アスカは落ち込みそうになつたシンジに対し、強引に声を掛けた。

「焼きそば一つ下さー」

「はいよ」

「アタシにも一つ」

後ろから顔を出して声を屋台の主人に注文したアスカにシンジは驚いた。

アスカは自分の財布からお金を出して焼きそばを買った。

「どうして、やつぱり僕においでもうのが嫌になったの？」

不安そうな顔をするシンジに、アスカはあきれた感じでため息をついた。

「シンジってどうして物事をそつねガティブに考えるのよ。シンジだってお祭りは初めてなんでしょ？ それなら焼きそばの味を体験するべきよ」

「そ、そう言われてみればそうだよね」

アスカとシンジは黙々と焼きそばを平らげた後、たこ焼き屋に向かった。

そしてたこ焼きを2人前買って頬張る。

「アスカって優しいんだね」

突然、シンジにそんな事を言われたアスカはたこ焼きをのどに詰まらせてしまった。

「な、何を突然言い出すのよ」

「だって僕の事をさつきから落ち込まないよつに気遣ってくれるし……」

「それは、アンタがネチネチしている顔を見るとイライラするからよー！」

「そ、そうだったんだ……」

アスカはシンジに言い返してしまった後に少しだけ後悔した。
しかし、シンジの内罰的なところにイラついていたのも本当だった。

「じゃあ、お詫びに綿あめをおいるよ」

シンジは慌てた様子でアスカから離れて綿あめを買いに行つた。

「それにしても、ヒカリ達はどうの調子によ」

アスカはそう言って夜店でにぎわう境内を見渡してもヒカリ達は見つからない。

「お待たせアスカ、キョロキョロしてどうしたの？」

「ねえ、ヒカリ達はここに来ているのよね？」

「うん、トウジ達は毎年お祭りに来ているって言つたけど……」

シンジはそう言つてアスカに綿あめを渡す。

「何で一つしか買って来なかつたのよ？」

「だって、僕は甘いのは苦手だし……」

「食べず嫌いはダメよ、アンタも少しは食べなさい」

「う、うん……」

シンジは顔を真つ赤にして密着しそうなぐらいアスカと顔を近づける。

こうしてシンジとアスカは1本の綿あめを食べ合う事になつたのだが……。

そんな2人の姿を夜店の影に隠れて見ていたのは、ヒカリ・トウジ・ケンスケの3人だった。

「まるで、カッフルやないか」

「アスカつたら大胆……」

ヒカリは顔を赤くしてアスカとシンジの姿を見つめている。

「……2人を邪魔しちゃ悪いだろうしな、行こうぜ」

「そやな」

3人はアスカとシンジに声を掛けずに離れて行つた。

「ああ、おいしかった。日本のお祭りの食べ物つておいしいものが
多いわね」

アスカはそう言つて満ち足りた笑顔になつた。

「よかつた、僕もアスカが笑つている顔を見るのが好きだから」

穏やかな笑顔を浮かべるシンジにそう言われて、アスカは胸がドキ
ツとした。

「どうしたの？」

「アンタ、今何を言つたのか分かつてるの？」

「えつ……僕はアスカが好きだつて……し、しまつたあ！」

ドッボにハマつてあたふたするシンジに、アスカの方まで落ち着か
ない気持ちになつてしまつた。

2人とも気まずい様子で顔を思わず背ける。

「じゃ、じゃあ、あの店に行つてみよつか！ 楽しそうだし…」

と言つてシンジが指差したのは風鈴を売つてゐる店だつた。風に揺られて涼しげな音色が辺りに鳴り響いてゐる。

体中が火照つた氣がして、涼みたい気持ちだつたアスカはシンジの提案に乗つた。

「へえ、面白い音が出る鈴ね」

「これは風鈴つて言うんだよ」

アスカは風鈴を1つ1つ手にとつて興味深く見つてゐる。

そして、赤い金魚の絵が描かれたガラスの風鈴が気に入つたようだ。

「アスカ、それが気に入つたの？」

「うん、面白いガラスの色をしているし」

「じゃあ、買つてあげるよ」

シンジはそう言つて財布を取り出す。

「2・880円！？」

シンジは一番目立つところに飾られていたガラスの風鈴が1・200円だつたのだと驚いた。

普通のガラスとは違う琉球ガラスを使った風鈴なので値段が倍以上すると言つた話だつた。

「アタシ、別に他のでも……」

「買います！」

そう言つて千円札3枚を風鈴屋の主人に突き付けたシンジは、風鈴屋の主人に男らしいと絶賛された。

「まったく、勝手に決めちゃうんだから」

「え、他にもつと欲しいのがあったの？」

「そういうわけじゃないけど……ありがと、大切にするわよ」

ぶつきらぼうながらもアスカにお礼を言われて、シンジは照れ臭そうだった。

「間もなく、花火大会を始めます」

アナウンスの声が響き渡ると、祭りに来ていた人々は移動を始めた。境内の道が混雑し始める。

「アスカは、花火は見た事あるの？」

「ううん、ドイツに居た頃はエルフで訓練ばかりだったから。シンジは？」

「僕も誰かと一緒に見るのは初めてかな」

「そんな暗い顔しないの。一緒に楽しみましょうよ」

アスカとシンジがそう言って花火の良く見える場所に移動しようとした時、2人の前方で悲鳴が上がった。

なんと包丁を持った男が、アスカを目がけて突っ込んでくる！

「アスカ、逃げて！」

アスカは今日は浴衣を着ているため、身動きがとりづらい。履きなれない下駄を履いて居て、上手く走れなかつた。

「きやあつ！」

アスカは声を上げて転んでしまつた。

手に持っていた風鈴は地面に落ちて割れてしまった。

そんなアスカの間近まで、凶器を持った男が迫っていた！
アスカは自分が刺されるのを覚悟して思わず目を閉じた。
しかし、その男の包丁がアスカを傷つける事は無かった。
シンジが横つ腹から体当たりをして男を突き飛ばしたのだった。

「シンジ！」

「このガキ、何しやがる！」

アスカの見ている前で、男は血走った目でシンジに向かって包丁を振り上げた。

そこへ間一髪、ミサトが駆けつけて男を取り押さえた。

「……みんなを困らせたかった、ですって！？ なんて幼稚な理由なのかな？」

その市民の男が騒ぎを起した理由を聞いて、ミサトは腹を立てた。
アスカを狙ったのは、目立つ髪の色だったからと言つ事らしかった。
残念なことにこの騒ぎが原因で、夏祭りは中止になってしまった。

「シンジ、アンタ危ない事するわね……」

「そうよ、刃物を持った男に近づくなんて、シンジ君が刺されたのかもしけないのよ」

「ごめんなさい……」

アスカとミサトに注意されて、シンジはしおげてしまった。

「でも、シンジ君のおかげでアスカが助かつたわ、ありがとう」

「ンフオート17の葛城家に戻ったアスカは、リビングの窓に傘の

部分が半分割れてしまつた風鈴をつるした。
それを見たミサトがアスカに声を掛ける。

「ワツ！」なら割れた風鈴ぐら～て床すのは朝飯前よ？」

ミサトにやう言われたアスカは首を横に振つた。

「アタシにひとつはこいつちの方がいいのよ」

「ほほう、そう来ましたか」

「ヤニヤして笑いを浮かべるミサトに対し、アスカは慌てて言い返す。

「」の方がその、ワビサビがあつていいのよ」

「くえ、アスカって日本の風流とか分かるんだね」

シンジは感心してそう呟いた。

「……それにこれはシンジがアタシの事を命を賭けて守つてくれたつて言う証だもの」

「え？」

アスカの呟きは、かきつじてシンジの耳に届かなかつたようだつた。

「別に何でもないわ、それに、また今度の夏祭りの時に新しい風鈴を買つわよ」

「アスカ、来年も日本に居るつもりなの？ 使徒とか居ないかもしれないんだよ？」

「ははーん、アスカつたらもしかしてシンちゃんと……」

ミサトはニヤニヤとした笑いを浮かべてアスカを見つめている。アスカは顔を赤くして手足をバタバタさせながら言い訳をした。

「アタシは日本が気に入ったのよ！……その、ヒカリやクラスにも友達が出来たしね」

「そつか、僕もアスカが居てくれると楽しいよ」

告田に近い事をポロリと言つてものほほんとしているシンジに、アスカとミサトは苦笑いを浮かべた。

「やつぱりバカね」

「でも、アスカもシンジ君の事、悪く思つてないんでしょ？」「加持さんと比べるとまだまだ用とスッポンよ」

そしてその数日後、浅間山のマグマ溜りで使徒の幼生が発見され、捕獲作戦が行われた。

アスカは首尾良く使徒を殲滅させる事が出来たが、地上に回収される前に式号機を支えるワイヤーが切れてしまつ。

ゆつくりとマグマの底に沈んで行く式号機。

しかし、アスカはシンジの乗る初号機の居る火口に向かつて必死に手を伸ばした。

「シンジ……」

アスカが死の淵に瀕して助けを求めたのは、母親でも加持でも無く、シンジだった。

「アスカ！」

その気持ちに答えるように、ネルフの誰もが式号機の救出を諦めた

が、シンジだけは諦めなかつた。

そして、D型装備をしていない生身の初号機が、溶岩の海の中から式号機を凄まじい力で引きあげると、奇跡は起こつた。

「バカバカバカ！ アタシを助けるために2回も無理しちゃつて！
アンタは本当に大バカよ！」

アスカはネルフの病室で火傷を負つて包帯を巻かされて寝ているシンジに向かつてそう言つた。

あふれだした涙をぬぐいながら、アスカはシンジの側から一晩中離れなかつた。

そろそろ目を覚ますはずのシンジにアスカは怒りたい事が山ほどあつた。

初号機まで溶岩の底に沈んでしまつたら、ネルフは、いや世界は終わつてしまふのだから。

でも、一番最初にすることは決まつていて。

笑顔で「ありがとう」と言つてシンジに思いつきり抱きついてキスをすることだ……。

ハルヒ×LASクロス短編 あたしは「変」がお気に入り

」の小説は新世紀エヴァンゲリオンと涼宮ハルヒの憂鬱とのクロスオーバー作品です。

「シンジが学校で暴力を振るつただと！？」

「ええ、担任の先生の話だとシンジの方から殴つたようですよ。理由を聞いても黙つたまままだとか」「何だと……」「

ゲンドウは困つたように頭を抱え込んだ。

ユイも悲しそうに首を振つて下を向いて深々とため息をついた。

「それで、シンジはどうしている？」

「ずっと自分の部屋に閉じこもつたままで、夕食の時間になつても出て来ないの」

「一言も話さうとしないのか」

「じめんなさいって泣くだけで、理由を聞こいすると顔を背けて口をつぐんでしまつて……」

「困つたものだ」

ゲンドウとユイの二人はしばらく考え込んだ後、ゲンドウの方からユイに話しかけた。

「シンジの友達に学校で何があつたか聞くことはできないのか？」

「そうね、惣流さんの家のアスカちゃんなら……」

コイはそのまま携帯電話を手にとり、惣流キョウウの番号を呼び出した。

「あ、キョウウ……つい、シンジの事なんだナビ……」

電話をしながら表情を変えるコイをゲンダウも不安そうな顔で見つめていた。

「わかったのか？」

そのまま尋ねるゲンダウに、コイはまずそうな顔で黙り込んだ。

「…………？」

「今、アスカちゃんが家に来てくれるそうだから、その時シンジと一緒に……」

「わかった」

数分経たないうちにアスカがシンジの家を訪ねて来た。

「おじ様、おば様、こんばんわ……シンジは部屋ですか？」
「やうなのよ」

コイがあいに手を当てて困った顔になると、アスカは「おじやまします」と告げてシンジの部屋へと向かった。

アスカが部屋に入ると、背中を丸めて座り込んでいたシンジの姿を見つけた。

「シンジ、おじ様とおば様にまだ話して居ないの？」
「言いたくない」

「黙っていたって、おじ様とおば様を不安にさせるだけじゃない！」「でも……話したら父さんが悲しい思いをするから」

「それは、そうかもしないけど……」

シンジはアスカに手を引かれて部屋から出てきて、アスカと一緒にコイとゲンドウの前に正座した。

「えっと……」

「シンジ、言いにくいならアタシから話そうか？」

「うん……」

ゲンドウとコイが見つめる中でアスカがゆっくりと話し始めた。

「実は……クラスでおじ様の風貌を馬鹿にする人が出てきて……」

ゲンドウはサングラスを押し上げてアスカの話を聞いていた。

「最初は数人が『変なおじさん』だって騒ぐくらいだったから、シンジも無視していたんですけど、そのうちエスカレートして行っちゃって……」

「そのうち父さんの事を悪い事をしてそうな顔だとか、言いだして……」

「それで、シンジが我慢しきれなくて殴りかかって、先生がやって来て……」

アスカとシンジが辛そうに話す様子を、ゲンドウは静かに聞いていた。

「そうか。こんなサングラスなどをかけている私が悪いのだから仕方の無い事だ」

「でも、なんで先生はその事を話してへだせりなかつたのかしじらへ。」

ユイがそう言つと、アスカは怯えたような様子になつた。

シンジが絞り出すよつて声を出す。

「先生は見でいるだけで、何もしてくれなかつたんだ」

シンジの発言にゲンドウとユイは目をむくほど驚いた。

「何だと、今の教師も情けなくなつたものだ」

「最近、生徒に怒れない先生が増えているつて言つたナビ……」「僕は父さんが傷つくるのが嫌だつたから……だから僕が言わないでおけば……」

「シンジ、やつぱりあなたは優しくあるね、優しい子ね」

ユイは目に涙を浮かべてシンジを抱きしめた。

ゲンドウもシンジの言葉に感心していようがつた。

「私は『変なおじさん』でシンジに迷惑をかけているのか……」

「父さんが悪いわけじゃなこよ」

「そつよ、おじ様」

辛うじてうつぶやくゲンドウをシンジとアスカが慰めたがあまり効果が無かつた様子で、碇家のリビングには重たい空気が流れていった。

次の日の朝、シンジ達のクラスは浮ついた雰囲気に包まれていた。

「あそこに置かれた新しい机は、このクラスに来る転校生のための
ものらしいぜ」

「しかも、その転校生は凄い美人だって話だ」

「それは楽しみだ」

うわさ話に夢中になつているクラスの生徒達は、シンジとアスカが
教室に入つてもチラリと視線を向けただけで、また話に戻つて行つ
た。

シンジとアスカはホッとした様子で席についた。

「アタシ、今日は学校に来るのが嫌で仕方無かつたけど、しばらく
は転校生の話題で持ち切りね」

「そうだね、僕が殴つちゃつた相手もそつちが気になるみたいだ」

「アタシは何もしてくれなかつた担任の先生の顔を見るだけで腹が
立つけどね」

「それは我慢するしかないよ」

ホームルームが始まり、転校生が入つてくるとクラスの中はどよめ
いた。

「ウワサ通りの美人だ！」

「ああ、潮流に負けていない」

「スタイルいいわねー」

「本当にうらやましい」

男女問わず、クラスの生徒達は感心した様子で転校生に視線を送つ
た。

転校生は教壇に立つと、担任の教師の言葉を待たずに自己紹介を始
める。

「東中から来た、涼宮ハルヒ。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居たらあたしのところに来なさい！」

ハルヒの言葉に教室中が静まり返った。

その気まずい静寂に耐えきれなくなつたのか、担任の教師がハルヒに着席するよう促す。

ホームルームが終わると、クラスの生徒達はハルヒの側に群がつた。しかし、ハルヒが周りの生徒に話を合わせる事の無い性格だと言う事を知ると、興味本位で話しかける生徒達の数は減つて行つた。それでも一部の男子生徒はこりずに昼休みもハルヒに話しかけていた。

「せうだ涼宮さん、あそこに居る碇とは仲良くしない方が良いですよ」

「あいつの親、変なおじさんだから」「どんなおじさんなの？」

ハルヒが質問すると、男子生徒は笑いをこらえながら答える。

「サングラスをかけた髭がもじや もじや の23の大男」

「授業参観に来た時の他の父兄たちに比べたら違和感が半端じゃない」

シンジを指差して笑う男子生徒を見て、お弁当を食べていたシンジとアスカは顔を曇らせた。

「まったくあいつら、気分が悪いたらありやしない。シンジ、今度は安っぽい挑発に乗つて手を出したらダメだからね」

「うん……」

しかしハルヒは何を思つたのか、自分の弁当箱を持つてシンジとアスカの席に近づいて来る。

シンジとアスカはただ驚いて空いた隣の席に座つたハルヒを見つめている。

「ねえ、あなたの親父さん、変で最高じゃない！」

無邪気な笑顔でシンジに話しかけて来たハルヒに、アスカとシンジだけでなく、クラスの生徒達も困惑した。

「あ、アンタ何言つてるのよ！？ シンジを馬鹿にしてからかつているの？」

「馬鹿になんかしていいわよ。普通より変の方が面白いし、樂しいじゃない！」

「あの……涼宮さん、父さんの顔の特徴を聞いて怖いとか、嫌だとかは思わないの？」

「あたしにとつて變つて言つるのは善め言葉だわ、普通よりずっといい事じゃない」

シンジとアスカは元気に話すハルヒのテンションに少し困惑いながら、ハルヒと三人で楽しく話しながら昼休みを過ごした。

「ちえつ、碇のやつめ、惣流だけでなく涼宮とも仲良くなりやがつて……」

その姿眺めていた男子生徒は思いつき面白くなさずシンジの顔をにらんでいた。

放課後、ハルヒはゲンドウに会いたいと言つ事でシンジとアスカと一緒にシンジの家まで下校する事になった。

「父さんは電気工事士の仕事をしているから、家にいつ帰つてくるか分からんんだよ」

「あたしは少しの間でも会つてみたいのよ」

「アンタも物好きね、自分からシンジのパパに会いたいなんて、そんなんの初めてよ」

「そういうえば、なんで碇君の親父さんはサングラスをかけているの？」

「仕事で火花が散つて、目の辺りにやけどをしたから、それを隠すためらしいんだけど」

「そりなんだ、てっきりあたしはちょい悪系ファッショソンなのかと思つたわ」

そういふ話している間に、三人はシンジの家に到着した。

「ただいまー」

「おかえりなさい。アスカちゃんも一緒なの……」

玄関に姿を現したユイはシンジとアスカの一人と一緒に居るハルヒの姿を見て言葉を止めた。

「初めてまして、碇君のお袋さん！ 変なおじさんに会いに来ましたー！」

「あ、あの……シンジ、この子は？」

シンジはため息をついてユイに事のいきさつを説明した。

ユイは信じられないと言つた顔でシンジの話を聞いていたが、ハルヒの二二二二二した笑顔を見て、悪意は無いと納得したようだ。

「仕方ないわね。……シンジ、悪いけどアスカちゃんと涼宮さんと一緒に家でお留守番をお願いね」

「どこかに出かけるの？」

「お夕飯の材料を追加で買いに行く事になつたから」

ユイがそう言つと、アスカが慌てて話しかける。

「あの、おば様、アタシ達が急に押しかけて迷惑をおかけして…」

「別にいいのよ、シンジに新しいお友達が出来たお祝いだと思えば」

そう言つてユイは楽しそうに家を出て行つた。

買い物から戻つて来たユイが作った夕食は、言葉通りお祝い事のあ

る日のよつと豪華だつた。

「ちょっと張り切りすぎたかしら」

「ユイさんの料理美味しい！」

たくさん作りすぎてしまつたかと思つたユイだが、ハルヒの食欲もかなりのものだつた。

「アンタ、よく食べるわね」

「はは……涼宮さんなら何人前も食べそうだね」

賑やかな夕食をとつていると、仕事を終えたゲンドウが家に帰つて來た。

女の子の靴が2組あるのを見て、ゲンドウはアスカとヒカリが來ているのかと思つたようだつた。

「惣流さんのところのアスカ君と洞木さんの所の子が遊びに来ているのか？」

「初めまして、碇君の親父さん！」

玄関からリビングに入つたゲンドウは、突然ハルヒに元気いっぽいにあいさつをされて驚いて固まつてしまつた。

「君は？」

「碇君のクラスに転校してきた涼宮ハルヒです、本当に変なおじさんですね！」

ハルヒにやう言われたゲンドウは少し表情を固くした。
コイやシンジやアスカはハラハラしながらその様子を見守つた。

「いひしてお会いできて嬉しいです！」

「会えて嬉しい？ 私と？」

「はい！」

笑顔でそう断言したハルヒにゲンドウは戸惑つた。

「だつて、普通だつたらつまらないじゃないですか！」

「どうやら、涼宮さんにとっては変と云ひのは褒め言葉らしいのよ」

コイにそう言われてゲンドウは少し照れくさそうな表情になつた。

その後の夕食の席でも、ハルヒはゲンドウの事を褒めていた。

ハルヒが帰つた後、ゲンドウが上機嫌になつたのを見て、コイヒシンジとアスカは安心した。

「私がこんなに顔の事を褒められたのは初めてだ、明るくていい子

だな

「本当によかつたですね」

ゲンドウとコイが喜ぶ様子を見て、アスカは安心する半面、ゲンドウとコイに気に入られてしまつたハルビがシンジとの恋のライバルになつてしまふのかもしれないと焦つていた。

「せつかく一組の綾波さんにシンジの事を諦めるように成功をせたのこ……」

しかし、そのアスカの心配は無駄に終わった。
ハルビは何回かゲンドウに会つと興味を無くしてしまつたようだつた。

ゲンドウはその事にちょっと寂しさを感じていらつた。

「涼宮君は最近、私に会いに家に来てくれないな」「だつて、あなたが変なのは外見だけ何ですもの、中身は普通なんですか」「やっぱり性格も変じやないといけないのか」「やめてください、あなた」

その後ハルビは数ヶ月後に学校に転校してきた”キヨン”と言つ変なあだ名の少年に興味を持つて友達になり、結構ウマが合つているようだ。

アスカはゲンドウの問題もシンジとの恋の問題も解決して、本当にホッとしているようだつた。

「R.Sのカップリングが好きな読者の方には辛い話かもしれません、」
注意を。

「レイ、学校生活はどう?」
「特に問題はありません」

これが、少し前までのリツコとレイの会話だった。
しかし、最近はレイの返答が違っている。

「学校に行くのが楽しいです。碇君が居るから」

リツコはこのレイの言葉の変化を素直に喜んだ。
人形のようだったレイにも感情が芽生えた事。
そして、一人の女の子としてシンジに好意を抱いている。
リツコはいつレイがシンジと恋人同士になれた報告をしてくれるの
か、心待ちにしていた。

「何よ、シンジのわからずや!」
「アスカが悪いんじやないか!」
「いい加減、止めてよ2人とも……」

葛城家の食卓で、アスカとシンジは今夜も言い争っていた。
ユニゾンの訓練をした直後は、まるで姉弟のように仲が良かつたの
に、最近はケンカの度合いが増している。
家族関係が崩れて欲しくないミサトは頭を抱えていた。

「ふんだ、シンジなんか大つ嫌い！」

「僕も、アスカなんか居ない方が楽が出来ていいよ…」

アスカは自分の部屋に籠つてしまい、シンジは不機嫌そうに夕食の片付けをしていた。

ミサトは飲んでいるビールの味がいつもより苦く感じている。

「シンちゃん、アスカにもうちょっと優しくしてあげたらどうなの？」

「アスカが僕に意地悪するからいけないんですよ。天才少女って言うぐらいなんだから本当は掃除とか料理とかできるんでしょ？僕を家政婦と何かと勘違いして居るんだ」

「アスカは、エヴァの訓練が忙しかったのよ……」

ミサトが少し苦言を呈しても、シンジの苛立つた表情は治らなかつた。

「うーん、ビールを飲みすぎるとトイレが近くなるのかしら、利尿作用つてやつ？」

夜中にミサトはそつ一人言を言つて起き上がつて、自分の部屋からトイレに行くために廊下に出る。

すると、アスカの部屋から泣き声のようなものが聞こえてくるのが分かった。

「まさか、あのアスカが泣いているわけないわよね～」

ミサトは氣のせいだと思い、アスカの部屋の前を通り過ぎてトイレへと向かった。

しかし、ミサトが用を足して戻つて来てもアスカの部屋から泣き声が聞こえ続けていた。

「アスカ、どうしたのー?」

ミサトがアスカの部屋のドアを開けると、ベッドの上でサルのぬいぐるみを抱いて泣きはらしていた。

「アタシ、明日の朝、シンジと顔を合わせるのが怖いの。だつてシンジはアタシに怒つていると思つし」

「それなら何で、シンジ君に對して意地悪な事をするの?」

「シンジにかまつて欲しかつた。アタシはシンジの事が好きになつちやつたみたいなのよ」

「じゃあ、正直にシンジ君に告白すればいいじゃないの。何なら私が伝えてあげようか?」

ミサトがそう言つと、アスカは上目遣いで瞳に涙をためてミサトを見上げながら、首を激しく横に振りミサトのパジャマの袖をギュッとつかんで否定した。

「止めて、それだけはダメ。シンジがアタシの事を本当に嫌いだつてわかつたら、アタシはこの家に居られなくなる」

「でも、シンジ君に聞かないとわからないじゃないの」

「シンジは学校ではファーストと楽しそうに話すの。もしシンジがファーストの事が好きだなんてわかるなんて、それだけは嫌なのよ

!」

もつ、ミサトは泣きじゅぐるアスカを自分の胸に抱きしめる事しか

できなかつた。

「そう、アスカはそんな事で悩んでいるのね」

自分専用の研究室で、ミサトから電話でその話を聞いたリツコはそうため息をついた。

電話をしている間に、用事で訪れたレイが部屋に入つてくる。リツコは電話を切つて、レイを迎え入れる。

「レイ、学校ではシンジ君と居れて楽しい?」

「はい、碇君はセカンドの事が好きだつて言つ事は知つています」

軽い笑顔で答えたレイの言葉に、リツコは顔面蒼白になつて固まつた。

「私は碇君に振りむいてもらつ必要は無いんです。私が碇君を好きでいるだけで良い。だから楽しいんです」

さらにそう言つたレイの言葉に、リツコは心を打たれた。リツコが高校生だった頃、リツコはただコイの夫であるゲンドウに憧れているだけで幸せな気持ちになれた。

それが今はゲンドウの弱みまで握つて、ゲンドウを自分の所に引き寄せようとしている。とても辛い辛い恋。

「私は碇君の側に居るだけで楽しいんです」

穏やかな微笑みを浮かべてそう言つたレイの小さな頭を、リツコは大

粒の涙を滝のように流しながら強く抱きしめた。

残暑記念ハルキヨン小説短編 気分は最高っ！

「この作品ではハルヒとキヨンは高校を卒業して大学生になつています。

「ほらっ キヨン、もっとスピードを出しなさいよ、あたしは早く海に入りたいの！」

助手席でそう言って騒ぎ立てるやかましい女は　SOS団“元”団長の涼宮ハルヒだ。

俺達が高校を卒業すると同時に、SOS団は解散して長門と朝比奈さんは未来に帰つて、古泉も外国の大学に行つてしまつた。何の因果か、ハルヒにずっと受験勉強の指導を受けていた俺は、ハルヒと同じ大学に入つちました。

大学生になつても、俺に対してもがままな事を言つ関係は全く変わらないように見える。

「無理言つなよ、車」と海水浴したいのか？」

海岸通りを走る車のハンドルを慎重に操りながら、俺は皮肉を交えながらそう答えた。

俺は車の免許を取つてからまだ半年しか経つちやいない。

この自分の車だつて、大学に入つてから必死にバイトをして貯めた金と親から頼みこんで借錢して、大学最初の夏休みに間に合つようになつたんだぜ？

「じゃあ、あたしが運転を代わろうか？」

「断固拒否する、買つたばかりの新車をスクラップにしたくはない！」

俺はわめくハルヒの声をかき消すためにも、スピーカーのボリュームを上げた。

車内をアーティストの夏の歌を満たす。

9月になつても依然として厳しい残暑が続いてはいたが、風はすっかり涼しくなつていた。

「うーん、サーフィンをやるなら9月が海開きつて感じよね」

「そうだな、8月の間は海水浴の客がごつた返して、ブイとかで禁止区域が設けられているからな」

海水浴場に着いた俺は、2人分のサーフボードを車の屋根から降ろしながらハルヒの言葉にそう答えた。

夏休みの混雑から解放された浜辺は、俺達のようにサーフィンを楽しもうとやって来たであろう大学生や社会人の人影がまばらに見えるだけだった。

大学は8月から夏休みがやつと始まるところもあり、9月の半ばまで夏休みが続くのが一般的だ。

「キヨン、早く来なさい！ 波と風がとつても気持ちいいわよ！」

真つ赤な水着に素早く着替えたハルヒが、俺に向かつて手を振つている。

大学生になつたハルヒは、高校生の時のスタイルの良さをそのまま維持した、なかなかの美女になつていた。

周囲から感じる羨望の眼差し、俺は嫌いじゃないぜ。

俺はハルヒの呼びかけに笑顔になつて応じて、ハルヒの元へと駆けて行つた。

波が太陽の光に反射して、とてもきれいに輝いている。

「良い波が来るといいな」

「絶対来るわよ、水曜にはでっかい波が来るって決まっているんだから！」

「それは映画の話だらう？」

俺はハルヒにそう答えるが、もしかしてハルヒの言う通りに大きな波が来てしまうのではないかと思っていた。

ハルヒの持っていた自分の願いをかなえると言う神がかり的な力はもう完全に失われている。

ごく普通の人間にハルヒはなつてしまっているはずなのだが、自信たっぷりのハルヒにはそんな力が無くても願いを叶えてしまいそうな、そんな気がした。

青い海と空の中で、俺とハルヒは波乗りを楽しみ、夏を満喫した。しかし、空に浮かぶのは入道雲ではなく、鱗雲。

「もう、空では秋になつているんだな」

「まだ、夏が終わっちゃ困るのよ！」

俺はハルヒの言葉に引っ掛かりを覚えた。

大学の課題はやつてしまつたから、ハルヒのやつは今度は一体何が心残りなんだ？

今度はあの時みたいに無限ループを繰り返すわけには行かないぞ。そんな事を考へていろいろひに、日はどんどんと傾いて行つた。

「でっかい波、来なかつたな」

暮れなずむ浜辺で、俺はハルヒにそう声をかけた。

他のサーファーたちも波乗りを終えて、戻つて来ていた。

「うん、でも別に構わないわ」

「ううことだ、ハルヒが夏にやり残したのはサーフィンじゃなかつたのか？」

「じゃあ、なぜハルヒのやつは俺をじつにサーフィンに誘つたんだ？」

「あ、あのね、あんたをサーフィンに誘つたのは、本当はサーフィンがしたかっただけじゃないのよ……」

ハルヒは顔を赤らめながら、歯切れが悪そうに俺に向かってそう言った。

「顔が赤いのは夕日のせいだけじゃないだろ、俺にもそれは分かる。」

「分かっているよハルヒ、お前が素直に言い出せなかつた事ぐらい「恋愛は病気だつて、言つちやつたしさ……」

ブツブツと顔を反らして言い訳をするハルヒに向かって、俺は告げる。

「ハルヒ、目を開じてじつとして居る」「う、うん」

ハルヒは俺に期待するよつとそつと目を開じた。
夕暮れの静かな浜辺、ムードも悪くない。
俺もやる時はやつてやるわ。

「行くぞ、ハルヒ」

俺はそう言って、ハルヒの焼けた肌を熱く抱きしめた……。

残暑記念ハルキヨン小説短編 気分は最高っ！（後書き）

倉木麻衣さんの「feel fine!」を聞いて浮かんできたイメージを形にしました。

浮遊都市リベルアークでの世界の命運をかけた戦いを終えてからしばらくの間、エステルとヨシュアは自分達の家でゆっくりと休息を取っていた。

結社の企みは阻止する事が出来たが、ヨシュアは結社との戦いの決着をつけるためにエレボニア帝国へと旅立つ決意を話し、エステルも共について行くと誓った。

エステルとヨシュアがリベル王国を後にすると決めた前日には、カシウスとショラザードもブライト家に戻り、4人で懐かしい思い出に浸っていた。

「それで、私に見てもらいたい物つて何？」

「これなのよ」

昼食の後、ショラザードに尋ねられたエステルがテーブルに置いたのは分厚い一冊のアルバムだった。

表紙には『思い出』と言う題名が書かれている。

「これが、あの時王都から戻つて来たあたしの部屋の勉強机に置いてあつたの」

「カシウスさんが作つたものではないんですね？」

「ああ、俺もそんな物があるとは、エステルに言われるまで知らなかつた」

ショラザードに言われて、カシウスは首を横に振つた。

アルバムのページをめくると、一番最初に目に付く写真はベッドに横たわるヨシュアと、その側に立つエステルの写真だつた。

「これってあたしとヨシュアが出会った頃の写真よね」「ふーん、エステルってばかわいいじゃない」

3人とも、ヨシュアが浮かべる冷たい表情には触れずに次のページをめくつた。

次は魚を釣り上げる元気一杯のエステルと、それを眺めているヨシュアの写真だった。

「ここの頃のエステルって、本当に色気の欠片も無いわね」「余計なお世話よ、シェラ姉」

写真を見て笑うシェラザードとカシウスに、エステルはむくれた顔になつた。

「でも、僕にはエステルの明るさが眩しい太陽に見えたんだよ……」

ヨシュアは誰にも聞こえない声でポソリとそう呟いた。

「あら、私まで写ってるじゃない」

リベル各地の支部を廻る準遊撃士の研修の旅から戻り、手土産をどうぞ持つてライト家を訪問したシェラザードと、ヨシュアの背中を思いつきり押してシェラザードに紹介するエステルの姿が映つた写真。

「ヨシュアのここの驚いた表情って面白い！ 決定的瞬間ってやつよね！」

「恥ずかしいから、次の写真に行こうよ」

次の写真は、食材相手に苦戦して居るエステルと、涼しい顔をして

料理をこなすヨシュアの姿だった。

「これじゃあ、ヨシュアが女の子みたいじゃない」

ショラザードは苦笑しながら次の写真を見るためにページをめくろうとするが、それをエステルがちょっと待つたとばかりに阻んだ。

「次の写真は参考にならないと思うから、飛ばしましょうよ」「だめだよ、今度はエステルが恥ずかしい思いをする番だよ」

さらにエステルの手を退けようとしたヨシュアと、エステルは揉み合ひになってしまった。

「ほらほら、今さら姉弟ケンカみたいな事をしないの」

ショラザードがそう言って2人をたしなめながらアルバムの次のページを開いた。

するとそこには七耀教会のデバイン神父の講義の最中に居眠りをするエステルの姿が丸写しになっていた。後ろの席ではエリッサが困ったような諦めたような「まかし笑い」を浮かべていた。

「あつちやー、これは恥ずかしいわね」

エステルは赤くなつて下を向くしかなかつた。

そして次の写真は、ライト家の庭で木刀の短剣と棒を構えて向き合うヨシュアとエステル、そしてその様子を見つめるカシウスの姿が映つていた。

「今までの写真は、カシウス先生が撮つた可能性も考えられたけど

……

「Jの通り、俺が写っている。俺が並ばれた能力の持ち主だとしても、自分自身は写せないだろ？」「

「そうですね……」

カシウスの言葉に、ショラザードは納得したようにうなずいた。次の写真はロントの街の中へと場所が移る。エスティルとヨシュア、エリックサとティオの4人が並んで楽しそうに買い物をしながら歩いている姿が映されていた。

「俺が側に居なくて、エスティルは寂しい思いをしているんじゃないかと思っていたこともあったが、この写真を見ると良い友人達に恵まれたようだな」

「そうだね、あたしは一人で沈んでいる事はあんまりなかったと思う」

次の写真は再び場所はブライト家の室内に戻り、酒の入ったグラスを持ちながら、レナの写真を前にうつむいて苦しげな表情を浮かべているカシウスの姿が写っている写真だった。

「先生、まだ奥さんのレナさんの事を……」

写真の中のカシウスが人前でを見せた事の無い表情を浮かべているのを見て、ショラザードは思わず言葉を詰まらせた。

「無様な所を見せてしまったな……」

カシウスが静かにそう言つたきり、しばらく重苦しい空気がブライト家の食卓を包む。

家の外で鳴く小鳥やセミの声が、その沈黙をわずかに和らげていた。

ショラザードは、その氣まずい空氣を破るためにも、次の写真を見るためにページをめくつた。

するとそこには星空の輝く中、ブライト家の2階のバルコニーでハーモニカを吹くヨシュアと、嬉しそうに曲に聴き入るエステルの姿があった。

「これはずいぶん最近の写真ね。傍から見ても2人ともラブランのカップルに見えるわよ」

「冷やかさないでよ、ショラ姉」

先ほどの重苦しい空氣を吹き飛ばすためか、ショラザードは思いつきりエステルを冷やかし、エステルもおどけてそう答えた。すっかり雰囲気がいつものブライト家の食卓に戻った中で、ショラザードはアルバムに収められた他の写真も眺めて、エステルとヨシュアとカシウスに向かつて宣言する。

「間違いないわ、あなた達は憑かれているわね
「嫌な言い方をしないでよ」

エステルは身震いをしてそう答えた。

「本人達に気付かれないように写真を取るなんて、生きている人間に出来る事じゃないわ。立派な心靈写真ね」

「心靈写真ですか」

「まあ、正確に言えば心靈が撮った写真とも言つべきかしら」

ヨシュアの呟きに対し、ショラザードはそう説明を付け加えた。

「レナは魂だけの存在になつてしまつても、私達を見守つているんだな」

「母さんが側に居てくれるのは嬉しいけど、ちょっと恥ずかしいかも」

カシウスが感慨深く呟いたのに対し、エステルは顔を赤くして慌てた様子でそう言った。

「やつね、ロレントの街の写真もあるから場所もブライト家の中に限らず、毎日夜も関係無さそうね」

「それじゃあ、今日はヨシュアと一緒に部屋で寝るつもりだつたけど、母さんに見られちゃつの?」

ショラザードの言葉を聞いて、つい本当の事をもらしてしまったエステルに、ヨシュアの顔が血の気が失せたように青くなった。

「ヨシュア～、お前今夜エステルに手を出すつもりだったのか!」「う、うわあ!」

怒り心頭に発したカシウスを見て、ヨシュアはエステルの手を引いて、慌てて玄関からブライト家を飛び出して逃げ出した。

「エレボニア帝国に旅立つなんて認めんぞ! 戻つて来い!」

大声を出して消えたヨシュアを追い掛けるカシウスを見送ったショラザードはため息をつく。

「先生も、先生の奥さんのレナさんも、子離れがなかなかできないのかしら。エステルとヨシュアの事をうらやましく思うのだった」

しかし、親の顔も覚えていない孤児だったショラザードは、それでもエステルとヨシュアの事をうらやましく思うのだった。

LAS短編 アスカのシンギュレーション

「あーっ、退屈！ せっかくの休みなのに、ちつとも面白くないわ！」

アスカはリビングに寝転がって、そんな事を言つてゐる。

「じゃあ、ここに居ないで外に遊びに行けばいいじゃないか、委員長の家とか」

「そんな気分になれないのよね」

僕も不満をもらすアスカの側に居たくないから、外で気晴らしをする事を勧めたんだけど、アスカはヘリクツをこねるんだ。

じゃあ、どうしろって言つのさ。

アスカはエヴァのエースパイロットだからって、僕や綾波に対していつも偉そうに見下したような態度を取つてわがままばかり。

学校ではトウジやケンスケの前で僕に文句を言つて怒つてばかりいるんだ。

使徒との戦いも、エースパイロットだから僕達の助けは要らないって、いつも独断専行。

でも、式号機がマグマの海に沈みそうになつた時は僕の腕をしつかりつかんぐれただよね。

今までアタシは、誰も信じる事が出来なかつた。

ネルフの大人達は、アタシを使徒と戦うための駒としてしか見てく

れないと思つてゐるから。

そつ、もしかして加持さんもそつかもしれないつて心の底で疑つてしまつてゐた。

でも、今のアタシはシンジを絶対的に信頼してゐる。

だつて、アタシを命懸けで助けてくれたから。

初号機だつて、一緒にマグマの海に沈んじゃつかもしれなかつたのよ?

アタシだつて、自分が死んでしまつて覚悟して居たのに。

シンジのおかげで、アタシはこうして生きている。

アタシはシンジの事が好きになつてしまつたかもしれないけど、それを認めたくないプライドが邪魔をしてシンジに辛く当たつちやうのよね……。

シンジに構つて欲しくて、振り向いて欲しくてちょっかいをだしていふんだけば、シンジにはあつと云つていなかつたわね……。

「面白じテレビ番組もやつてないから、映画でも見に行きまじょうよ

アスカにそう言われて、僕は胸がドキリとした。

これつて、アスカが僕をテートに誘つてゐるんだよね。

「勘違ひしないのよ、これは暇つぶしなんだからね

アスカは無理やり怒つてゐるよつた顔を作つてゐるけど、その蒼い瞳は不安そうに泳いでいる。

そんな素直になれないアスカの不器用な表情も、僕は好きになれた。

「じゃあ、着替えてくるよ」

「当つたり前じやない、アタシに恥をかかせるんじやないわよー。」

そんな事を言つたアスカの方が服を選ぶのに時間がかかっていて、僕より部屋から出でてくるのがずいぶん遅かった。

僕はテーブルの上にミサトさん宛てにアスカと映画を見に行く事と、夕食は自分で温めて食べるようになるとメモを残して、コンフオート17を出た。

「あれ、碇君とアスカ、もしかしてデート?」

夕方になりはじめた街の中を映画館に向かつてアスカと2人で歩いていると、買い物をしていた委員長に声をかけられた。

「アタシがバカシンジとデート? そんなわけないじやない。アタシが映画を見に行くつて言つたら、ついて來たのよ。まったく邪魔で仕方が無いわ」

アスカはそう言いながら大げさに困つたと言つた感じのジョスチャーをした。

「そんな意地を張つちゃつて」

「こんなやつをアタシが好きになるわけがないじやない、やつぱり加持さんみたいに素敵な男性じやないとね」

デートをしている事を疑いもしない委員長に、アスカは僕を指差してそんな事を言つた。

アスカの照れ隠しだつて僕にも分かつていただけど、加持さんと比べられて僕はいい気分はしなかつた。

買い物の途中だと言つ委員長と別れて、僕とアスカは映画館に入つた。

映画館の入口から席に着くまでの間、不機嫌だつた僕はアスカとなるべく口もきかないで目も合わせようとしなかつた。

でも、映画の上映が始まつて辺りが暗くなつて静かになつた時、アスカは座席の手すりの下で僕の手を繋いできたんだ。

もう委員長が見ているわけでもないのに、他のお客様にも見えないようになつそつと。

アタシはまた大好きなシンジを傷つける事をしてしまつた。

映画の上映が始まつてしまつて、アタシはシンジを見つめる事も、声を出して謝る事も出来ない。

今、アタシがシンジに謝る事の出来る唯一の方法はシンジの手を握る事だけなの。

アタシが恐る恐る隣に座るシンジの手に向かつて自分の手を伸ばすと、シンジも手を握り返してくれた。

「ごめんね」つて気持ちを込めて、シンジを握る手に力を入れたり緩めたりしていると、シンジの方も優しく手を握つてくれた。

良かった、シンジはアタシの事を許してくれたみたい。

でも、アタシがシンジの事が好きだつてことはシンジにしつかりと伝わつてゐるのかしら。

アタシも不器用だし、シンジも鈍感なところもあるから……。

シンジとデートをしたいと思って、適当に選んだ映画は地球の人類が宇宙生命体と戦うホラーアクションだつた。

途中で、主人公の男性がヒロインを守り切れずに殺されてしまつシンジが映し出されてアタシはショックを受けた。

アタシとシンジもエヴァのパイロットとして得体の知らない使徒と言つ生物と戦つている。

いつ命を落としてもおかしくない絶望的な運命の中に居るのよ。決めた、家に帰つたらアタシはシンジに好きって気持ちを告白しよう。

言わなくて後悔してしまうのは絶対にマシだから。

アタシはそう決意してもう一度シンジと繋いだ手に少しだけ力を込めた。

LAS短編 アスカのシンジケーション（後書き）

この話は、PerfumeさんのPuppy loveを聴きながら勢いで作ってしまった短編です。

「ねえアスカ、ハグしようか」

「うん、お願ひシンジ」

シンジの申し出をアスカが受諾すると、シンジはアスカの肩をぐつと引き寄せて抱きしめた。

アスカの方がシンジより背が少しだけ高いので、シンジの方がアスカに抱きついたように見える。

夜のコンフォートーの葛城家のリビングで抱き合っている一人の姿をそつと影から見つめているのは一人の女性と一匹のペンギン。家主のミサトとリビングを横切つて寝床に戻ろうとしたところを取り押さえられたベンベンだつた。

シンジとアスカも薄手のパジャマ姿だったので、お互いの体の感触が密接に感じられた。

目を閉じて二人は相手の暖かな体温、ゆっくりと胸を上下させる息遣い、心臓の脈打つ鼓動などを体中で感じ取ろうとした。

この時のシンジとアスカには言葉は不要だつた。

そして静かに抱き合つて数分、アスカの心臓の鼓動がシンジの心臓とシンクロしたところでゆっくりと体を離す。

「気分は落ち着いた？」

「ありがと、これで今日もぐつすり眠れそうよ

アスカはとても爽やかな微笑みをシンジに向けた。

一人が寝る前にハグをするようになったのは、第十五使徒アラエルとの戦いの後からだつた。

使徒との戦いで心の中を侵され、さらにレイの乗る零号機に助けられた事でプライドまで激しく傷ついたアスカは、プラグスーツのま

まネルフの施設のビルの屋上まで駆け上がつて行つた。

慌てて追いかけたミサトと、続いて屋上までたどり着いたシンジの目に、とんでもない光景が飛び込んで來た。

フェンスを乗り越えて足を外に投げ出した形で座つてゐるアスカの姿だつた。

「アスカ、バカな事は止めなさい！」

「ふん、ミサトもシンジもファーストのやつも、みんな大つ嫌い！」

ミサトがいくら呼びかけても、アスカは振りかえらずにミサトやシンジ達への不満を口にして叫ぶばかり。

かなり興奮して今にもアスカは地面に身を投げ出しそうな危険な状態だつた。

強引に力で取り押さえようとミサトが近づこうとすると、アスカは腰を浮かせて飛び降りそつとそぶりを見せたために、ミサトは二の足を踏んでいた。

しかし、シンジは決意を固めると、勇気を出してゆっくつとアスカの方へと歩いて行く。

「近づいたら飛び降りるつて言つてゐるのが解らないの！？ アンタが止めようとしても、多分間に合わないわよ！」

「アスカ、落ち着いて。僕はアスカの話を聞きに來たんだ」

シンジはそう言つと、アスカとフェンス越しに背中合わせに腰を下ろした。

ミサトもシンジについて行こうとしたが、シンジが視線を送ると、黙つてその場に止まつた。

アスカはそれからもずっと特にシンジがシンク口率が一番になつてからいかにシンジの事が憎くてたまらなくなつたか、シンジに怒りをぶつけ続けた。

「家族、」なんて、アンタとミサトの二人でやつていればいいのよ、反吐が出るわ！」

アスカがそう叫んだ時、シンジは後ろに回されていたアスカの右手をそつと手にとつて優しく撫で、指を絡めて軽く握った。そして手を握ったまま、シンジはアスカの事がどれほど好きなのかを三十分位話し続けた。

「ねえアスカ、ハグしようか」

「はあ？ アンタ何を言つてるのよ？」

体をねじつて振りかえり、驚いた瞳で見つめてくるアスカに対して、シンジは自分がエヴァに乗るのが嫌になつて第三新東京市から逃げ出そうとした時、ミサトによつて引き止められた事を話した。

「だから、ハグをすれば僕の気持ちがアスカに伝わると思うんだ。さあ、こつちに来てよアスカ」

シンジの呼びかけからしばらくして、アスカは自分でフェンスを乗り越えて待ち受けていたシンジの胸に飛び込んで行つた。

こうして無事に仲直りを果たす事が出来たアスカとシンジ。ミサトとの3人の家族生活も取り戻す事も出来て、アスカのシンク口率も安定した。

しかし使徒の攻撃を受けた後遺症からか、アスカは毎晩悪夢にうなされるようになつてしまつた。

そこでアスカの心を落ち着けるためにシンジがアスカをハグする事になつたのだった。

「シンちゃん、今度はお姉さんが大人のキスの仕方を教えてあげよ

うか？ アスカとの初キスは大失敗しちゃったんでしょう？

「そ、そこまで教えてくれなくていいですっ！」

「やつよ、何言つているのよ!! サトー！」

今のシンジとアスカにとつては、ハグで充分に満ち足りていた。
そのうちに自然と次の段階へと進んでいくのだろう。
アスカの言葉を幕開けに。

「ねえシンジ、 キスしようか」

「ほりシンジ、何やつているのよ！ グズグズしないで早くハンバーグを作っちゃいなさいよ、アタシはお腹が空いているんだから！」「わ、わかったよ！」

アタシが苛立つた声を掛けると、シンジはハンバーグをこねる速度を上げた。

シンジの手元は相変わらず手慣れない様子で、おつかなびっくりで料理を作っている。

はつきり言つてシンジの作るハンバーグは美味しいはない。でも、コンビニで売つているレトルトのハンバーグはもっと嫌だつた。

全く、何をいちいち迷つているのかしら？

どうせ上手く作れないんだから、もっと早く作ればいいのに。自信が無いから優柔不斷になるのよ。

「そりだアンタ、いつも背中を丸めて下ばかり向いて道の端っこを歩いているじゃない、もっと堂々と真ん中を歩かなきゃダメよ」「何でアスカにそんな事言われなくちゃならないんだよ」

「いい、アタシ達はエヴァンゲリオンのパイロットなの、世界人類のために戦っているのよ。それだけで誇らしい事じゃない！」「でも、エヴァに乗つて無かつたら僕達はただの中学生じゃないか」

シンジの放つた言葉はアタシの胸をえぐつた。

そう、エヴァのパイロットだからみんなアタシを見てくれる、アタシに優しくしてくれる。

ミサトがアタシを引き取つたのも同居していた方が作戦部長として都合が良いから？

シンジも命令だからいやいやアタシと同居しているの？

アタシは怖くて聞く事が出来なかつた。

壱中ではアタシはドイツ人の血を引くクオーターと言う事で、男子生徒や女子生徒に羨望の眼差しで見られてアイドルのようになつてゐる。

でも、アタシに声を掛けてくれるのはヒカリだけ。

アタシのルックスに惹かれた一部の男子生徒も交際を迫つてくれるけど、それはここが日本だから。

ドイツの大学では周りより身長が低くて、チビ扱いされてコンプレックスを抱くほどだつた。

そんな事を考えていたアタシは不機嫌そうな顔でシンジの作ったハンバーグをかきこむように食べた。味なんか全然分からなかつた。

「あ、あのさ……」

「何よ？」

「「」、「めん……」

アタシがシンジをにらみつけると、シンジは下を向いて黙り込んだ。このシンジの態度がアタシをイライラさせる。

「言いたい事があるなら言ひなさいよ……」

「別にいいんだ、全部僕が悪いんだから」

「はあ！？ 何勝手に自分で納得しちやつているのよ、そんなところが内罰的なの」

「そ、そうかな……」

「もつと自信を持ちなさいよ……」

アタシはシンジの鼻先に人差し指を突きつけて、自分の部屋に戻つた。

全くあいつの辛氣臭い顔を見ているとムカついて来る。

やっぱり、アタシに相応しい男は加持さんしか居ないわ。

でも、加持さんつたらいくらアタシが好きだつて言つても分かつてくれないんだから。

「アスカは背伸びをしている。ありのままのアスカを好きになつてくれる相手を探すべきだ」

加持さんはアタシを子供扱いしている。

アタシはもう子供じゃないのに。

ミサトと親しく話している所を見ると胸が痛くなる。

加持さんもアタシよりミサトの方がいいんだ。

襲いかかってくる使徒を倒して行くうちにシンジの態度も変わつて来た。

シンクロ率もアタシを追い上げるようになつて戦闘中でも自分から指示を出すようになつた。

アンタが勝てているのはエースパイロットのアタシが居るからなんだからね、調子に乗るんじゃないわよ！

シンジが自信をつけて行くにつれて、アタシは何となく面白く居なくなつて来た。

アタシに対しても納豆や魚を食べろつて言うようになるし。

あげくの果てにはデートに誘われたとかで有頂天になつている。

でも、シンジは他に好きな子が居るつて断つたみたいだけど

シンジの好きな子つてアタシ……なわけないわよね。

いつも文句ばかり言つて怒鳴りつづけているアタシなんか好きになつてくれるはずなんかない。

きっとファーストに決まつていて。

そう思つたアタシはそれから一段とシンジにきつく殴たるようになつた。

とある使徒との戦いで、ミサトの命令に逆らつて突撃したシンジは

エヴァー」と使徒に飲み込まれてしまった。

「これって、独断専行じゃない！」

「そうね、戻ってきたらたっぷり叱らないとね

アタシのつぶやきにミサトも同意していた。

なのに戻つて来たシンジはミサトに怒られる事も無く、何の処分も下される事は無かつた。

何よそれ！ 結局ミサトも碇司令も、シンジやファーストばかり大事にして、アタシなんかどうでもいいんだわ！

シンク口率もシンジに抜かされたアタシは、ついにエヴァでも認められなくなつた……。

家に戻つたアタシは、シンジやミサトの顔を見るのも嫌になつて部屋に閉じこもつた。

ミサトやシンジと一緒に空気なんて、吸いたくもない。

「アスカ、『飯だよ！』

シンジに呼びかけられても、アタシは背中を丸めて座つたまま動かないでいた。

廊下を歩くシンジの音が近づいて来て、アタシの部屋のドアを開けた。

何で部屋に鍵を掛けられないのよ、日本の家屋つて！

アタシは内心そう毒突きながら、部屋に入つて来たシンジに文句を言つてやううと振りかえる。

「何で勝手に部屋に入つてくるのよ、ドアに掛けある『立入禁止』の札が見えないの！」

「うん、わかっているけど

アタシが怒つてこらみつけてもシンジは皿を返さず見つめ返して来た。

至つて静かな、落ち着いた瞳だった。

「アスカにハンバーグだけは食べてもらいたかったんだ」「何よそれ！？」

今さらハンバーグがどうしたつて言うのよ。アタシはシンジの考えが理解できなかつた。

「「めんアスカ」

シンジはそう言つと、強引にアタシの口の中をく切り分けたハンバーグを押し込んで来た。

アタシの口の中いっぱいに肉汁が広がる。お腹が空いていた事もあって、アタシはハンバーグを吐きださずに咀嚼して飲み込んでしまつた。

「どう？ やつと最近になつて上手く焼けるようになつたんだよ？ こねるときも空氣が入るよつになつたし……」

確かに同居を始めた頃のシンジのハンバーグはとても不味いものだつた。

それがわづきのハンバーグはまだれが出るほどおいしいものに仕上がつてゐる。

アタシは今まで思い違いをしていた事に気がついた。

シンジはグズグズとハンバーグを作つていたんじゃない。

どうすればおいしいハンバーグが作れるか自分なりに考えながら作つていたんだ。

食べてもらう相手……アタシの事を思つて。

そんなシンジを小突くなんてアタシは何て恥ずかしい事をしたのだろう。

「どうして、アタシみたいな性格の悪い女にそこまでするのよ」「そんな事無いよ、アスカは僕の事を励ましてくれたし、何よりもアスカの側にいると明るくなれるんだ」

「励ますって……アタシはただ文句を言つてただけで……」

「アスカ、私は仕事の上だけで他人と一緒に住めるような物事を割り切れる人間じゃないわ」

いつの間にか、ミサトまでアタシの部屋の入口に姿を現していた。

「私は、シンジ君とアスカを、弟と妹のようと思つて居るのよ、誤解しないで」

2人に優しい言葉を掛けられて、アタシは目に涙が浮かんでくるのを感じた。

「アスカ、自分をつまらない人間だと思いこまないでよ。もつと自信を持つてよ」

「ふう、アンタに説教されるなんてアタシも落ちたものね」

アタシはあきれた仕草でため息をつこうとした。

でも、アタシはきっと泣き笑いの笑顔を浮かべてしまつて居るに違いない。

口元が思わず緩んでしまつて居るのを感じる。だつて胸の中は嬉しさでいっぱいになつたから。

「ハンバーグ、おいしかったけど80点つて所ね」「厳しいなあ」

シンジと//カトと笑顔で話せるなんて、ずいぶん久しぶりな感じがする。

アタシははとつてもすがすがしい気持ちになった。

きつとありのままの自分を好きになつてくれると言ひつ自信が湧いて來たからね。

LAS小説短編 シンジが死んじゃったのよ！

世界観は学園エヴァとなっています。

使徒やゼーなどは出て来ません。

シンジとアスカの両親も健在です。

碇家と惣流家は隣同士となっている幼馴染版LASです。

第三新東京市第壱中学校一年A組の女子、惣流アスカ。

アスカはとても元気な声で朝のあいさつをする少女だつた。

しかし、今朝登校して来たアスカは暗い顔で教室に居る誰ともあいさつを交わさずに自分の席に着くと塞ぎこんだ。

アスカの親友である洞木ヒカリでさえ、アスカが登校して来た事にしばらく気が付かなかつた。

「アスカ、来ていたの！？」

「あ、ヒカリ……」

ヒカリに声を掛けられて机から顔を上げたアスカは目の人下に大きなくまを作っていた。

「アスカ！？」

「惣流、なんちゅう不細工な顔しとるんや」

「せつかくの顔が台無しだな……いや、これは珍しい写真が撮れるかも」

そう言ってカメラに手を伸ばそつとしたケンスケの手をヒカリが押し止める。

「まつたく相田つてば不謹慎なんだから。アスカ、いつたい何がかったの？」

「今朝起きたら、シンジが……冷たくなつていたのよ、ベッドの中で」

アスカが悲しさに満ちあふれた口調でそつまつと、ヒカリ、トウジ、ケンスケの3人も重苦しくため息を吐いた。

「そりか、シンジのやつ調子が悪そりやつたしな……」

「やつぱり、病氣だつたのかしら」

「でも、今年で14歳だろ？ 長く生きた方じやないのか」

トウジ達が話す横でアスカは切なそうにため息を吐き出した。

「病院に行つて治療すればよかつたのよ」

「無理な延命処置は止めようつて……」

ヒカリの言葉にアスカは目に涙を浮かべて答えた。

「最近は外を歩くことも出来なくなつて、ご飯も食べられなくなつていたんでしよう？」

「そりやあ内臓も悪くなつて居たんだろうな」

「きつと苦しめたんやろうな」

「昨日の夜もシンジの苦しそうな声がアタシの部屋まで聞こえて来て……静かになつた明け方までアタシも心配で眠れなかつたの」

アスカは感極まつて涙を流し始める。

「きつと最後は声も出せないほど力が無くなつてしまつたのよ、あ

の時シンジの側に行けば死に目に会えたかもしないのに……」

泣き出してしまったアスカを前にして、ヒカリ達は何も声を掛ける事が出来ずに顔を見合させるだけだった。

そして、泣きつかれて涙を止めたアスカにヒカリが恐る恐る声を掛ける。

「それで、お葬式はいつやるの？」

「明日にでも、シンジは火葬にされちゃうってママが……」

「そうか、俺も放課後、会いに行つてもええか」

「うん、シンジってば鈴原と仲が良かつたもんね」

「私もお菓子を作つて持つて行つてもいい？」

「シンジってばヒカリのクッキーが大好物だったわね」

アスカは昔を懐かしむように視線を遠く窓の外へと移した。

「シンジと初めて会つた時は、アタシも赤ん坊だつたから良く覚えていなideど……」

「シンジのやつは周りから好かれていて友達も多かつたよな」

「うん、友達のジョンやベックム、ダイアンからもお見舞いのお花が届いていたわ。また元気に外で遊ぼうって」

アスカがそこまで話した時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

ヒカリ達は力バンの置かれていないとある男子生徒の机に視線を送ると、困った顔でため息をつく。

「全く碇のやつ、惣流を泣かせたままにして置いてからに……」

「小さい頃からずっと一緒に居た幼馴染なんだろ？」

「私達が励ますより碇君が側に居る方がずっとアスカは元気になるつて言うのに」

ヒカリ達は口々に責めるような言葉を言いながら自分達の席へと着席した。

その時教室に息を切らせて掛け込んで来た一人の男子生徒を見て、ヒカリは声を荒げる。

「碇君！ 今頃になつて登校してくるなんて！」

「「めん委員長、アスカは？」

「惣流のやつ、シンジが死んだつて朝からグッタリしてたから自らが必死に励ましていた所や！」

トウジの言葉を聞いて、シンジは慌ててアスカの所へ駆け寄る。

「「めん……いつも元気で笑顔を絶やさないアスカが、大声を上げて泣いているところを初めてみたから、どうしたらいいのか分からなくて……朝から顔を合わせられずにいたんだ」

「アタシもシンジは近いうちに死んじゃうつて覚悟はしていたんだけど……空っぽになつたシンジのベッドを見たら急にシンジが居なくなつちゃつたって実感がわいちゃつて、とても悲しくなつてしまつたのよ」

「碇、こういう時は胸を貸してやるんだよ」

ケンスケに言われたシンジはアスカの顔をそつと自分の胸に抱き寄せた。アスカはまたせきを切つたように泣きはじめた。

廊下で教室の前のドアの入口から中をのぞきこんだ2・A担任教師の葛城ミサトは、出席番号1番の綾波レイを手招きして事情を聞く。

「いつたい何が起こつたの？」

「惣流さんの家で飼っていた犬が死んじゃつて惣流さんが泣いてい

るので、碇君が慰めてるんです

「せつか、もうじぱらくそつとしてあげるか」

ミサトはせつかぶやくと、2-Aの教室を通り過ぎ、校舎をゆっくりと歩いてもう一周してから朝のホームルームを始めるために教室へ入った。

「」の作品は以前に公開した作品の部分修正版です（Ver1.0
2）。

「」の物語にはエヴァは登場しません。ゲンドウとコイは親バカ夫婦です。

「あなた、今年のクリスマスプレゼントはどうしましょ~？」

「もうそんな時期か。時の経つのは早いものだな」

「去年と同じ絵本にしましょ~か？シンジは本を読むのが大好きですものね」

「それに関して、少し気になる事があるのだが……シンジは少し内向的ではないか？このままだと学校に入つたとき困つてしまつぞ」

「あなたに似てシンジは照れ屋さんですからね」

「そこで私は考えたのだが……」

「……まあ、それは良いアイディアね」

「全てはシナリオ通りに」

「あなた、その変な笑い方止めてくださいーーーシンジが真似したらどうするんですか！」

「そ、それは問題があるな……善処しよう」

12月25日のクリスマスの朝。碇家の一人息子シンジがベッドの中で違和感を覚えて目を開くと……すぐ横では金髪の同じ年の女の子が寝息を立てていた。

「うわあーなんで女の子がおとなりで寝ているのー?」

シンジの大声でその女の子は目を覚ましたよつだ。

「うわーなんで男の子が同じベッドに居るの?」

パニックになつた女の子はポカポカとシンジを叩きだした。
しかしそのパンチは力の弱いものでシンジに当たっては痛いというよ
りくすぐつたい。

「へすぐつたこよ。やめてよつ

しばらくして、その女の子はなぜ自分がここに居るのか気が付いた
ようだ。

「やつだ、アタシはサンタさんによ頼まれてシーちゃんとお友達にな
るよつに言われたんだつた」

女の子はこつこつと笑つてシンジに手を差し出した。

「アタシはアスカよ。よろしくねシーちゃん」

しかし、シンジはそれを無視してブイツと横を向いてしまつた。

「僕はお友達なんていらないんだ。本を読んでいる方が好きなんだ」

それを聞いたアスカは泣き出しそうな顔になつてしまつ。

「シーちゃんもアタシの事嫌いだからお友達になつてくれないの?」

暗く沈みこむよつた声にシンジは慌てて伸ばされたアスカの手を握る。

「お友達になるから泣かないでよ……」

それでもアスカはまだ暗い表情を崩さない。

「ならどうしてアタシの方を見てくれないの? いやいやお友達になつてくれても、うれしくない」

「だって、アーチャンは本に出て来るお姫様みたいに綺麗な青い目をしていて美人だから」

顔を赤らめてアスカの方をちらつと見てそう言つた。シンジは、アスカは歓喜の涙を流した。

「アーチャン、僕は何かひどい事を言つた?」「めんね、泣かないで」「違うの。アタシは日本に来てから髪の毛を引っ張られて抜かれちゃつたり、目が青いからつて公園の遊び仲間に入れてくれなかつたんだ」

「僕はアーチャンみたいにかわいい女の子は見た事無いのに」「嬉しい、シーチャン大好き」

アスカは上機嫌になつてシンジに抱きついた。

シンジはちょっと困つた顔になつたが、アスカをはねのける事はしなかつた。

二人がベッドの上でそうして居ると、頃合いを見計らつたように、イドゲンドウが部屋に入つて来た。

「アスカちゃんはもうシンジと仲良くなつたのね」

コイはそう言って笑顔でシンジとアスカの頭を優しくなでる。

「よかつたなシンジ。友達ができればおねしょもきっと治るわ」

「ふふっ、シンジは寂しがり屋ですものね」

「ひどいな、アーチャンの前で言わないでよ」

「これからシーサンが寂しくないようと一緒に床にあがるね」

そう言ってアスカはシンジの脣にそのサクランボのようなかわいい唇をほんの一瞬押しつけた。

驚いたシンジをアスカは満足げに眺めると、ゲンドウの方に顔を向けて礼を述べた。

「ありがとうございます。素敵なお手紙をくれて」

「問題無い」

「まつたくあなたも、不器用なんですか?」

その後アスカは碇家に滞在する事になり、シンジとアスカは一緒に時を過ごす事になった。

朝の着替えも食事も……お風呂も寝るのまで……外を散歩する時はいつも手を繋いでいた。

そんな生活が一週間ほど続き、シンジとアスカが生活に慣れ始めたころ、二人はゲンドウに別れを告げられた。

「そんな、アーチャンが帰っちゃうなんて嫌だよ!」

「アタシもシーサンと一緒に居たいけど……」

「シンジ、アスカちゃんも両親の居る家に帰らないといけないのだ」

そう宥めているアスカとゲンドウの前でシンジはまたもダダをこねた。

「じゃあ今度は僕がアーチャーの家に行くべー！」
「シンジ！いい加減にしなさいー！」

そんなシンジの顔をユイが平手打ちにした。

「我がまま言うのもいいかげんにしなさいー！」
「嫌だつ！僕はアーチャーと結婚するんだ！」
「アスカちゃんの」両親もね、もう一週間近くも離れ離れになつて寂しがつているのよ。シンジは自分のことしか考えられないそんな悪い子なの？」「

そこへゲンドウが助け船を出す。

「シンジ、いい子にしていれば、またアスカちゃんと会わせてやる
「本当？じゃあ僕はいい子になるー！」
「シーちゃん、じゃあ約束しよう。ゆびきりげんまん、つやついた
ら、はりせんほんの一ます」

シンジとアスカが小指を絡める様子をユイとゲンドウは微笑ましく温かく見守った。

「シンジが反抗するなんて初めての事ですね、あなた」「
「ああ。シンジは今まで大人しすぎたからな。あいつも男の目を見るようになった」

しかし、そのシンジとアスカの誓いは果たされたことが無かつた。
「お父さん、アーチャーにはもう会えないの？」

「シンジ……すまない」

「アスカちゃんの家族はまだドイツに引っ越しやつたのよ。『この
んなさい』

アスカによつて明るい性格になつたと思われたシンジは、また以前
のようない内向的な性格に戻つてしまつた。

学校でも教室で静かに本を読んでいるシンジには親しい友達もでき
ず、シンジが家に友達を連れて帰る事も無かつた。

携帯電話の着信履歴も両親からのものだけ。

ゲンドウとコイもシンジが素直な子に育つてくれた事には安心して
いたが、いまいち覇氣の感じられないシンジに不安を感じていた。

「シンジは近くで照らしてくれる子が居ないと明るくられない性格
なのだな」

「どこかにアスカちゃんみたいにシンジの氣を引いてくれる子が居
ないものかしらね……」

「この前隣に引っ越してきた綾波さんの娘はどうだらう?」

「ああ、レイちゃんですか? あの子もアルビノが原因でクラスに
お友達が居ないらしいですね」

「シンジはきっと友達になれるだらう」

ゲンドウはニヤリと薄笑いを浮かべた。

コイが電話を綾波家にかけると、レイの母親は上機嫌だった。

「あら碇さん」

「そちらのレイちゃんに友達ができるといつお話ですが……」

コイがそつ切り出すと、レイの母親は嬉しそうに話しおつした。

「レイの件では『この相談に乗つていただいてありがとうございました』

あの後すぐにレイにもお友達ができたんですよ

「えっ、そうなんですか？」

「私の知り合いの渚さんのところのカヲル君も、アルビノで悩んでいたんですけど、碇さんのお話通りレイを隣に寝かせたらすぐに仲良くなってしまって……」

「それは、おめでとうございます」

レイの母親にユイはシンジの事を切り出せずに電話を切るしかなかつた。

「あなた、『ごめんなさい。私がシンジとアスカちゃんの馴れ初めを綾波さんにお話したばかりに……』

「まさか、即座に実行に移すとは想定外だつたな」

ゲンドウとコイの碇シンジ育成計画に何の進展が見られないままシンジは小学校を卒業し、中学生となつていた。

進学してもシンジは相変わらずクラスで孤立し、真面目すぎる性格と優秀な成績は時にはからかいやいじめの対象となつた。

シンジは学校であつた嫌な事を日記に書いて憂さを晴らすという消極的なストレス解消方法しか持たなかつた。

しかし、シンジが中学二年生、14歳のクリスマスを迎える頃になつてゲンドウとコイの下にとある朗報が飛び込んだ。

「あなた、見てください。シンジつたら、同じクラスの子に彼女を自慢されたから自分も彼女が欲しいなんて日記に書いてますよ」

「これであの計画を実行しても問題は無いな」

和感を感じて目を覚ますと、隣に金髪の同じ年の少女が眠りこけている事に気が付いた。

「うわあーなんで女の子が隣で寝ているの？……ってアスカ！？」

シンジの大声で寝ていたアスカも目を覚ましたようだ。

「さやああ！ 何で男が隣に寝てるのよ！？ スケベ、変態！」

アスカはシンジの顔に思いつきり平手打ちを喰らわせて突き飛ばした。

「痛いよアスカ～」

涙目で訴えるシンジの姿を見てアスカは「これは日本のシンジの部屋だと思いだしたようだ。

「『めんシンジ！ 痛かった？』

そう言ってアスカはシンジの赤く腫れあがったほおを優しくなでる。もつとも、シンジの顔が赤いのは叩かれた事だけが原因ではなかつたのだが。

そこへ聞き耳を立ててタイミングを見計らつたゲンドウとコイが部屋に入つて來た。

「二人をここに集めたのは理由があつたからなのだ」

「私とゲンドウさん、アスカちゃんの『両親は仕事の都合で南極に行かなくてはいけなくなつたのよ』

「南極に？」

不思議そうに首をひねるシンジとアスカを急かすようにゲンンドウが喋りはじめた。

「とにかく着替えて、朝食を食べろ。日本でシンジ達の面倒を見てくれる方がここに来るからな」

「うん……わかつたよ」

いそいそと朝食を終えたシンジとアスカは、ユイの運転する車で出て行つたゲンンドウ達を見送つた。

しばらくすると、インターフォンが押され、玄関前にメイド服を着た黒髪の女性が立つて『いるのが見えた』

「碇シンジ君に、惣流・アスカ・ラングレーさんね？ 私は家政婦紹介所から来た葛城ミサト。あなた達の世話をするよつに頼まれて來たの」

「ずいぶん態度のでかいメイドね」

「でも、何か明るいお姉さんって感じがするよね」

シンジはドアを開けて、ミサトを家に迎え入れた。

「ようしひくお願いします、葛城さん」

深々とお辞儀をしたシンジにミサトは笑顔を浮かべて、手を上に振る仕草をする。

「まあまあ、そんなにかしじまらないで。私もあなたたちをシンちゃん、アスカちゃんつて呼ぶから、ミサト、でいいわよ

「ありがとうございます、ミサトさん」

「サンキュー、ミサト」

「アスカ、やつそく呼び捨てにしたわね……」

ミサトは仕事である家事や洗濯、掃除などをすると小学生より下手だとシンジ達は思った。

「……さつきから掃除しているけど全然汚れが落ちていない気がするんですけど」

「さては、落ちこぼれメイドね？ ミサトは

「うつさいわね！ 文句があるなら自分達でやりなさい！」

怒ったミサトはそれから一切家事の類をやろうとはしなかった。

「職務怠慢よ、ミサト！」

「ミサトさん、眞面目に働いて下せ！」

「それじゃあシンちゃん達が家事をすればいいじゃないの」

アスカとシンジが訴えても、ミサトはへラへラと笑って相手にしなかつた。

その日の夜、出張先に出発する前のゲンドウがミサトに電話をかけてきた。

「葛城君、くれぐれも一人の事を頼む」

「はい、計画通りだらしない保護者役を精いっぱい演じさせていただきます」

「君は普通どおりに生活して居ればいい。そうすればシンジとアスカ君は協力して料理や家事をしようとするはずだ」

「そんな、私も社会人として一通りの事はできますよ……」

「君はずぼらでがざつで、婚期を逃して恋人をからかう事が一番の趣味の三十路直前の素晴らしい人材としてリツコ君の推薦を受けて選ばれたのだ」

そう断言するゲンドウにミサトは肩を落としたのだった。

次の日、ミサトの部屋に入ったシンジとアスカは足の踏み場もないほどの散らかりように戸惑った。

今まで両親にまかせっきりで掃除などした事が無いシンジとアスカだったが、これはまずいと一人で協力して家事をする事になった。そしてダメ押しとばかりにミサトのカレーを食べた二人は激しく苦笑し、数日後にはお揃いのエプロンをつけて「一人は料理をする」とになる。

「あらまあ、お揃いのエプロンなんかしちゃって新婚さんみたいね」「ふふふ、ミサトったら」

ミサトが冷やかしてもシンジとアスカは余裕で受け流す。
入浴は別々だったが、パジャマに着替えたアスカは当然のようにシンジの部屋に向かう。

さすがにこれはマズイと思つたのかミサトは寝る時の部屋は別々にするように言うのだが、二人は聞く耳を持たない。

「だつて僕達は小さい頃から一緒に寝ていたんですよ」「シンジと一緒に寝ると、心がポカポカするの」

シンジの部屋に入つてしまつた二人を見送つたミサトは、やりきれない気持ちになつてリビングでビールを飲みまくる。

「私だけしかけなくても、あの二人は勝手にラブラブになつているじゃないの」

こつして2人の生活はおおむねゲンドウとユイの計画通りになつたのだが、シンジとアスカのラブラブはエスカレートしてきた。

「シンジちゃん。ビール持つてきて~」

夕食の席でビールをせがむミサトを前にして、シンジとアスカは熱い視線を交わしていた。

「シンジ。食べさせてあげる。あーん」

アスカが箸でつかんだおかずをシンジは幸せそうに頬張る。

「アスカちゃんが食べさせてくれるとおいしいね」

「あつたりまえよ、アタシはシンジのお嫁さんなんだから」

一人のやり取りを見ていたミサトは青い顔をして胸を抑え出した。

「アスカのお口に」飯粒が付いているよ

「シンジが取つて」

シンジは舌を伸ばしてアスカの唇についたご飯粒を舐めとる。

「私には痛すぎる」ブランブフィールドだわ

その後しばらく半年ほど、月曜日から金曜日は学校でイチャイチャ、土日は公園や遊園地でデートをしながらイチャイチャと言づラブラブな生活が続いた。

「ミサト、アタシ達修学旅行に行かなきゃダメなの?」

「どうして、そんなこと聞くのよ?」

「だつて、夜はシンジと一緒に寝れなくなるじゃない」「アスカ、あなたねえ……」

ミサトはあきれ果ててため息をついた。

そしてキスをしたことによって、シンジとアスカの結びつきは強くなっていた。

キスの回数が増える」とにシンジとアスカは強く唇を重ねていた。

「大人のキスよ……学校から帰つたら続きをしましょ」「うん、楽しみにしているよ……アスカ」

そしてある日放課後、図書委員の仕事を終えて学校から帰ろうとしたシンジは教室で待つているはずのアスカの姿が無いことに気が付いた。

「アスカ、先に家に帰っちゃったのかな……」

シンジが家に帰ると、リビングに紙が置かれている事に気が付いた。その紙を手に取ると、シンジにとって驚くべきメッセージが目に飛び込んできた。

これ以上シンジとは一緒に居られない、とよひながら

「何の冗談だよ！　日本に戻つて来たアスカはずつと一緒に居られるんじゃなかつたのかよ！」

そう叫ぶシンジの肩に、いつの間にか追いついていたミサトが手を置いた。

「アスカは自分の意思でドイツにいる」親戚のところへ行つたのよ……

「そうだ、アスカはきっとどこかに隠れて僕をドッキリさせようとしているんだ！　じゃあ僕はアスカの大好物のハンバーグを作つてアスカを驚かせてあげよう！」

シンジは大声でそう喚きながら、台所でハンバーグを作り始めた。料理を作り終えたシンジは3人分の食事をテーブルに並べる。しかし、いつまで経つてもアスカが帰つて来るはずは無かつた。

「ミサトさん、アスカが早く帰つてこないとせつかく作つたご飯が

冷めぢやつよ……」

「シンジ君、いい加減に現実を認めなさい。アスカはもう日本には居ないのよ」

アスカの姿が見えない事を確認すると、シンジは膝を折つてへたりこんでしまつた。

「シンジ、アスカちゃんはこのまま一緒に居ると良くないこと思つてシンジから離れたのよ」

「ミサトさん、アスカは僕の奥さんなんでしょ？ お嫁さんになつてくれたんでしょう？」

「アスカちゃんはシンジと結婚をしたわけじゃないわ。まだ口約束の段階だつた」

「アスカは僕の事が嫌いになつてしまつたのかな……」

シンジはその日からまた輝きを失つた生活に戻つて行つた。

それからのクリスマスの日、田を覚ました時シンジは隣にアスカが寝ていなか探すのだが、サンタクロースの贈り物は無かつた。

日本から遠く離れたドイツで暮らすアスカは、学校で遠くに居るシンジの事を思っていた。

「シンジ……一緒に居るとアタシはムラムラして我慢できなくなってるのよ」

そしてアスカの頭の中にはピンク色の妄想が広まる。

「でも、18歳のクリスマスの朝にはシンジのベッドに潜り込んで……ジユルリ」

授業中によだれを垂らして、一ヤケ顔になるアスカを、クラスの友達は気味悪がっていました。

エステルとヨシュアがリベール王国の各支部の遊撃士協会を巡る旅を終えてロレントに戻つて来てからしばらくした時の事。

「え？ ヨシュアの一番欲しい物ですって？」

ヨシュアの誕生日、エステルは息を弾ませてショーラザードの居る遊撃士協会の2階の部屋へとやって来た。

エステルに聞かれたショーラザードは少し驚いて聞き返した。

「占いが得意なシェラ姉なら分かると思つて」

「タロットにしても、水晶球にしても、抽象的な答えばかりで、具体的な物は分からないわね」

「そつか、ヨシュアって何をあげてもありがとうって受け取つてくれるから、今年こそは本当に喜ぶ物をプレゼントしたいのよね」

エステルはそう言つと残念そうにため息をついた。

ヨシュアは今日一日休みを貰つたので、家でゆっくりとくつろいでいる。

エステルは街で買い物をしてくると言つて1人で家を出て行つたのだが、ヨシュアにはバレバレだった。

「そうね、ヨシュアとあんたの馴染のロレントの街の人聞いてみれば、誰かが何かを知つているかもしれないわね」

「うん、あたし、街のみんなに聞いて来る！」

ショーラザードの提案を聞いて、エステルは元気100倍になつて遊撃士協会の建物を飛び出して行つた。

「ヨシュアはエステルが笑顔で側に居てくれるだけで喜んでいると
思つけど……ま、結果が出たら教えてもらひますか」

ショラザードは1階に降り、受付のアイナと2人でエステルが戻つて来るのを楽しみに待つことにした。

エステルが最初に向かつたのは遊撃士協会の隣にあるエルガー武器商会だつた。

ヨシュアがカシウスに拾われてブライト家で暮らすようになつてから準遊撃士の旅に出るまで、ヨシュアはこの店の手伝をして居たのだ。

「せう言えば、ヨシュアはナイフの手入れを良くしているわよね」

店に入ったエステルが店主のエルガー、ステラ夫妻にヨシュアの好きなナイフについて尋ねると2人とも渋い顔をした。

「エステル、ヨシュアがナイフの手入れを熱心にするのは、遊撃士の仕事で生き残るためだと思うぞ」

「そうなの？」

「そりや、長い間使つてゐるナイフに愛着が湧いてきたりはするだろうが、あいつは新作のナイフとかに飛びつくようなやつじや無かつたな」

「それに、女の子がナイフをプレゼントするのはおばさん、ちよつとはしたないとと思うの」

「言われてみればそうかも……」

「そうだエステルちゃんも、もうスニーカーを集めるとか止めてもうちょっと女の子らしく……」

「あ、あたし他の人にも聞きに行くから、またね！」

いつものステラの説教が始まつたと察したエステルは、エルガー武器商会を飛び出して行つた。

次がエステルが向かつたのは、自分とヨシュアの共通の幼友達であるエリッサが看板娘をしている居酒屋アーベントだつた。

「え、ヨシュア君の欲しそうな物？」

「そうそう、ヨシュアつてば自分で何が欲しいとか言わないからさ、エリッサにも知恵を貸して欲しいのよ、ほら、ヨシュアをビックリさせる料理とかさ」

「エステルつて、単純な料理しか作れなかつたわよね？ リベール各地を巡る旅をして少しばかりは料理の腕も上達した？」

「それが各地の料理を食べてばかりで、料理は全てヨシュアやクローゼにお任せ……」

「やつぱりね……じゃあ、バッタとかなんか虫でも焼いて食べさせてあげたら？」

「それは試してみたけど、あんまり嬉しくなかつたみたい。シェラ姉が言うには引きつった笑顔だつたつて」

「本当にやつっていたとは怖いわね……そうだ、ティオにも聞いてみたらどう？」

「うん、そうしてみると、ありがとうエリッサ、相談に乗つてもらつて」

「エリッサ、役に立てなくてごめんね」

エステルはエリッサに手を振つてロレントの街の郊外、パーゼル農園へと向かう事にした。

パーゼル農園に着いたエステルはすぐに入口の側のナス畑で仕事をしているティオの姿を見つけた。

「やつぱー、ティオ」

「あれエステル、一人で居るなんて珍しいね」

「今日は休みだから、ヨシュアは家でのんびりとくつろいでいるわ」

エステルの隣にヨシュアが居ないのを不思議に思ったティオが尋ねると、エステルはそう答えた。

「やつ言えば、今日はヨシュア君の誕生日だけ。サプライズのお祝いはまだ続いているの？」

「うん、それで今年こそ本当にヨシュアが欲しい物を突き止めてプレゼントしてあげようかなと思つてさ」

「エステルも良く飽きないわね、前は”伝説のあの虫”をプレゼントするとか言つてミストヴァルトの森に行つたりするし」

「あの時はみんなに心配をかけちゃつたわね」

ティオに言われたエステルは苦笑を浮かべた。

「確かにヨシュア君つてば、何が好きだと嫌いだと表に示さないわね」

「その優しさが逆に困つた事になつてしまつたよね」

エステルは疲れた表情でため息をついた。

「あ、そうだ、うちの農園に来てヨシュア君が一番嬉しそうだつて見えた瞬間はね」

「うんうん」

目を輝かせてエステルはティオの言葉の続きを待つた。

「妹のチャエルと弟のウィルと遊んでいる時かな、いつも固いヨシュア君の雰囲気がその時はとっても柔らかくなるの」

「うーん、それじゃあチャエルとウィルをプレゼントしてあげようか

「バカねエステル、そんなことできるわけないでしょ」

ここでもヨシュアへのプレゼントを思いつかなかつたエステルはティオにお礼を言つてパー・ゼル農園を立ち去り、ロレントの街でもた考へる事にした。

帰り道のミルヒ街道を歩きながら、エステルはジョニース王立学園でヨシュアの親友になつたハンスの言葉を思い返した。

「ヨシュア、もう幸せを取り戻せないなんて事は無いわ、太陽はまぶしいだけのものじゃない」

エステルはそうつぶやくと、何かを思いついたのか遊撃士協会の建物へと駆け込んで行つた。

「あらエステル、ヨシュア君に渡す誕生日プレゼントの内容は決まつたの？」

息を弾ませて遊撃士協会の建物の中に入つて来たエステルに、受付に居たアイナが声を掛けた。

「シエラ姉、居る？」
「ええ、依頼をこなして2階で休んでいると思つけど……もしかして、ヨシュア君に渡すプレゼントが決まつたの？」

「うん、それでシエラ姉の助けを借りようと思つて……」

「ふふ、頑張つてね」

エステルはアイナに見送られて2階へと行き、シエラザードに思いついた内容を話した。

ブライト家で1人休憩を取つていたヨシュアは、自分の部屋で読書をしていた。

遊撃士の旅をしながら本を読む事はできるが、自分の部屋から旅先に持つて行ける本には限りがあった。

「もう、こんな時間になつてしまつていたんだ……」

ヨシュアは窓の外を見て、部屋にあつた何冊もの蔵書を夢中になつて読んでいるうちにすっかり日が傾いてしまつてゐる事に気がついた。

「エステルが居ないとこんなに静かだなんて」

そう口に出してから、ヨシュアはクスリと笑つた。
朝から街に買い物に行くと出て行つたエステルは、この時間になつても帰つて来ない。

「またエステルつてば、お腹を空かせて戻つてくるんだろうな」

ヨシュアは自分の部屋を出て、夕食を作り始める事にした。
毎年ヨシュアへのプレゼントを探すのに夢中になつたエステルは、昼ご飯を食べるのを忘れて辺りを駆け回つて帰つて来る。
そしてヨシュアにプレゼントを渡した後盛大にお腹の虫をなうすのだった。

「あれ……？」

1階に降りたヨシュアは外からハーモニカの音色が聞こえてくる事に気がついた。

その調べはヨシュアが良く知っている『星の在り処』だった。ここまで上手くハーモニカで吹ける人物の心当たりは一人しか存在しない。

ヨシュアは玄関の扉を開けて、庭に居ると思われる音の主を探す。すると、庭の大きな樹の下で黒い長い髪、白いドレスを着た女性がハーモニカを吹いている姿が目にに入った。

「カリント姉さん……？」

驚いた顔でヨシュアがゆっくりと近づいて行くと、長い黒髪の女性は無言で微笑んだ。

「幻じゃないよね？」

ヨシュアが問い合わせると、長い黒髪の女性は首を横に振つてヨシュアに向かつて両手を広げた。

「姉さん、姉さん……！」

胸元で泣きじゃくるヨシュアを、長い黒髪の女性はゆっくりと抱きしめた。

「ありがとう、エステル。今までの中でも最高の誕生日プレゼントだつたよ」

エステルの胸の中で泣いていたヨシュアは、顔をあげると笑顔でエステルに微笑みかけた。

「……あ、やっぱりわかつっちゃった？」

「うん、最初からエステルだつて分かってた。でも、君が髪を黒く染めてまで姉さんの真似をしようとしているのを見て驚いたよ」

「そつか、すっかりお見通しだったのね」

「だけど、エステルがそこまでしてくれた好意に、僕も甘えようかと思つて」

エステルはヨシュアに向かつてスッと手を伸ばす。

「ヨシュア、亡くなつてしまつたお姉さんとレオンハルトさんは戻つて来ないけど、あたし達はまた新しい家族を作る事が出来るはずよ」

「えつと、それはどういづ意味だい？」

エステルの言葉を聞いて、ヨシュアは顔を赤らめる。

「だから、あたしもヨシュアの旅について行く！ そしてレンをあたし達の新しい家族にしてあげるのよ」

「そういづことか……」

ヨシュアはホッとしたように息を吐き出した。

そして、ヨシュアは差し出されたエステルの手をグッと握った。

「僕がエステルを置いて行くはず無いだろう? エステルは僕の家族なんだから」

その時エステルのお腹の虫が盛大な音を立てた。

「さあ、まず腹ごしらえをしないとね」

ヨシュアはエステルの手を引いてブライト家中へと入って行つた。

あたしはサンタクロースっていうのは、居るとは断言できないけど、完璧に居ないと証明されたわけでもないと思うのよね。

そりやあ、枕元にプレゼントを夜こつそり置いて行つたのは父親だつて言うのは小さい頃から解つていたわ。

でも、それは親達がサンタの真似事をしているだけかもしれないじゃない？

同じように宇宙人、未来人、異世界人だつて居ないと科学的に証明されたわけじゃない。

探査ロケットに地球外生命体の可能性を感じさせる細胞が付着していたつて言うじゃない。

未来人だつて、正しい歴史を調べるために潜んでいるかもしぬないし、異世界人だつてあたし達の世界に溶け込んでこちらの住人になつて居るかもしぬない。

だから、もしかして居るかもしぬないつて思った方が面白いじゃない！

今日は12月18日、クリスマスが近いこの日に大事件が起つたの。

あたし達はクリスマスパーティーに必要な物を街で買いそろえるために部室を出たんだけど……。

部活棟の階段を降りている時に、キヨンが後ろから転げ落ちて来たのよ！

目を丸くしながら叫び声を上げたキヨンの体が宙に舞つて振り返つたあたしの目の前を横に通り過ぎて、後頭部から床へと落ちて行くのが見えた。

キヨンが床に叩きつけられる大きな音がしてみくるちゃんが悲鳴をあげた。

でも、あたしは倒れたキヨンの事よりも、振り返った瞬間に見えたキヨンを突き落とした人影を見てショックを受けた。

なんで、あんたがそこに居るの…？

北高の制服をひるがえしてその人影は逃げて行く。

「……救急車」

有希が119番に電話を掛ける姿を見て、あたしはやつとキヨンの身に何が起きたのか知つて、体中から血の気が引くのを感じた。

「キヨンくん、キヨンくーん…」

みくるちゃんはぐつたりとして動かなくなつたキヨンの名前を呼んでオロオロしている。

「みくるちゃん、有希の電話の声が相手に聞こえないから静かにしてよ！」

あたしはついてみくるちゃんを怒鳴りつけてしまつた。

みくるちゃんがビクツと体を震わせて黙り込む。

きつこい言い方になつてしまつたけど、あたしもキヨンの事がそれだけ心配だったのよ。

キヨンはぐつたりと倒れ込んで氣を失つていて動かない。

もし一度と目を開かない、なんて事になつたら？

こらあたし、いつたい何を演技でも無い事を想像しているのよ！

でも、あたしの胸の動悸は治まらなかつた。

学校に救急車が到着して、校庭の中に救急車が入つて来る。

ほとんど残つて居なかつた北高のみんなも何事かと辺りが騒がしく

なるのがわかつた。

古泉君が慌ただしく部活棟の外へ出て行く。

みくるちゃんはぼう然自失して崩れ落ちてしまつてゐるわ。
あたしも、有希から見たらみくるちゃんと同じ状態なのかもしけない。

頭がぼーっとして何も考えられなかつたから。

「 ひちりです」

救急隊員の人達が古泉君に案内されてやつて來た。

そして協力してキヨンを担架に乗せる。

その間もキヨンはぐつたりとしていて一度も目を開かない。
悲しくなつて、あたしの目に涙が浮かんだ。

「涼富さん、ご家族への連絡は僕がしておきます。あなたは彼に着いて居て下さい」

あたしは無言で古泉君の言葉につなづく。

視界がぼやけて古泉君の表情がよく見えない。

こんな状態で歩いてあたしまで怪我をしてしまつたらどうしようもない。

泣いているのがみんなに分かつてしまつけど、あたしは腕で涙をぬぐつた。

運ばれるキヨンを急いで追いかけたあたしは、救急隊員の人と一緒に救急車に乗せてもらひように頼んだ。

「君、この子の彼女かい？」

おじさんの救急隊員の人には聞かれて、あたしは首を縦に振つてしまつた。

いつものあたしならきつぱり否定するところだけど、この時ばかりはキヨンが心配だったから、そんなの問題にしていられなかつたわ。あたしの真剣さが伝わつたのか、あたしは救急車に乗る事を許された。

古泉君と話していた救急隊員の人、が運転席に乗り込んで、あたしとキヨンを乗せた救急車はサイレンを鳴らして走りだした。いつかは乗つてみたいと冗談交じりで話していた救急車にまさかこんな形で乗る事になるなんて、本当に最悪だわ。

救急車の中で、あたしはキヨンが落ちた時の状況を聞かれたけど、一瞬の事だつたから後頭部を打つたとだけしか言えなかつた。

病院に運ばれたキヨンはすぐにCT検査を受ける事になつた。

あたしが廊下の椅子に座つて検査の結果を待つていると、タクシーで追いかけて来た古泉君と有希とみくるちゃんがやつて來た。

キヨンの家族も古泉君の連絡を受けてすぐに駆けつけて來るみたい。初めてキヨンのおじさんとおばさんと顔を合わせる事になつたんだけど、2人ともあたし達の自己紹介などほとんど耳に入つていない感じだつた。

あたしはキヨンは大丈夫つて救急車の中で励まされたから少し冷静になれたけど、よく聞かされていないおじさん達が心配するのも当然なのかもしねり。

妹ちゃんもみくるちゃんと同じぐらい泣きわめいてしまつて大変だつたわ。

病院の中だから静かにしようと聞かせるはずのみくるちゃんが泣いているんだもの。

キヨンに外傷が無く、脳内出血なども見られないって聞いてあたしは一安心した。

でも、キヨンの意識が戻らない原因は先生にも分からないつて。もしかしたら、長い間目が覚めないかもしねりて医師の先生が言うと、泣きつかれていた妹ちゃんとみくるちゃんがまた泣き出しだ。

だから、あたしは2人を安心させるために空気を出していくつもりだった。

「あたしがキヨンの目が覚めるまでつきっきりで看病してあげるからー。」

学校もほつりだして、ずっとキヨンの病室に泊まり込むなんて、あたしのわがままだった。

でも、キヨンのおじさんとおばさんはあたしにキヨンの事を任せてくれたし、古泉君は寝袋とか食事とか持ってきてくれて、便宜を図つてくれた。

学校が終わってから古泉君、有希、みくるちゃんが交代であたしとキヨンの居る病室に来てくれる事になったみたい。

あたしは悪質な風邪をひいたって事で学校を休ませてもらっている。でも、このままキヨンが何週間、何ヶ月も目が覚めなかつたらあたしもずっと病院に居るわけにはいかなくなる。ううん、そんなダラダラと病院のベッドで寝ているなんて許さないんだからー！

「団長命令よ、いい加減に起きなさいよー。」

何度もこのセリフを繰り返しだらうか。

ついにキヨンが意識を失つてから2日目の夜を迎ってしまった。

昨日に引き続いて、この病室に泊まり込んでから不思議な夢を見るよになつた。

その夢の中でのあたしは光陽園学院の制服を着て古泉君と一緒にラスで学校に通つている。

おかしい、光陽園学院は女子高のはずなのに。でも、違和感を感じたのはそこに居たあたしの表情だつた。あたしからみたあたしは苛立つてゐる、退屈そうな顔をしていた。

SOS団なんてまったく知らない、あの樂しい日々とはまるで別な生活を送っているあたし。

そんなあたしとキヨンが夢の世界でまた会う事になる。

キヨンはあたしにジョン・スミスと名乗ったのだ。

「はい、まさか……そんなわけ無いわよね」

夢の内容に驚いて、あたしは目を覚ましてしまった。カーテン越しの月明かりに照らされたキヨンの寝顔を見て、あたしは自分に言い聞かせる。

高校に入学して前の席に座っていた男子が偶然ジョン・スミスだなんて言う夢物語なんてありえない、と。きっと他人の空似よ。

次の日にやつて来たみくるちゃんに、運命の再会つてあり得る？ って聞いたら、みくるちゃんは目を輝かせて、もしそんなことがあつたらロマンチックだつて言つていたわ。

そうよ、そんな偶然……無いとは言えないけど……まさか、そんな展開をあたしが望んでいるから、そんな夢を見つけつけて言つの？ それこそあり得ないわよ。

キヨンが気を失つてからついに3日目。

なぜか今日中にキヨンの目が覚めないと、ずっとキヨンは眠つたままになつてしまふかもしけないって胸騒ぎがしたわ。

あたしは有希が持つてきた童話の本へ目を向けた。

その童話は呪いで眠られたお姫様が、王子様のキスで目覚めてハッピーエンドで終わると言う結末の内容だった。

無口な有希の事だから、本の内容がそのままあたしへのメッセージになつているのだろう。

だけど、あたしは寝ているキヨンにキスをするといつ事は絶対にしたくなかった。

だって、それってフヨアじゃないし……って何を考えているのよあ

たし！？

みくるちゃんが帰った後、無情にも田は暮れて行く。

何度も田のため息だろう、あたしは数える氣力が無くなつた。

七夕の時期の思い出し憂鬱より重症ね。

そして、その日もあたしは寝袋に潜り込んで泊まる事にした。

昨日の夢の続きなのか、光陽園学院の制服を着たあたしとキヨンが古泉君と一緒に3人でいつもあたし達が集まっている喫茶店で話している。

キヨンは以前にあたしにもした有希が宇宙人、みくるちゃんが未来人、古泉君が超能力者と言つ話をしていた。

「「Jつちの世界のハルヒは理解が早いな。前に話した時はまるで信用されなかつたんだぜ？」

「そのあたしは本当にバカね」

同じあたしなのにバカにされると腹が立つて來た。

でもそのあたしは驚く事にだんだんと嬉しそうに田を輝かせて行つた。

そして、向こうの世界のあたしもSOS団を創ると宣言を宣言をしたの！

即断即決、やると決めたあたしはすぐに北高に直行、書道部に居たみくるちゃんをさらつて有希の居る文芸部の部室へと足を踏み入れた。

そして、部室にはあたし達SOS団の5人がそろつた。

このままじゃキヨンがあつちのあたしに取られてしまつ。

こつちのあたしは用が無くなつてしまつ、そんな気持ちに捕らわれた。

胸が痛くなつて、その後文芸部の部室であたしや古泉君、有希やみくるちゃん、キヨンがどんな会話をしていたかなんて耳に入らなかつた。

でも、最後にキヨンが言った言葉だけが耳に残った。

「俺は今まで過ごして來たSOS団が氣に入っているんだ、だから新たなSOS団に入るつもりはないのさ」

眼鏡を掛けた有希がキヨンの言葉を聞いて、悲しそうな笑顔を浮かべたように見えた。

でも、あたしは有希への同情より、心の底から暖かくなるような嬉しさで胸がいっぱいだった。

やっぱり、キヨンはあたし達と過ごしたSOS団の方が楽しこと思つてくれたのね。

あたしは幸福感に包まれたまま、このままずっと眠つていていたいと思つた。

だけど、誰かにほっぺを思いつきつねられた。

この痛みは夢じゃない、現実だ。

「わあっ！？」

目を開けたら、あたしのほっぺを触つてするのがキヨンだと知つてあたしは驚いてしまつた。

あたしは首を激しく振り動かして眠つていた頭を強引に目覚めさせた。

「キヨン、起きるなり起きるといいなによ、あたしにも準備があるんだからね！」

あたしは無防備な寝顔をキヨンに見られた氣恥かしさからキヨンに大声で言つてしまつた。

すると、キヨンは口元に人差し指を立てて、『静かに』のジェスチャーをした。

「心配を掛けて、すまなかつたな」

「ふん、団長が団員の心配をするのは当たり前なのよ」

病院の消灯時間をとつぐに過ぎていた事もあって、あたしとキヨンの顔を照らすのは月明かりだけだった。

普通の大きさの声で話す事も出来なくて、あたし達は抑えた声でひそひそと話す事しかできなかつた。

その声があたしの眠りを誘つたのだろう、あたしはいつの間にかキヨンのベッドに突つ伏して眠つてしまつたらしく。

あの不思議な夢は見なくなつた。

次にあたしが目を覚ました時には、キヨンの病室には古泉君、有希、みくるちゃんもやつて来ていた。

「おや、お目覚めですか」

目を覚ましたあたしに声を掛けたのは、いつもと変わらない笑顔を浮かべた古泉君。

持つて来たお見舞いの花束を花瓶に活けているみくるちゃん。

冬の制服を着てキヨンのベッドの側に立つている有希。

やつと元のSOS団が戻つて来たのだと実感した。

あたしが寝ている側で、キヨンが目を覚ましたと病室には医師や看護師が駆けつけて来てとんでもない騒ぎになつっていたみたい。

そんな中グース力寝ていたあたしの姿を思い浮かべるととんでもなく間抜けな気がする。

「キヨン、この数日のSOS団無断欠勤の罪は重いわ、罰ゲームとしてクリスマスはトナカイの衣装を着て一発芸をする事！ もちろん子供会でもね！」

他のみんなが居る手前、あたしはキヨンにやう言こ残して古泉君達と一緒にキヨンの病室を出た。

病院の廊下であたし達はキヨンのおばさんと妹ちゃんにすれ違った。軽くあこせつを交わすだけにする。

だつて、2人は早くキヨンの無事な姿をみたいはずだもの、引き止めるわけには行かないわ。

「さて、退院祝いはどうしまじょうか」

帰りのタクシーの中で古泉君がそつと、あたしの中でバツと面白いアイディアが浮かんだ。

「ねえ、今度のクリスマスパーティーの事だけ……」

あたしのサプライズプレゼントに古泉君やみくわのりやん、有希も贊成してくれたわ。

自分で鍋料理を作るなんて初めてだから上手く行くかどうか分からぬけど、きっとおいしいものを作つて見せるんだから！

あたし特製の鍋を食べて驚くがいいわ、キヨン！

さつそく一回目の練習をするために、家に帰る予定だつたあたし達は街でタクシーを降りる事にした。

キヨンのお見舞いで疲れているかもしれないのにじめんね、と謝つておく。

料理する場所は一人暮らしだと言つ有希の部屋を使わせてもらひつ事にした。

調理器具がそろつてゐるのに、使わないなんてもつたいたいなさすぎるわよ、有希。

有希に料理の仕方を教えながら、あたしはふと思い浮かんだ疑問を有希にぶつける。

「有希、あんた双子だつたりしないわよね？」

有希は首を無言で横に振った。

じゃあ、キヨンを階段の上から突き落とした人影は……。

それこそ、他人の空似の幻覚よね。

あたしはそう結論付ける事にした。

キヨンが突然目を覚ました事も、脳に後遺症が残つていかない事も、医学的にはとても信じられない事だと聞いた。

きっとこの奇跡はサンタクロースがプレゼントをくれたのよ。さすが、本物のサンタは親達よりも数百倍気前がいいわね！

今年は楽しいクリスマスを迎えられそうだ。

あたしはサンタクロースに心から感謝した。

惣流アスカと碇シンジは幼稚園の頃からの幼なじみ。

第三新東京市のコンフォート17に住んでいたシンジの家族の隣に、ドイツからアスカの家族が越して來たのだ。

最初アスカはドイツ語しか話せなかつたので、周囲から孤立していた。

そんなアスカに初めての友達になつてあげたのがシンジだった。ゲンドウは学生時代ドイツに留学していた経験があつたので、ドイツ語は上手かつた。

しかし、ゲンドウは自分がアスカの理解者になるより、息子にその役目をさせる事を考えたのだ。

ユイも隣家の少女が孤立してしまつて、心を痛めてシンジがアスカと仲良くなるように後押しをした。

アスカはシンジと友達になれた事で、シンジの妹のレイ、友達であるトウジ、ケンスケ、ヒカリとも仲良くなれた。

そして、日本語も上手に話せるようになつてクラスメイト達とも「ミニニケーションがとれるようになつても、アスカの親友はシンジである事に変わりは無かつた。

「アスカ、女の子にクリスマスプレゼントを贈りたいんだけど相談に乗つてくれないかな?」

小学生になつて初めてのクリスマス、シンジから話を持ちかけられた時はアスカは嬉しさで心の中で飛び上がりそうな気持ちになつた。それを必死に押し隠して、シンジに答える。

「まあまあシンジじゃ変なものを選んでしまってどうだしね。アタシが見てあげるわよ」

「よかつた、アスカが選んでくれるなら安心だよ。」

シンジは笑顔になつてアスカに感謝の言葉を述べた。

「そりゃあ、アタシが貰つものだし当然よ」

「アスカ、何か言った？」

「ううん、何にも！」

アスカのつぶやきはシンジの耳に届かなかつたようだが、シンジに尋ねられたアスカは首を横に振つた。

シンジとアスカはそのまま放課後、商店街の洋品店へと足を運んだ。

「ねえ、手袋なんて良いんじゃない？」

アスカは赤い小さな手袋を指差して、シンジに勧めた。

「プレゼントしたら、喜んでくれるかな？」

「これから寒い季節だし、ピッタリよ！」

「うん、お母さんからお金をもらつて今度買いに来るよ、ありがとうアスカ」

自信たつぱりのアスカの言い分に納得したのか、シンジは赤い手袋を買う事を即座に決断した。

そして、クリスマスイブの日。

シンジとアスカはシンジの部屋でお互いのプレゼントを交換する事になつた。

「はい、いつもみんなに配つているプレゼントだからシンジにもあげるわ」

アスカはそう言ってクッキーの入った袋を渡した。

「うわあ、アスカのお母さんが焼いてくれるクッキーっておいしいんだよね」

アスカの家族はドイツに住んでいたので、そのクッキーはレーブクーヘンと呼ばれる特別なものだった。

レーブクーヘンとはクリスマスの飾り付けに使われる、はちみつがたっぷり、スペイスの香りがたっぷりと効いた焼き菓子だった。

「」、今年のレーブクーヘンは特別製だからいつもと違った味がするかもね」「そうなの？」

アスカは少し顔を赤らめながらシンジにそう言った。
急にシンジにプレゼントをもらう事になつたアスカだったが、どんなプレゼントを用意すればいいか思いつかず、自分の手でレーブクーヘンを焼く事で気持ちを込める事にしたのだ。

「ねえ、食べてみてよ」「今すぐ？」

早くシンジに気が付いて欲しいアスカは、レーブクーヘンを食べるようになに急かした。

シンジはレーブクーヘンを口の中に入れでじっくりと味わう。

「うーん、いつもと変わらないおいしいレーブクーヘンだと感づけど?」

「や、そう?」

シンジの味覚が鈍いのか、アスカの料理の腕がキヨウコに肉薄しているのか。

感想を聞いてアスカはガックリと肩を落とした。

「僕もプレゼントをもらつてばかりで悪いから、今年はお返しをしようと思つて」

シンジの言葉を聞いたアスカは氣分を直して顔をあげた。アスカがシンジからプレゼントの箱を受け取つて開けると、その中にはアスカが選んだ赤い手袋が入つてゐる。

「ありがとうシンジ」

アスカは笑顔になつてシンジにお礼を言つて、赤い手袋を胸に抱え、シンジの部屋を出てリビングに向かつた。レイやユイにシンジからもらつたプレゼントを見せるためだ。しかし、碇家のリビングに着いたアスカはレイが真つ赤な手袋をしているのに気が付き青い顔になつた。

「レイ、その手袋は？」

「お兄ちゃんからのクリスマスプレゼント、アスカお姉ちゃんも、もらつたの？」

無邪気な笑顔で答えるレイ。

アスカは後ろから追いかけて来たシンジの方を振り向くと、顔を真つ赤にして怒り出す。

「ぬか喜びさせないでよ、このバカシンジ！」

アスカはシンジに赤い手袋を投げつけると、泣きながらシンジの家

を出て行つてしまつた。

「ど、どうしたの？」

突然キレたアスカにシンジは訳が分からず困惑ばかり。

「シンジ、今すぐこれを持つてアスカちゃんを追いかけなさい。」

「どうして？」

「女の子を泣かせたのよ、早く！」

「う、うん……。」

ユイに言われたシンジは、手のひらでユイからのプレゼントを受け取ると急いで家を出て隣のアスカの家へと向かつた。

「ユイ、レイ、シンジ、帰つたぞ」

「お帰りなさいませお父様」

その日の晩、家に帰つたゲンドウは玄関で正座して出迎えたアスカを見て目を丸くした。

「ど、どういう事だ？」

「だつて、アタシとシンジは婚約したんですね」

アスカの言葉を聞いたゲンドウは吹き出して膝を折つて倒れ込んだ。嬉しそうな笑顔を浮かべるアスカの左手の薬指には指輪がつけられていた。

しかし、サイズは少し大きめだったようだ。

「……これはユイが付けていた指輪か？」

「そうよ、もちろん左手の薬指の指輪はあげてはいませんけどね。」

右手の方をアスカちゃんに」

ゲンドウの言葉に、遅れて玄関に顔を出したコイが笑顔で答えた。

「だつてアスカちゃんって可愛いんだもの、是非レイのお姉さんに
してあげたいわ」

ユイは後ろから引っ張つて来たレイの頭とアスカの頭を抱きしめた。
そして3学期の始業式の日、アスカは朝のホームルームで教壇に立
つた担任のミサトを押し退けて、シンジとの婚約発表をするのだつ
た。

クラスメイトのおめでとうの言葉に囲まれたシンジは、アスカと共に照れ臭い顔でありがとうと答えるのだった。

アタシは第三新東京市第壹中学校、2年A組、惣流アスカ。

日本人の血とドイツ人の血が混じつたクオーターなの。

それだけあって、アタシは宝石のような青い瞳、紅茶色の髪、ママ譲りの美貌を持つた、プロポーションも完璧な容姿端麗を絵に描いた存在つてわけ。

さらに、成績優秀、スポーツ万能、クラスメイトと教師からも受けがいい、そして学級委員で生徒会役員！

これだけ条件がそろえばクラスメイト全員、いえ、学校中の生徒達の尊敬と注目の的のはずだつたんだけど……。

アタシはクラスメイト全員の注目を浴び続けるわけにはいかなかつた。

同じクラスに憎いアタシのライバルが居るからだ。

そいつの名は碇シンジ！

幼稚園の頃に知り合つた、腐れ縁とも言つべき存在。

全くあんなグズでドジでのりまで言えないヤツのどこがいいのかしら？

ルックスも平々凡々、背も他の男子に比べて低いし、成績も運動神経も平均以下。

おまけにそんなに話上手つてわけじゃないのに、アイツの側には男女を問わず人が集まる。

シンジが授業で解らなかつた所があると言つと、周りの子が親切に教えた。

「ありがと」

「あ、でも惣流さんに教えてもらつた方が良いんじゃないの？」

シンジと曰があつたアタシは微笑んだけど、心の中では怒つていた。

「ううん、惣流さんは忙しそうだから」

「やうよな、いろいろな委員会に引っ張りだこだもんね」

シンジはそうしたアタシの心中を心得ているのか、遠回しにその提案を断つていた。

そう、シンジは学校の外でのアタシの姿を知っているのだ。

学校では爽やかな優等生を演じているアタシ。

趣味もクラシック音楽鑑賞、部活もクラシックバレーとお嬢様そのもので通している。

「アスカ、この前貸していたアニソンのアルバムは持ってきてないよね、ケンスケが借りたいって言うんだ」

「バカつ、アタシが学校にそんな物を持つてくるはず無いでしきう？」

「や、そうだよね、ごめん」

人気のない廊下で声をかけて来たシンジをアタシは追い散らした。アタシの本当の姿をばらしてしまわないようにアタシはシンジに口づるむく念を押していた。

学校ではアタシはシンジとの接触を極端に避けている。

いつアタシの地の性格が飛び出してしまつか分からぬからだ。

クラスの生徒達はアタシの仮面にすっかりだまされて勉強を教えてくれなどとアタシの側にやつて来る。

アタシはそんな子達に喜んで勉強を教えたし、感謝されるのも快感だつた。

しかし、クラスの人気を独り占めするという事はシンジが居る限り出来なかつた。

さらに、学校のたいていの男子達はアタシにラブレターを送つたり、告白をしてきたりしてくるけど、シンジはそういうそぶりを見せな

いのが気に入らない。

シンジが自分から声を掛ける女子と言えばいつも教室の片隅の自分の席で本を読んでいる綾波つて子だ。

出席番号が1番だけって以外、何の特徴も無さそくな地味な女の子。まあシンジにはアタシみたいな輝きすぎている存在はまぶしきるから、同じような地味な存在に親近感を覚えるんでしょうね。アタシはそう強がってはみたけれど、シンジが告白をして来ないのは気に入らなかつた。

でも、中学校に入つてから積み上げて来た優等生と言つブランドが崩れ落ちる日は意外にも早くやつて來た。

ある冬の日曜日、アタシはビビりにもんぺと言つ田舎のおばあちゃんのような服装でこたつでテレビを見ながらダラダラと過ごしていた。

朝からパパとママも出かけてしまつてゐるから、髪型もくしをいれて下ろすだけにしていた。

インターフォンが鳴らされたので、出て見るとシンジだつた。用件を聞くと、この前貸したアルバムを返してもらつて來たと言つ。アタシはコタツに戻つてシンジに言つ放つ。

「面倒くさいから、アタシの部屋から適当に持つて行つてよ」

「アスカ、日曜だからってだらけすぎじゃないの？」

「別にいいの、学校では完璧な優等生を演じてゐるんだから疲れちゃうのよ、休息も必要なわけ」

「そんなくだらない事やつてるから疲れるんだよ」

「何よ、アンタは人に褒められたり、感謝されたり、尊敬されたりして嬉しいわけ？」

「嫌じやないけど」

「じゃあ、アタシの事は放つて置いて…」

イラだつたアタシはそこでシンジとの会話を打ち切つた。
シンジはアタシの部屋で少しの間アルバムを探して、外へと出て行つた。

「ふん、こちこかうむせこんだか」

アタシはやうむらしながら戸棚からせんべいを取り出してかじり始めた。

しかし、数分も経たないうちにまたインター フォンが鳴らされた。

「どうせまたシンジでしょ、まったく腹が立つ…」

シンジは別れた後も、すぐに用事を思い出して引き返して来るような事が何度もあった。

それがアタシの油断を誘つたのだ。

アタシは相手を確認しないでドアを開けてしまった。

「バカシンジ、寒いんだから用事は一回で済ませなさいよ、」のア

ホンダラ…」

「惣流さん…？」

「洞木さん？」

アタシは玄関先に立つていたクラスメイトの女の子を見て、持つていたせんべいを地面に落としてしまつた。

洞木さんはお下げ髪の真面目っぽい子としか印象に残つていない。休日にはたしの家を訪ねてくるなんて、ありえないはずだ。

「これを惣流さんの家に届けてくるよつて頼まれて……」

洞木さんは顔を赤くしながら、アタシに小さな包みを手渡した。
「どうやら、PARTAでママが洞木さんの親御さんと知り合つて、約束
をしたようだ。

「え、えっと、これはね……」
「じゃ、じゃあ惣流さん、わよひなうらー」

アタシが言い訳をしようとする前に洞木さんは走り去ってしまった。
洞木さんにじてらもんペ姿を見られてしまった。
ぼさぼさの髪の毛とせんべいまで……。

しかも、シンジに対する下品な言葉遣いまで聞かれてしまった。
洞木さんはみんなに私の事を話してしまつかもしれない。
真面目そうな子だけ、無いとは言い切れないし……。

「身の破滅よ！ もうお終いだわ！」

アタシは頭の中が真っ白になつた気分になつて頭を抱えてそう叫んでしまつた。

「アスカ、一体どうしたのさ？」

アタシのそんな姿を見たのか、アタシの大声が聞こえてしまつたのか、隣の家からシンジが出てきてしまつた。

「アタシの『じてら姿を洞木さんに見られてしまったのよ、とん
だイメージダウンよ！』

「そんな事言つたつて、その姿で玄関に出来やつたアスカが悪いん
じゃないか」

「明日、学校ではきっとクラス中からの笑い者よ、もう一度と学校

に行けないわ

「そんな事でアスカを嫌いになる人達となんて、付き合ひ必要無い
じゃないか！」

シンジに突然両肩をつかまれて、アタシはドキッとした。

「何よ、アンタにアタシの何が分かるって言つのよー」

「少なくとも、学校のみんなよりはずつと知つていろよ、アスカが
褒められたいからつて必死に努力している事も」

「そうよ、じゃあ分かるでしょつ、アタシの立場がまずくなつたつ
て」

「アスカはもう、アスカのお母さんに充分褒めてもうつていいじゃ
ないか、それ以上何を頑張る必要があるんだよ」

シンジに言わされてアタシの頭の中にママと会話を交わすアタシの声
が聞こえて来た。

そうだ、テストで満点を取つたのも、運動会で1位になつたのも、
全部ママに褒めてもらつて頭をなでてもうつためだつたんだ……。
それがいつの間にこんな見栄つ張りになつてしまつたの……。

「僕は嬉しそうにしているアスカの姿がずっと好きだつた」

「嘘つ、じゃあ何であの綾波つて子と仲良くしていたのよ」

「綾波さんはクラス図書の係だつたから話していただけだよ」

「そう言えば、あの子つて本が好きだつたから立候補したんだっけ」

アタシ達の学校では読書を推奨するためにクラスごとに本棚が置か
れていた事を思い出した。

「もしかして、妬いてくれた？ そうだつたら、嬉しいな

「な、何をうぬぼれているのよー」

ここに認めてしまつたら、シンジにアタシがほれてたつて事で主導権を握られちやうぢやないのー

「僕は、アス力に好きになつてもらえばそれで満足だから」

シンジの言葉を聞いて、アタシは胸を撃たれる思いがした。
だけど、この感覚は痛いものじゃない。
嬉しさで舞い上がってしまいそうな気持ちがした。

「アタシも……」

アタシは胸が締め付けられてこれだけ答えるので精一杯だった。
この時からシンジとアタシは彼氏と彼女になった。

「でも、やっぱりアタシは学校に行きたくない、洞木さんもきっとアタシを見て幻滅したと思うし」

絞り出すような洞木さんの声が聞こえて、アタシはビックリしてシンジから体を離して振り返ってしまった。

「洞木さん、どうしてここへ？」

「『』めんなさい、惣流さんの姿を見て驚いて立ち去ってしまった、悪い事をしたなって思つて戻つて来たの」

シンジが尋ねると、洞木さんは走つて来たのか息を切らしていた。

「私は、惣流さんの服装を見てガッカリしてないわ。逆に嬉しいと思うもの」

「どうして、アタシは洞木さんの前で醜態をさらしたのよ？」

「だって、惣流さんは外見も中身も完璧だったから、雲の上の存在のような気がして近寄りにくかったと言つか……あつ、『めんなさい、悪い意味じゃないのよ？』

「ううん、私も洞木さんの言いたい事が分かったから」

洞木さんがアタシの事を軽べつしていない事を知つて、アタシはホッとする同時に胸が暖かくなるのを感じた。

「アスカ、立ち話を続けても寒いから、洞木さんに中に入つてもらおうよ」

「えつ、でもお邪魔だらうし……」

「遠慮しないで、アタシ達は友達でしょ？」

「そうね」

洞木さんが笑顔でうなずいてくれてアタシはホッとした。

思えば、中学に入つてから本当の友達と呼べる存在は誰も居なかつた。

それはそうね、嘘の自分と本当の友達になつてくれる人なんていいもの。

それからアタシとシンジと洞木さんはコタツに入りながらいろいろな事を楽しくおしゃべりした。

洞木さんもこれからはヒカリって呼んで良いって言つてくれたしとても嬉しかった。

「でもバカシンジが何でクラスのみんなからあんなに好かれるかどうかが理解できないのよね。アタシみたいに才能あふれる人間ならともかく」

「アスカはひどい事言つなあ」

「碇君は自分をよく見せようと無理をしないで自然体でいるから、

みんなに好かれるのよ

「自分勝手つて事？」

アタシが尋ねると、ヒカリは首を振つてわらひて説明を重ねる。

「『明鏡止水』って言葉の語源を知つてゐる？ ありのままの自分で碇君と付き合う事が出来るから、『氣疲れしたりしないのよ』

「そつが、シンジもありのままのアタシを好きだつて書つてくれたし」

思わずセリフばやいてしまつたアタシは、あわてて口を手で押された。

しまつた、ヒカリの目の前だつた。

「アスカはその碇君の告白の言葉に心をすっかり奪われてしまつたつてわけね」

「お願いヒカリ、今のは聞かなかつた事にして誰にも言わないで…」

「どうしようかな、アスカつてからかうと可愛いし」

「あーん、ヒカリのいじわる！」

アタシは今まで自分を優等生と言つぱに無理やつはめようとなつてバカな事をしていたのだろう。

明日からは正直な自分をさらけだして行こうと思つ。

まずは、元気一杯に朝のあいさつをすることから始めよう。

クラスのみんなはそんなアタシの事をどう思つかしら？

仮面を被つていたズルイ女だつて軽べつするだらうか？

うん、絶対に居ないとは言い切れない。

でも、アタシは嫌われたり、傷つく事を恐れない。

だつて、アタシには支えてくれるシンジやヒカリが居るんだから。

「えっ、ギターが欲しい？」

葛城家の夕食の食卓で、シンジに話を切り出されたミサトは驚いてそう言った。

「アンタ女の子にモテたいからそんな事言いだしで、あーいやらしく」

アスカがからかうような表情でシンジを見つめる。

「そんなんじゃないよ、トウジ達とバンドを続けようって話になつたんだよ」

「チョロがあるじゃないの」

力説するシンジにアスカはそう返した。

「まあ、バンドをやるならギターがあつた方がいいわね」

ミサトは腕組みをしながらうなずいた。

「何でシンジがギターをやるのよ？ 文化祭ではキーボードを弾いていたじゃない」

「うん、綾波がキーボードをやつてくれる事になったから」

シンジのこの発言を聞いたアスカは田を三角にして怒り出した。

「勝手に向してんのよー。」

「だつて、ケンスケがアスカより綾波の方が反対もしないし、誘いやさいだらうつて」

「あちやあシンジ君、それは火に油よ」

鬼のように荒れ狂うアスカを見て、ミサトはため息をついた。

「シンジ君、バンドに使うギターは何万円もあるのよ」

「えつ、そりなんですか？」

「ミサト、バンドやつてた事あるの？」

「いやあ、ちよつち酔つた勢いで友達のギターをポツキリと折つちやつた事があつてね、弁償したのよ」

ミサトはバツが悪そつに頭をかいた。

「ほりみなさい、中学生程度の小遣いで買えると思つてゐるの？」

「トウジ達には悪いけど、バンドは諦めようかな……」

アスカが勝ち誇つたように腰に手を当てて言つて、シンジはうなだれた。

「シンジ君、氣を落とすのはまだ早いわ」

ミサトは笑顔でそう言つて、シンジの前に10万円の束を突き付けた。

「ミサトさん、このお金は？」

「シンジ君も頑張つてるからね、ボーナスよ」

「ちよつとミサト、シンジに甘すぎるんじゃないの？」

シンジに向かつてウインクしたミサトにアスカは怒鳴り散らした。

「余ったお金でアスカの服も買つていいから」

「本当!…?」

ミサトの言葉を聞いてアスカは目を輝かせた。

「…」これは『テート』じゃないんだから勘違いしないでよね…
「分かってるよ」

翌朝、アスカとシンジはそんな言い合ひをしながら葛城家の玄関を出て行つた。

「シンジ君もよつやく打ち込めるものが出来たのね、よかつたわ」

ミサトは微笑みを浮かべながらシンジ達を見送つた。

だが、戻つて来たシンジ達の姿はミサトの予想を裏切る物だつた。アスカの胸にはトイプードルが抱かれていたのだ。そして、シンジはケージ（檻）やトイレスリートなど犬用のグッズを汗を流しながら持つてゐる。

「アスカ、その犬はどうしたのよ!…?」
「ペットショップで見たら飼いたくなっちゃつた」

アスカは満面の笑みを浮かべてミサトにそう答えた。

「じゃあ、シンジ君のギターは?」
「買えませんでした……」

シンジは気弱そつた表情でアスカに微笑み返した。

「全く、家にはペンペンも居るのよ？」

「クニッ？」

大型冷蔵庫から出て来たペンペンとアスカの抱いていたトイプードルとの皿が合つた。

すると、トイプードルは顔を背けて吠え出した。

「うひひ、驚かすんじゃないわよ、この子が怯えているじゃないの！」

「クニヒヒーッ」

ペンペンは何もしていないのにアスカに怒られてしまつた。やるせない気持ちになつたペンペンは悲しそうな鳴き声を上げる。

「かわいそうにね、とんだ濡れ衣よね」

ミサトはうつむいてペンペンを胸に抱きあげた。

「で、この犬の名前は考えたの？」

「ブツツにしようと思つて」

「ドイツ語で小さな子つて意味ね

「シンプルな名前だね」

シンジはほめたつもりなのだが、アスカの逆鱗に触れてしまつたようだ。

「アタシが単細胞だつて言いたいのー。」

「呼びやすくて良い名前じゃない。アスカ、あんまり大きな声を出すとブツツが怖がつてしまふわ」

ミサトがそう声を掛けると、アスカは気がついたように表情を和らげる。

「大きな声で怒鳴つたりして『めんね、ブツツ』

アスカは猫なで声で子犬のブツツに声を掛ける。
シンジはそんなアスカの姿をじつと見つめていた。

「どうしたのシンちゃん、アスカの顔をじつと見つめちゃつて」

一ヤケ顔でミサトがそつと耳打ちする。

「あ、いや、アスカもあんな優しい表情ができるんだなって
「そんな事アスカに聞かれたら叩かれちゃうわよ」

シンジとミサトのヒソヒソ話はブツツに夢中になつてゐるアスカの耳には入つていないようだ。

「ほらシンジ、ぼーつとしていないでブツツのケージを準備してよ
「その優しさを少しでも僕に向けて欲しいよ、まったく」

シンジの皮肉もアスカに無視され、シンジはブツブツ言いながらケージを奥の和室へと運んだ。

リビングはケージを置くスペースがすでに無かつたし、ペンペンの冷蔵庫を移動させるわけにもいかないからだ。

トイプードルは座敷犬と言われるようになり、散歩の時以外はトイレも寝るのも屋内だつた。

その日のアスカは上機嫌で、ブツツの前である事もあり、激しく怒ると叫う事も無かつた。

そして夜になつて寝るときも、アスカはブツツを離さうとしない。そんなアスカに向かつてシンジが忠告をする。

「アスカ、犬は夜にはケージに戻さないといけないんだよ」

「何を言つているのよ、アタシはブツツを抱いて寝るんだから。トイプードルを飼つている人の中には抱いて寝ている人も居るじゃない」

「ダメだよ、子犬にはケージを家だと思いつ込ませるまで躱けないと」

「そうそう、ブツツのためよ」

シンジと//サトに説得されて、アスカはやつとブツツを離した。

「ブツツ、狭いけど我慢してね」

アスカはケージに入れられたブツツにそつ声を掛けた。

そして葛城家で最初の夜を迎えることになつたブツツは予想通り夜鳴きをした。

悲しげなブツツの鳴き声に耐え切れず、シンジは部屋を出てブツツの様子を見に行くことにした。

リビングに足を踏み入れた時、シンジはアスカが先にブツツの元にやつて来ている事に気がつき、そつと廊下の物陰に隠れた。

「ブツツ、1人で寂しいの？ そうよ、アタシと同じママともパパとも引き離されてしまったものね」

「アスカ……」

シンジはブツツに手を差し伸べるアスカを見てそりそりとやった。

「だから、アタシがブツツのママになつてあげる。寂しい思いは絶対にさせないから！」

アスカは我慢しきれなくなつてしまい、ケージを開けてブツツを抱き締めてしまつていた。

躊躇から言つとアスカの行動はいけない事なのだが、シンジはアスカに注意をせず、黙つて自分の部屋に戻つた。

次の日の朝、自分より早く起きているアスカにシンジは驚いた。アスカはシンジが起きたのも気が付かずに、熱心にブツツのトイレやケージの汚れなどを掃除している。

「アスカつてば自分の部屋は掃除しないのに、ブツツのためなら一生懸命なんだね」

シンジは皮肉めいた言い方でアスカの背中に声を掛けると、アスカは飛び上がつて驚いてシンジの方を振り向いた。

「まだ朝早いじゃない。アンタ、今日は早起きしたの？」

「そんなこと無いよ、僕はいつもこれぐらいの時間に起きているよ。洗濯物を干したり、お弁当を作つたりしなくちゃいけないし」

「……いつも悪いわね」

「えつ？」

アスカから聞こえた言葉に、シンジは耳を疑つて聞き返した。

「ありがとうひひひひひるの、何度も言わせないでよー。」

「う、うん」

シンジは少し顔を赤くしながら、キッチンに向かい、朝の準備に取り掛かるのだった。

そしてしばりくして起き出して来たミサトも、アスカが先に起きていることに驚いた。

毎朝シンジに起こされたるとき揉めていたのがつたのようだった。ブツツとずつと一緒に居たから学校を休むといふアスカのわがまみはミサトに却下された。

それどころかアスカがわがままを語りのならブツツを飼うのに反対すると家主のミサトに言われては、アスカは引き下がるしかなかつた。

「ペンペン、ブツツをこじめるわけないじゃなーいわよー。」

「クホン……」

アスカはペンペンに念を押してシンジと共に玄関を出て行った。

「ペンペンがブツツをこじめるわけないじゃなー」

「クホン」

ミサトはペンペンと見つめ合つて睨つぶやいた。

ブツツは昨日より葛城家の雰囲気に慣れたのか、ちょこまかと部屋の中を歩き回っていました。

そして、ペンペンに対しても怖がらなくなっていた。

「クホン？」

「キャンキャン」

「クヨーッ！」

ついにはブツツの方がペ็นペ็นを追い回し始めてしまった。

「こりら、ペ็นペ็นをいじめちやダメよ！ まつたく、この子は内弁慶になりそうね」

ミサトはペ็นペ็นを吠えて追いかかるブツツを見てため息をつくのだった。

「へえ、アスカってば犬を飼い始めたんだ」

「うん、トイプードルよ。ちっちゃいからブツツって名前を付けたんだけど、とってもかわいいの！」

学校に登校したアスカはさっそくヒカリに飼つた子犬の事を楽しそうに話し始めた。

「何やって、やつぱりバンドはやめるやー！」

同じ頃、教室にトウジの怒声が響き渡った。

「昨日、街で会つたときミサトさんにギターを買つためのお金を貰つたつて喜んでいたじゃないか」

「あの後ペットショップの前を通りかかつてアスカが犬を飼いたいって言つのを断つきれなくて」

ケンスケが尋ねると、シンジは困つた顔でそう謝つた。

「何や、惣流が悪いんか！」

トウジはさう言つとヒカリと楽しそうに話しているアスカのところへ向かい、アスカとの言い争いが始まった。

「碇、綾波もバンドがやれるつて楽しみにしていたんだぜ」

ケンスケに言われて、シンジはレイの席に視線を向けた。するとレイは怒りを感じさせる視線でシンジをにらみかえした。それはシンジが初めて田にするレイの表情だった。

「い、ごめん綾波」

「あなたはセカンドのわがままをきいてしまつのにね」

期待を裏切られたレイの怒りは冷ややかながら鋭いものだった。シンジはそれ以上レイに謝ることもできずに自分の席へと戻るのだった。

それに反してアスカは授業中も笑顔を絶やすことが無かつた。ブツツが自分に慣れて来たらヒカリやクラスの女子に紹介すると約束までしていた。

そして、アスカは同じように犬を飼つているクラスメイトとも急速に親しくなり、ヒカリがうらやましがるほどだった。

「わあシンジ、ブツツが待つていてるわ、早く帰るわよー。」

アスカに声を掛けられて帰らつとしたシンジを、トウジが引き止める。

「待てや、センセはワシらとゲーセンに行くんや」

「そうだ、新型のビートマニアが入ったからやりに行くのを忘れた

のか、碇？」

「ごめん、僕も早く帰つてブツツに会いたいから」

シンジは頭を下げて謝り、アスカの元へと駆けていく。

「こらつ、男の友情より犬つころをとるんか！」

「犬つころとは何よ、ブツツはとってもかわいいんだから！」

アスカはトウジに怒鳴り返して学校を走り去るのだった。
帰り道の通学路、シンジはアスカに腕を引かれて走つて行く。

「ほら、もつと早く走りなさいよ！」

「精一杯走つてるよ！」

周囲の注目もどこ吹く風、笑顔のアスカには家で待つているブツツの事しか頭に無いようだった。

アスカとシンジが葛城家に帰ると、ブツツはアスカに向かつて飛び付いて来た。

「ブツツ、アタシも寂しかったわ。おお、よしよし」

アスカはブツツを胸に抱き寄せてその頭をなでる。

シンジはブツツを抱きしめるアスカをうらやましそうに眺めている。
シンジもアスカに劣らずブツツの事が気になってしまったのだ。

「シンジもブツツを抱っこしたいの？」

「いや、別にそんな事は無いけど」

シンジは口では否定したが、アスカはからかうような顔でシンジを見つめる。

「仕方無いわね、ブツツが人見知りしたままじや困るし、他の人も慣れさせなきやいけないわ」

アスカはため息をつくと、シンジにブツツを近づける。シンジがブツツに震えながら手を伸ばすと、アスカがそれをとがめた。

「ダメよそんなおぼつかない様子じや、シンジが警戒している事がブツツにも伝わっちゃうでしょ？」「「「」」めん」

シンジは意を決してブツツをしっかりと抱きしめた。するとブツツの方も暴れる事無くシンジに抱かれている。

「うわあ、かわいいな
「当たり前よ」

歓声をあげながらシンジはブツツを抱き続けている。そんなブツツにしつとしたのか、ペンペンがシンジのふくらはぎを固いくちばしで突つつく。

「もひ、しょうがないな

シンジは抱き上げていたブツツを床に降ろしてペンペンの餌を用意する。ペンペンの餌に興味を持ったのか、ブツツが顔を近づける。

「ク、クエツ？」

「」ひりつ、ペんぺんは雑食で何でも食べるけど、ブツツが食べたらお腹を壊しちゃうんだからダメよ」

「すっかり自分がペんぺんより上だつて思い込んでじゃつてるね」

「シンジより上だつて思つてゐるかもしれないわよ」

「そりだつたらひどいな」

アスカとシンジは声をあげて笑つた。

シンジが夕食の準備をしてゐる間も、アスカはブツツと遊んでいた。

「早く慣れて、みんなと外で遊べるよ」になろうつね」

ブツツに躊躇を覚えさせようと、アスカは張り切つてゐるようだつた。シンジは苦笑しながらそんなアスカとブツツの様子を見ていたのだが、突然ブツツが床に倒れ込んだ。

「ブツツ、どうしたの？ しつかりして！」

アスカの悲鳴が上がり、シンジも驚いて駆け寄つた。

アスカの腕の中で、ブツツはグッタリとして何の反応も示さない。

「ただいま…… つてどうしたの2人とも？」

帰つて來たミサトがただならぬ雰囲気を感じ取り声を掛けた。

「ミサト、ブツツがさつきまで元気だつたのに……」「いきなり倒れてしまつたんです」

アスカもシンジも目に涙を浮かべてミサトに言つた。

特にアスカの方は号泣寸前だ。

事態の深刻さを悟ったミサトはネルフのリツコに電話を掛けた。

意識不明の重体となつたブツツはミサトの超スピードの運転によつてネルフに運ばれた。

「頑張つてブツツ……アタシはもう誰かに置いて行かれるのは嫌なの……！」

車の中でアスカは涙を流してブツツを抱きしめていた。
そしてネルフ本部の医療スタッフにより診察が行われた。

「リツコ……！」

医務室から出て来たリツコに、廊下で待つていたアスカ達が駆け寄る。

「リツコさん、ブツツが倒れたのは何かの病気が原因ですか？」
「そんな、予防接種も受けさせたのに！」

シンジとアスカの前でリツコは首を横に振つた。

「違うわ、あの子犬が倒れたのは体力の低下が原因よ。ゆっくり休ませればじきに良くなるわ」
「よかつた、病気じや無かつたのね」

リツコの言葉を聞いて、アスカは安心して大きく息を吐き出した。

「油断しちゃダメよ。子犬は休ませてあげないとね、遊び過ぎて死んでしまう事があるの」

「アタシのせいだ、ごめんね、ブツツ」

アスカはガラス越しにベッドに寝かされているブツツに声を掛けた。

「赤木博士、これは何の騒ぎだ」

「碇司令、実は……」

リツコが抱き込まれたブツツの事を話すと、ゲンドウは悲い顔をした。

「犬だと、くだらん。そんなものエヴァのパイロットには必要無い。手放せ」

「嫌だ」

シンジが答えると、ゲンドウはシンジをにらみつける。

「これは命令だ。その犬を手放せ」

「止めてよ父さん、アスカの、僕達の大切な家族を奪わないで！」

シンジがそう言つてゲンドウをにらみ返す。

そして、シンジは決してゲンドウから視線を反らさない。

「好きにしろ」

先に田を反らしたのはゲンドウの方だった。

そして、ゲンドウは面白くなさそうな顔で立ち去つて行つた。

「やるじゃないシンジ、司令に逆らうなんて。腰抜けとばかり思つ

ていたけど、今回はアンタを見直したわ

「モ、そつかな？」

アスカにほめられたシンジは照れ臭そうに頭をかく。
そして楽しそうに話しながらリリカトと3人でブツツの西の医務室の中へ入つて行く。

「あら、レイ？」

リツコも続いて医務室に入るうと思つた時、いつから見ていたのか、レイが廊下に立つてゐるのに気がついた。

「赤木博士。私もペットが……欲しいです」

「困つたわね、そつね、猫なら何とかなるかもしねないけど……」

レイの見つめる前で、リツコは祖母の住んでゐる家へと電話を掛けるのだった。

早朝の葛城家のキッチンで、シンジは自分とアスカとミサトの分のお弁当、そして朝食を作っている。

そこまでは普通の朝だった。

「うえええつ！？」

静かな葛城家にアスカの悲鳴が響き渡った。

「どうしたの、アスカ！？」

シンジがアスカの部屋に駆けつけると、そこには何とアスカが2人居た。

片方のアスカはシンジがいつも見慣れたタンクトップにショートパンツ姿のアスカ。

もう片方のアスカは、熊さんのキャラクターが入った子供っぽいパジャマを着たアスカだった。

「アンタ、何者よ？ どうして、アタシそつくりなのよ？」

「それはこっちこそ聞きたいわよ」

両方のアスカはお互い相手を怪しんでそんな事を言い合っていた。

「もしかして、新手の使徒！？」

タンクトップ姿のアスカがそう言つと、シンジの顔にも緊張が走つた。

「何よ使徒つて？」

そう言つて身を乗り出して来たパジャマ姿のアスカが身を乗り出すと、タンクトップ姿のアスカはパジャマ姿のアスカを突き飛ばす。

「離れなさいよ…」

「痛つ…」

突き飛ばされたパジャマ姿のアスカはしおりもちを着いて顔をゆがめた。

「大丈夫？」

その姿を見たシンジは警戒を一気に解いてアスカに駆け寄つて助け起こした。

「シンジ、そいつは使徒かもしけないのよ？ 早く離れなさい！」
「嫌だ、使徒だつたとしても、いきなり突き飛ばすなんてやりすぎだよ」

「シンジ……」

タンクトップ姿のアスカにシンジが言い返すと、パジャマ姿のアスカの表情が華やいだ。

「ひつ、じゃあミサトに言つてその使徒をきつちり殲滅してもらひから！」

タンクトップ姿のアスカはそう言つて部屋を飛び出して行つた。

シンジは追いかけて引き止めようとしたが、不安そうなパジャマ姿のアスカに腕を引かれて、その場に止まつた。

「シンジも、あたしの事は知らないの？」

「うん、残念だけど、さつき話していたアスカしか知らないんだよ」「そつか……目が覚めたら、あたしの部屋と違う場所に居るし、どうなつちゃうのかしり……」

パジャマ姿のアスカは自然にシンジに体を預けるような形で抱きついてしまっていた。

シンジはそんなアスカを振り払う事は出来なかつた。

「あーっ、何でシンジに抱きついているのよー。」

ミサトを連れて部屋に戻つて来たタンクトップ姿のアスカは怒つた顔で人差し指を突き付けた。

シンジはパジャマ姿のアスカをかばうような発言をする。

「アスカはいきなり知らない場所に来て心細いんだよ」

「ミサト、使徒は色仕掛けを使ってシンジを陥落させるつもつよ

「だから、使徒って何なのよ?」

言い争う2人のアスカを前にして、腕組みをしたミサトはため息を吐き出す。

「こうなつたら、ネルフ本部に来てもらつて使徒かどうか検査するのが一番ね」

ミサトの提案に従い、シンジ達は葛城家を出て行こうとしたが、玄関でパジャマ姿のアスカは大声を発する。

「ちょっと、パジャマで外に出て行けつて言つのー?」

「そうよ、着替えている暇なんて無いわ」

「……じゃあ、僕のジャンパーを羽織ると良いよ」

シンジは急いで自分の部屋に戻つてジャンパーを持つて来ると、アスカに渡した。

「ありがとうシンジ、優しいのね」

「そ、そんな事無いよ」

「ウオッホン！」

いい雰囲気になりかけた2人を邪魔するかのように、タンクトップ姿のアスカはわざとらしく咳払いをした。

ネルフ本部に向かう車の中はミサトが運転席、タンクトップ姿のアスカが助手席、後ろの席にシンジとパジャマ姿のアスカが並んで座つた。

運転しながらミサトはパジャマ姿のアスカに緊張をほぐすような感じでそれとなく質問をする。

「ねえ、アスカちゃんの着ているパジャマって可愛いわね

「これは、ママに買つてもらつたから仕方無く……」

「ママつて？」

「惣流キョウコ、ミサトも知らないの？」

パジャマ姿のアスカの言葉を聞いて、シンジとタンクトップ姿のアスカは息を飲んだ。

ミサトは心の中で思考を巡らせる。

(……もし使徒がアスカに擬態するとしたら、隣に居るアスカの真似をしようとするはずだわ。となると、後ろに居るアスカは別の可能性が……)

推論を確信に変えるために、ミサトはパジャマ姿のアスカにいろいろと質問を続ける。

「シンジ君の、ご両親について教えてくれるかしり?」

「コイおばさんとゲンジウおじさんの事?」

またもやシンジとタンクトップ姿のアスカは驚いた。
これにはミサトもショックを受けて動搖した。

「ゲンジウおじさんったら、この前なんか町内会を巻き込んで運動会なんか開催しちゃったが。コイおばさんをお姫様だっこじたら腰を悪くしちゃったのよ」

「アスカ、その辺で良いから止めて!」

楽しそうに話しあったパジャマ姿のアスカをミサトは慌てて制止した。

いくらなんでも受けた衝撃が大きすぎる。

タンクトップ姿のアスカもシンジも冷汗を流して黙つて座りこんでいた。

ネルフ本部に到着すると、リツコ達も実際にアスカが2人居る事に驚いていた。

「さあ、ひとつと検査とやらをしきりつてよ」

パジャマ姿のアスカがぶっきらぼうに手に放つて怒った顔でリツコ達をにらみつけた。

「『めんねアスカちゃん』

「あ、いえ、別に伊吹先生に怒っているわけじゃないから」

謝るマヤに向かつて、アスカは優しい口調でそう答えた。
そして、不安そうな顔でシンジの方をチラチと見つめる。

「ねえ、もしあたしが使徒って事になつたら、殺されりやうの?
「そんな事無いよ、大丈夫だよ」

優しく微笑みかけるシンジを、タンクトップ姿のアスカは崩れてにらみつけた。

そして、リツコ達に従つて医務室に入つて行つたアスカをシンジ達は息を飲んで見守つた。

「検査の結果、使徒の反応は全く見られなかつたわ。まったく普通の人間よ」

リツコがそう言つと、パジャマ姿のアスカは堂々と腰に手を当てて言い放つた。

「ほら、あたしを化け物呼ばわりして突き飛ばすなんてひどかつた
じゃない」

「悪かつたわね」

タンクトップ姿のアスカは口をとがらせながらも頭を下げて謝つた。

「でも、それならいつたいどうこう事かしら?」

リツコのつぶやきを聞いて、ミサトは自分の推論を話した。

パジャマ姿のアスカは、こととは異なる世界パラレルワールドからやって来た存在なのではないかと。

話を聞いたリツコ達もそのミサトの仮説に同意した。

「でも、アスカが2人じゃ区別がしにくいわね」

「それじゃあ、アスカA、アスカBにすればいいじゃない?」

「「それは嫌!」」

難しい顔をしてつぶやくリツコにミサトがそう提案すると、2人のアスカは声をそろえて反論した。

「そうね、もとからこの世界に居たアスカを『アスカ』、この世界にやつて来た可愛いパジャマ姿のアスカを『あすか』って呼ぶ事にしない?」

「AとかBよりはだいぶマシね」

「まあ、それなら……」

アスカとあすかは納得したようにうなずいた。

「あすか、ちょっと実験に付き合ってくれないかしら

「何ですか、赤木先生?」

リツコの目が怪しく光るのを見逃さなかつたアスカは、あすかの前に立ちはだかつた。

「もしかして、エヴァに乗せるつもり?」

「良く分かつたわね」

「あすかは今までエヴァなんかに関係無い世界で生きていたのよ?興味本位で巻き込むなんて絶対許さないんだからね!」

「わ、わかつたわよ」

アスカの剣幕に驚いたリツコはやむなく引き下がつた。

「や、早く帰りましょ。こんな所に長く居ると、あすかが実験材料にされちゃうわ！」

怒った顔でそう言ったアスカは、あすかの手を引いて部屋を出て行こうとした。

苦笑しながらミサトとシンジが後を着いて行く。

アスカとあすかは打ち解けた後は双子のように仲良くなっていた。帰りの車の中ではシンジも入りこめないぐらい話していた。葛城家に戻ると、アスカとあすかはアスカの部屋で着替える事になった。

「絶対のぞくんじゃないわよ！」

「分かってるよ、命は惜しいしね」

アスカの言葉にシンジはそうため息をついたが、アスカの部屋から聽こえてくる楽しそうな声にはドキドキしていた。

「じゃあ、私はネルフに戻つて仕事にかかるから。今夜の夕飯、私の分はあすかにあげて」

「あすかはこれからどうなるんでしょうが？」

シンジは不安をひきこむ顔を曇らせると、ミサトは明るく励ます。

「とりあえず、しばりへこむに居てもうつ事になるわね。アスカもあすかとすっかり打ち解けたみたいだし、同じ部屋でも構わないと思つわ」

「そうですね」

ミサトの言葉を聞いて、シンジはまつと息を吐き出した。

「シンちゃん、今日から文字通り両手に花生活じゃない、羨ましいわ」

「からかわないでください」

ため息をついたシンジに見送られ、ミサトは葛城家を出て行った。しばらく考え込んだシンジは、商店街に買い物に出かける事にした。あすかが来たのでハンバーグを作ろうと思つたのだ。きっと喜んでくれると思ったシンジは鼻歌交じりに葛城家を後にしてた。

「これなら鏡が要らないわね」

アスカはあすかに次々と服を着せて、満足気に眺めていた。

「その頭に付けているのは何よ?」

「ああ、これはエヴァのインターフェイス・ヘッドセシットよ。エヴァとシンクロし易いように付けているの」

「何かダサいわね。ほら、リボンの方が可愛いわよ」

あすかはそう言つと、アスカの頭からインターフェイス・ヘッドセシットを取り外して自分の付けていたリボンを結びつけた。

「そうだ、入れ替わつてシンジをからかっちゃおうか?」

「面白そうね、それつて」

アスカの提案に、あすかは笑つて答えた。

あすかはインターフェイス・ヘッドセシットを自分の頭に付けた。

「あ、あの服なんか着てみたいわね」

あすかはそう言つと、部屋にかけられたレモン色のワンピースを指差した。

「アンタ、持つてないの？」

「ママはあたしに可愛らしい服を着せるのが好きなのよ。だから、持つている服もフリフリのフリルが付いたものとか、そんなのを勧められちゃう」

「……アンタのママって、アンタを愛してくれてこる？」「うん、もう面倒になるぐらいい抱きしめてくるのよ……あつ」

暗そうな表情になつたアスカを見て、あすかは氣まずい表情になる。

「じめん、あんたの氣持を考えずにこんな事言つて」

「謝らなければいけないのはアタシの方よ、勝手に落ち込んだりして」

アスカは軽く首を振つてそつと、あすかの脱いだパジャマを拾い上げて顔を赤らめながら尋ねる。

「このパジャマ、アタシも着てみていい？」

「良いわよ、少しきつくなつて來た所だし、アスカにあげる」

あすかの言葉にアスカは喜んだが、あすかの胸やお尻を見ると少しむくれた表情になる。

(……どうせ、アタシはガリガリですよーだ)

アスカは心の中でそうつぶやいた。
夕食の席で、アスカはシンジがあすかがアスカだと騙されるいたずらを楽しみにしていた。

頭のインター・フェイス・ヘッドセットとリボンが入れ替わっているのに気が付かないはずだ。

「あすかの口に合つと良いけど……」

「あ、ありがと」

あすかは戸惑つたようにシンジに答えた。

「どーして分かつたのよー?」

「そ、それは……」

シンジは気まずそうにレモン色のワンピースを着るあすかの開いた胸元に視線を送つた。

「こ、スケベつ！」

顔を真つ赤にしたアスカは思いつきりシンジの足を踏みつけた。

そんなハプニングもあつたが、3人は夕食を食べ始めた。

アスカは少しむくれた表情になつていた。

シンジは今夜のおかずはアジの開きと肉じゃがだと言つていたのに、あすかが来てハンバーグを張り切つて作ったのに腹が立つたのだ。あすかとシンジが楽しそうに話しているのにもさらに腹が立つた。しかし、アスカは怒つて自分の部屋に戻ると言つ事はせず、不機嫌ながらもシンジとあすかの会話に参加していた。

せつかく姉妹のような存在ができたのに1人になるのは寂しかったのだ。

「でも、学校ではあすかの事をどう説明したらいいんだろう?」

「ええつ、あすかを学校に行かせるの?」

「だつて、ずっとあすかを家に閉じ込めておくわけにも行かないじ

やないか」

「生き別れの姉が居たつて言うのが一番無難かもね」

「何でアタシが妹になるのよ?」

「だつて、あたしの方が背もスタイルも良いし」

あすかが自慢気に胸を張ると、アスカは渋い顔になつた。

外見が似ていて2人だが、夕食の後に見るテレビの好みは違つた。

「こんなトーク番組、面白くないじゃないの」

アスカがチャンネルを変えた。

「ハプニング映像番組なんて、つまんない」

あすかがチャンネルをトーク番組に戻した。

そのうちアスカとあすかはリモコンを奪い合い取つ組み合いのケンカになつてしまつた。

「仲が良かつたと思つたら、急にケンカするんだから」

シンジは疲れた顔でため息をついた。

アスカがお風呂に入つて居る時、あすかとシンジはリビングで2人きりになつた。

「今日は助けてくれてありがとうね」

「そんな、あすかの事を放つておけなかつたから……」

シンジは照れたように頭をかいてそう答えた。

「でも、シンジってばレイにも優しくしてあげるんでしょう?」

「うん、綾波も放つて置けないとこりがあつて」

「それは結構なことだけども、自分を放つて置かれてレイと仲良くしているシンジを見ているとイラつて事があるのよね」

あすかがそう言つてため息をつくと、シンジは驚いて目を丸くする。

「えつ、それつてあすかが僕の事を気にかけているって事?..」

「ま、まあ、そんな所ね」

あすかは少し顔を赤らめながらもシンジの言葉を否定しなかった。

「アスカつてば、いつも僕に辛く当たるから、ストレートに甘える

加持さんの事が好きだとばかり思つていたよ」

「あなたの事だから、やうだらうと想つてたわよ」

あすかは再びあきれたようにため息をついた。

「じゃあアスカも僕の事を気にかけているのかな?..」

「調子に乗るんじゃないわよ、あんたは加持さんに比べたらまだまだガキよ」

少し嬉しそうに笑顔を浮かべたシンジに、アスカはそう言つ放つた。

「そつか……でも、どうしてあすかは僕に話してくれたの?..」

「あたしが使徒かもしれないってアスカに言われても、助けてくれたのが嬉しかったからかな」

「ずいぶんと仲良くなっているじゃない?..」

あすかとシンジが見つめ合つて話していると、お風呂からあがつたアスカが鋭い目つきでにらんでいた。

そして、アスカはシンジ達に言い訳する時間を『えすに怒った様子で部屋の中へと入つて行つた。

「さすが、我ながら分かりやすい怒り方ね」「僕が綾波とばかり話していると、アスカを怒らせてしまうのか」「ま、あたしの顔色ばかりうかがうようになつても困るけど、少しは鈍感を直してアスカを気にかけてやってね」「うん、何かあすかつてアスカのお姉さんみたいだ」「な、何を言つてんのよ…」

あすかは照れ臭そうに逃げるようにお風呂へと入つて行つた。

「アスカ、またあすかと仲が悪くならなければいいけど……」

アスカと仲直りしたくても、良い言葉が思い付かないシンジはリビングでそう祈るしか無かった。

あすかがお風呂から出て来て、アスカの部屋に入る。部屋の中から2人の話声が聞こえるが、すぐにはあすかが追い出されない所を見ると、アスカもそんなには怒つていらないらしい。安心したシンジはお風呂に入る事にした。

「そうだ、アスカのシャンプーの減りが2倍速くなるんだつけ、気を付けないと……」

シンジはそんな事を心配していた。

「何よ、シンジとの仲良し話は終わつたの？」

アスカの部屋にあすかが入ると、アスカは背中を向けたままそつと嫌味を言った。

「あたしにシンジを取られそuddtて、嫉妬しているの？」
「別に、嫉妬なんかしてないわよ！」

あすかに言われたアスカは勢い良くあすかの方に振り返った。

「隠さなくとも分かるわよ、同じあたしなんだから。まあ、加持さんと比べると情けなくて頼りないけどね」
「そうね、加持さんは落ちるけど……ね」

渋々ながらアスカもあすかの意見に同意した。

「でも、シンジの方もアスカに気があるみたいじゃない。あたしとあんたが入れ替わってもすぐに見抜いたし」
「あいつ、アタシの事をやらしい目で見てただけよ」
「仕方無いじやん、男なんだから。あたしもシンジからそう言つ視線を感じた事があるし」
「ずいぶん余裕じやない。もしかして、シンジとキスは済ませたの？」

「ええ」

「ふーん」

「5歳ぐらいの頃したらしいわ。あたしもシンジも良く覚えて無いけど」

「それって、してないのも同然じやない」
「じゃあ、シンジとキスしちゃおうかな？」
「何ですってー？」

アスカが血相を変えて叫ぶと、あすかは大きな声で笑い出した。

「ほら、やっぱシンジが気になるんじやない」

「ぐーつ、騙したわね！」

「素直になれないのは分かるけど、少しさは優しくしてあげないと

レイにシンジを取られちゃうわよ」

「そんな恥ずかしい事できるわけ無いじゃないー！」

「嫉妬してもシンジが気付かなくちゃ 意味が無いわよ」

「解つたわ、ほんの少しだけ優しくしてやつてもいいわよ」

ふくれた顔でアスカがそう叫ぶと、あすかは満足そうにうなづいた。

「でも、あすかがこのままずっと元居た世界に帰れなかつたら、シンジの事を好きになつたりするの……？」

「それは……」

アスカとあすかは氣まずそうに見つめていた。

しばらくの間、沈黙が流れた後、その雰囲気を壊そつとあすかが声を掛ける。

「もう寝よつか」

「そうね」

アスカはあすかからもらったパジャマに着替えた。

そして、毛布を持ってきて床で寝よつとした。

あすかはそんなアスカに声を掛ける。

「あたしが床で寝るわよ、ここはあんたの部屋なんだからさ」

「アンタこそ、朝から色々あつて疲れたでしょ？ ベッドはアンタに譲るわよ」

アスカの言葉を聞いたあすかはため息をつくと、後ろからアスカを抱きあげて、ベッドへと運ぶ。

「ひつして2人ともベッドで寝ればいいじゃない」

「でも、それじゃあ狭いでしょ？」

「別にあたしは構わないけど」

「じゃあ、アタシが壁際に代わってあげるわ」

アスカが顔を真っ赤にして言つと、あすかは苦笑を浮かべた。これはアスカが壁際に代わりたいと言つ強い意思表示だ。

「ありがと」

あすかはひつてアスカと位置を変わつた。

（……ありがとひつのはアタシの方よ）

アスカは心の中であすかに感謝した。

ベッドで誰かと2人で寝る事はアスカにとって初めての事だつた。その事がこんなにも心地が良い事だとはアスカは思つてもみなかつた。

今日は悪い夢を見なくて済むと思つたアスカはすぐに眠りについてしまつた。

「ママ……ひつて死んじゃつたの……？」

眠りかけていたあすかはアスカのつぶやきを聞いて目を覚ました。そして涙を流すアスカを慰めるようにギュッと抱きしめる。

「あたしは、ママの代わりにはなれないけど、アスカのお姉さんになるから。寂しい時ずっと側に居てあげるから……」

「「めん、ありがとあすか」

アスカもあすかの胸に抱かれ、安心したように眠りについた。

そしてその翌日。

なかなか起きて来ないアスカとあすかを心配してシンジがアスカの部屋に足を踏み入れると、シンジは驚いた。

ベッドにはアスカとあすかの姿が無かつたのだ。

「ミサトさん、大変です！ アスカとあすかが居ないんです！」
「アスカとあすかが居ないですって！？」

たちまち葛城家はパニックになった。

そんな葛城家の様子を遙か遠く、赤い空が広がる世界から眺めている2人の男女の姿があつた。

「上手く行きそうで良かつたわね」

「うん、アスカがあすかを使徒だと突き飛ばした時はどうなるかと思つたよ」

「今度はこつちの世界の番ね」

「もう、アスカはあすかをすっかり信頼しているから大丈夫だと思うよ」

「神様つて言うのも、意外と大変ね。使徒を倒しちゃつたり、ママを復活させるとか、奇跡を起こしちゃえれば良いんじやないの？」

「ダメだよ、人間はなるべく人間の力で物事を乗り越えさせなくちゃ」

「人の可能性か。アタシも早くシンジの事を信じて居ればアタシ達の居るこの世界はこんな結末にはならなかつたのに」

「悔やんでも仕方無いよ、僕達は世界を想像する力は持つていてもやり直す事は出来ないんだからさ」

「はいはい、これからもアンタの暇潰しに付き合つてあげるわよ」

「暇潰しとは酷い言い方だなあ。でも自己満足に過ぎないかもしだれ

ないけどね」

シンジは少し寂しそうな顔で微笑んだ。

「そうだ、お腹が空いたからハンバーグ作つてよ。シンジが作つて
いるのを見たら食べくなつちやつた」

「神様になつてもお腹が空くんだ?」

「気持ちの問題よ!」

アスカの言葉にシンジは苦笑して、何も無い空間に1軒の小さな家
を出現させた。

そしてアスカとシンジの2人は楽しそうにその家の中に入つて行く
のだった。

「シンジ、話があるの」

夕食の片づけを終えたシンジは、葛城家のリビングでテレビを見ていたアスカに呼ばれた。

何の話だらうと、アスカの所へ行くシンジ。数分の会話の後、目を疑うような光景が展開されていた。丈の長いジーパンとシャツに着替えたアスカが、シンジを膝枕しているのだ。

ミサトが見たら冷やかされそつなものだつた。

「まあミサトが来ないうちにさつと済ませてしまつわよ

アスカもその事を分かつてゐるのか、耳かき棒を取り出してシンジの耳を掘り出した。

「アスカ、本当に大丈夫？」

「初めてでも耳かきなんか簡単よ！」

不安そうに聞くシンジに、アスカは自信満々にそう答えた。

「シンジの耳の穴って見やすいわね、これは耳かきがやり易そうだわ」

アスカの言葉を聞いて、シンジはホッと息をもらした。

アスカの操る耳かき棒は順調にシンジの耳垢を取り除いて行く。

「それにしても、耳かきなんて他の人にしてもらえるなんて、思わ

なかつたよ。僕は小さい頃に母ちゃんを亡くしてしまつたし

「ふふん、ありがたく思いなさい」

「アスカが耳かきをしてくれるなんてかなり驚いたし」

「何よ、アタシにはそんな事似合わないって言いたいの?」

アスカが身を乗り出すと、アスカの胸がシンジの目前まで迫った。

「うわっ」

自分の顔に触れそうになつた所でシンジが声を上げると、アスカもあわててシンジから体を離す。

「やらしいわね」「勝手に近づけたのはアスカだろう?」

シンジがアスカに強く言い返そうと頭をあげると、またシンジとアスカの胸との距離が近くなつた。

「ほら、頭を下げなさいよ。」
「分かつたよ……」

シンジはアスカの言葉に従い、頭をアスカの膝に付けた。

アスカは興奮してしまつてゐるのか、耳かきの仕方も先程より雑になつてしまつた。

「ああ、終わつたわよ！」

アスカはそう宣言するとさつさと立ち上がろうとした。
そのアスカをシンジがあわてて引き止める。

「待つてよ、両方やるつて約束したじゃないか」

「……仕方無いわね」

「自分で言い出した事じやないか」

反対側の耳を掃除するためシンジは顔の向きを変えた。
こちらからはアスカの体は見えない。

さらにはほつぺたに感じるのは固いジーンズの感触。

シンジは残念な気がしてならなかつた。

それでも、アスカに耳掃除をしてもらつてはいるが、自分の良いものだつた。

「はい、今度こそ終わつたわよ」

シンジの至福の時間は意外と早く終わつてしまつた。
もつと耳垢が取りにくい耳だつたら良かつたのに。
そんな事をシンジは思つていた。

「たつた10分で5,000円何で高すがると思ひナビ

シンジは苦笑しながらアスカに5,000円札を渡した。

「耳垢を全部とるつて約束だつたじやない。それとも、膝枕に期待してたの？」

「そ、そんな事無いよ」

シンジは真つ赤になつてアスカの言葉を否定した。

夕食の片付けの後、小遣いの前借りをミサトに断られたアスカは、
今度はシンジにお金を貸してくれるように頼んだ。

しかしシンジの財布の紐も固かつた。

そこで、アスカはシンジの耳かきをすると提案して來たのだ。

タンクトップにショートパンツと言つた刺激的な服装のアスカに言われたシンジは、その誘惑に乗つてしまつた。

甘い妄想が打ち碎かれてしまつたとは言え、シンジは詐欺だとアスカに訴える気持ちは起こらなかつた。

「どうせ、加持さんとのデート代に使つんだろ?」

お金を手に入れて嬉しそうにするアスカを見て、シンジは少し寂しそうにやうづぶやいた。

その一週間後のひな祭りの日、シンジとトウジとケンスケの3人は葛城家のリビングで部屋の飾り付けをさせられていた。

ここでひな祭りパーティをやると言つのだ。

言つ出したのはアスカで、ミサトも賛成したと言つ事だつた。

「どうせミサトさんはお酒が飲めれば何でもいいんでしょう?」

「甘酒なんでお酒のうちに入らないわよ。」

夕食の席でミサトはシンジにやう答えていた。

「しかし、惣流と委員長はワシリに準備を押し付けて何をやつとんのや」

「委員長の家で準備をしてくるって言つたけど」

「何の準備や?」

「もちろん、あれだらつへ、今日は良い被写体が撮れそうだ」

ケンスケは予想が付いているようで、楽しそうにカメラの調整をしていた。

部屋の飾り付けや料理の準備が終わった所でインター ホンが鳴らされた。
アスカ達が来たようだ。

「うわあアスカ、その着物……」

玄関を開けたシンジは驚いた。

目の前には髪を結つて赤い着物を着こなしたアスカが立っていたからだ。

「ヒカリのお姉さんに着せてもらつたのよ、どう? 見とれて声も出ない?」

「……うん」

シンジが素直に感動を表すと、アスカは少し顔を赤くしたが誇らしげな表情になる。

「これで、アンタの言つていた大和撫子つてのにグッと近づいたでしょ?」

「アスカ、あの事を気にしてたの?」

アスカが得意顔でシンジにそう言つと、シンジは驚きの声を上げる。少し前にシンジはアスカと言い争いをした。

その時怒ったシンジはアスカを大和撫子とは正反対の女性だと馬鹿にするように言つたのだ。

ケンカは収まつたがアスカはシンジにリベンジする機会をつかがつていたらしい。

「別に僕はアスカに大和撫子になつてもらいたいって言つたつもりは無いんだけど……」

「酷い言い草ね、せつかくアンタに借りたお金を足して着物を買つたのに」

「お金が必要だつて言つのは、着物を買つためだつたの？」

「まあまあ、良いじやない。着物を着たアスカが可愛いって言つのは事実なんだし」

むぐれたアスカをなだめるよつこミサトがそう声を掛けた。

「お、委員長も着物やつたんか」

「うん、お姉さんのお古を着せてもらつたの。まだ少しサイズが大きいけど」

トウジに言われると、ヒカリは少し顔を赤らめながらそう答えた。

「ミサトさんは何で着物じやないんですか？」

「忙しくて仕立てる時間が無かつたのよ」

ケンスケに言われてミサトは苦笑しながら答えた。

サイズがきつくなつて着れなくなつたとは言えない。

「それにしても、着物を着た委員長は大和撫子そのものやけど、惣流は馬子にも衣装やな」

「何ですって！？」

トウジの言葉を聞いたアスカは、怒つてトウジに殴りかかるうどうした。

「アスカつてば、大和撫子は殴つちやいけないのよ」

「むりや」

「おー恐、やっぱ惣流はじやじや馬や」

ヒカリに止められて、アスカは寸前で引き下がった。

「シンジ君は大和撫子タイプの子が好きなの？」

「分かりません、でもアスカは今のままの方が良いような気がします」

「そうね、しおらしいアスカは何か調子が狂うわ」

「ミサトもシンジも言ってくれるじゃないの！」

ミサトとシンジの会話はアスカの耳に届いてしまったようだ。

「そうだ、綾波は誘つたの？」

「誘つたわよ、でも来るのは嫌だつて」

シンジの質問にアスカはため息をついて答えた。

「そつか、まだ賑やかなパーティとか苦手なのかな」

納得したようにシンジは寂しそうにつぶやいた。

そのパーティの翌日、シンクロテストのためにネルフに行つたシンジとアスカは青い着物姿のレイを見て驚いた。

一目見てその着物の価値に気が付いたアスカは震える声でレイに尋ねる。

「ファースト、その高そうな着物はどうしたのよ？」

「昨日あなたは電話でひな祭りパーティで大和撫子の姿を碇君に見せると言つていた。だから私も碇君に大和撫子を見てもらつたの」

「もしかして、綾波は着物が無かつたから家に来なかつたの?」

シンジの言葉にレイはうなづく。

「碇君、私の大和撫子はどう?」

「うん、良いと思つよ」

シンジは冷汗を浮かべて退き気味にそう答えた。
レイは褒められたと思いわずかに顔を赤くした。

「その着物はどうしたの?」

「碇司令に欲しいと言つたらすぐに用意してくれたの」

レイの言葉を聞いたシンジとアスカの顔は険しくなる。

((えこひこき))

シンジとアスカの心の声は一致した。

自分達には小遣いの前借りは決して認めないのにレイの要望は聞き入れる。

2人はそんなゲンドウに腹を立てた。

ゲンドウはそんな2人の心には気付かず、着物を着たレイを見て機嫌が良かつた。

レイも着物が気に入つてしまつたのか、私服はすっかりその着物になつてしまつた。

「綾波はまだ僕が大和撫子が好きだつて勘違いし続けているよ……」

着物姿のレイをネルフで見かける度にシンジはレイの誤解をじつやつて解けばいいのか思い悩んだ。

見かねたアスカとヒカリが協力してレイの私服を街に買いに行くと言つ事で、やつと騒動は収まるのだった。

寒さも依然として厳しい2月の冬、教室でシンジとトウジとケンスケは声をひそめて話していた。

もちろん話題は翌日に迫ったバレンタインの事である。

「今年もセントバレンタインチョコレートをもらひやうなあ」「そんなん、みんながくれるのは義理チョコばかりだよ」

トウジが冷やかすと、シンジはため息をついて否定した。

「だつて僕はそんなにハンサムでもないし、頭だつて良くないし、スポーツマンでも無いし……」

「いやいや、碇の演奏するチョロはかなりのもんだぞ、いつもファンの子が音楽室に聴きに来ているじゃないか」

「チョロだつて下手の横好きだよ」

「お前つて本当に自覚ないんだな。義理チョコの中に本命が混じっているかもつて考えた事も無いのかよ」

シンジの言葉を聞いて、ケンスケとトウジが大げさにため息をついた。

「だつてさ、僕は小さい頃からずっとアスカから、義理チョコしかもらつた事が無いんだよー」

「碇、声が大きいー」

うわづつた声で反論したシンジの口を、ケンスケが慌てて押さえた。同じ教室に居るアスカ達の方を見ると、シンジの発言に気が付かないようにおしゃべりを続けていた。

「ふーっ、聞こえなかつたみたいやな」

トウジとケンスケとシンジは大きく息を吐き出した。
しかし、アスカ達の耳にはしつかりと聞こえていたのだ。

（……チャーンス！ シンジ君はアスカの照れ隠しに気が付いて居ないわ。今年は思に切つて本命をあげちゃおうかな）

マナはそんな事を思つてほくそ笑んだ。

（は、恥ずかしいけど、碇君に本命と言つて渡しちゃおうかな……）

レイはそんな事を思つてモジモジしていた。

（え、義理も渡した事が無いけど、勇気を出して碇君にチョコレートを渡してみようかな。初めて渡すチョコレートが本命なんて、碇君は驚いてしまうかしら）

シンジと委員会で話した事のあるマコもそんな事を考えて顔を赤くした。

（うーん、シンちゃんは義理しかもつた事が無いと思いつ込んでいるなら、今年は本命だと言つて渡してからかづけやおうかしら）

シンジの近所のお姉さん兼担任教師のミサトもそんな事を考えて一
ヤニヤ笑いを浮かべていた。

しかし、アスカだけは浮かない顔をしていた。
アスカは5歳から毎年シンジにバレンタインにはチョコを欠かさずあげていた。

シンジの周りの女子はシンジとアスカが付き合っているのかと思う事もあつたが、アスカがあまりに義理チョコだと言う事を強調するため、それならば自分達もとシンジにチョコをあげていた。アスカは嫉妬心からシンジが他の女子から受け取ったチョコは全て義理なんだからと言い聞かせ、シンジもそうだと同調していた。いつか自分の気持ちにシンジの方から気付いてくれるだろうとアスカは思ったのだが、シンジの鈍感は筋金入りだつた。

「惣流さんは今年も碇君にチョコをあげるの？」
「え、ええまあ隣に住んでいる付き合いで義理だけね」「やつぱり、義理なんだ」「当たり前じやない、アタシの本命は加持先生に決まつていいじゃないの！」

突然マナに尋ねられたアスカはその場の勢いでそう答えてしまつた。

「そうよね、加持先生ってスポーツマンで紳士的だもんね」「葛城先生と付き合つているのに、アスカも大変ね」

マナとヒカリに励まされて、アスカは憂鬱な気持ちになつた。アスカが体育教師の加持に熱を上げてているのはクラスの生徒が誰もが知る事だつた。

しかし、アスカがそう見せてているのは自分のプライドがそうさせでいたポーズだつたのだ。

本当は加持にあげているチョコが義理でシンジにあげているチョコが本命なんて恥ずかしくて言う事が出来るわけがない。

そんな自分の態度がシンジに自分を失わせていると感じたアスカは一大決心をした。

「よしつ、今年こそシンジに本命チョコをあげて素直になるわよー。」

アスカは気合を入れて、力強い眼差しでシンジを見つめた。

「セ、センセ、惣流のやつはつい怖い顔で」口をこじらせるで

そのアスカの姿を見たトウジがシンジにそう話しかけた。

「やつぱつさつきの話が聞こえちゃったのかな？」

「後で謝っていた方が良いんじゃないかな？」

「う、うん」

シンジはケンスケの言葉にうなずき、放課後真っ先にアスカの席へ行つて謝る事にした。

「あ、あのを……」

「ア、アタシ用事があるからつー」

シンジが話しつけようとすると、アスカは顔を赤くして教室から走り去つてしまつた。

アスカは照れ臭くなつてシンジと顔を合わせられなかつたのだが、シンジとトウジは違うふうに受け取つた。

「惣流のやつ、顔を赤くしてまで怒つとるんか」

「俺にはそうみえなかつたけどな」

ケンスケはトウジの言葉に異議を唱えた。

「アスカをそんなに怒らせる事をしたかな？」

シンジは首をひねつて考え込んでいた。

「あんな女の事なんてパーティとゲーセンで遊んで忘れてしもつたらええやん」「うん……」

シンジはトウジの誘いに乗つて、ケンスケと3人でゲームセンターに寄り道する事にした。
しかし、しばらくゲームセンターで遊んでもシンジの心は晴れず、ため息ばかり付いていた。

「何やセンセ、そんなに惣流の事が気になるんかいな」「それなら、会つて話して気持ちをスッキリさせた方がいいかもな」「うん、アスカと話して来るよ」

シンジはトウジとケンスケに別れを告げて、大急ぎで家に戻った。
碇家と惣流家は、コンフォートーフと言つ分譲マンションの隣り合つた部屋同士だった。
家に帰つたシンジは玄関にカバンを投げ捨て、隣の惣流家のチャイムを鳴らした。

「「ごめんね、アスカつてばシンジ君に会いたくないらしいの」「そんな！」

惣流家の玄関でアスカの母親であるキョウウコに止められたシンジは青い顔になつた。

「少しだ良いいから、アスカに話をさせてください」「それが、アスカは絶対にシンジ君を通さないでって」「そうですか……」

キョウウコにやう言われてしまつては、シンジは引き下がるしか無かつた。

自分の部屋に戻つたシンジは、ベランダで繫がつてゐるアスカの部屋の窓に厚いカーテンが下ろされてゐるのを見てため息をついた。何度アスカの携帯に掛けても、携帯電話の電源は切られてしまつていた。

いつでも会えると思っていたアスカに会えなくなつた事に、シンジは寂しさを感じるのだった。

アスカがかたくなにシンジと会つのを拒んでいたのは、放課後に買い物をして家に帰つて来てからシンジのためのチョコレートを作つていたからだつた。

「ふふ、アスカつてばこんなにチョコレートを作っちゃつて。シンジ君が見たら、これだけで涙を流して喜んでくれるわよ？」

たくさんチョコレートが並べられたテーブルを見て、キョウウコは微笑んだ。

アスカはシンジに送るチョコレートに試作品を何個も作つていたのだ。

「ママ、お台所を占領しちゃつてごめんね」

「いいのよ、今日は出前にするから」

キョウウコの協力も得たアスカは気合を入れてチョコレートを作り続けた。

“I Love Shinji from Asuka”なんて、やつぱり恥ずかしい……

「でも、ストレートに云つて良いじゃない、もうシンジ君に誤解されたくないんでしよう?」

「うん……」

アスカはキョウコの言葉につなぎ、ホワイトチョコで”H – L
v e S t r e a m f r o m A s u k a”と書いたハート形の
チョコレートをシンジに贈る事に決めた。

「そうだ、加持先生にあげるチョコレートも作らないと」「
「それなら、義理つてしつかり書いた方が良いんじゃないかしら？」「
「でも……それつてやりすぎじゃない……？」

キョウコの言葉を聞いたアスカは冷汗を浮かべながらそう答えた。
しかし、結局キョウコの助言に耳を貸してでっかく「義理」の文字
が刻まれた加持宛てのチョコレートを作ったのだった。

「やつと……シンジにあげるチョコが出来た……」

アスカはかなり緊張していたのか、糸が緩むと疲れて座り込んだ。

「そうだ、箱にリボンを掛けてあげればもっと可愛らしくなるわよ」「
「それは良いアイディアね……」

そう言つてリボンを買いに行つとするアスカは、よみがて床に座
り込んでしまつた。

「パパに言つて帰りにリボンを買つてしまつから、今はゆっくり
り休みなさい」「
「ありがと、ママ」

後をキョウコに任せてアスカは自分の部屋で休む事になった。

「ふふ、私も手作りチョコをジニアブさんにプレゼントしようか
しり……」

キヨウコも夫に手作りチョコレートをプレゼントしようと台所でチョコレートを作り始めたのだった。

次の日、バレンタイン当日は日曜日だった。

学校でなはありけなくシンシにヨミ一レーワを渡せるのだが、このままでアスカに先を越されて渡されてしまつ。

「霧島さん……」

コンフォート17の近くで、レイとマナはバッタリ出会ってしまうた。

「やつぱつ、考える事は回じみたいね」

そう言つたマナとレイは顔を見合わせて苦笑した。

「おはよう、アトム君。おはようございます。」

「ンフオーツーフに向かって歩き出そうとしたマナとレイは後ろから担任教師のミサトに壁を掛けられた。ミサトは恥ずかしそうに泣きつむてこちらマコリを連れていた。

「玉井さん？」

「マコリちゃんたらね、シンちゃんにチョコレートを渡したいってあたしに住所を聞いて来たのよ、健気じゃない?」

(葛城先生は、面白がつていいだけだと想つわ……)

レイの驚きの声にミサトは笑みを浮かべながら説明したが、マナとレイは心の中でそつツツコミを入れた。

4人は足並みをそろえてシンジの家を訪問する事になった。

「どうもコイさん、教え子達と一緒にシンジ君にチョコレートをお届け上りました」

明るくおどけながらやつて来たミサトをコイは相変わらずだと苦笑しながら迎えた。

ミサトは良くゲンドウとコイの酒の相手をするので、碇家とは顔なじみだったのだ。

そして、アスカ達と一緒にシンジの家に遊びに来ているレイとマナの姿を見ると、コイは部屋に居るシンジに声を大声で呼んだ。

「あれ、みんな遊びに来てくれたの? アスカは?」

シンジはアスカの姿が見えない事に真っ先に違和感を覚え口にした。

「ああ、私達は知らないけど? いつも一緒に居るわけじゃないし

自分達はアスカのお供ではないと、マナが不満そうに答えた。

「どうええず、上がつてよ

「お邪魔します」

シンジに言われて、マナ達は碇家のリビングへとあがりこんだ。

ゲンドウは追いやられたように自分の部屋へと移動した。

そして、シンジがマナ達にチョコレートを渡される姿を少しづらりやましそうに見ていた。

同時にチョコレートを渡す事になってしまったマナ達3人は、冗談でも本命だと話す事が出来ず、何となく言葉を濁すような微妙な雰囲気となってしまった。

「あれって、甘すぎよね」

「私はあの甘さがいいと想つわ」

「碇君はどう思つ?」

「僕は、もつちゅうと甘い方が良いかな?」

「では、もう少しチョコレートも甘く味付けした方が良かつたのをしちゃうか……」

「そんな事無いですよ、山野さん」

マナとレイとマコちゃんは、シンジと話した後、チョコレートを置いて帰つて行つた。

ミサトは担任教師として、マコを家まで送つて行つた。

マナ達を見送つたシンジは無表情でリビングの椅子に腰かけていた。

「どうしたのシンジ、3個もチョコレートをもらえて嬉しいのに

?」

「わうだ、もつと喜ぶ

「うそ……」

ゴイとゲンドウに言われても、シンジは生返事をするばかり。

部屋に戻つたシンジは憂鬱そうにカーテンが下がつたままのアスカの部屋を眺めていた。

朝からずっとアスカの部屋のカーテンは閉ざされたままだった。

シンジはマナ達からもらった3個のチョコレートを食べたが、少し

も甘く感じなかつた。

重苦しさがシンジの胸を支配し、シンジはまわつとベッドに横になつていた。

夕方になつて日が沈み始めた頃、シンジの携帯電話にアスカからのコールが来る。

「今すぐ、近くの公園に来なさい。」

シンジが出るとアスカは有無を言わせずにいついつて電話を切つてしまつた。

乱暴な言い方だつたが、シンジはアスカに会える事を喜んで、急いで部屋を飛び出した。

コンフォート17の廊下から公園を見下ろすと、アスカが立つて待つている姿が見えた。

一刻も早くアスカに会いたいシンジは息を切らせて階段を駆け下りてアスカの所へ向かつた。

空が真つ赤に染まる公園で、シンジはアスカと2日振りの対面を果たした。

「ちょっと、何でアタシの顔を見て泣きそつとなつてこるのよ。」

アスカはシンジの顔を見てそう言い放つた。

「だつて、毎日会つていたアスカにいきなり会えなくなるなんて思わなかつたから……」

「そ、そりやあ、悪かつたわね。はい、バレンタインのチョコレート」

「あ、ありがと」

いきなりラッピングされた箱を突き出されたシンジは戸惑いながら

も受け取つた。

「で、今すぐここで開けてくれない？」

「チョコレートの箱を？」

「いいから、開けなさいよー。」

アスカに迫られたシンジはチョコレートの入つた箱を開封した。中からは”I Love Shinji from Asuka”と書かれたハート形のチョコレートが出てくるはずだ。その勢いでアスカはシンジに告白するつもりだつた。

「義理つて書いてあるけど？」

「な、何ですってーー？」

シンジの言葉を聞くと、アスカは声が裏返るほど驚いた。

確認すると、シンジが持つてているのは義理と大きく書かれた板型のチョコだつた。

アスカはシンジにあげる本命チョコレートの箱と加持にあげる義理チョコレートの箱を間違えてしまつたのだ。

「ありがとう、義理でももらえてうれしいよ。でも義理つてこんなに強調してくれなくてもいいのに……」

シンジは涙をこらえてアスカに微笑みかけた。

「ーー、これは加持さんにあげるつもりで作ったチョコレートで……ママが散らかしたせいで間違えちゃつたのよー。」

「そんな嘘まで付いて慰めてくれなくて良いよ。アスカは加持先生みたいなスポーツマンが好きなんだろ？」「

アスカは慌てて言い訳をするが、シンジは諦め切つた悲しそうな顔でそうつぶやいた。

仕方無くアスカは最後の手段を取る事にした。

アスカはシンジの腕を取ると、正面からシンジを抱き寄せ、瞳を閉じて唇をシンジに向かつて突き出した。いわゆるキスして体勢だ。

「アスカ、冗談はやめてよ」

「……シンジは、アタシとキスしたくないの？」

震える声でそういつたアスカの顔は赤く染まつて、シンジには見えた。

シンジは自分の唇をゆっくりとアスカに重ねた……。

「アタシのチョコレート、とっても甘かつたでしょ？」

アスカはシンジから唇を離すと、シンジにそう尋ねた。

「えつ、まだ食べて無いけど？」

シンジは不思議そうに自分の手に持つたチョコレートを見て答えた。アスカが黙つて自分の唇を指差すと、シンジは顔を真つ赤に染める。

「うん、大人の味もしたよ」

シンジが答えると、アスカは耳まで顔を真つ赤に染める。

「」「これは夕陽のせいなんだからねー」

「う、うん……わかったよ」

「さあ、暗くなつて来たから帰りましょ」

シンジはアスカに差し出された手を握った。

「それとシンジ、アタシが告白したんだからもつと自分に自信を持ちなさいよ」

「そう言われても……」

「スポーツマンではなくても、シンジは加持さんより良い所がたくさんあるわ。アタシはそれを知っているんだから」

「例えば？」

「そうね、チエロが上手く弾けるとか……」

「他には？」

「はあ～っ、アタシに全部聞かないと分からなの？」

「ごめん。でも、何か少し自信が出て来たよ」

アスカとシンジは手をつないで仲良く話しながらコンフォート17の建物の中へと入つて行つた……。

支援ヨシュエス小説短編 共に笑顔

リベル王国で起きた2度の大事件を解決したエステルとヨシュアは旅に出た。
結社との戦いの後消息をくらましてしまった少女、レンを探すために。
帝国の街を回っていた2人は、いつしかロレントの街に似た雰囲気の街にたどり着いた。
故郷を感じさせる街並みに、エステルとヨシュアの気持ちも軽くなつた。
しかし、広場に通じる道を歩いていたエステルは暗い表情になつて歩みを止めた。

「どうかしたの？」

不思議に思ったヨシュアがエステルに尋ねると、エステルは黙つて視線を広場の方へ移した。

ヨシュアが広場の中心部を見ると、そこには倒壊した時計台のがれきがそのままになっていた。

「どうやら先日の災害で壊れてしまつたようだつた。

「せうか、レナさんの事を思い出してしまつたのか……」

「……ちよつとね」

エステルの母親のレナは、帝国軍の砲撃によつて崩れたロレンツの街の時計台で、小さな頃のエステルをがれきから守つて命を落としてしまつたのだ。

「別に我慢しなくても良いんだよ」

「えつ？」

「僕は約束したじやないか、エステルが泣きたくなつたらいつでも胸を貸してあげるつて」

「でも、泣くなんてあたしらしくないし」

「無理して笑つているエステルの顔を見ている方が悲しいよ

「じゃあ……」

エステルはヨシュアの胸にすがりついて静かに涙を流し始めた。それと同時に、辺りには冷たい雨が降り始めた。

ヨシュアはエステルを雨からかばうように抱きしめながらそつと話しあげる。

「悲しかつた事は、全て涙で洗い流してしまおうよ。僕もエステルと再会したあの海岸でそうしたんだ」

ヨシュアの言葉を聞いたエステルはかすかにつなぎで涙を流し続けた。

あの時は泣いていたヨシュアの背中にエステルが抱きついて慰めていた。

いた。

今は2人の立場は逆だ。

「泣き終わつたら、今度は2人で楽しい事を考えようよ。もう僕は2度とエステルから離れない、ずっと一緒に歩いて行くつて誓つよ」ヨシュアが優しくエステルに話しかけると、エステルはヨシュアの手をぎゅっと握つてうつむいていた顔を上げた。

「もう大丈夫?」

「うん」

エステルはヨシュアに強くうなずいて返事をすると、もう片方の手で目にたまつた涙をふいて微笑み返す。

「それじゃあ、また約束しようよ。2人で一緒に歩いて行くつて」「そうだね」

エステルに言われて、ヨシュアはエステルと握つた手を強く握りしめた。

2人に笑顔が戻ると、それを祝福するかのように雨が上がり、雲の間から太陽が顔をのぞかせた。

「あつ、綺麗な虹!」

エステルが嬉しそうに青空にかかる虹を指差した。ヨシュアも穏やかな微笑みを浮かべて虹を眺めた。

「ねえ、レンとも」「うして笑い合う事ができるのかな?」

「歩き続ければ、きっと大丈夫だよ」

ヨシコアはそう言って優しくエステルの肩を抱きしめた。

2011年 4月1日記念ハルキヨン小説短編 晴れのち土砂降り

「何で、キヨンが出てくるのよー。」

朝、目を覚ましたハルヒは叫び声を上げた。

それは先程まで見ていた不思議な夢の内容を思い出したからだ。2人だけで閉じ込められた夜中の北高。

グラウンドで暴れる青い巨人。

そして、ハルヒはキヨンにキスをされ……。

そこまで思い出したハルヒは否定しようと激しく頭をかきむしった。

今日は休日、外は晴れ。

SOS団の定例の市内不思議探索をするには絶好の日だとハルヒは考えた。

思い立つたら即実行がモットーのハルヒは、古泉イツキ、長門ユキ、朝比奈ミクル、キヨンに電話をかけて招集しようとした。

しかし、キヨンに電話を掛ける時になつてハルヒは今日が4月1日だと言つて事に気が付いた。

何か面白い嘘をつこうと考へたハルヒは電話に出たキヨンに傘を持つて来るよつに告げた。

案の定、キヨンからは疑問の声が返つて来る。

「天気予報では降水確率は0%だと言つてゐるぞ。それにほり、現に晴れていて雨なんか降りそうにないじゃないか」

「そうと見せかけて、夕立が降るのよー」

「夕立は夏だけだろ?」

「あんた、団長の言つ事が信用できないの? 傘を持つて来なさい、団長命令よー」

知識を持つていたキヨンを強引にねじ伏せ、なんとかハルヒは嘘をつき通した。

1人だけ傘を持つているキヨンは周りからとても浮いた存在になるだろう。

つまらない嘘だが、付かないよりはマシだ。

夢の中でキヨンに言われた言葉を思い出したハルヒは出掛ける前に髪型をポニーテールに変えた。

そして、着て行く服はお気に入りのピンクのスカート。

いつも頭に付けている黄色いリボンの位置を整えると、ハルヒは鏡の前で満足したようにポーズをとる。

「よし、バツチリ決まつたわね……つて何でこんなに気合を入れているのよ、デートじゃあるまいしー」

ハルヒが集合場所に行くと、待つていたのはなんとキヨン1人だけだった。

「他のみんなはどうしたのよ？」

「急に都合が悪くなつて来れなくなつたようだな。ハルヒ、今日はお前がお出でる番だぞ」

「バ、バカっ、何を言つていいのよ！」

ハルヒはキヨンの笑顔を見ていられずに口を反らした。
あの夢を見てから自分の心の中が変だとハルヒは思った。
キヨンと口を合わせる事が出来ない。
まさか自分が恋をしてしまつたと認める事はどうしてもできなかつた。

恋愛は病気の一種だと公言してしまつていたのだ。
いつもの喫茶店の中でハルヒとキヨンの2人だけのSOS団の定例会議をしていると、信じられない事に今まで晴れていた空模様が一気に土砂降りへと変わつた。

街を行きかう人々は慌てて雨宿りをする。

「嘘つ、本当に雨が降つて來た！」

「……やれやれ」

ハルヒとは対照的にキヨンは驚く事も無く諦めた顔でため息をついた。
その後2人は喫茶店で時間を潰したが、雨が止む気配は無かつた。

「仕方無い、妹に電話をして傘を持ってきてもらうか」「どうしてよ、あんたは傘を持っているじゃない？」「だって、ハルヒの分の傘が無いじゃないか」「1本あれば十分よ」

ハルヒはキヨンの差す傘に入つて家へと帰る事になつた。
キヨンの方も照れがあるようで、ハルヒから体を離すように傘を差

していた。

「もつと体を寄せなれこみ、そのままじやあんたがずぶ濡れになつ
ちやうじやない」

「2人で入つているんだから濡れるのは仕方無いじやないか」

「あもうつ、じれつたいわね」

ハルヒはそう言つと、キヨンの腕をとつて強引に抱き寄せた。
2人の体が密着する。

「あんたが濡れて風邪でも引いたら、お見舞いに行くのが面倒だか
らこうしているんだからね！」

「分かった、また去年の1~2月のよつて迷惑をかけてもマズイしな」

キヨンはハルヒが腕に抱きつけるを感じながらゆっくりとハルヒと
歩調を合わせて進んで行った。

「……ほり、お前の家に着いたぞ」

家の前に着いても、ハルヒはしばりへじつと立つてしていた。

「ハルヒ、どうした？」

「な、何でも無いわよ、それじゃあまた明日、学校でねー！」

ハルヒはそう言つて家の玄関へと走つて行った。

「お前のポニー テール、似合つてこらへん」

「何をバカな事言つてるのよー。」

キヨンがそう呼びとると、ハルヒは振り返つてキヨンに言つ返し

た。

そのハルヒの顔は少し赤くなっているように思えた。

キヨンはハルヒが自分から離れる時に抱きついた腕にぎゅっと力を込めたのは気のせいではないと確信した。

ハルヒが家中へと姿を完全に消した後、土砂降りの雨は急に止んで空ははれ上がって行つた。

やはりこの急な雨はハルヒの嘘が原因だつたのだ。

どうしてハルヒは雨を降らせる事を望んだのか。

その理由を考えたキヨンは激しく首を横に振つて否定する。

「あのハルヒが……そんな事あるものか！ それに俺は朝比奈さんのような優しい先輩の方が……」

しかし、キヨンは閉鎖空間でハルヒとキスした時の事、救急車に運び込まれるキヨンの姿を見た時のハルヒの慌てた顔、そして今日のポニーテールの髪型や腕に抱きつかれた感覚などを次々と思い出すのだった。

キヨンの方もハルヒを意識し始めてしまつたと自覚してしまつたのだ。

「今日のうちに言つてしまえば、冗談だつたつて済ませられるかもしれない」

キヨンはせつづぶやくと、ハルヒの家のインターフォンを押すのだった。

寒さも和らぐ日々が訪れ始めた3月の中頃、自然とホワイトデーの話が教室のそこかしこでされるようになつた。バレンタインデーのお返しを考えていたシンジはクラスの女子が話をしているのを聞いて驚いてしまつた。

「まさか、バレンタインデーのお返しにそんな決まりがあるなんて……」

シンジは困惑した顔でそうつぶやいた。

先日のバレンタインデーにシンジはアスカから『大人の味がするとも甘いチョコレート』を受け取つてしまつていたのだ。それは値段の付けようの無い物で、しかも形の無い物だったので、3倍高価な物にするとか、3倍の量を返す事など不可能だった。

「やっぱり、一度に3回連續は無理だろうから、朝と昼と夜に分けた方が良いかな」「何を難しい顔をして考えているのよ」「ひゃあっ！」

突然アスカに声をかけられて、シンジは驚いて飛び上がつてしまつ。

「アスカ、ビックリさせないでよ」

「驚いたのはこっちょ。さつきから暗い顔してブツブツ言つてるけど、深刻な悩み？ アタシが相談に乗ろうか？」

「だ、大丈夫、たいした事じやないから……」

「そう、でも一人で抱え込まない方が良いわよ」

アスカが立ち去ると、シンジはホッとしたように胸をなで下ろして息を吐き出す。

「こんな事アスカに相談できるわけが無いじゃないか。……でも、アスカの都合も考えてあげた方が良いのかな……」

シンジは忘れないようにホワイトティーの予定を紙に書いて置いた。そして、放課後にシンジは義理チヨコ（本人達にとつては本命チヨコなのだが）をくれたレイ、マナ、マコリへのお返しを買いに商店街へと出掛けた。

そのシンジの姿を田代とく見つけたアスカはこつそりと後を追いかけて行く。

「シンジのやつ、アタシがせつかく本命チヨコを渡してやつたんだから、他の子達と同じ物じや承知しないわよ」

アスカはシンジはお返しに高級なスイーツを贈るつとを考えているのが分かった。

おいしいスイーツが食べられるのは嬉しかったが、特別なプレゼントを期待していただけにアスカは少し寂しさを覚えた。

帰り道にシンジがアスカへの特別なプレゼントを買い求めるのかと期待していたが、アスカの見ていく前でシンジは真っ直ぐに家へと帰ってしまった。

「シンジったら甲斐性の無い男ね、つまんないの」

アスカは気落ちした様子で自分の家へと戻るのだった。
今じるシンジは部屋でバレンタインのお返しのスイーツを準備しているのだろう。

それを邪魔するわけにもいかないと思ったアスカはシンジにちょっかいを出さずに退屈な時を過ごした。

その日の夜、アスカの携帯電話にシンジからの電話が入った。
シンジは明日の朝、登校前にバレンタインデーのお返しをしたいから部屋に来て欲しいとアスカに告げた。

「おはよー」「おはこます、おばさま」

「こひつしゃい、アスカちゃん。今日シンジは珍しく早起きしているのよ」

「あはは、そうですか」

アスカはコイにあいさつをして、シンジの部屋へに入る。
すると、しつかりと服装と髪型を整えたシンジがアスカを待っていた。

「シンジ、お返しなら学校で渡せば良いじゃない」

「だって、みんなの見てる前じゃ恥ずかしかったんだ」

「ただ渡すだけで何をそんなもつたいぶつているのよ」

「じめん」

アスカに言われて、シンジは苦笑しながら謝った。

「それで、プレゼントのスイーツはまだ」「あるの?」「うん、もう用意してくるよ」

アスカは口に出してしまつてから、しまつたと思った。
これでは昨日シンジの買い物の後をつけた事がばれてしまつ。
しかし、シンジは気にしない様子でそう答えた。

「じゃあ、目を閉じて
「……えつ？」

シンジに突然言われたアスカは驚いて聞き返した。

「だつて、キスのお返しは、キスでするしか無いじゃないか
「ちよつと……！」

赤い顔をして戸惑つアスカに、シンジは必死に頭を下げて頼み込む。

「お願いアスカ、僕にもお返しをさせとよー。
「わ、分かったわよ……」

数分後、顔を赤くしたアスカとシンジが部屋から顔を出すのだった。
通学路を歩く頃になつても、アスカの顔は熱を帯びてゐる。

「シンジつたら、鈍いくせに大胆なんだから」

学校に登校したシンジは、レイとマナとマコにバレンタインのお返しを渡した。

「碇君、ありがとう」
「このスイーツ、結構高いんじゃない？」
「あの……惣流さんの分は……？」
「アスカには、学校に来る前に渡したんだよ」

心配したマユミが尋ねると、シンジはそう答えた。

「えーっ、抜け駆けなんてズルイよ、惣流さん！」

「あなたは、もう食べたの？」

「そ、そうね、とっても甘くて大人の味がしたわ」

レイに聞かれてアスカは少しじどうもどろになりながらそう答えた。

「それは頂くのが楽しみですね」

マユミはシンジに渡されたスイーツの入った小箱を軽く抱きしめながらそう答えた。

そのアスカの言葉を聞いてシンジは慌てた様子でアスカにそつと耳打ちする。

「アスカ、適當な事言わないでよ

「アタシは正直に感想を言つただけよ」

とりあえず、バレンタインのお返しは特別な物を貰つたと満足したアスカ。

しかし、シンジがまだ落ち着かない様子でいるのは気になつた。

アスカと視線が合つと、シンジは赤くなつて目を反らした。

「あいつ、まだ動搖から立ち直つていなかっしら、相変わらず気が小さいわね

アスカはあきれた顔でため息をついた。

そしてその日の放課後、女子ゴルフ部の部活を終えたアスカは校門でシンジが待つていた事に驚いた。

吹奏楽部のシンジとは時間が合わず、シンジが先に帰っている事が多かつたのだ。

「何か用事があるならこんなに遅くまで待っていないで電話で呼んでくれれば良かつたのに」

「ううん、今頃の方が都合が良いから」

シンジはそう言って、茜色に染まり始めた空を指差した。ソワソワするシンジの様子にアスカは首をかしげながらも、一緒の通学路を歩いた。

そして、コンフォート17が近づくと、シンジは公園を指差した。そこはバレンタインの日にアスカとシンジがキスをした場所だった。シンジの真意を悟ったアスカは顔を赤くして叫ぶ。

「まさか、またキスしようって言つたじゃないでしょうねー。」

アスカの言葉に、シンジはぎこちない動きでつなぎいた。

「アンタ、いつからそんなキス魔になつたのよ」

「」、これはバレンタインのお返しだから……

アスカに強く追及されたシンジはじどろじどろになつて答えた。

その時強い風が吹いて、シンジのポケットから白い紙が舞い落ちた。紙を拾い上げたアスカは驚いた。

そこにはシンジが1日で3回キスをするためのプランが書かれていた。

夜の予定は星空の下、ベランダでキスをすると書かれていた。

「シンジ、これって……」

「だって、ホワイトデーにするお返しは3倍返しつてクラスの子達

が話しているのを聞いたからー。」

「だからって、1日にキスを3回なんてハードよ」

「……」めん、強引に押し付けられたら迷惑だよね

シンジはすっかり元気を失つてうなだれてしまつた。
すると、アスカは夕陽に負けないぐらいに顔を真つ赤にしながら話
し出す。

「仕方無いわね、今日だけシンジに付き合つてあげるわよ」

アスカはそう言つて手を閉じてシンジに唇を突き出した。
そして夕陽に照らされた2人のシルエットが重なつた……。

「Jの作品はファイクションです、冥王星の扱いは実際と異なります。（冥王星が惑星の定義から外されたのは2013年ではありません。セカンドインパクトのせいでの観測が遅れた設定にしています）登場する博物館は実在の博物館とは異なります。

エルフ本部に新しいパイロットとしてアスカが来田し、立て続けに2体の使徒を倒してしばらく経った。

エヴァのエースパイロットとして自信に満ちたアスカは、第壱中学校でも憧れの的となり輝いているようにシンジには見えた。今日は第壱中学校の社会科見学で、シンジ達の2年A組のクラスメイト達は科学未来博物館へとやって来ていた。

シンジ達が居る展示されているのは太陽系の惑星に関する模型や写真などだった。

トウジとケンスケと一緒に模型を眺めていたシンジは、ポツリと疑問を口にする。

「あれ、冥王星って惑星じゃないの？」

「シンジ、知らないのか？ 去年ニュースでやっていたじゃないか、アメリカでの会議で惑星から外すつて決定したつて
「どうして？」

シンジに聞かれたケンスケが説明をしようとすると、アスカが現れてそれをさえぎつて自分から話し始める。

「冥王星はね、正確な観測がされるようになつて、惑星だと思われ

ていた頃より実際はとても小さい星だって分かつたのよ

アスカはその後も得意顔で冥王星に関する知識を披露して行った。アスカの親友ヒカリやクラスの女友達は感心した様子で歓声を上げる。

「アスカつてば、頭良いのね」

「これぐらい常識よ！」

アスカは腕を組んだまま堂々とそう言い切った。

「ちえつ、俺だってそのぐらい知っているのこさ」

ケンスケは面白くなさそうな顔で舌打ちした。

アスカはシンジに言いたい事を言って満足したのか、ヒカリ達と一緒に十一星座についての展示がされているコーナーへと行ってしまった。

「へえ、ヒカリは水瓶座なんだ」

「アスカは？」

「アタシは射手座よ」

アスカ達は自分の星座をお互いに報告し合っていた。

「ほら碇、俺達は他の所へ行こうぜ」

「うん」

不機嫌そうな顔のケンスケに促されて、シンジ達は宇宙関係の展示スペースから立ち去った。

その日の夜、シンジとアスカだけの2人の夕食が終わった後、葛城家にドイツからの国際電話が掛かって来た。

受話器を取ったシンジが言葉が分からず困惑していると、アスカがシンジから受話器を奪つて話し始めた。

時には笑い声を上げて楽しそうにドイツ語で話すアスカを、シンジはぼう然として見ていた。

「ふう」

疲れたようにため息をついて受話器を置いたアスカにシンジが疑問を口にする。

「ドイツに居るアスカの知り合いの人からだつたの？」

「そう、アタシの新しいママはドイツ語しか話せないのよ」

ユニゾン戦闘の特訓のために強制的に同居させられた時に、シンジとアスカは自分達の母親が小さい頃に命を落としている事はお互に話していた。

「アスカって、新しいお母さんが居たんだ」

「そう、血の繋がりは無いけど、身元引受けになつてくれたのよ」

「ドイツに家族が居るんだね」

「アンタの方はどうなのよ、司令とじやなくアリサートと暮らしているなんてさ」

アスカに尋ね返されたシンジは暗い表情になつて下を向いてつぶやく。

「母さんが死んだ時、父さんは僕を先生に預けて行ってしまったんだ

「まあエルフの総司令となれば忙しくて仕方が無い事なのかもね」

シンジの話を聞いてアスカはため息をついた。

「でも、先生は僕の面倒を見ててくれて居たとは言つてもやつぱり他人だよ。こつちに来てから一度も連絡が来ないし」

「そつか

「家に居てもお互に必要以上に顔を合わせようとしなかったし、1人暮らしとほとんど変わらなかつたよ」

シンジは悲しそうな目をしてやめ息を吐き出した後、テーブルの方に視線を送る。

「//サトさんと一緒に暮らし始めた前は、誰かと一緒に食事する事なんて無かつた……」

そこまで話したシンジは、アスカを見つめてつぶやく。

「アスカは良いよね、お母さんと仲が良さそう」

「そんな事無いわ、表面上を取り繕つたってアタシと今のママの間には壁のようなものがあるのよ。アンタと同じよ」

アスカは首を振つて否定した。

「アスカは違うじゃないか、遠く離れていてもこいつして気遣つて電話して来てくれるんだから」

「シンジだって、血の繋がつたパパが居るじゃない」

「きっと父さんは僕がいらなくなつたから捨てたんだ」

シンジが首を振りながら悲しそうにしつぶやくと、アスカはあきれた
よつてシンジを見つめる。

「それって、司令から直接言われたの？」

「いや、何も話そうとしない父さんから逃げてしまったから」

「アンタの勝手な思い込みって事もあるわけだ」

「そうかな……」

「全く情けないわね、しつかりしなさいよ」

「うん。……『ゴメン、ウジウジとした話をしちゃって』

アスカに励まされたシンジは心が少し軽くなつたよつた気持ちになつてアスカに笑みをこぼした。

それからしづらく経つた日、シンジは母親のユイの命日に父親のゲンドウと墓参りに行く約束をした。

父親のゲンドウが毎年行つている事を知つたシンジが、一緒に行きたいとゲンドウに伝えたのだ。

ゲンドウはシンジが来る事を拒否しなかつた。

しかし約束をした後、シンジはとても落ち着かない様子だった。

シンクロテストの間も、家に帰つて家事をしている時も、アスカと一緒に夕食を食べて居る時もソワソワしつぱなしだつた。

そんなシンジの姿に、アスカはイライラした様子で怒鳴りつける。

「まったく何をオドオドしてこるのよ。見ていろ」つままで落ち着かない気分になるじゃないの」

「だって、父さんと長い間2人きりで何を話せばいいのかわからなくて。変な事を言って嫌われたらどうしよう」

「アンタね、女の子とデートするんじゃないんだから」

アスカはあきれたようにため息をついた。

そしてアスカはシンジに思いつきり人差し指を突き立てる。

「そんな挙動不審な態度をとつていた方が、よっぽど気に障るわよ」

「そ、そうかな……」

ズバリ指摘されたシンジは気落ちした様子で下を向いた。

「アンタ、デートした事は無いの？」

「そ、そそそ、そんな事あるわけないじゃないか！ 女の子をデートに誘つた事もないし、誘われた事もないよ…」

アスカに言われて、シンジは顔を真つ赤にして否定した。そのシンジの慌てふりが面白いと、アスカはお腹を抱えて笑つた。

「そんなに笑う事無いじゃないか」

「ゴメンゴメン」

アスカは笑いすぎて出了涙を人差し指でぬぐいながらそう答えた。何か思いついたのか、アスカは手をポンと叩く。

「そうだ、アンタの上がり症を克服するためにデートでもしてみよつか

「えつ、でででデート…？」

アスカに提案されたシンジは、声を裏返せぬほどに驚いた。

「もしかしてアンタ、怖くてデートもできないの？」

「出来るよーとべりー、やつてやれりじゃないかー。」

挑発されたシンジはアスカにそつ答えた。

シンジの返事を聞いたアスカはニヤリと笑いを浮かべた。

チョシャ猫のようなアスカの笑顔を見て、シンジはアスカの思惑に乗せられた事に気が付いた。

「明日はちょうど日曜日だから、わっそくデートしましょ。 どんな物を買つてもらえるか今から楽しみ」

「そんな、ひどいよアスカ」

「授業料よ、授業料」

せっかく節約して貯めた小遣いをアスカに巻き上げられるのが日に浮かんだシンジは青い顔になった。

次の日の朝、着替えて居間にやつて来たアスカの姿にシンジは驚いた。

いつものラフな服装とは違つて、アスカはリボンをあしらつたワンピースを着ていた。

シンジの格好を見たアスカは、顔を真つ赤にしてシンジの顔をグーパンチで殴つた。

「アンタバカア！？ そんな格好でアタシとデートをするつもりだつたの？ アタシの事舐めているでしょー」

「そ、そんな事無いよー」

アスカに殴られてしりもちをついたシンジは顔を手で押さえながら困惑した顔で言い返した。

急いでシンジは部屋に戻つて着替え、アスカに平謝りしてどうにか許してもらえた。

葛城家の玄関を出たシンジはアスカに突然手を握られて驚いて飛び上がつた。

「デートなんだから、手を繋ぐのは当然でしょ」「う、うん」

シンジは緊張しながらアスカの手を握り返した。

アスカの手を握ったシンジは、自分が想像していたよりずっとアスカの手が堅かつた事に気が付いた。

少し前にエヴァに乗り始めた自分の手とは大違ひだ。

「何よ、アタシの手を撫でまわしたりして」「い、ごめん」

つい夢中になつてアスカの手の感触を確かめてしまつたようだ。シンジが正直に理由を話すと、アスカはエースパイロットなのだから当然よと胸を張つた。

そしてシンジから手を離したアスカは、今度はシンジと腕を組んだ。

「うわっ、どうして？」「この方が、もっと効果的な特訓になるからよ」

アスカと腕を組んで歩き出したシンジは、周囲の視線がとても気になつた。

自分達はカップルに見られているのだろうか。

シンジはアスカより少しだけ背が低かつた事もあって、きょうだい姉弟に見られているかもしれないと考えたりしていた。

そして買い物をして、映画を見て、ケーキ屋で観た映画の感想を話

しぐれと並んでデートの定番をこなした。

「じゃあ、そろそろ帰ろつか

ケーキ屋を出たシンジがアスカにそつ言つて、アスカは首を横に振る。

「ちょっと、まだデートは終わって無いわよ」

「えつ、まだ何かあるの？」

「シンジ、どこか景色のいい場所を知らない？」

アスカにそう尋ねられたシンジは、アスカを第三新東京市の街並みを一望できる展望台へと案内した。

「」はかつてミサトが使徒を倒したシンジに教えた場所だ。

「へえ、良い場所じゃない」

夕陽に照らされる第三新東京市の街並みを見て、アスカは感心したようにそつそつぶやいた。

「それで、ここで何をするの？」

「アンタねえ、そこまでアタシに言わせる気？ デートの最後にすることと言えば、キスに決まっているじゃない」

「き、キスっ！？」

アスカの言葉に驚いたシンジの声が裏返った。

「ほら、せっかく良いムードなんだからさ、しつかりしなさいよ」

「う、うん」

アスカに言われて、シンジは正面からアスカと向き合った。

「お互いの歯がぶつからないよ！」に、顔を傾けるのよ。後、鼻息がくすぐったいから興奮しないで、静かに息をして」

そう言つと、アスカは口を閉じてシンジに顔をゆっくりと近づけて行つた。

しかし、アスカの唇がシンジに到着する前に、シンジはアスカの体を押し返す。

「やつぱり、止めよ！」

「えつ！？」

突き離されたアスカが驚いて口を見開いた。

「やつぱり軽い気持ちでキスするのはいけないと思つんだ」

シンジがアスカの口を見つめてそう言い放つと、アスカはじつと顔を伏せて悔しそうに歯をかみしめる。

「……分かったわよ」

「じめん」

「謝らないでよ」

シンジとアスカは一言も話さずに葛城家へと直行した。

葛城家の玄関に足を踏み入れると、ミサトに出迎えられた。

タイミングが良いのか悪いのか、ミサトはネルフの仕事が早く終わつて帰宅していたのだ。

ミサトはシンジとアスカの服装を見ると、ニヤケ顔になる。

「おんやあ、シンちゃんとアスカ、今までデートして来たの?」「デートじゃないわよ、ただ暇潰しに映画を見て来ただけ」「それを世間一般ではデートって言うのよ。2人ともおめかしなんかしちゃって、気合が入っているじゃない」「からかわないで下さいよ」

アスカとシンジが止めても、ミサトはからかい続ける。

「それでそれで、キスなんかしちゃったの?」

ミサトがそう尋ねると、アスカは怒った顔で言い返す。

「アタシがバカシンジとキスなんて、あり得ないわよー。」「そう?」

「あの、ミサトさんもこれからどうかへ出掛け��んですか?」

シンジはミサトの服装を見てそう尋ねた。

「仕事が早く終わつたからね、これからリツコと加持と3人で飲みに行くのよ」

「えーっ、アタシも行きたい!」

「アスカはお酒は飲めないでしょ」

ミサトはそう言つて玄関を出て行つた。

その後の夕食の間、アスカはずつとイライラし通しだつた。

「ミサトったら、朝帰りするんぢやないでしょ?」「まさかあ、加持さんも一緒だし、大丈夫だよ」「だからよ」

夜遅くに、ベロベロに酔っぱらったミサトが加持に背負われて家へと帰つて来たのだった。

アスカとのデート特訓の成果か、シンジは墓参りで短いながらもゲンドウと会話を交わす事が出来た。

使徒との戦いにおいてもシンジはアスカ、レイの3人と力を合わせて勝利を重ね、ゲンドウから評価を得られるようになつた。積極的にシンクロテストなどの訓練をこなすようになったシンジは、シンクロ率を伸ばして行つた。

そして、ある日のシンクロテストでシンジのシンクロ率はついにアスカを追い越した。

「おめでとう、今日のシンクロテストのトップはシンジ君よ」
「シンちゃん、頑張つたじゃない」

リツ「!!」に褒められたシンジは、素直に喜んだ。

「ふん、でもテストの結果だけ良くてもね。実戦ではアタシの方が上よ」

「うん、アスカの足手まといにならないよう頑張るよ」

シンジはアスカに笑顔でそう答えた。

全てが良い方向に進んでいるとシンジは思つていたが、アスカの心境の変化に気がついていなかつた。

その次のシンクロテストから、アスカのシンクロ率は低下し始めた。焦れば焦るほどアスカのシンクロ率は不安定さを増して行く。

「大丈夫だよ、アスカの調子が悪い分は僕が頑張るから」

自信たっぷりにシンジがアスカに言つと、アスカは悔しそうに顔を歪ませた。

その後からシンジはアスカがいつも苛立つているように感じられた。学校でも、夕食の時でも、刺々しい言葉と空氣をまとつていて、部屋にこもつてしまう事も多くなつた。

シンジは自分がアスカに対して何かマズイ事をしてしまつたのかと考えたが、思い付かなかつた。

「そつか、加持さんか」

最近、加持がミサトを誘つ事が多くなり、アスカは加持の事が好きだと言つていたから面白くないのだと思つた。

シンジは仲が良さそうなミサトと加持の姿を嬉しく思つていたが、イライラしているアスカの姿を見ると心中は複雑だつた。いい加減に加持さんを追いかけるのを止めて他の子と付き合つてくれた方が良いのに……。

例えは僕とか……。

シンジはアスカと初めてデートをした時の事を思い返した。あの時は緊張し過ぎていたが、今考えるととても楽しい事のようと思えた。

もう1回アスカとデートをしてみたといと考へたが、シンジはまだアスカに告白する勇氣が出なかつた。

そして次に使徒が襲来した時、シンジはミサトにオフホンスを命じられた。

そこはエースパイロットを自称するアスカのいつものポジション。サポートに回される事になつたアスカは当然のように不満を述べる。

ミサトはシンジにもいろいろな経験を積ませたいのだと説明した。

「ふん、シンジなんかにオフェンスができるのかしら」

アスカの挑発的な言い方に、シンジはムッとした表情になる。

「やつてやる「ひじやないか」

シンジは怒氣を含みそつ言つて、パレットガンを装備して空中に浮遊する使徒へと近づいて行つた。

強氣なシンジの態度を見て、アスカは舌打ちして後へと続いた。その使徒との戦いは、初号機が黒い影に飲み込まれてしまつアクシデントがあつたものの、初号機単独で使徒を殲滅させた。

「あーあ、お1人で使徒を倒してしまわれるなんて、さすがエースパイロットのシンジ様ですわね」

「止めてよ、エースパイロットはアスカじやないか」

「いえいえ、アタクシなどシンジ様のお足下にも及びませんわ」

「アスカ、止めなさい」

その場でミサトに止められたものの、アスカは事あるごとに『シンジ様』と呼び続けた。

バカシンジと呼ばれる事は全く無くなり、家中でもアスカは夕食の時以外シンジと顔を合わせる事を避けるようになった。

「ゴメン、僕が調子に乗つたから悪いんだ」

夕食の席でシンジがアスカにそつ謝ると、アスカは自分の怒りをシンジにぶちまける。

「アタシはね、小さい頃からエヴァに乗っているのよ。それをぽつと出のアンタ何かに負けるなんて……！」

アスカはそう言つと、部屋の中に閉じこもつてしまつた。シンジは自分が知らないうちにアスカを傷つけてしまつていた事にショックを受けた。

今のシンジにはアスカを慰めるべき適切な言葉が全く思い浮かばない。

アスカのシンクロ率が復活する事をただ祈るだけだった。しかし、奇跡は起こらずその後のシンクロテストにおいてもアスカのシンクロ率は低迷を続けた。

ついにはアスカのシンクロ率は起動指数を割り込むようになつてしまつた。

そして、シンクロテストを行うシンジ達の前に1人の銀髪の少年がミサトに伴われて姿を現した。

「君は？」

「僕は渚カヲル、フォースチルドレンさ」

シンジの質問に、カヲルは笑顔を浮かべて答えた。

「彼には戦闘機のパイロットしに来てもらつたのよ」

ミサトがそう言つと、アスカとシンジの顔は真つ青になつた。ついに、来るべき時が来てしまつた。

「フン、アタシはお役御免つて事？」

「アスカ、今までお疲れ様」

「嫌よ、交代だなんて！ それにアタシの戦闘機にコイツを乗せるなんて……」

アスカは憎しみをこめた目でカラルを見つめた。

「どうやら僕は嫌われてしまったようだね」

アスカの差すような視線を受けてもカラルは涼しげな顔をしていた。カラルはネルフ本部に到着して早々にシンクロテストをする事になった。

その様子を固唾を飲んで見守るシンジ達。

そしてシンジ達の目の前でカラルは今までのアスカを超えるシンクロ率を簡単に出したのだった。

自分のシンクロ率を超える人物が2人も出現した。

それはアスカのプライドを激しく傷つける。

「そ、そんな……アタシは……」

アスカは手で頭を抱え込んでしゃがみこんで倒れてしまった。

そんなアスカをシンジが慌てて支える。

「アスカっ！」

「2人とも、今日の所は家に帰りなさい」

アスカの様子を見て、ミサトはシンジ達にそう告げた。

ネルフの諜報部の車に乗せられて葛城家へと戻ったシンジとアスカ。車の中でも、家に戻った後もアスカはずつと黙つて顔を伏せていた。シンジが声を掛けてもアスカは何も答えない。

困ったシンジは、自分の心も落ち着かせるためにチョロを弾き始め

た。

演奏に集中すると、心が洗われて行くような気がした。

シンジが気がつくと、アスカが立つてシンジの事を見つめていた。手を止めたシンジに、アスカはそつと続けるように促した。落ち着いたチョロの旋律はアスカの心も静めたのだろうか、アスカは目を閉じて聴いていた。

シンジもそんな穏やかなアスカの姿を見て安心して弾き続けた。

「アンタにこんな特技があつたなんてね、見直しちゃった」

「そんな、小さい頃から続けていてこの程度だから、恥ずかしいよ」

「いつから始めたの？」

「5歳の頃から、先生に勧められて」

「そう……」

シンジの答えを聞いて、アスカの表情はまた暗いものになった。そして小さな声でつぶやく。

「アタシがエヴァのパイロットの訓練を本格的に始めたのも、その歳くらいよ」

シンジはピートの時に握ったアスカの手の感触が堅かつた事を思い出した。

それは小さい頃からのアスカの努力の証しだった。

「ドイツではエースパイロットとして送り出されたのに、パイロットをクビだなんて。戻つたら、きっとみんなから白い目でみられるんでしょうね」

「アスカにはドイツに家族が居るじゃないか」

「ママはエヴァのパイロットのアタシを誇りに思つてくれているのよ？ 顔を合わせられるわけが無いじゃない」

「それって、アスカの勝手な思い込みじゃないの？」
「そうかもしれないけど……」

アスカはそう言って口をつぐんだ。

「ドイツに帰りたくないのなら、ここに居なよ」

「えつ、アンタ何を言つているのよ？」

シンジは社会科見学に行つた時のパンフレットを取り出し、冥王星のページをアスカに見せた。

「冥王星か、惑星から外された星ね。エヴァのパイロットを外されたアタシと同じ、人々から忘れ去られる存在ね」

アスカが悲しそうな顔でつぶやくと、シンジは首を振りて否定する。

「違う、冥王星は惑星から外されても今も太陽系の仲間じゃないか。だからエヴァのパイロットじゃなくなつてもアスカは僕の家族だよ」

「シンジ……」

アスカは目に涙をためて、シンジを見つめた。

「それに、肩書きなんて関係ないよ。冥王星は惑星と呼ばれたずつと昔から、そして今も変わらない。……アスカはアスカだよ」「アタシ、ドイツに戻つてママ達と向き合つてみようと思う、エヴァのパイロットじゃない”アスカ”自身として。……ありがと」「そんな、お礼を言われる事じゃないよ」

そして、アスカはシンジに見送られてドイツへと飛び立った。
シンジはアスカが母親と打ち解けあってくれる事を星空を見上げて
冥王星に祈るのだった。

あの使徒との戦いが終わってから10年。

エヴァンゲリオンのパイロットだつたシンジとアスカは再建された第三新東京市のコンフォート17の1世帯の部屋で同棲生活を送つてゐる。

保護者役のミサトは3年前にここを明け渡して出て行つた。

戦いが終結した直後から交際を始めたネルフのオペレータの日向マコトと結婚したからだつた。

加持リョウジと言つ恋人を失つた傷心のミサトは、マコトに励まされるうちに彼の愛を受け入れていつた。

今では3歳の男の子と、2歳の女の子の母親が板についている。専業主婦になつたミサトは休日を狙つてシンジとアスカが住むこの場所に、2人の子供を連れて遊びに來るのだ。

言葉を話せるようになつたミサトの子供達はシンジの事を『おじちゃん』、アスカを『おばちゃん』と呼んでなついていた。

シンジとアスカは苦笑しながら、ミサトの子供達を近くの公園に散歩に連れて行つたり、部屋でゲームの相手をして遊んで上げてあげていた。

そして、帰るのを渋つて泣きわめくミサトの子供達を見送つた後、シンジとアスカはリビングに散らかつたおもちゃを片付けて一息つくのだった。

「まったく、ミサトにも困っちゃうわね」

「うん、顔を合わせる度に結婚しろって言つて来るよね

アスカとシンジのいつものやり取り。

2人は仕事が忙しいとミサトに言い訳をしていた。

しかし、今日のアスカは違つた。

「ねえシンジ、そろそろ結婚しようか？」

軽い感じで話を切り出したアスカにシンジは驚く。

「え？」

「何よ、鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をして」

「だつて、アスカは今まで結婚を怖がつていたじゃないか」

「そうね……」

アスカはシンジの言葉にうなずいた。

今まで2人がずっと同棲状態だったのは、アスカがシンジのプロポーズを拒み続けていたからだつた。

シンジにはアスカの抱える不安が解つていた。

だからシンジもアスカの側を離れる事は無かつたのだ。

「アタシは誰かに愛を『えられる自信が持てなかつたわ。だけど…

…』

「うん、ミサトさんの子達だね」

シンジの言葉に、アスカはうなずく。

「小さい子つてやっぱり可愛いわね。あの子達の笑顔を見てるだけでアタシの心も優しく暖かくなつて来ちゃう」

「ミサトさんが口で説得するよりずっと効いたみたいだね」

アスカの顔が自然とほころぶのを見て、シンジも微笑みを浮かべた。

「それで急な話だけど、結婚は6月にしようと思つたのよ」

「ジュー・ブライドだね、僕も聞いたことあるよ」

「そう、6月に結婚した花嫁は幸せになれるって言い伝えよ、発祥は諸説あるけどね」

「アスカが安心できるなら大賛成だよ」

シンジは嬉しさに顔を上気させてしまういた。

「それで、日取りは6月6日にしようと思つたけど、どう?」

「アスカ、それって僕の誕生日だよね」

「そうよ、ベタだけど、今年の誕生日にはアタシをあげる……」

アスカは顔を真っ赤にしてシンジにそう言った。

恥じらうアスカの姿を見て、シンジは飛び上がつて喜んでアスカの両手を握る。

「ありがとうアスカ、とっても嬉しい誕生日プレゼントだよー。」

「こんなに喜んでくれると、アタシの方も嬉しいわ」

「じゃあ早速式場を予約しないとー!」

舞い上がつたシンジはすぐにパソコンに向かった。

しかし、しばらくインターネットをしていたシンジは渋い顔になつた。

「どこの式場も6月6日は予約が一杯だつたのだ。

「やつぱり、1年ぐらい前から予約は埋まつているわね」

「うん、さらに休日と大安が重なつている人気日だからね」

アスカとシンジは顔を見合わせて残念そうにため息をついた。

「じゃあ、6月じゃ無くても構わないわよ」

「そんな、せつかくなんだからさ」

あつさりと折れてしまつたアスカをシンジが励ました。

「でも、シンジにまた1年我慢させてしまつ事になるじゃない。」「めんね、アタシのワガママのせいでシンジに迷惑を掛け」「別にアスカが悪いわけじゃないよ」

悲しげな沈黙がリビングを支配した。

落ち込んだアスカを何とか元気付ける手は無いものかとシンジは考えを巡らし、顔を上げる。

「そうだ、父さんに頼めば何とかなるかもしねない」

シンジがそつぶやくと、アスカは苦い顔をした。

使徒との戦いが終わつた後から、アスカとゲンドウの仲は最悪だつたのだ。

人類補完計画を知つたアスカは、母親を失う事になる実験を見過したゲンドウの事を憎んだ。

頭を下げて謝るゲンドウを母親の仇とばかりに平手打ちを食らわし、それきり顔を合わせる事も無かつた。

シンジもアスカの前でゲンドウの事を話題にするのは避けていた。しかし、アスカの願いをかなえるためにシンジは伝家の宝刀を抜いたのだ。

「あ、アタシは嫌よ、そんな事で借りを作るなんてさ」

「そんな事言わないで、父さんに償いをさせるチャンスをくれないかな」

固い表情をしたアスカに、シンジは揉むように頬み込んだ。リビングに緊迫した空気が流れる。

アスカは腕組みをして考え込んでいた。

シンジは息を飲んでアスカの返事を待つた。

「いいわよ、アタシも子供じゃないんだし、いつまでもつむじを曲げているわけにはいかないわ」

「よかつた」

表情を和らげたアスカがそう言つと、シンジはホッとしたように胸をなで下ろした。

長く続いた平穏な生活は、アスカの心を軟化させていたのだ。

ただ仲直りするきっかけが今まで無かつたのかも知れない。

シンジはアスカの気持ちが変わらないうちにと、自分の携帯電話でゲンドウに電話を掛ける。

すると、小悪魔的な笑顔を浮かべたアスカはシンジから携帯電話を奪う。

「（）無沙汰しております、お父様」

アスカが電話でそう話すのを聞いてシンジは目を丸くして驚いた。しかし、電話を受けたゲンドウはもつと驚いて椅子から転がり落ちてしまつたようで、電話口の向こうで元副司令の冬用が慌てているのがアスカには聞こえた。

その様子を聞いたアスカは口元に手を当てて笑い声を押さえた。何とか落ち着きを取り戻したゲンドウはアスカに尋ねる。

アスカの母親の実験に加担してしまつた自分を赦してくれるのかと。ゲンドウの問いにアスカは穏やかに「はい」と答えた。

アスカの答えを聞いたゲンドウは感無量なのか、黙り込んだ。

そして、アスカはゆつくりとゲンドウに電話をした理由を話す。

アスカの話を聞いたゲンドウは興奮した口調で、すぐに式場を押さえると宣言した。

シンジとせつくりな反応に、アスカは苦笑する。

「でも、アタシ達のせいで誰が結婚式を挙げられなくなるのは気まずいので、強引な事はしないで下さい」

暴走しそうなゲンドウにアスカが釘を刺すと、ゲンドウはうなづいた。

そして、アスカはシンジと電話を代わった。
ゲンドウとの電話を終えたシンジに、アスカは冷やかすよつた笑みを浮かべて話し掛ける。

「司令はアンタを子供として愛していたのね」

「多分、アスカもだよ。男親は女の子が可愛いって言ひし」

「そう? でも、アタシは甘えるつもりは無いけどね」

「はは、僕だつて父さんとアスカがベタベタして居たら複雑な気分になるよ」

ゲンドウとアスカが和解すると、シンジとアスカは重荷が下りたようにはがすがしい気持ちになった。

そして、その日の夜も更けた頃、寝巻に着替えたアスカは顔を赤くしてシンジの服の袖を引っ張る。

「ねえ、アタシ達も勇気を出して次のステップに進むべきだと思わない?」

「そうだね」

アスカの言葉にシンジはうなずいて寝室へと入つて行つた。

その後、ゲンドウはネルフの大宴会場をシンジとアスカの結婚式の会場にして2人を少し困惑させた。

ネルフの中には多数の監視カメラやセンサーが存在している事は周知の事実だったので、全ての行動がMAGIに記録されるかもしれないと思つと緊張してしまつた。

結婚式では2人の馴れ初めとして、エヴァ初号機と式号機がユニゾン攻撃で使徒を撃破する映像が映し出された。

結婚後の2人の初めての共同作業は、ウェディングケーキとシンジのバースデーケーキが2段重ねになつたケーキへの入刀だった。拍手と共にシンジの誕生日を祝う声とシンジとアスカの結婚を祝う声が式に参加したゲンドウ達から投げ掛けられる。

「おめでとう」

「めでたいな」

「おめでとう」

新郎の席に座つたシンジは隣の新婦の席に座つたアスカと一緒に笑顔で言葉を返す。

「「ありがとうございます」」

シンジにとって6月6日は1年の内比べ物にならない程嬉しい日となつた。

シンジとアスカが高校生位で、少し性格的に成長していたらと仮定しての話です。

＜ネルフ本部 第一発令所＞

最後の使徒である渚カラルはシンジの乗る初号機によりせん滅された。

発令所に戻ってきた暗い表情のシンジを出迎えたのはミサトだつた。

「シンジ君、使徒せん滅お疲れ様」

ミサトはそう言つてシンジの肩に手を置いたが、シンジはそのままミサトの手をはねのけた。

そして、怒りを込めた視線を真つ直ぐにミサトにぶつける。

「何で、渚君が死ななければならんですか」

「それは……彼が使徒だからよ」

「解つてます……だけど、渚君は僕達人間とほとんど変わらなかつたじゃないですか」

冷酷に言い放つたミサトの言葉に、シンジは唇をかみしめて悔しがつた。

発令所に居る人間は、誰もがシンジがカラルと接触していた事を把握していた。

シンジの悲痛な姿を見ていたオペレーターの三人も、慰めの言葉は思い付かず、黙り込んでいた。

その静寂を破つたのはミサトの発言だつた。

「それでは司令、第一種戦闘配備を解除して構いませんね？」

「いや、このまま継続だ」

ゲンドウがミサトの質問にそう答えると、発令所は騒然となつた。オペレータの三人も戸惑つた顔をして見合わせた。

「使徒は全て居なくなつたんぢやないの！？」

「ああ、これで俺達の仕事も終わつたと思つたんだがな」

マヤヒシゲルに聞こえない小さな声で、難しい顔をしたマコトはボソリとつぶやく。

「まさか、補完計画が発動されるのか……？」

ネルフ周辺の状況を映し出していたモニターから次々と大きな爆音が聞こえて来た。

戦略自衛隊の部隊がネルフの軍事施設を破壊し、ネルフの軍や職員を急襲したのだ。

爆音と悲鳴が混じる地獄絵図のような風景を、発令所に居るミサトやシンジ、オペレータ達はぼう然と見ていた。

すると、副司令の冬月の前にある電話が突然鳴り始めた。

冬月はすぐに受話器を取り耳に当てるど、ゲンドウに告げる。

「碇、先程第一新東京市の日本政府がA-801を発令したぞ」

「何が起こつてゐるんですか、副司令！？」

「戦略自衛隊が攻めて來たのだよ、ネルフを滅ぼし我が物とするために」

ミサトの言葉に冬月がそう答えると、発令所の空氣の温度が下がつた。

「最後の敵は人間か」

ゲンドウが落ち着いた低い声でそうつぶやいた。
厳しい表情になったミサトは発令所に居るメンバーに言い聞かせる
ように大声を発する。

「多分、やつらの目的はエヴァとパイロットかー。」

「ミサトの言葉を聞いたマコトは端末を操作して、アスカの所在を確認する。

「セカンドチルドレンは303号病室です、第4グループが護衛中
アスカは使徒アラエルとの戦いで精神に異常をきたし、意識を失つ
て寝たきりの状態が続いていたのだ。」

「わかった、私がアスカを連れて行くわ」

マコトの報告を聞いたミサトはマコトを呼び止めた。

「ミサトさん、僕もアスカの所へ行かせてくださいー。」

シンジは頭を下げてミサトに頼み込んだ。

「だめよ、あなたは直ちに初号機へ乗つてもらわないと
「最後に一日で良いからアスカに会いたいんですー！」

ミサトはシンジの気持ちが痛い程解った。

この戦いは生きて帰れる保証は限りなく低い。
これが今生の別れになるかもしれない。

「わかつたわシンジ君、早くアスカの所へ行きましょ」

うなずいたミサトはシンジの手を取つて駆け出した。

「葛城三佐一！」

ゲンドウの制止する声にも振り返り、ミサトとシンジは発令所を出て行つた。

△ネルフ本部 303号室 △

非常用連絡通路を使って、ミサトとシンジは早くにアスカの病室にたどり着いた。

しかしここもいつまでも安全と言つわけにはいかない。

敵はネルフ本部の中心に向かって攻め込んで来て居るのだ。

シンジはベッドで眠るアスカに優しい口調で話し掛ける。

「ねえアスカ、君が眠つている間に大変な事が起つたんだよ」

シンジが話し掛けても、アスカは何の反応も示さない。

「渚君も助けられなかつたんだ、僕の守りたいものは次々と失われてしまふんだよ、トウジも、加持さんも、綾波も」

そこまで話したシンジは感極まり、目から涙を溢れさせた。
そしてそつとアスカの手を取る。

「……アスカの手は、まだ暖かい」

「シンジ君、そろそろ行かないとマズイわ」

タイミングをギリギリまで引き延ばしたミサトが辛そうな顔で声を掛けた。

ミサトの言葉にシンジはうなずいて、身を屈めてアスカの顔に自分の顔を近づける。

そして、シンジはアスカの唇に自分の唇をそつと重ねた。触れるか触れないかストレスの優しい物だつた。

「でも、僕にはまだ守りたいものがまだ残っているんだ。だから、僕は行つてくるよ」

顔を離したシンジはアスカに向かつてそつそつと微笑むと、他のネルフの職員に付き添われて病室を出て、初号機の所へ向かつた。シンジを見送ったミサトは、ベッドで寝ているアスカに向かつて話し掛ける。

「アスカ、いい加減に起きなさいよ。童話なら王子様のキスで眠り姫は目を覚ますはずじゃないの」

「起きろって言つては、アスカは何の反応も示さない。そんなアスカを見て、ミサトは段々と腹を立て始める。

「起きろって言つては聞こえないの！？」

ミサトはアスカの胸倉をつかんでアスカの顔を思いつきり平手打ちにした。

何度も何度もアスカの顔を叩く。

たちまちアスカの顔は真っ赤になつた。

「起きたさいー！」

周りの護衛が止めてもミサトは振り払ってアスカを叩き続けた。すると、アスカは目を開けて身体を震えさせて小さな声でつぶやく。

「怖い……」

「アスカっ！」

アスカが目を覚ましたのに気がついたミサトはアスカの腕をつかみ上げる。

「さあ、行くわよ」

「行くつて……どこへ？」

アスカが怯えた瞳でミサトに尋ねた。

「決まっているじゃない、エヴァのところだよ」

「嫌よつ、もうエヴァには乗りたくない！」

「しつかりしなさい、シンジ君一人に戦わせる気？」

ミサトは厳しい表情でそう言つと、アスカの顔を強引につかんで自分で自分に向けさせた。

しかし、やはりアスカはミサトから目を反らしてしまつ。

そのアスカの態度を見たミサトは強い失望感と激しい憤りを感じる。

「あの自信に満ちあふれたアスカはどこへ行つてしまつたのよー。」

「アタシは式号機に拒絶されたのよ……」

目を合わせようとしないアスカが弱々しくそう答えると、ミサトは首を横に振つて否定する。

「式号機がアスカを拒絶するはずが無いわ、心を閉ざしてしまったのはアスカ、あなたの方なのよ」

「そんなのどっちでも式号機に乗れない事には変わらないじゃない」「全然違うわ」

ミサトとアスカが言い争いをしていると、護衛をしていたネルフの職員達の悲鳴が聞こえてきた。

ついにここまで戦略自衛隊の侵攻部隊がやって來たのだ。

「セカンドチルドレンを発見した、こっちだ！」

「直ちに確保しろ、抵抗するなら殺しても構わん！」

戦略自衛隊の兵士達は容赦無くネルフの職員達に向かつて発砲する。

戦う意思の無い職員に向けてもだ。

ミサトの反撃により兵士達は倒されたが、側にいた護衛達は大怪我を負うか絶命していた。

目の前で人が死んで行く姿に、アスカは少なからずショックを受けた。

「式号機の所へ行くわよ、急いで！」

「嫌つ、どうせ死ぬのならここで死んでも同じよ…」

「まだそんな事を言つていいの…」

アスカがそう言つと、ミサトはアスカのほおを思いつきり叩いた。ミサトに叩かれたアスカは怯えた表情でミサトを見上げる。アスカにこのような表情をさせてしまったミサトは後悔し、優しくアスカに微笑みかける。

「私はね、アスカに生きる希望を持つて欲しいのよ」

そう言つてミサトは、アスカをしつかりと抱きしめた。

突然抱きしめられたアスカはミサトを振り払おうとはしなかつた。

「だからアスカには何としてでも式号機に乗つてもらいたいの。 そ
うすれば、きっと道が拓けるから」

ミサトの言葉を聞いたアスカは、無言だつたが大人しくミサトに従
う様子を示した。

そんなアスカの手を取つてミサトは迫りくる戦略自衛隊の兵士から
走つて逃げるのだった……。

〈ネルフ本部 地下駐車場〉

アスカを連れたミサトは地下駐車場までやつて來た。
そして自分の愛車が無事だと確認すると、アスカを助手席に乗り込
ませる。

「アスカ、これから私が知り得た全ての情報をあなたに話すわ」

ミサトはそう言つて、車のエンジンを掛けた。

そしてミサトは助手席に座るアスカに、ネルフが秘密裏に行つてい
た人類補完計画の内容を話した。

ミサトの話を、アスカは青い顔をして聞いていた。

「にわかに信じ難いとは思うけど、全て本当の話よ」

「ママがエヴァに取り込まれたって、そんな……」

アスカは頭を抱え込んでそうつぶやいた。

そんな時、今まで雑音が流れていたスピーカーから発令所に居るマコトの声が聞こえて来る。

「聞こえますか、葛城三佐」

「聞こえるわ、シンジ君の状況は？」

「現在、人造湖で戦自と戦闘中！」

「シンジ君、反撃して！」

マコトの背後で、マヤが初号機のシンジに指示している声が聞こえた。

どうやらシンジは戦略自衛隊に対して攻撃するのを困惑している様子だった。

シンジが戦っている事を知ったアスカは驚いて顔を上げる。

「シンジ君に伝えて、アスカが行くまで頑張れって」

ミサトは発令所のマコトにそう言つと、運転していた車のスピードを上げた。

そしてミサト達の行く手にも戦略自衛隊の部隊が現れるようになつた。

どうやらネルフ本部のかなり深部にまで侵攻部隊がやつて来ているようだつた。

発令所との連絡も再び途絶え、爆音が周囲に鳴り響く。

どれほどの被害が出ているのか、誰が無事であるのか全く把握できない。

戦略自衛隊の攻撃を受けてもミサトはただひたすら田舎地へと向かつて車を走らせた。

＜ネルフ本部 ジオフロント＞

その頃、戦略自衛隊の部隊と戦っていた初号機に乗るシンジは、ミサトから式号機を出撃させると聞いて狂ったように攻撃を始めた。病み上がりのアスカが乗った式号機を戦わせるわけにはいかない、こうなつたら自分の手で敵を全滅させると決意を固めたのだ。

「うおおっ！」

S2機関を取り込んだ初号機は、暴走したように戦略自衛隊の戦闘機、戦車、戦艦を次々となぎ倒して行った。

しかし、戦略自衛隊はネルフ本部や初号機への攻撃を止める事は無い。

ついにはZ2爆雷まで投下し、ネルフ本部のジオフロントを地上へと露出させた。

ATフィールドを張っている初号機はその強烈な衝撃にも耐えた。

「エヴァには一万一千枚の特殊装甲と、ATフィールドがあるんだから、いくら攻撃をしても無駄なんだよ！」

初号機のハントリープラグの中でシンジはそう叫んだ。

シンジの言葉通り、初号機の装甲に致命的なダメージを『えられる』ことなく戦略自衛隊の部隊はやられて行つた。

そして、戦略自衛隊の部隊の大部分がやられ、壊滅すると思われたその時、シンジの目の前の上空に輸送機にぶら下された九機の白いエヴァの姿が見えた。

「まさか、あれがミサトさんの言っていたエヴァシリーズ？」

ぼつ然とつぶやいたシンジの田の前で、九機の白いエヴァは輸送機から放出され、初号機を取り囲むように降り立つた。状況の厳しさを悟ったシンジは冷汗を垂らす。

「一対九か……圧倒的にこっちが不利だね」

しかし、自分が戦うしかないと知っているシンジは、田に力を入れてエヴァ 量産機をにらみつける。

「逃げちゃダメだ」

シンジはさうつぶやいて初号機で田の前のエヴァ 量産機に向かって突進して行つた。

〈ネルフ本部 R20Hレベータ〉

ミサトとアスカはついにR20Hレベータがある場所へとたどり着いた。

このHレベータに乗れば、式号機が收められているケージに三十秒で行ける。

しかし、ミサト達のすぐ背後まで戦略自衛隊の兵士達は迫つていた。そして、アスカを銃弾からかばつたミサトは背中にかなりの銃弾を受けてしまう。

アスカと共に何とかR20Hレベータに乗り込んだミサトだったが、かなりの出血をしており、このままでは助からない事は明白だった。

「ミサト、死なないでよ、アタシを置いて行かないでよ！」

下降するエレベーターの中で、目に涙を浮かべたアスカはミサトに声を掛けた。

「『めんなさい』アスカ、あなたを一人で行かせる事になつて……」

ミサトは苦しげに息をしながらアスカに答えた。

「ダメよ、無理をして喋っちゃ！」

「私はもう助からな『い』って、私自身が一番良く分かつて『いるわ……』

アスカ、もつとこつちへ来て」

アスカは無言でミサトの言葉につなずき、ミサトに身体を近づけた。すると、ミサトは残された力を振り絞つてアスカを抱きしめる。

「今までいろいろ厳しい事を言つて『めんなさい』。私はアスカを本当の妹のように思つていたのよ」

「うん、アタシもミサトを……」

「シンジ君を助けてあげて。きっとアスカの助けが必要だから。私がからの最後のお……ね……が……い」

ミサトはそこまで話すと、急に身体から力を抜いた。

アスカの背中にまわした腕もダラリと垂れた。

ミサトが事切れた事を知ったアスカは涙を流した。

それからしばらくしてエレベーターが停止する。

どうやら式号機の居るケージへと到着したようだ。

アスカは腕で涙をふいてエレベーターの外へと出た。

しかし、ケージへと到着すると式号機の姿はそこには無い。

アスカの目に映つたのは緊急避難措置プログラムが発令されたと表示するモニター。

式号機が戦略自衛隊の部隊の手に落ちる事を恐れたネルフは、式号機を地底湖の湖底へと沈めてしまっていたのだ。

「そんな……これじゃあ式号機に乗れないじゃないの。ミサト……シンジを助けに行くつて約束したのに……」

アスカの顔に絶望の色が広がった。
しかし、アスカは祈るような姿勢を取つて、念じながら湖底に居る式号機に向かつてつぶやいた。

「……お願い、ママっ！」

するとアスカの呼び声に応じるかのように、式号機が浮上し、水面に姿を現した。

「ママっ、//サトの言つ通り式号機の中に居たのねー。」

式号機の姿を見たアスカは、満面の笑みを浮かべた。
そして式号機のエントリーフラグがエヴァの側から開かれる。
式号機に乗り込んだアスカは、自分の母親の気持ちを感じる事が出来た。

これなら式号機とシンクロ出来ると、アスカは安心した。
ジオフロントへの射出カタパルトまで式号機を移動させたアスカは、エントリーフラグの中からそつと笑顔で式号機に話し掛ける。

「今までアタシを守つてくれてありがとう。……またアタシに力を貸して、ママ」

幸いにもカタパルトの電源は破壊を免れていて、式号機はジオフロントへと発進することが出来た。

〈ネルフ本部 ジオフロント〉

人造湖で量産型エヴァ九機と戦っていたシンジは、苦戦を強いられていた。

量産型エヴァの持つ武器は、ATフィールドを紙のようにあつさりと貫通し初号機に傷を負わせる。

シンジは必死に交わして致命傷は避けていたが、ダメージは着実に蓄積して行つた。

初号機の痛みが伝わり、意識が朦朧しかけていたシンジに、式号機からの通信が入る。

「お待たせ、シンジ……」

「アスカ、大丈夫なの！？」

モニターに映し出されたアスカの穏やかな笑顔を見たシンジは驚きの声を上げた。

何があつたのかシンジには理解できなかつたが、アスカはすっかりと立ち直つたように見えた。

「アスカ……よかつた……」

感激したシンジはアスカに聞こえないような小さな声でそつとつぶやく。

「シンジ、アタシも協力するから、こいつらを倒しちゃいましょう！」

「ダメだアスカ、こっちへ来ちゃ！」

「えつ、どうして…？」

厳しい表情でそう言い放ったシンジに、アスカは驚いて聞き返した。

「……僕は初号機を自爆させてやつらを倒す。出来るだけ引きつけてたくさんの相手を道連れにするつもりだよ。やつらの数が減ったら、きっとアスカも戦いやすくなるよ」

「バカシンジ、何を言つてゐるのよ！」

「最後にアスカと話せて良かつた」

シンジはそう言つて、武号機との通信を切つた。

「シンジ！」

武号機のアスカが真つ暗になつたモニターにいくら呼びかけても、返答は全く無い。

「あのバカつ、一人で格好つけちゃつて…！」

アスカはそう言つて初号機の元へ向かつて全力で走つた。走りながらアスカは浮かび上がつた疑惑について考える。

「おかしいわ、ネルフを壊滅させるだけならエヴァは九体も必要無いはず……」

アスカの頭の中で、ミサトに聞かされた人類補完計画の内容と、九体の量産型エヴァ達が繋がる。

「まさか、ゼーレはサードインパクトをここで起こすつもりなの…？」

胸騒ぎを覚えたアスカは、必死に初号機の元へと急いでいた。

シンジの乗る初号機が利用される予感がしたのだ。

今までバラバラの動きをしていた量産型エヴァ達が初号機を中心に陣形を整えているのを見て、アスカの予感は確信へと変わった。

量産型エヴァ達は一斉に初号機に向かって突進した。

それを目の前で見たアスカは初号機の自爆を止めようと叫び声を上げる。

「シンジ、ダメっ！」

アスカの制止も通じず、初号機からまぶしい光が広まった。

「シンジーーーっ！」

真っ白になつた視界に向かつて、アスカは涙を流しながら叫んだ。そして次の瞬間、アスカの意識と視界はブラックアウトした……。

＜？？？？？＞

「アスカ、アスカっ！」

「シンジ？」

「良かつた……」

横たわっていたアスカがうつすらと目を開けてそう答えると、シンジは嬉しそうに息をもらした。

「ちつとも良くないわよ、この大バカシンジー！」

怒ったアスカはシンジの胸倉をつかみ上げた。

そして、シンジを思いつきにらみつけて言い放つ。

「アタシを勝手に置き去りにするなんて、許さないんだからね！」

「ごめん……」

「でも、じつじてまた会えたんだから、シンジを責めるのはもう止めるわ」

アスカが優しい口調でそう言ってシンジをつかみ上げていた手を離すと、シンジは安心したように顔を上げて周りを見回した。二人の周囲に広がるのは紅い空と白い砂浜、紅い海が広がる世界。音は打ち寄せる波の音以外、何も聞こえなかつた。

「いつたい何が起こつてしまつたんだろう？　僕は初号機で自爆したはずなのに」

「きっと、サーディンパクトが起きてしまつたのよ。それで人類補完計画の通りになつてしまつた……」

「僕とアスカがこうして居られるのは？」

「多分、エヴァの中に居たから無事だつたのよ。アタシ達のママ達が守つてくれたんだわ」

「そつか……でも、僕が原因なんだろうね」

シンジもある程度察しあついていたのか、暗い顔でそつそつとやいた。

「そんな事は無いわ、これは仕組まれていた事なのよ

アスカはシンジの手を優しく握つて、シンジを励ました。

「どうちだつて同じだよ、僕が世界を滅ぼした元凶だつて事には代

わりは無いよ」

「いえ、アタシとシンジが『うしごとに』いると言つ事は、人類の補完は完全に行われていな『うしごとに』事になるわ」

「えつ？」

アスカの言葉を聞いたシンジは驚いてアスカを見つめた。

「もしかして、世界の姿が元に戻る可能性が残されているかもしないって事よ」

アスカが希望を持つてシンジを励まそうとするが、シンジの表情はさえない。

「元に戻つたとしても、僕は嬉しくないよ」

「どうしてよ？」

「だって、サーディンパクトが僕のせいで起こつたと知つたら、きっとみんなは僕を許してはくれないよ」

そう言って身体を震えさせるシンジの前で、アスカは太陽のような微笑みをたたえてシンジを見つめる。

「みんなシンジが悪いんだつて言つても、アタシはシンジを責めた
りなんかしないわ」

「アスカ……」

シンジの視線と、アスカの視線がぶつかつた。

「世界の全てを敵に回しても、アタシはシンジの側に居るから……」

アスカはそう言ってシンジを抱きしめると、シンジにそつと優しく

口づけをした……。

その二人の姿を紅いＬＣＬの海に溶け込んだ全人類が目撃していた。
彼らは何を思ったのだろうか、それを知る術は無い……。

使徒との戦いが終わり、碇シンジ、惣流・アスカ・ラングレー、綾波レイの3人はエヴァンゲリオン専属パイロットの任から解放された。

そしてシンジ達を待っていたのは平穏で平凡な中学生としての生活。第三新東京市は目的の変わったネルフを中心に、戦禍を乗り越えようとしていた。

激しくなった使徒との戦いで他の地域に避難していた人々も、少なからず戻つて来ていたのだ。

シンジ達の通う第壱中学校は、3年の1学期から再開された。それは早くシンジ達に中学生としての生活を送らせてあげたいと言うミサト達の努力の成果だつた。

しかし、高校受験を控える3年生にとっては1年はとても短い。それでもシンジ達は5月の連休までは取り戻した中学生の生活を満喫するかのように遊びに没頭した。

その余韻が冷めやらぬ6月のある日の事、シンジはアスカと商店街で買い物をしていた。

シンジとアスカは以前と変わらず葛城家でミサトと同居生活を続けて居たのだ。

だが今日の買い物はいつもの夕食と違つて量が多かつた。

それは葛城家のリビングでシンジの誕生日パーティをやるからだ。最初はレイとヒカリとアスカが料理を担当し、トウジとケンスケがシンジの材料の調達に付き合つはずだつた。

しかし、アスカはこの前の家庭科の調理実習で中は生焼け、表面は黒こげのハンバーグを披露。

トウジのカレー やケンスケの野菜炒めの方が十分おいしいという結果に、ヒカリも苦笑するしか無かつた。

そこでアスカは名譽挽回のために買い出しに立候補した。

「どうせアタシは暴力女よ、鈴原も相田も、アタシの分まで料理を作つてあげればいいでしょう!」

アスカは怒つた様子でトウジとケンスケの同行を拒否したが、これは一部にアスカの思いやりが込められているのかもしないとシンジは思った。

トウジとケンスケは前にシンジに得意料理を食べさせると言つていたからだつた。

そんなアスカの性格を知つてはいるシンジは苦笑した。だがアスカだけで全ての食材を買つて来れるはずは無く、誕生日を祝つてもらう側のシンジがアスカの荷物持ちの手伝いをするとおかしな事になつてしまつた。

そしてシンジにはたくさんの食材を持たせて、自分は大きなケーキの箱を持っているだけと言うのもまたアスカらしい。

「でも、そんな高級なケーキにしなくても良かつたんじゃないかな」「つるさいわね、アタシが選んだケーキに文句があるの?」

ケーキ屋でアスカは、イチゴのたつぷりと詰まつたケーキを選んだ。しかし、そのケーキの値段を聞いたシンジは田玉が飛び出るほど驚いた。

よりによつてアスカが選んだケーキは特選の大粒の高級イチゴをふんだんに使つたものだつたのだ。

ミサトから誕生日パーティーのために貰つたお金では足りなかつた。

「アスカ、予算が足りないから他のケーキにしようよ

「妥協したら負けを認める事になるわ、そんなの悔しいじゃない!」

シンジがこつそりアスカに耳打ちすると、アスカは毅然とした表情

で首を振った。

そして自分の財布からお金を取り出して店員に支払った。

そのアスカの行動にシンジは開いた口が塞がらなかつた。

アスカの買い物に付き合わされると、シンジが買わされる事が多かつたのに、ケチなアスカがどうして？ と驚愕したのだ。

アスカがケチだと言うのはシンジの思い違いで、シンジがアスカの女心を見抜けなかつただけなのだが。

シンジはアスカは負けず嫌いで、言つてしまつた勢いでケーキを買つてしまつたのだろうと思つて納得した。

その推理はだいたい合つていた。

アスカもアスカで、シンジに渡す誕生日プレゼントを用意できていなかつたので、偶然とは言えこつして渡す事ができて安心していた。シンジは自分で何が欲しいと主張するタイプではない。

もちろん、高級なチョコを欲しがつていたのは知つていたが、さすがにそれはアスカの小遣いでは手が出ない。

手編みのマフラーや手料理なんて出来っこないと諦めた。

「アタシのおごりなんだからね、心して味わいなさいよ」

「うん、みんなに言うと笑われるかもしれないと黙つていたけど僕はイチゴが好きだつたんだ」

「そ、そう、それは良かつたじゃない」

シンジの笑顔を見て、アスカは照れ臭そうに顔を背けた。

葛城家の帰り道を歩くシンジとアスカは、行く手の上空に灰色の雲が広がつてゐるのに気がつく。

「家に戻るまでに降られるかな？」

「走るわよ！」

「待つてよアスカ！」

たくさんの荷物を抱えているシンジは顔を真っ赤にして汗を流し、息を切らせながら必死にケーキの箱だけを持ったアスカを追いかけた。

しかし、無情にも数分で雨は降り出した。

「ほらっ、シンジがノロノロしているから降り出したじゃなーのー。」「そ、そんな事言われたって……」

このまま立ちつくしていたら2人ともびしょ濡れになってしまつ。シンジとアスカは近くの公園の樹の下で雨宿りをする事になつた。

「あーあ、すっかり濡れちゃつた」

この日アスカは白いブラウスを着ていた。

当然濡れてしまつとともに面倒な事になつてしまつ。

「シンジ、ずっとあひを向こでなさいよ
「分かってるよ」

シンジはすぐ側に立つアスカにドギマギしながら、食材が濡れないように気にしながら立つていた。

「……すぐに通り過ぎるわよね？」

「そうじゃないと困るな、食材が無いとみんなも料理を始められないだろ?」

降り出した雨は弱まるどころか、むしろ激しさを増していくようになつた。シンジとアスカは無言で空を見上げていた。

その沈黙に耐えきれなくなったのか、アスカが口を開く。

「……ねえシンジ、アタシ達が一緒にエヴァに乗つて戦つた事も、今こつして2人で居る事も、この雨みたいに遠い思い出になつて通り過ぎて行つちゃうのよね」

「アスカ？」

沈んだ声で話し掛けってきたアスカに、シンジは驚いて振り返つた。

「小さい頃こママが居なくなつちゃつてから、アタシはずつと独りぼつちのままだと思つてた」

シンジはアスカの話に口を挟まず、じつと瞳を見つめていた。

「だけど、気が付いたらいつの間にかアタシの側にはシンジが居た。アタシがパイロット失格だつて言られてヤケになつてた時も、ずっとアタシを見ていてくれた」

アスカに見つめ返されてそう言われたシンジは、体中がかゆくなるような照れ臭い気持ちでいっぱいになつた。

しかし、アスカは真剣に話しているのだからシンジは口を反りじつて逃げてしまつわけにはいかないと思つてこらえた。

「でもね、優しくしてくれたママの想い出がアタシの中で薄れて行つてしまふのを感じると悲しくなつちゃうのよ。どんなに優しくされても遠く離れてしまつと、消えて無くなつてしまふのかなって」

「そう言つてうつむいたアスカに、シンジはどんな言葉を掛ければ良いか迷つた。

そんなシンジの心境を察して、アスカはため息をつきながら謝る。

「悪かったわね、せっかくの誕生日なのにこんな濡っぽい話をしてシンジに迷惑かけて」

「そんな事無いよ、アスカがこうしてありのままを話してくれて嬉しかったよ。雨って不思議な気分にさせてくれるよね」

シンジがそう言つと、アスカはうつむいていた顔を上げてシンジを見つめた。

「アスカが話してくれたから僕も話すね。僕もアスカが居てくれて助かってるんだ。だつて、アスカは僕にいつもたくさん元気をくれるから」

「な、何を言つてるのよバカシンジ、アタシはアンタがあまりにウジウジして情けないから気合を入れてやつてるだけよ」

笑顔でそう言ひ放つシンジに、アスカは顔を真っ赤にしてそう言ひ返した。

「だからアスカ、お願い中学を卒業してもドイツへ帰つてりしないでよ」

「どうしてよ?」

シンジの言葉の意味は解つていたが、アスカは尋ねた。

「アスカにはこれからもずっと側にいて欲しいんだ。笑うかもしけないけど、アスカと同じ高校へ通つて思い出を作つて行きたいのが僕のありのままの気持ちなんだ」

「じゃあ、身体を張つてアタシを引き止めてみせてよ

「……うん」

アスカの言葉にシンジはうなずいた。

そしてシンジとアスカはしばらくの間黙つて見つめ合つていた。

激しい雨音が周囲に響いている。

それ以上言葉は要らなかつた。

持つていた荷物を置いたシンジとアスカは雨が降り終るまで抱き合つていた。

雨が止んだ後、2人の明日を祝福するかのように綺麗な虹が空にかかるつていた。

俺が初めてハルヒのポニーテール姿を見たのは、あの閉鎖空間に巻き込まれた翌日の教室での事だった。

その時のハルヒは新学期にそれまで伸ばしていた髪を切っちゃったもんだから、ポニーテールと言えるのか怪しいもんだつたがな。やはり閉鎖空間でハルヒにキスをする前に何を言って良いのか解らなくて口走ってしまった言葉が原因なんだろうな。

お前は偶然ポニー テールもどきの髪型にしたと言うが、無理があるぞ。

やっぱりあの頃から少しでも俺の事を意識し始めていたんじゃないのか？

長門に閉鎖空間からの脱出方法を聞かされた時は驚いたよ。

それが俺がハルヒを意識し始めたきっかけには相違無い。

俺はまるっきり好きでも無い女にキスをするなんて芸当が出来るほど器用では無いからな。

次にハルヒのポニーテール姿を見たのは七夕も迫った七月の事だ。喜緑さんがSOS団の部室を訪れ、俺達は行方不明になつたコンピ研の部長氏の部屋へ行き調査する事になつた。

そこでもハルヒは傍若無人に振る舞い、冷蔵庫の中を漁りわらび餅を食べてしまふわ、勝手に部長氏のパソコンのワードライブを覗いてしまうわやりたい放題だった。

部長氏は長門と古泉の活躍によつて閉鎖空間から救い出せたわけだが、ハルヒは部長氏に報酬としてさらにパソコンを要求したのだ。そして部長氏が拒否すると、ハルヒは例によつて脅迫を始めやがつた！

「そう、それならあんたが部屋のパソコンで見たサイトの履歴を暴露するわ。それとも、Dドライブの中身の方が良いかしら？」

「や、止めてくれ！」

部長氏はすでにハルヒからパソコンを一台奪われている。こんな悪習が何回も通じるとハルヒのやつに味を占めさせたはいけない、さすがに部長氏がかわいそうになってしまった。そこで俺はハルヒを止める事にした。

「何よキヨン、団長に盾つくなんていい度胸しているわね！」

いつもならハルヒの迫力に圧されてしまつたが、今回の俺は本気だつた。

「ハルヒ、自分の欲しいものが何でも手に入ると思ったら大間違いだぞ！ 他人から無理やり奪い取るなんて言語道断だ！」

側に居た古泉の顔色が変わること無視して、俺はハルヒに説教を始めた。

ハルヒは口をアヒルみたいにとがらせて聞いていた。

「わかったわよ、ただパソコンが欲しいなって言つてみただけ

不機嫌そうにハルヒはそう言つと、コンピ研の部室を出て行つた。その後のハルヒは団長席で静かに黙り込んでいた。

突然「帰る」と一言つぶやき、俺と田を呟わせる事無く部室を出て行つた。

「涼宮さんはすっかりつむじを曲げてしまられたようですね

「古泉、あんまりハルヒを甘やかすな」

俺は目の前のハルヒの横暴を見過ごした古泉に腹が立っていた。しかし、古泉はいつもの微笑みを俺に返すだけだった。その日の翌日、ハルヒは教室の自分の席で面白くなさそうな顔で頬杖をついていた。

ハルヒの髪型はポニー テールだった。

この時の俺は、まだハルヒの意図をくみ取れる程では無かった。たぶん、気まぐれでポニー テールにしたのだろうと結論を出した。いや、心の底ではひょっとしたらと疑問を持っていたのだが、否定する気持ちの方が強かつたんだ。

俺が決定的にそれを確信したのは文化祭に向けた映画撮影をする最中での事だった。

ハルヒは文化祭においてSOS団で映画を公開すると言い出して、俺達を巻き込んだ。

俺もハルヒの提案に魅力を感じないわけでは無い。だから映画撮影そのものには反対はしなかった。

しかし、俺達SOS団のメンバーを人形だと言われた時は本当に腹が立つた。

俺達SOS団は仲間じゃなかつたのかよ！

そう思っていた俺は悔しくて、古泉が止めるより早くハルヒを思いつきりぶん殴つていた。

殴られたハルヒは目を丸くして俺を見ていた。ハルヒに驚かされる事は日常茶飯事だが、ハルヒが驚くのは珍しいから俺の方が驚いちまつたぜ。

そしてその後に見せたハルヒの表情は、俺を驚愕させた。ハルヒは目から涙を流して顔を真っ赤にして怒りだした。

それはまるで子供が癪癪かんしゃくを起こした様だつた。

そしてハルヒは腕に着けていた“超監督”的腕章を叩き付けて俺達の前から立ち去つて行つた。

俺達はハルヒに何も声を掛ける事は出来なかつた。ハルヒの姿が消えた後、古泉はいつに無く真剣な眼差しで俺をにらみつけて来る。

「いったいどういうつもりですか、涼宮さんに手を上げるなんて?」「じゃあ黙つてハルヒの言う通りにしていいのか?」「その通りです、我々は涼宮さんの精神安定剤なのですから」「だからつて、ハルヒを腫れ物に触るよう投げ事は俺には出来ん」「僕はとてもあなたの考えには賛成できませんよ」

古泉はハルヒが中学生の時散々振り回されているんだからな、そんな先入観を持つて恐れてしまうのは解る。

でも、少しばかりのやつを信じてやつても良いんじやないか?あいつも自分で気付いても良い頃だ。

地面に置き去りにされた“超監督”的腕章を拾い上げながら想像していた。

明日の朝、ハルヒは教室でポーテール姿で俺を待つてゐるだろうと。そしてそれは予想通りになつた。

ハルヒのその姿を見た俺は、笑い出したくなつた。お前は何て不器用なやつなんだ。

俺にはお前が謝つてゐる事は解つてゐるが、ハルヒ。だから俺はもうお前を責める事はないぜ。

「ハルヒ、これを落として行つたぞ」

俺はさりげない仕草でハルヒに“超監督”的腕章を返してやつた。

腕章を受け取ったハルヒは太陽のような笑顔になつて元氣を取り戻した。

その日の放課後も映画の撮影が再開されたのは言つまでもない。

「キヨン、早く来なさい！ 水が冷たくて気持ち良いわよー。」

ポニー・テールで水着姿のハルヒがそう言つて俺を手招きした。夏休みを目前に控えた7月7日、俺達は海に来ている。

周りには長門や古泉、朝比奈さんの姿は無い。

なぜかと言えば、俺とハルヒは長門や古泉、朝比奈さん達と違う大学に進学したからだ。

俺とハルヒは世間一般で言つて「アーティスト」と言つものをしているからだ。そして、ハルヒは今日だけでなく昨日もおとといもその前も、ずっと髪型はポニー・テールだ。

でも、俺達の間には別に困る事は無いんだ。

「悪かつたわね、アンタが課題の締め切りに追われていたのに海に出掛けたい何てワガママ言つてさ」

「良いんだ、そのおかげで俺も課題を早く完成させることができたからな。補講の心配が無くなつたんだ、今日は思いっきり遊ぶぞ！」

……だつて、こつしてハルヒは素直に謝る事が出来るようになつたからな。

それにハルヒはこんな穏やかな笑顔を浮かべられるようになつたし、ポニー・テールで魅力は136%に上がつた。

過去の俺が今の俺を見たら凄い羨ましがるだろう。

そう言えば今日はポニー・テールの日だったな。

由来は少し強引な気もするが、ポニー・テールを考えついた人物に感

謝
だ。

使徒との戦いを終えてエヴァンゲリオンのパイロットの責務から解放されたシンジとアスカは、筑波にある民間企業の研究所で働いていた。

そのままネルフで働き続けるかとゲンドウに勧められたのだが、2人はそれを断つた。

そして高校、大学、大学院と進学したシンジとアスカが選んだ道は研究者としての道だつた。

人工進化研究所と名前を変えたネルフからも誘いを受けたが、シンジとアスカはこの研究所を選んだ。

ここで功績が認められたアスカは専用の研究室を持つに至り、シンジは雑用をまとめる助手の立場に甘んじていた。

シンジとアスカが結婚していると知っている同じ研究所の所員の中には、シンジの立場をバカにして笑う者も居る。

しかし、シンジは職場でアスカより立場が下と言う事に、何の不満も感じていなかつた。

何よりも家庭での生活に充実感を覚えていたからだ。

ある晴れた日の事、休暇を取ったシンジとアスカは2人の子供を連れて近くの利根川の河川敷に遊びに来ていた。

周囲には葦が生い茂り、土手は草地で覆われていた。

岸辺には小魚を取るための漁師の網が仕掛けられていて、ちらほらと釣り人の姿が見える。

「こ」の辺りはたっぷりと自然が残つてゐるわね

「そうだね、ジオフロントは人間の手によつて都合良く作られた縁

と言つた感じがしたよね」

陽の光を浴びて気持ち良さそうに伸びをするアスカ。
そのアスカには今年で2歳になる娘のユキが抱きついている。
シンジは右手に網を持ち、左手で3歳になる息子のゲンキの手を引いて歩いていた。

「あつ、シンジ！」

アスカが葦の間に浮かぶ小さな丸太を指差した。
シンジが視線を向けると、そこでは小さなカメが甲羅干しをしている。

「ミドリガメの赤ん坊だね」

「カメさんだー」

言葉を覚え始めたばかりのゲンキが嬉しそうに歓声を上げた。

「かみついたりしないの？」

「かみつくのはカミツキカメやワニカメだよ」

「それじゃあ、あのカメを捕つてよ」

「よしつ」

しかし、シンジがカメの乗る丸太を岸边に引き寄せた時は小さなミドリガメは丸太の上から姿を消していた。

「きつと水の中に潜つてしまつたんだ」

「そう、残念ね」

「こっちの方へ来て居れば捕まえる事が出来るんだけどね」

「カメさんはー？」

そう問い合わせるユキに、シンジは優しく微笑みかける。

「また後で捕まえられるかもしだいよ」

「そうなの？」

「うん、カメは甲羅干しをするために地上に出なければいけないからね」

「ふーん、ずっと水の中に居るわけじゃないんだ」

シンジの説明に、アスカは感心したようにうなずいた。

その後岸辺をうろついたシンジは、綱でターシを2匹捕まえる。

「ほら、こっちがゲンキの分で、これがユキの分だよ
「パパとママの分はー？」

ユキにそう言われたシンジはクスクスと笑った後、またターシを新たに2匹捕まえるのだった。

「ねえ、あっちに居る人達は何を釣っているの？」

「多分、マブナとかヘラブナだろうね。そうだ、ライギョなんかも捕まえられるかもしね、ちょっと行って来るよ」

そうアスカ達に告げると、シンジは綱を持って歩いて歩いてしまった。

「まったく、パパってばアンタ達に良い所を見せようと張り切っちゃって」

豆粒のよつになってしまったシンジの姿を見て、アスカはゲンキとユキにそう語りかけた。

「うーん、オタマジャクシしか捕まえられなかつたよ」

手ぶらで戻ってきたシンジは、アスカ達に向かつて少し残念そうにつぶやいた。

しかし、そんなシンジに幸運が舞い降りた。

先程の小さなミドリガメが同じ場所で甲羅干しをしていたのだ。そのチャンスを逃さず、シンジはミドリガメを捕まえる事に成功する。

「やるじゃない、シンジー！」

「す、」「ーー」

アスカとゲンキに褒められたシンジは少し照れくさそうに笑う。

「じゃあ、次はこのカメの餌を取らないとね」

「カメの餌つて何？」

「ウシガエルとかかな」

「カエルう！？ 気持ち悪い」

シンジはそんなアスカのつぶやきを聞いて苦笑した。

そしてシンジは捕つた小さなミドリガメをアスカに預けて、水田の用水路に向かう。

この辺りの用水路はコンクリートで固められている事は無く、自然にあふれていた。

水面を眺めていたシンジは何かを見つけたのか、用水路に何回か網を入れるが、捕れたのはマブナの死体と小さなヘラブナだった。

「小さなメダカが2匹、追いかけっこをしているのが見えたんだけどね」

「へえ、メダカが居るなんて、この辺りの水は澄んでいるのね」

その後もメダカを狙つて用水路をウロウロするシンジの姿を見ていたアスカは、持つていたミドリカメが甲羅から首を出して辺りを見回しているのに気付く。

「ふふ、逃げようとしているのね」

ゲンキとコキもそのカメの様子が面白いのか、楽しそうに甲羅を突いていた。

そして、2時間ほど河川敷や水田でねばつたシンジだったが、結局メダカを捕まえる事は出来なかつた。

「水草が生えて居たら、そこに網を入れれば捕まえられるんだけどね」

「やっぱり、田んぼにあげる水なんだから薬とか少し入つているんじゃないの?」

釣果はカメとターシだけだつたが、たっぷりと遊んだシンジ達は家へと帰るのだった。

家に帰つて夕食の時間になると、ゲンキとコキはシンジにテレビゲームをやるようにせがんだ。

それは、銃の形をした専用コントローラを使って標的を撃ち落とすゲームだった。

「パパ、ゲームやってー」

「ママもー」

「もう、ゲームはもう飯を食べてからでしょ?」

コキに腕を引っ張られたアスカは、そう言いながらもゲーム機の口

ントローラを手にした。

「田標をセンターに入れてスイッチ……田標をセンターに入れてスイッチ……」

このゲームはいつもシンジの圧勝だった。

アスカはすぐに両手を上げて降参のポーズを取る。

「やれやれ、射撃はシンジには敵わないわね」

「パパ、つよいー」

褒められたシンジはくすぐったそうに微笑んだ。

そして、満足したゲンキとユキは夕食を摂ると、眠ってしまうのだった。

「ふふっ、今日のシンジはすっかりゲンキとユキのヒーローね」

「喜んでくれて良かつたよ」

アスカが優しくシンジに微笑みかけると、シンジは穏やかな笑顔を返した。

「僕は小さい頃、ずっと一人で遊ぶ事が多かったからね。田んぼで魚とか虫を捕まえてばかり居たんだよ」

「シンジ……」

シンジの言葉を聞いたアスカが悲しそうな瞳でシンジを見つめると、シンジは首を横に振つてアスカに語りかける。

「アスカ、そんな顔をしないでよ。僕はそんな経験を父親となつた今になつて活かす事が出来て嬉しいんだから」

「そつか、シンジがそう思つならそれで良いわ」

シンジがそう言つと、アスカは納得したようにそりつぶやいて明るく微笑みかけた。

親戚に預けられて孤独な少年時代を送り、エヴァンゲリオンのパイロットとして厳しい訓練をさせられたのは悲しい経験だ。しかし、こうしてシンジはその経験を楽しいものに転化させている。第三新東京市では無く自然豊かな筑波の地に住んで働くこと2人が決意したのもシンジの希望があつての事だつた。

シンジとアスカがリビングでゆつたりとした時間を過ごしていると、シンジの携帯電話が鳴る。

「電話は父さんからだつたよ。贈つたネクタイを気に入つてもうられたみたいだ」

「そう、良かつたわね」

シンジとアスカは父の日のプレゼントとしてゲンドウにネクタイを贈つていた。

「ねえ、何でシンジはそんなに司令に感謝しているの？　だつて、司令はお世辞でも良い父親だ何て言えないじゃない」

「はは、アスカはハツキリと言つね」

シンジはアスカの言葉に苦笑した。

シンジがゲンドウに深く感謝をしている事は自分の子供にゲンキと言つ名前をつけた事からも感じられる。

「父さんにとって僕は利用するだけの存在だつたかもしれないけど、

それだけじゃない気がするんだ。それに……」

「それに？」

「父さんが僕をエヴァンゲリオンのパイロットに選んでくれたから、僕はアスカと出会つ事が出来たんだ。だから僕は父さんにいくら感謝しても感謝しきれないぐらいだよ」

シンジの言葉を聞いたアスカは沸騰したよつに顔を真つ赤に染める。

「な、なんて事を言つのよ、バカシンジ！」

そんな事を言つアスカのほおは嬉しさで緩み切つていた。

ミサトに見送られ、アスカを助けるためにエヴァ 初号機で量産機の輪の中へ飛び込んだシンジ。

その救援はギリギリのタイミングで間に合つた。

自分を助けると言つシンジの言葉を聞いて、アスカは式号機のエン

トリーブラグの中で歓喜の涙を流した。

しかし、現実は非情な物だ。

すでに動けなくなつっていた式号機はロンギヌスの槍の餌食となり、シンジの乗る初号機も量産機に捕らえられた。

そして、空中に描かれる巨大な光る紋様。

シンジ達の奮闘もむなしく、ゼーレの人類補完計画のシナリオ通りにサーデインパクトは起こつてしまつた。

碧き世界は紅い空に包まれ、人類すべての人間は溶け合い、紅い海となつてしまつた。

ただ2人の例外、碇シンジと惣流アスカラングレーを除いて。

世界の姿がすつかり様変わりしたのを目の当たりにしたシンジの視線はしばらくの間、虚空をさまよつていた。

打ち寄せる波の音しか聞こえないこの奇妙な空間は不思議とシンジの心を落ち着かせて行く。

「あれは、アスカ！？」

シンジは白い砂浜に倒れているプラグスーツ姿のアスカを見つけると期待と不安を抱きながら駆け寄つた。

ロンギヌスの槍に串刺しにされる式号機の姿と、アスカの絶叫が頭にこびりついていたからだ。

幸いにも、アスカは気を失つていいだけで無傷だった。

アスカの無事に、シンジは目を輝かせる。

シンジはアスカを起こそうと、肩をつかんで振り動かした。揺さぶられたアスカがゆっくりと目を開くと、シンジは嬉しそうな笑顔になる。

「よかつたアスカ、僕達は助かつたみたいだよ！」

テンションの上がったシンジとは対照的に、起き上がったアスカは周囲を見回すと冷ややかな表情でシンジを見つめる。

「アンタ、馬鹿……？ こんな変な世界になっちゃって、どこが助かつたって言うのよ」

「でも、僕達はこうして生きているんだし」

シンジは氣弱そうな表情でアスカに言い返した。

しかし、シンジも段々とこの波の音しか聞こえてこない世界を不気味に思つて来た。

そして頭の中に浮かんだ不安な懸念をアスカに話す。

「もしかして、サードインパクトが起きてしまったのかな？」

「ええ、多分そうよ」

シンジの質問にアスカはうなずいた。

さらにアスカは皮肉めいた言い方で言葉を続ける。

「加持さんが言つていた、人類補完計画は実行されてしまったんだわ。アタシ達が補完されずに済んだのはどういうカラクリなんだかわからぬけどね」

「そんな……」

予想していた事とは言え、シンジは大きく落胆してうなだれた。

「アタシ達のして来た事は、全部無駄に終わったのよ」

アスカはそう言つてシンジに背中を向けると、海へと向かつて歩き出した。

驚いたシンジは慌ててアスカを追いかける。

シンジはアスカが紅い海に腰まで浸かり始めた所で追い付き、アスカの腕をつかむ事が出来た。

「アスカ、一体何をするつもりだよ！？」

「決まつてるじゃない、」のまま海の中へ入るのよ

アスカは振り返らずに淡々とした口調でそう答えた。

そんなアスカの言葉を聞いたシンジはアスカをそれ以上行かせないと肩をつかんで連れ戻そうとする。

「アスカ、死んじゃダメだよ！」

「うるさい、生きて居たつて仕方が無いじゃないの！」

怒ったアスカは振り返つてシンジに向かつてそう言つて放つた。

そのアスカの瞳には涙が溜まつてゐる。

悲しみと悔しさに満ちたアスカの表情を見たシンジは何も慰めの言葉が出て来なかつた。

こんな時、加持さんだつたらアスカにどんな言葉を掛けるだらう…

…。

シンジがそう考えた時だつた。

シンジの頭の中に直接、加持の言葉が飛び込んで來た。

「おいおいアスカ、何を言つてゐんだ

「加持さん！？」

アスカにも加持の声が聞こえているらしく、驚いた顔で辺りを見回していた。

しかし、声はすれど姿は見えない。

「俺は加持リョウウジでもあり、加持では無い。融け合つた人類の統合思念体の中から、加持リョウウジの表層意識が君達に語りかけているだけだ」

戸惑うシンジ達の頭に再び加持の声が響いたが、その説明でシンジ達の疑問が解けるはずは無かつた。

それは加持の方も心得ている様子で、落ち着いた加持の声が再びシンジ達の頭の中に響く。

「俺の正体はどうでもいいだろう。それよりアスカはどうして死んでしまいたいなんて思うんだ?」

すると、アスカは再び悔しそがこみあげたのか、涙を流しながら話し始める。

「アタシは今まで、エヴァンゲリオンパイロットとして生きてきたわ。でも、使徒との戦いが終わったら、何の意味が無いじゃない」

「それは違うな」

「何が違うのよ!」

加持から否定の言葉が返つて来ると、アスカは怒つて言い返した。これには慰めの言葉が掛けられると思ったシンジも驚いた。

「生きてきたんじゃない、これから生きるのさ。君達はまだ14歳じゃないか」

加持の言葉を聞いたシンジは目を覚ました気がした。
シンジもアスカと同じ気持ちを抱えていたのだ。

「でも、アタシはこれからどうやって生きて行けばいいのよ……」
「それは自分で見つけるんだ、シンジ君と一緒にな」

アスカは涙でぬれた瞳でシンジをじっと見つめた。
何も言葉が浮かんでこないシンジの頭に再び加持の声が響く。

「こんな時は、言葉は不要だ。分かるだら、シンジ君？」

シンジはうなずいて正面からゆっくりとアスカを抱きしめた。
アスカもシンジに抵抗する事無く身体を預けた。

「君達2人は人類最後の希望だ、頼んだぞ……」

消え入るような優しげな加持の声をシンジとアスカは黙つて聞いていた。
その言葉の意味を加持に尋ねてみたい気持ちもあった。
しかしそれよりも、シンジとアスカはお互いの温もりをしつかりと
感じる事に集中していたのだった。
アスカが泣き止むまでシンジはずつとそのままアスカを抱きしめていた。

「シンジ、アタシはもう大丈夫よ」

シンジから身体を離したアスカは穏やかに微笑んだ。
それはまだ強がっている見せかけの笑顔かもしけない。
しかし、シンジもアスカに笑顔を返す。

2人の胸には小さな希望が芽生えていたのだ。

本当に加持の人格が2人に話しかけてきたのかは分からない。

アスカとシンジは葛城家のミサトの異変から加持が死んでしまったのかかもしれないと考えていたからだ。

しかし、自分達に兄の様に接してくれていた加持ならきっと同じ言葉を掛けてくれるのだろうと信じる事にした。

「行こう、アスカ」

シンジの言葉にアスカはシンジの目を見つめてしつかりとうなずいた。

そして2人は互いに手を繋いで紅い海を飛び出し、白い砂浜を駆けて行つた。

その残された足跡を波が静かにさらつて行く。
まるで2人の頭を優しくなでるかのようにな。

そして、アスカとシンジの目の前には2人の心の中を現すような碧い空が広がり始めていた。

ハッピーハンドとなるかは読者様の想像にお任せする、と言う方向性で公開したのですが、それではご満足して頂けないと、言う感想が寄せられたので、ハッピーハンドを予想させる最後の一行を加えました。

ハルキヨン小説短編 The Sea Glowfly ハルヒとキヨンの

ハルキヨン大学生カップル設定。
ぬいぐるみのクレーンゲームの内容は、文章では説明しにくいので実際と少し変えてあります。

うつかり、ハルヒの前で”海ほる”の事なんか話題にしたのがまづかった。

海の上に建てられた観光スポットなどと聞いて、ハルヒが黙つているはずが無い。

えつ？ 宇宙人や未来人、超能力者などと全く関係ないだろ？ て？ 大学生になつてからのハルヒには興味事が一つ増えたんだ。

”恋愛”と言づジャンルだ。

「キヨン、あんた車を運転できるんでしょう？」

「おい、ここから片道8時間近くかかるじゃないか」

「大丈夫、あたしと交代しながら走れば5時間じゃない

おい、何で俺の方が2時間多いんだよ。

まあ、8時間ぶつ続けて運転しろと言わないだけ昔のハルヒに比べたらはるかにマシだが。

「決まつているじゃない、あんたに花を持たせてあげるのよ

俺の心が読めるのか、ハルヒはそんな事を言い出した。

正直に集中力がそれぐらいしか持たないと言つたらどうだ。

「あたしはね、瞬発力はあるけど持続力はキヨンの方が上じゃないの」

「ああ、思いつきで兵庫県から千葉県まで行こうとするやつだからな」

「陸続きなんだから平気よ」

「うしたハルヒの強引さは出会った頃からちつとも変わらん。ヘンテコな神の力なんぞ使わなくても実現可能な事であるのが救いか。」

途中まで新幹線や飛行機で行く、夜行バスで行くなどの案は却下された。

「だつてさ、今のうちは高速道路にいくら乗つても1・000円なんでしょう? このチャンスを逃す手は無いじゃない!」

「来週の日曜日を最後に廃止するらしいけどな」

他にも理由はあって、2人きりで色々な場所を寄り道できるからだそうだ。

初めツンツン、後はデレデレと言うのが谷口の言う眞のツンデレの意味らしいが、谷口の事だからな、あまり信用していない。そう言えばあいつは長続きする恋人がどうして出来無いんだろうな。意地の悪いやつだとは思わないが。

「そんなの決まっているじゃない、理想の虚像を演じ続けよつとして痛々しいのよ。要する見栄つ張りで子供だからよ」

「うわっ、バツサリと斬りやがった」

谷口、在りのままのお前を愛してくれる女性がいつか現れてくれる事を祈るべ。

「谷口の事なんてどうでもいいでしょ、今は”海ほた”に行く計画を建てるのが先決よ！」

「やうだつたな

片道8時間もかかる行程だ、運転経験の浅い俺達が無理をしないで行くためには千葉県で一泊するのが妥当だと結論が出た。俺とハルヒが2人きりで泊まりの旅行へ行くなんて初めての事だ。もちろん、大学生になつたのだから親の同意を取るべき事でも無いのだが、俺とハルヒの顔は真っ赤になつた。

「なあ、シングルの部屋2つじゃ無くてダブルの部屋1つを取るのが効率的だよな」

「ねえ、あたしとキヨンが1つのベッドで寝れば経済的にもならない……？」

待て、そこまではやりすぎだろ？。

俺が慌てて首を横に振つて否定すると、ハルヒは冗談だと少し残念そうに笑つた。

別に俺はハルヒの事が嫌いだからそう言つているわけじゃないぞ。俺の理性が持つ自信が無いだけだ。

高校卒業の時に告白されてからデートは数え切れないぐらいしたけどな。

しかし、現実的に計画を建てる段階になつて俺達はとんでもない事に気が付いた。

車で行くとなつたらガソリン代は物凄く掛かりそうだ。

長門に電話をして事情を話して計算してもらつた所、とんでもない金額になつて俺は悲鳴を上げたくなつた。

「……」
「いやあ、成田か羽田まで飛行機で行つた方がいいんじゃないかな？」

「それじゃあ、海 たるを通り越す必要が無くなってしまったじゃない！」

ハルヒは憤慨した顔でそう怒鳴った。

俺に怒られても困るんだが。

しかも、千葉県のホテルに泊まるとなるとひとと時間も費用もかかるし、無理があるな。

するとハルヒは俺の部屋の椅子の上に立って、自信満々の笑顔になつてこう言い放つ。

「この物語は、フィクションだから細かい事は気にしないって設定にすれば良いのよ！」

「おいつー！」

俺は声に出してツッコミを入れてしまった。

あーっ、もうどうでもなりやがれ。

そして、ついに迎えてしまつた長距離データーの日。

俺達の東海道中の詳細な出来事は省略させて頂く。

連載作品にならなければ語りつくせない程になつてしまつだろうからな。

朝早くに家を出た俺達は何だかんだで夜に海ほるに着いた。

長時間・長距離運転してきたにもかかわらずハルヒは元気な物だった。

それにも、左を見回しても、右を見回しても、手を繋いだカツブルがいるな。

こうして手を繋いでいる俺とハルヒもそのうちの一組として溶け込んでしまっているけどな。

着いた俺達はまず腹ごしらえをするために5階のレストラン街へ行

く事にした。

俺達が選んだのは海が一望できる席があるセルフサービス形式のレストランだ。

カウンターで注文して番号札を貰い、注文の料理が完成したら呼び出し音が鳴るので取りに行く流れなのだが、ハルヒはメニューを見るなり不機嫌になる。

「ただのメニューには興味が無いのよ！」

眺めは申し分ないのだが、ハルヒはカレーやきつねうどんなどの平凡なメニューが多い事が気に食わないらしい。

他に回転寿司屋があつたのだが、そこは一皿105円のリーズナブルな店では無く、最低150円もする店だった。

550円する皿もあるぐらいだぞ。

ハルヒが本気で食つたら1万は行きそうな気がするからな、社会人にならともかく大学生の俺の財布には厳しい。
遅刻しての罰金は無くなつたが、デートは全て俺がおこりだ。

「ほらほら、せっかくデートに来たんだ。そんな口をどがらせるなよ、可愛い顔が台無しだぞ」

「分かつてるわよ」

太陽のような笑顔までは行かないが、何とかハルヒは持ち直してくれたようだ。

こうなれば食事以外の部分で挽回するしかないな。

俺達が4階に降りると、そこにはゲームセンターのような施設がつて、クレーンゲームの筐体があつた。

中には45センチと大きなサイズのぬいぐるみが入っている。
入口ではマイクを持つた係員が盛んに呼び込みをしている。

「面白そうね、みくるちゃんへのお土産にぬいぐるみをゲットして
帰りましょうよ！」

俺は笑顔のハルヒに手を引かれてゲームセンターの中へ入った。
サン オやティ 一一のキャラクターの大きなサイズのぬいぐるみ
が窮屈そうに座らされている。

そして、そのぬいぐるみの前には大きな穴が開けられていた。
クレーンはどこにでもある様な通常サイズのようなもので、どうに
かしてぬいぐるみを穴に落とせばゲットできるみたいだ。
それにしても、1ゲーム300円、2ゲーム500円と密の心理を
巧みについた心憎い値段だ。

俺とハルヒがビッグサイズのぬいぐるみクレーンゲームに苦戦して
いると、呼び込みをしていた係員が営業スマイルを浮かべて声を掛け
て来る。

「大きいぬいぐるみはバランスが重すぎて、アームの力ではつかん
で持ち上げる事は出来ないんですよ」

そう言つて係員は俺達の目の前でアームを操作し始めた。
アームが大きなぬいぐるみの後頭部を殴るように叩くと、大きなぬ
いぐるみは転がつて頭から穴に落ちた。
その鮮やかな手際を見て、ハルヒは目を輝かせて興奮する。

「キヨン、財布にありつたけの1000円札を全て100円に両替
しなさい！」

まるで全てのぬいぐるみを根こそぎ取つてやると言わんばかりにハ
ルヒはそう宣言した。

俺はため息をつきながら小銭入れを握りしめると両替機へと向かつたのだった。

何でもこなすハルヒならすぐにコシをつかむだらうと思つて、俺も青ざめる係員の顔を思い浮かべていたんだけどな。

「あーっ、もう止めっ！ 悔しいわ、あの係員は一発で取れたって嘘の元気

結局3000円ほどしき込んだが、大きなぬいぐるみは一人たりとも体勢を崩していないうに見えた、畜生め。こうなつて来ると係員の得意げなスマイルが憎たらしく思えて来たぜ。

「キヨン、あたしがぬいぐるみを取れなかつた事は内緒だからね。団長としての沾券に関わるから」

やれやれ、そう言えばさつきの係員の立ち振る舞いは何となく古泉に似ている気がしたな。

それでハルヒは古泉に負けたように感じたのかもしれん。ゲームセンターで負けてしまった俺とハルヒは頭を冷やす事も兼ねて外へ出た。

ライトアップされた景色はきっと俺達を和ませてくれる。そう思つていたんだが……。

「何よ、東タワーも、レンボーブリッジも全然光つて無いじゃない！」

「あー、そう言えば節電しているんだっけか」

周りを見回しても広がるのは真っ黒な海。

豪華な客船が浮かんでいる様子もない。

俺達のいるこの建物自体にも暗がりが出来ているぐらいだ。それ幸いに盛り上がっているカップルも居るようだけどな。

「あーあ、何か気が抜けちゃったわね」

ハルヒはそう言って大きな欠伸をした。

無理もない、朝からずっと運転して来たんだ。

眠くなるさ。

この後俺達は千葉県のホテルで一泊する事になるんだが、そこで起

こつた出来事については別の機会に話す事にしよう。

ホテルで泊まった後の帰り道。

俺達は早朝の海 たるにやつて来ていた。

昨日の夜とは打って変わって、レストランには俺達の他には客が2、

3人居るだけだった。

しかもカッフルでは無く、高速道路のパーキングエリアに似つかわしいトラックの運転手達だ。

外の通路にはほとんど人が居ない。

「静かなもんね」

「そうだな」

落ち着いた顔で長いボーネーテールの髪を潮風にそよがせるハルヒの姿は、100万ワットの元気な笑顔とはまた違つた良さがあった。ハルヒのどちらの表情も独り占めできる俺は何で幸せ者なんだとそう思う。

俺とハルヒはしばらく黙つて海を眺めていたのだが、ハルヒは何か面白い事を思いついたのか、表情を100万ワットの笑顔に切り替えて話し始める。

「ねえ、退屈だから王様ゲームでもやらない?」

「何だと?」

ハルヒはそう言つとあのレストランから持つて来たのだろう、2本に別れた割り箸を俺の前に差し出した。

どうしても俺はこの笑顔には逆らえない。

俺が引いた割り箸はハズレだつたようだ。

「あたしが王様ね!」

参加者が俺とハルヒの2人しか居ないんだからそうなつて当然だよな。

それと、お前は自覚していないようだが王様じや無くて神様だらう?

「じゃあ1番の人は、王様に大好きと言つて抱きしめてキスをする事!」

何だよ、結局それがしたかつたのか。

俺はハルヒの言葉を聞くと首を横に振つて拒否した。すると、ハルヒの笑顔は凍りついた。

そして次にハルヒは泣き出しそうな顔になる。

「何よ、王様の命令が聞けないつて言つの!」

ああ、久しぶりに見たなハルヒのこの表情は。

大学生になつてもハルヒは変わらない部分があるんだな。

おつと、早くフォローを入れないとあの映画撮影の時と同じ事になつてしまつ。

ハルヒが本気で怒つて立ち去る様な事があれば、特大の閉鎖空間で古泉も大慌てだらうしな。

「待てよ、俺は命令だからって言われてキスするのが嫌なんだ」「な、何よ、紛らわしい事言わないでよ、このアホキヨン！」

ハルヒは思いつきり顔を赤くして目をつぶつて怒鳴った。

本当にハルヒは表情が豊かで面白いやつだ。

別に俺はハルヒをいじめたいわけじゃないんだが、ハルヒが可愛いからからかいたくなるのさ。

涙に濡れたハルヒの瞳が俺をじっと見上げる。

そのハルヒの顔を見た俺は思わずハルヒの身体を抱き寄せて……耳元で好きだと囁きながらキスをしてしまったのさ。

短編小説『小さな魔法』 ハルキヨンLASヨシュエス3点セット ～同じ一つの

短編小説『小さな魔法』 ハルキヨンLASヨシュエス3点セット
～同じ一つのテーマで異なる3ジャンルのカップルの話を書いてみ
た～

涼宮ハルヒの憂鬱SS

ハルキヨンVer・サブタイトル『欲張り』

未来人に仕組まれた事だとは言え、運命とはつくづく奇妙な物だと
俺は思う。

俺は何となく流されるまま県立の高校を受験し高校生になり、涼宮
ハルヒと出会った。

そして、俺はハルヒに強制的に引き込まれる形で、ハルヒが創った
新しい部活、SOS団の団員一号（但し、雑用係）となる。

SOS団とは、

S=世界を

O=大いに盛り上げる

S=涼宮ハルヒの団

が正式名称だ。

まあ、ハルヒが気まぐれで作った部活だから、名称なんて形骸化し
ているんだがな。

とりあえず、宇宙人や未来人、超能力者、そして異世界人を探して
一緒に楽しく遊ぶのが目的らしい。

傍から見れば、何て思考回路のおかしい女だと思うかもしれない。

俺も入学式の後の教室の自己紹介で、「普通の人間には興味が無い」と聞いた時は「冗談かと思つたさ。

しかし、ハルヒのやつは本気だった。

しかも厄介な事にハルヒはとある解釈によると、自分の願望を無意識のうちに叶えてしまうパワーを持つているらしい。

高校が始まって数ヶ月も経たないうちに長門有希と言う宇宙人、朝比奈みくると言う未来人、古泉一樹と言う超能力者をSOS団に集めやがつた。

だが、肝心のハルヒ本人は3人がレアな存在に気が付いておらず、気付かせてもいけないらしい。

だから、現在のSOS団の活動はオカルトめいた面白い事を探索しつつ、七夕などのイベントをお祭り騒ぎで楽しむレベルで落ち着いている。

ハルヒの退屈を紛らわすためにクラスの友達や妹までをメンバーに加えて市の野球大会に出たり、七夕の短冊に願い事を書いたり。夏休みには古泉の提供で孤島の別荘に合宿にも行つたな。

こうして、俺もハルヒに雑用係としてしごかれながらも、SOS団に居心地の良さと愛着を覚え始めていた。

仲間である団員や我らが団長、涼宮ハルヒにもな。

しかし、ハルヒ発案の文化祭で公開すると言う自主製作映画の撮影中に事件は起きた。

ハルヒはいつも”団長”の腕章の代わりに”超監督”の腕章をつけ、俺達相手に好き放題をやつていた。

以前にも入学早々にコンピ研からパソコンを巻き上げたり悪事は働いていたんだが、今回俺をキレさせたのはハルヒの一言だった。

朝比奈さんを酔わせて抵抗出来なくさせてから、古泉とキスをさせようとしたハルヒに俺はこう言つてやつたんだ。

「無茶言つんじゃない、朝比奈さんも古泉もお前の人形じゃないん

だぞ！ 軽々しくキスなんてさせるな！」

「つるさいわね、あんた達は監督のあたしの言つ通りに動く人形でいいのよー。余計な演出は要らないわ！」

何て女だ、俺達を物扱いかよ！

裏切られた気持ちになつた俺はハルヒをぶん殴つて立ち去つた。後ろでハルヒが何やらわめいていたが、俺は顔も見たくなかったから、一度も振り返らなかつた。

「どうしたのキヨンくん、とつても恐い顔～」

家に帰ると、俺の雰囲気を察してか、妹が心配そうに声を掛けて来た。

まだ怒りの収まらない俺は、妹に笑顔を返す事も出来ずに部屋のベッドで仰向けになつた。

「畜生、ハルヒのやつ……」

俺がそうつぶやきながら虚空に視線を泳がせていると、家のインターホンが鳴らされる音が聞こえた。

妹の友達でも来たのか？

と俺は大して氣にも留めないでいたのだが、妹が息を切らせて部屋に入つて来る。

「キヨン君、ハルにやんが来たよ！ でも、さつきのキヨンくんみたいにとつても恐い顔してる」

どうしてハルヒが俺の家に？

あいつは俺の家に来た事は無いはずだろ？

そんな疑問が俺の頭の中を巡つたが、それよりも俺はまだハルヒを

許せない気持ちが強く残っていた。

「悪いな、俺は会いたくないんだ」

「でも……」

俺と妹が話していると、俺の部屋のドアがゆっくりと開かれ、隙間から怒りの表情をしたハルヒが顔をのぞかせた。

ここまで来てしまっては門前払いも出来ないと覚悟を決めた俺は、妹に部屋の外へ出て行くように促した。

妹が完全に部屋の外へ出て行くと、ハルヒは大声で俺に向かって怒鳴り散らす。

「何で映画の撮影中に勝手に家に帰つてんのよー！」

「別にナレーションの俺が居なくても、映画の撮影は続けられるだろ？！」

俺はあきれたようにハルヒにそう言い返した。
すると、ハルヒの目から堰を切つたように涙が流れ出した。
もちろん、俺はハルヒが涙を流すのを見た事は無いから、自分が怒つていた事を忘れるほど驚いた。

「あの後みんな帰つちやつたわよ、みくるちゃんも古泉君も有希も
やつぱり、古泉や朝比奈さんや長門も腹にすえかねたんだろうな。
！」

「もし」のままずっとあたし一人になつたら、SOS団はどうなる
のよ……」

「……」
こいつ、失つて初めて大事な物に気が付いたんだな。

まあそれはハルヒに限らず人間誰しも大なり小なりある事だが。

「せっかく高校になつて楽しくなつて来たと思つたのに、キヨン、あんたが側に居ないと全然楽しくない……」

そう言つて子供のように泣きじやくるハルヒを見て、俺はハルヒがかわいそうになつて来た。

ハルヒは今まで他人の気持ちを考えるなんて少しも意識していなかつた残酷な子供だったのだ。

しかし、今回の件でハルヒは身を以つて成長しただろ。

俺は妹をあやす時のようにハルヒの頭を胸に抱き寄せて優しく言い聞かせるように話し掛ける。

「なあハルヒ、お前が俺達SOS団のメンバーの事を好きだと思つて居てくれる事は解る。でもな、言葉つてのは気を付けなきゃいけないんだ。口から出たら取り消せないし、誤解させてしまつ事もあるからな」

「うそ……本当に、『メン、あたしバカだ、あんな事を言つて……』

俺はハルヒが泣き止むまで、優しく背中をさすつてやつた。
泣き止んだハルヒは、不安そうな顔になつて俺に尋ねる。

「ねえ、みぐるちゃんと古泉も有希も、あたしの事を許してくれるかしら？」

こんな自信の無さうなハルヒの顔を見たのも初めてだ。
俺はハルヒを元氣づけるために肩を抱いて語りかける。

「お前が心を込めて謝れば、きっと朝比奈さんも古泉も長門も、解つてくれるはずさ。だって、SOS団の仲間だろ？」

「当たり前じゃない！」

そう言うと、ハルヒは俺に太陽のように光り輝く笑顔を向けて来た。この分ならもうハルヒは大丈夫だろ？ 俺の心も晴れ上がって行くのを感じた。

ハルヒは早速朝比奈さん達に謝りに行くと言つて部屋を出て行った。不安なら俺がついて行こうかと提案したが、ハルヒは自信たっぷりに一人で平氣だと答えた。

ハルヒが出て行つた後、不思議そうな顔をした妹が部屋へと入つて来る。

「キヨンくん、ハルにゃんがとつても嬉しそうな顔をしていたけど、どうしたの？」

「さあな、秘密だ」

「おかーさん、キヨンくんがハルにゃんと部屋でした事は秘密だつて教えてくれないの〜」

「誤解を招くような発言は慎みなさい！」

俺は慌てて妹にツッコミを入れた。

次の日、登校するとニヤケ顔の谷口が俺に話しかけて来る。

「よおキヨン、昨日涼宮にお前の家の場所を聞かれたんだが、あの後どうしたんだ？」

「さあな」

俺は妹に答えたのと同じ返答をした。ハルヒに教えたのはお前だつたのか。

「何だよ、その余裕ぶつた笑顔は？ もしかして、お前涼宮とそんな関係になつちまつたのか？」

どんな関係だよと心の中で谷口にツッコミを入れながらも俺は愉快で笑いが止まらない気分だつた。

何しろ、俺はハルヒの喜怒哀楽をコントロールする力を持っていると気がついてしまったからだ。

もちろん、俺はハルヒをわざと泣かせる趣味なんて無いぞ。
これからお前をたくさん笑顔にさせてやるからな、ハルヒ。
この力を他の誰にも渡したくないなんて思う俺は、欲張りなんだろ
うな。

英雄伝説 空の軌跡SS ヨシュエスVer. サブタイトル『太陽が消える前に』

ヨシュアは帝国の片田舎のハーメル村で暮らす普通の少年だった。村は貧しくても、優しい姉カリンとカリンの恋人であり兄代わりだったレオンハルトに見守られ、ヨシュアは幸せな生活を送っていた。しかし、平和な日常は突然破られた。

謎の武装集団がハーメル村を襲ったのだ。
為す術もなく殺されて行く村人達。

だが、村を襲つたやつらの追手が2人に迫つた。

ヨシュアは目の前の地面に横たわる村人の死体が持つていたナイフを拾い上げると、追手の男の心臓に突き刺した！

まさか村の少年であるヨシュアが反撃してくるとは思いもよらなかつた男は叫び声を上げて絶命した。

だが、ヨシュア達を追つて来たのはその男だけでは無かつた。

レオンハルトがヨシュアを助けに駆けつけた時、ヨシュアは人の命を奪つてしまつた事と、目の前で姉の命が奪われた2重のショックで、すつかり心が壊れてしまつた。

そして、レオンハルトとヨシュアは結社と呼ばれる組織に入つた。ヨシュアは結社に『漆黒の牙』と言う肩書きを授けられ、暗殺者としての技術を教え込まれて行つた。

”Sランク遊撃士カシウス・ブライトを暗殺せよ”

結社から暗殺命令を受けて仕事中のカシウスを襲つたヨシュアだが、カシウスに歯が立たなかつた。

”任務を失敗した自分には存在価値が無い”

自分で命を絶とつとしたヨシュアだったが、カシウスに阻止される。

「どうして、あなたは自分の命を狙つた僕を助けようとするんだ。そのまま放つて置いて死ねば、敵が減ると言うのに」

「何でだらうなあ、俺にもお前さんと同じ年頃の子供が居るからかな」

「そんなの理由になつてない！」

その後もヨシュアはカシウスに質問を浴びせるが、カシウスはのらりくらりとはぐらかされてしまつ。

さらにカシウスに言いくるめられたヨシュアはカシウスに引き取られてブライト家の家族となる事を了解してしまつた。

しかし、名の売れた遊撃士である家を留守にすることが多い。

ブライト家の居候となつたヨシュアの側にいつも居るのは、カシウスの実の娘、エステルだつた。

カシウスに兄弟が欲しいとせがんでいたエステルだが、幼い頃に母が他界してしまつたため、それも叶わなくなつた。

そこにカシウスが新しい家族として連れて来たヨシュアは、エスティルにとって待望の『兄弟』だった。

エスティルはヨシュアより数カ月ほど年下だったのだが、ブライト家に長く居る身として、姉としての地位を主張し、ヨシュアの世話を焼き始めた。

しかし、その世話の焼き方はかなり個性的でヨシュアを困らせる事になる。

「ほら、ダンゴ虫をあげるから元気を出してー」

ブライト家の庭の木で寄りかかっていたヨシュアに、エスティルが無邪気な笑顔で話し掛けた。

「……僕に構うな」

心を閉ざしていたヨシュアは、エスティルにも冷たく接した。だがエスティルはそんなヨシュアの態度にも臆すること無くヨシュアに対し暖かい笑顔を向け続ける。

「うーん、じゃあこの蝶なりビツ？ 変な模様があつて面白いよ」

エスティルはそう言ってヨシュアの前に蝶を差し出したが、ヨシュアは黙つて顔を背けた。

「これでもダメか、じゃあとつておきのを持って来るから覚悟して置きなさいー」

エスティルはヨシュアに人差し指をビシッと突き付けて宣言すると、家の中へ戻つて行つた。

そして2階の自分の部屋を引っかき回す音がヨシュアにも聞こえて

来る。

ヨシュアの所へ戻ってきたエステルは手に大きな虫かごのようなものを持っていた。

「じゃーん。マルガオオトカゲだよ！」

結社によつてあらゆる知識を詰め込まれたヨシュアは、マルガオオトカゲの事を知つていた。

マルガオオトカゲは口の中に伝染病の細菌を保有しており、人間がかみつかれたら死に至る場合もある。

そんな危険な生物を10歳前後の子供がペットにしているとは驚きである。

カシウスは家を空ける事が多いと聞いているが、知つているのだろうか。

ヨシュアが何も答えないでいると、エステルはその沈黙の意味を勘違いしたのか、悔しそうな顔になる。

「よーし、じゃあ森でヨシュアが思いつきり驚く虫を探して来る！」

エステルはそう言つて、ミストヴァルトの森へ向かつて駆け出して行つてしまつた。

「別の意味で驚いたよ……」

ヨシュアは去つて行くエステルの後ろ姿を見てそうつぶやいた。エステルの気配が消えたのを確認したヨシュアは、マルガオオトカゲを家の庭から遠く離れた場所へと放す。

これでエステルが間違つてかまれてしまつ事も無くなるはずだ。いや、エステルがどうやって捕まえたのか知らないと安心はできない。

すると、ヨシュアは森に向かつたエステルの事が気になつて仕方が無くなつて来る。

ヨシュアは急いでエステルを追いかけて行つた。

「さやあああつ！」

森に着いた途端に、ヨシュアの耳にエステルの悲鳴が聞こえて来た。悲鳴が聞こえた場所に駆けつけると、そこには魔獸に囲まれたエステルの姿があつた。

ヨシュアは素早くエステルの側に飛び込んで魔獸達を蹴散らす。

「何でこんな危険な事ばかりするんだ！」

「だつて、どうしてもヨシュアに喜んで欲しかつたんだもん」

ヨシュアが思いつきりしかると、エステルは目に涙を浮かべてそう反論した。

「僕なんかのために、そこまですること無いだらけ……」

エステルの言葉を聞いたヨシュアは、ショックを受けてそうつぶやいた。

「ほら、捕まえた！　この虫ならヨシュアも満足でしょう！」

泣いたカラスがもう笑つたと言つべきか、エステルの両手には巨的なカブトムシが握られていた。

そのエステルの太陽のような笑顔に、ヨシュアの凍りついた心も徐々に解け始めて行つた。

そして、ヨシュアは見てて危なつかしいエステルの世話を焼き始める事になる。

料理を作らせてヨシュアの方が器用。

日曜教会で授業中に寝てしまつたエステルをヨシュアが起こす。ヨシュアの心の中で、エステルの存在は大きくなつて行つた。

カシウスにこれからどう生きるかと尋ねられた時、ヨシュアは迷わずエステルと同じ遊撃士を目指すと答えた。

遊撃士になつてもエステルを支え続けたいとヨシュアは本氣で思うようになった。

エステルと言う太陽を得たヨシュアは、他人に心を開く様になり、遊撃士になるための修行の旅の中で様々な人々に触れ合つて成長して行つた。

ロレントの街の市長邸から盗まれた宝石を取り戻したり、ボースの街でおきた飛行船ハイジャック事件の解決に協力したり、ルーアンの街の市長の悪事を暴いたり……。

ついには王都グランセルの街で起きたクーデター事件の解決に協力した功績が認められ、表彰されるまでになつた。

ヨシュアはこれからもずっと、エステルとコンビを組んで遊撃士の仕事を続けられると信じていた。

しかし、そんなヨシュアの希望を打ち砕くような無慈悲な出来事が起きる。

平和を祝う女王生誕祭の中でたまたま1人になつたヨシュアに、結社の人間が接触して來たのだ。

「君が彼女の側に居ると彼女を不幸にする」「血で汚れ切つた君に彼女の側に居る資格があるのか」

結社の人間はヨシュアの心の闇を突くような言葉を次々と投げ掛ける。

その言葉に負けてしまつたヨシュアは、その日の夜エステルの側から黙つて姿を消した。

エステルと別れたヨシュアは、単身で結社への復讐を行おうと決意

を固め、その準備を進めた。

時間を掛けて慎重に情報収集を行つたヨシュアは、結社のアジトである飛行船の場所をつき止めた。

このアジトを飛行中に爆破する。

そうすれば結社に大きな被害を与えられるに違ひない。

上手くすれば幹部の何人かを墜落に巻き込んで倒せるかもしない。もちろん、脱出のタイミングを間違えれば自分の命は無い。

それだけ危険な事は分かつてゐるが、ヨシュアはためらわなかつた。しかし、そんなヨシュアの前に立ち塞がつたのはまたもやカシウスだつた。

「こんな所に居たのか、ずいぶんと探したぞ」

「あなたは、僕を連れ戻しに来たんですか？」

「そうだ、戻つて来てはくれないか、俺のためでは無く他でもないエスティルのために」

「でも、僕はエスティルの側に居る資格なんかありません、彼女を不幸にするだけです」

ヨシュアが強い拒否の態度を示すと、カシウスは困つたような表情をして語りかける。

「お前が姿を消した後、エスティルは悲しみを隠して周囲には笑顔を見せていた。いつかお前に再び会えると信じてな」

「くつ……」

カシウスの言葉を聞いて、ヨシュアは悔しそうに顔をしかめた。

「だが、この前結社の連中がお前の名前をエサにして、エスティルをだまし討ちにしようとしたんだ」

「何だつて？」

ヨシュアは目をむいて驚いた。

「それで今までこりえていた気持ちがあふれだしたんだろう、エステルはずつと泣きっぱなしだ。あの笑顔の絶えなかつた娘がな……」

カシウスに言われて、ヨシュアはエステルの泣いた顔を想像しようつとしだが、エステルの泣いた顔は数年前に1回見たきりだ。なかなか想像する事は出来なかつた。

その代わりに脳裏に浮かぶのはエステルの笑顔ばかり。

ヨシュアもエステルの笑顔が恋しくなつていた。

「こJのままエステルを泣かせたままで良いと思つていいのか？」

「いいえ、僕の考えが浅かつたようです」

カシウスが尋ねるとヨシュアは首を強く振つて否定し、自分の決意をカシウスに伝えるのだった。

「ヨシュア！」

カシウスの計らいでグラントセル城の空中庭園で2人は再会を果たした。

「こんなにエステルを泣かせてしまうなんて、僕は何て事をしてしまつたんだ。だけど、これからはずつと側で君を守るから……」

泣き笑いの表情を浮かべるエステルを抱き締めてヨシュアはそつとそつ誓うのだった。

新世紀エヴァンゲリオンSS

LASVer. サブタイトル『黄色いワンピース』

(ラブ・ラブ・アスカ・シンジ)

シンジは幼少の頃、事故により母親を失つてから、父親により伯父の家に預けられた。

伯父夫婦は自分の子供達とシンジを区別して接したため、シンジは内向的な性格に育つてしまつた。

中学2年の時、父によって第三新東京市のネルフにエヴァンゲリオンのパイロットとして呼ばれるまで、無氣力な生活を送つていた。しかし、そんなシンジの暗い性格を心配したミサトはシンジを強引に自分の家へと住ませる。

陽気な性格のミサトに引っ張られる形でシンジは少しずつ周囲に興味を向けるようになつた。

新たに通う事になつた第壱中学校でも友達と呼べる存在が出来た。使徒と戦うエヴァンゲリオンのパイロットと普通の男子中学生と言う2足の草鞋わらじを履いた生活を送るシンジ。

ドイツのヴィルヘルムスハーフェンを出て日本へと向かう船の甲板で、シンジとアスカは出会つた。

黄色いワンピースを着て堂々とした態度で腰に手を当てたつぱりの余裕を持った笑みを浮かべたアスカの姿を見て、シンジはアスカに強く惹かれるものを感じた。

「ふーん、アンタがサードチルドレン？ 何かさえないわね」

アスカがシンジを少しバカにするように声を掛けても、シンジはアスカに見とれていた。

自分には無い輝きのようなものを持つていると思ったからだ。

直後に使徒が2人と式号機を載せる船に襲来し、シンジとアスカは2人で式号機のエントリープラグに入る事になった。

目前でアスカの操縦技術を見たシンジは目を見張り、エヴァのパイロットしてもアスカに憧れを抱くようになる。

次に出現した使徒に対し、シンジとアスカの攻撃のタイミングをピタリと合わせる必要があると判断したミサト。

そこでシンジとアスカの生活リズムを合わせるためにアスカもミサトの家で同居させると宣言した。

同じ屋根の下で暮らす事に猛反発したシンジとアスカだったが、作戦だと言われては逆らう事は出来なかつた。

こうして、始まった同居生活も続けて行くうちに次第に家族へと変化して行く。

ある日の夜、寝ていたアスカが母親の名前を呼んで涙を流しながらうなされているのを見たシンジは、アスカが自分の境遇と似ているのだと知つた。

惚れた男の弱みと言うべきか、それからシンジは出来る限りアスカの望みを叶えるように努力を始めるようになつた。

アスカがドイツ風のハンバーグが食べたいと言えばいつもより遅くまで起きて料理本を読んで研究する。

愛用しているシャンプーが切れたならば、遠く離れた店まで買いに行く。

最初はエースパイロットして優遇されるのは当然だと受け止めていたアスカだったが、ある出来事をきっかけにシンジの好意に気がつく事になる。

ある日火山のマグマたまりの中に使徒を発見したエルフはエヴァによるせん滅を決定。

高熱のマグマに耐えられるように耐熱防護服を装備したアスカの乗

る式号機がその任務に当たった。

命綱となるワイヤーにつり下げられ、使徒の居るマグマの海の底へと潜つて行く式号機。

そして使徒と遭遇した式号機はプログナイフを使った戦闘の末、使徒を撃破する事に成功する。

しかし、使徒の最後の攻撃がアスカの乗る式号機をつり下げるワイヤーを全て切り裂いてしまった。

命綱を失った式号機はゆっくりとマグマの底へと沈み始めた。

「これからだと思ったのに、もうアタシはここで終わっちゃうの…

…？」

アスカも自分の命運が尽きたと覚悟したその時、式号機を引っ張り上げたのは火口で待機していたシンジの乗る初号機だった。

初号機は耐熱装備をしておらず、通常装備のままだった。

その初号機でマグマの中に手を伸ばし、式号機を引き上げたのだ。エヴァのダメージはシンクロしているパイロットにも伝わる。

乗っているシンジは熱湯に手を突っ込んで火傷したような痛みを感じているだろう。

「無茶しちゃって、バカシンジ……ありがとう

アスカは目に嬉し涙を浮かべながらシンジにお礼を言うのだった。これからアスカの方もシンジに心を許して行くようになる。

素直にシンジに好意を示す事が出来なかつたアスカだが、揃つて登下校をしたり、食材の買い物をする姿は夫婦のようだとからかわれた。

友達以上恋人未満の生活でも、2人はとても楽しかつたのだ。

使徒との戦いも息のあつたコンビネーションを發揮し、ミサトの立てた少し無茶だと思われた作戦も遂行して行つた。

2機のエヴァが手を繋げば向かう所敵無しとまで言われた。しかし次第に激しさを増して行く使徒との戦い。

そんな状況下でもシンクロ率を伸ばして自信を着けて行くシンジ。ついには上回っていたアスカのシンクロ率を追い越してしまった。焦るアスカは、シンクロ率を大幅に落として行つてしまつた。

アスカは日常生活でも笑う事が無くなつてしまつた。

葛城家も灯が消えたような暗い雰囲気に包まれている。

大気圏外の衛星軌道上に出現した使徒に對して、ネルフは式号機を出撃させた。

初号機は直前に現れた使徒との戦いで暴走したため、ネルフの司令であるシンジの父ゲンドウによつて待機命令を下されたのだ。

空中の使徒から発せられる光線が式号機を直撃し、エントリープラグの中のアスカが苦しそうな声を上げる。

「司令、このままでは式号機パイロットが危険です、収容して下さい！」

ミサトはそう言つて、オペレータに式号機をネルフの中に引き上げさせようと命令図を送つたが、ゲンドウは大声でそれをさえぎる。

「ならぬ、式号機はそのまま使徒の攻撃を引きつける」

ゲンドウの言葉を聞いて、ネルフの誰もが式号機は捨て駒に使われたのだと理解した。

しかし、ゲンドウの命令にネルフの誰も逆らえない。

それはミサトもシンジも例外では無かつた。

「レイ、ドグマに降りて槍を使え」

「はい」

ゲンドウは冷静に命令を下し、零号機に乗る綾波レイも淡々と従う。レイが地下に潜つて地上へと戻るまでの間、シンジは田と耳を塞いでアスカが苦しんでいる姿と声をシャットアウトしようとした。

「ロンギヌスの槍、準備完了。3、2、1……」

オペレータの合図によつて零号機から投げられたロンギヌスの槍は衛星軌道上に居た使徒の核^{コア}を直撃し、式号機はやつと使徒の攻撃から解放された。

戦闘が終わると、シンジは一人でたたずむアスカの所へゆっくりと歩いて行つた。

「アスカが無事で良かつたよ、綾波に感謝しないとね」

落ち込んでいるアスカの背中にシンジが声を掛けると、アスカは振り返らずにわめき散らす。

「何が感謝よ、へどが出るわっ！」

「そんな、綾波のおかげで助かったんだからさ」

空気の読めない発言を続けるシンジに堪忍袋の緒が切れたアスカは、怒りに燃えた表情でシンジの方を振り返つた。その青い瞳にはたくさん涙が溜まつてゐる。

「どうして、シンジが助けに来てくれなかつたのよー！」

アスカに詰め寄られたシンジはアスカから田を反らして下を向いてボソボソと言い訳を始める。

「だつて、初号機は父さんの命令で動かせなかつたし、仕方無かつ

たんだ」

「アタシが使徒の攻撃で苦しめられて居るのを初号機のエントリー プラグの中で見ていたんでしょ、どうしてずっと黙つたままだつたのよ！」

式号機のエントリー・プラグからも、初号機のエントリー・プラグの様子は解る。

アスカは使徒の攻撃に苦しまれながらも、シンジが何もしていい事を覚えていたのだった。

「ネルフでは司令である父さんの命令は絶対じやないか、だから抵抗しても無駄だつたんだ」

シンジが話している事は、後付けの言い逃れであるとアスカは見抜いている。

「それは違うわ、シンジは使徒が怖かつたんでしょう、この臆病者！」

図星を突かれてしまったシンジは顔を上げる事も、何も言い返す事も出来なかつた。

「バカシンジに期待したアタシの方が大バカだつたわ！」
「えつ？」

アスカの言葉を聞いてシンジが驚いて顔を上げると、シンジが何か言う前にアスカは走り去つて行つた。

「アスカ、泣いていたな……僕が泣かしてしまつたんだ」

プライドの高いアスカは人前で涙を流した事は無いとシンジはミサトからも聞いていた。

家に帰つたらひたすらアスカに謝るしかないと思ったシンジだが、なかなか家に帰る決意がつかず、葛城家に戻つたのは夜も遅くなつてからの事だつた。

「シンジ君おかえり……遅かつたわね」

「ミサトさん」

玄関でシンジを出迎えたミサトは静かな怒りを押さえている様子だつた。

そのミサトの雰囲気に圧されて後ずさりするシンジ。そんなシンジの手をミサトがつかんで、アスカの部屋へと連れて行く。

「見てよ」の部屋……さつきアスカが荒らして行つたのよ

ミサトは皮肉めいた口調でシンジにそう話した。

アスカの部屋の中は、泥棒でも入つたかのように荒らされていた。特にシンジとの思い出に関係すると思われる2人が映つている写真などは入念に引き裂かれていた。

そこからもアスカのシンジに対する憎しみの深さが分かる。

「アスカは泣き叫びながらシンジ君を何度も呼んでいたわ。私もアスカが人目も気にせずに泣くのを初めて見たわ」

「ごめんなさいミサトさん、僕のせいだアスカがこんな事に」

「そうね、アスカをこんなに弱くしてしまつたのはシンジ君のせいかもね」

ミサトの言葉を聞いたシンジは驚いてミサトの顔を見つめた。

いつの間にかミサトは優しく微笑んだ表情へと変わっている。

「さあ、行きなさい。アスカは友達の洞木さんの家へ行つたわ。そこでシンジ君の思いをアスカに伝えるのよ」

「分かりました」

強くうなずいたシンジは床に落ちていたアスカの黄色いワンピースを拾い上げると、それを持って洞木ヒカリの家へと向かうのだった。駆けつけたシンジの姿を見ると、ヒカリはほつとしたような表情を浮かべてシンジを自分の部屋へと案内する。

「碇君、アスカの事は任せたからね」

「うん、委員長こそありがとうございました」

ヒカリに見送られてシンジは部屋の中へと入つてアスカに声を掛ける。

「アスカっ！」

「今さら何よ」

背中を向けたアスカに、シンジは思い付く限りの謝罪の言葉を述べて家へ帰つて来て欲しいと訴えたが、アスカは固く拒否し続けた。決して振り返ろうとしないアスカをシンジは後ろから抱きしめた。思わぬシンジの行動にアスカは驚きの声を上げる。

「ちょっと、どうこいつもりよシンジー！」

すると、シンジはアスカを抱き締めたまま、黄色いワンピースをアスカの前にかざして訴えかける。

「この黄色いワンピースは僕とアスカが出会った時にアスカが着ていたんだよね」

「それがどうしたのよ」

シンジの言葉の意味が分からないアスカは、不機嫌そうな声でシンジに聞き返す。

「あの時の自信たっぷりのアスカの笑顔、僕は好きだったよ」「フン、どうせ今のアタシは可愛げのない顔をしているわよ」「それって、アスカが自分で自分を追い詰めているだけじゃないのかな」

「何ですって！？」

アスカは怒った顔になつてシンジの体を振り払つた。そしてシンジに人差し指を突き付けて怒鳴る。

「シンジにアタシの何が解るって言うのよ！」

「解らない……解らないよ……でも、僕はアスカを泣かせてしまつた分だけ、今度はアスカを笑わせてあげたい。その気持ちだけは本物だから」

シンジはアスカの目をしつかりと見つめてそう訴えかけた。そして、アスカはシンジの目を見つめ返してゆつくりと尋ねる。

「今度こそ、信じて良いのね？」

「うん、僕はもう逃げない」

シンジが力強くうなづくと、アスカは泣き笑いの表情になつてシンジの胸に飛び込んで行つた。

そしてそれからしばらくして、シンジの隣で黄色いワンピースを着

て笑顔を浮かべるアスカの姿があったのだった。

学園エヴァです。

(H'カ'ン'ゲリオンは出て来ませ)

中学2年生の夏休みのある晴れた日。

第三新東京市の街並みを一望できる公園で、碇シンジは友達のトウジ達と待ち合わせをしていた。

容赦無く照りつける太陽の日差しを恨めしそうに眺めながら、シンジは集合時間の10分前に来てしまつ自分の眞面目な性格に苦笑する。

「今日は風が吹いているから、まだ良いんだけどね」

自分に言い聞かせて慰めるよつてシンジはつぶやいた。

「ねえ、第三中学校はどこのかしら？ アンタ、ここはどの子でしょう、知らない？」

黄色いワンピースを着て麦わら帽子をかぶつた少女がシンジの側にやつて來た。

「えつ、君は？」

見ず知らずの少女に話し掛けられて、シンジは驚いた。

「アタシ、今度この街に転校して來る事になつたのよ」

「へえ、そつなんだ」

シンジは照れながら少女の顔をチラチラと見ながら尋ねた。
しかしシンジは困ってしまった。

シンジは待ち合せの最中だったのだ。

「でも、僕は……」

「碇君、その子は誰？」

少女がシンジの言葉に答えようとした時、待ち合せをしていたレイが姿を現して声を掛けた。

すると、少女は青い顔になつて必死に言い訳をする。

「ア、アタシは自分で行くわー。」

少女は慌てて逃げるよう立ち去ってしまった。

シンジとレイは訳が分からないと言った様子で、少女の後ろ姿を見送った。

しばらく2人で立ちつくしてくると、レイが何か思い付いたかのようにシンジに話し掛ける。

「もしかして、私と碇君がデートの待ち合せをしていたのかと思つたのかも」

「そつか、誤解されちゃったのか」

シンジはレイの言葉に納得したようになっていた。
そんなシンジのつぶやきを聞いたレイは悲しそうな顔になる。

「本当にアートなら良かったのに……」

シンジに聞こえない小さな声でレイはそつぶやいた。

そのレイの視線の先には、友達であるトウジとケンスケ、ヒカリが

やつて来る姿があった。

トウジとケンスケは興奮した様子で待っていたシンジとレイに話しかける。

「おい、今そこでえらい可愛い娘とすれ違つたで！」

「ああ、スタイルが良くて綺麗な髪をしていて、まるでアイドルみたいだつたよ」

「まったく、鈴原つたら……」

ヒカリは少し冷めた目でトウジを見つめてため息をついた。

「待ち合わせをして居なかつたら声を掛ける事ができたのになあ」

「せやな

「鈴原つー」

ケンスケのぼやきにうなずいたトウジをヒカリがまた怒鳴った。レイはシンジが黙つて考え方をしてくるのに気がついて声を掛ける。

「碇君、またあの子の事を考へているの？」

「あつ、『じめん……』

レイに言われたシンジは照れ臭そうな顔をして謝つた。

「でも、素敵なお話ね。ヒヤワリ煙で会つた女の子だなんて」

ヒカリは陶酔に浸るよひに両手を胸の前で握つて目を閉じながら言った。

「ほん、どに住んでるのか名前もわからん女の事をいつまで引かずつておるんや」

「現実味が無い話だな」

「嘘じやないってば、だつてヒマワリの種もくれたし」

トウジとケンスケがあきれたようにため息をつくと、シンジは悔しそうな顔をして言い返した。

「それから碇君は、その女の子に見せたって、毎年ヒマワリを育ててているんだつナ」

「うん、ヒマワリの種は何年も持たないって父さんが言つてたから」

ヒカリが尋ねると、シンジはそう答えた。

「碇の親父の研究所でもいろいろなヒマワリを育てててるんだう？」

「そつから持つてきて見せればいいじゃないか」

「まったく、相田つてば夢の無い事を言つのね」

ケンスケの言葉に、ヒカリはため息をついた。

「うん、だけど気持ちの問題だから。ヒマワリって受粉が上手くいかないと発芽する種が出来ないらしいし、ずっと続けられるとは限らないし」

シンジは少し悲しそうな顔をしてそうつぶやいた。

レイはそのシンジの横顔を複雑な心境で見つめている。

碇家のプランターに植えられているヒマワリが無くなってしまえば、

シンジはその少女を想う事は止めるだろ。

しかし、シンジはとても悲しむに違いない。

その後、シンジ達5人は夏休みを満喫するように遊んだが、シンジは時折り物想いにふけってしまう時がある。

その度にトウジとケンスケは夏の思い出し憂鬱だと黙つてシンジを

からかうのだった。

シンジが今日、ヒマワリ畑で会った少女の事を思い出したのは、さつき出会った少女があまりにも似ていたからだった。
友達のトウジ達には話していなかつたが、その少女も麦わら帽子をかぶつっていたのだ。

夏休みが終わり、始まつた2学期。

シンジの教室に新しい机が1つ増えているのに気が付いたクラスメイト達は騒いでいた。

「転校生は男やろか、女やろか？」

「男だつたら面白い性格のやつ、女だつたら美少女が良いな

トウジとケンスケも他のクラスメイト達と同じよつて盛り上がり上がつていた。

そして、担任のミサトの後について教室に入つて来た転校生の姿を見て、シンジ達は驚いた。

シンジのクラスにやつて来た転校生は夏休みに麦わら帽子をひつてあげた少女だつた。

突然現れた美少女に、クラスはさらに騒然となる。

「はいはい、静かに」

ミサトは陽気な笑顔でそう言つてから、転校生の少女に自己紹介をするように言つた。

「惣流・アスカ・ラングレーです」

ミサトの横に立つた少女は表情を変えずに落ち着いた声でそう囁つた。

教室の中がしんと静まり返る。

その雰囲気を何とかしようつとミサトは冷汗を浮かべながらもアスカに話し掛ける。

「もしかして、もうおしまい？ もうちょっと、何かあるんじゃない？」

「ありません」

「あ、そう……」

アスカにキッパリと断言されてしまったミサトはとりつく島も無いと判断したのか、ヒカリの席の隣に追加した新しい席に座るよう指示した。

「私、このクラスで学級委員をしている洞木ヒカリ。解らない事があつたら、何でも聞いてね」

ヒカリは笑顔でアスカに話し掛けたが、アスカはヒカリの顔をチラツと見た後、返事をせずに席に座つた。

拒絶されたヒカリの顔がさつと青ざめた。

ショックを受けたヒカリの姿を見たトウジがアスカに向かつて怒鳴る。

「イインチョをシカトするとはどうこうつ事やー」

「鈴原、私の事は別に良いからー」

ヒカリはトウジの方を向いてそう叫んだ。

席に座つたアスカはほおづえを突いたまま動かない。

そんなアスカに、レイが声を掛ける。

「惣流さん、洞木さんに謝つた方が良いと思つ」

レイに言われたアスカは体を震わせたが、答えようとはせずに顔を伏せてしまった。

そのアスカの態度に、クラスメイト達からため息がもれた。ミサトもアスカにどう声を掛けて良いものか困り果てていると、1時間目の開始を告げるチャイムが鳴る。

仕方無くミサトは教室の外へと出て行つた。

ミサトも彼女の担当する英語の授業があるのだ。

そして休み時間が終わつても、仏頂面のアスカに声を掛けるクラスメイトは誰も居なかつた。

「あーあ、せつかくの美少女なのに、もつたいないよな」

「あんな性格の暗いやつ、絶対友達なんかできへんわ」

遠巻きにアスカを眺めていたケンスケとトウジはぼやいたが、ヒカリも止めたりはしなかつた。

しかし、シンジは異議を唱える。

「おかしいな、夏休みに会つた時はあんな感じじゃ無かつたんだけど」

「何や、あの女と会つた事があるんか?」

「うん、その時は普通に笑つたりしていたんだけど」

「他人の空似じゃないのか?」

疑う言葉を掛けるトウジとケンスケだったが、レイもシンジに同調する意見を話す。

「私もほんの少ししか惣流さんと話して無いけど、今みたいな感じ

じゃ無かつたわ

「どうしたんだろう？」

シンジの質問に誰も答える事は出来なかつた。

その日の放課後、シンジは駅前通りで制服姿のアスカを偶然見かけた。

アスカは手に地図を持って外国人の男性とバスター・ミナルを歩いていた。

最初シンジは、アスカがデートをしているのかと思った。

興味を持つたシンジは、しばらくアスカの姿を追いかける事にした。

アスカはバス停で待つていろいろな人に尋ねて回つてゐる。

どうやら外国人の男性の道案内をしているようだつた。

やがて目的のバス停を見つけたのか、外国人の男性はアスカにお礼を言つてバスに乗り込んで行つた。

それを見届けたアスカの背中に、シンジは声を掛ける。

「やつぱり惣流さんつて、優しい人なんだね」

シンジに声を掛けられたアスカは、驚いて飛び上がる。

「何でアンタがここに！？」

「うん、さつき駅前で偶然、惣流さんを見かけて……」

顔を真つ赤にしたアスカは、シンジに背を向けて逃げようとした。

シンジは逃げようとしたアスカの肩をつかんでしまつた。

「離してよ！」

「あつ、『めん』

アスカに言われて、シンジは慌てて手を離した。

「どうして、アタシみたいのに構うのよ」

「1人で辛そうにしている惣流さんをどうしても放つておけない気がしたから」

アスカとシンジは同じ方向に向かって歩きながら話を始めた。

「アタシは、1人で居るのが好きなのよ

「僕にはそう見えなかつた。洞木さんや綾波と話したくても、わざと我慢している気がするんだけど」

アスカはシンジの言葉に返事をせずに2人とも黙つて歩き続けた。

「どうまでついて来る気?」

しばらく歩いて、しびれを切らしたように足を止めてシンジに尋ねた。

「だつて、僕の家はこっちの方向だから」

シンジの返事を聞いたアスカは再び歩き始めた。

そして、ついにコンフォート17まで着いてしまったアスカとシンジは驚いて顔を見合わせる。

「アンタの家つて、このマンションなの?」

「惣流さんの家もこのマンションだったんだ。でも、今まで見かけなかつた気がするけど」

「夏休みの間は荷物が届かなくてホテル暮らしだったんだけど、今日からなんとか入居できるようになったのよ」

「やうなんだ」

シンジとアスカはエレベータのボタンを押すとして指が重なる。

「5階なんだ」

「そう、5階よ」

「同じ階だなんて、凄い偶然だね」

シンジはそう言って穏やかに微笑んだ。

シンジとアスカが連れ立つてエレベータを降りると、碇家の隣の部屋が引っ越しで慌ただしい事に気がついた。

「シンジ、帰つて来たか。お前も惣流さんの家の引っ越しを手伝え」「ええっ、惣流さんの家つて隣だつたの？」

父親のゲンドウに声を掛けられたシンジは驚きの声を上げた。

それからシンジはゲンドウとコイと一緒にアスカの家の引っ越しを手伝う事になった。

普段は研究所で忙しく働いているゲンドウも、この日は早退したようだつた。

引っ越しの作業が終わつた後、アスカ達の家族も碇家で夕食を一緒に食べる事になった。

夕食の席での話題は、アスカの父親の仕事になつた。

アスカの父親は、ゲンドウと同じ組織でヒマワリによる土壤汚染を浄化する研究員として世界の支部を転々として来たと言う話だつた。しかし、今回は日本に長く居られる事になつたと話すと、アスカの顔がぱあつと明るくなる。

「パパ、それなら学校を卒業するまでずっと日本に居られるの？」
「そうだな、アスカが中学だけでなく高校を卒業するまでも居られると思う」
「やった！」

アスカは側に居たシンジの手を取つて、飛び上がって喜んだ。

「ちょっと、アスカ！？」

シンジが驚いた声を出して、ユイ達のニヤケた顔に見つめられたアスカは、恥ずかしそうに顔を伏せて手を離した。

夕食が終わると、惣流家の家族は碇家にお礼を言つて帰つて行つた。部屋に戻つたシンジは、宿題をするために机を向かつた。

そんなシンジに自分の名前を呼ぶアスカの声が聞こえて来る。シンジが碇家のベランダに出ると、隣の惣流家のベランダにはアスカが立つていた。

「ごめん、シンジともつと話したくて。別に構わないわよね？」
「うん、いいけど。名前で呼ばれるなんて少し恥ずかしいな」
「これからアタシの事は惣流さんじゃなくて、アスカって呼んで、ねつ？」

笑顔のアスカにノーと言つた事も出来ず、シンジはうなずいた。

「でも、アスカはもう宿題は済ませたの？」
「ええっ、宿題なんてあつたのー？」

シンジの言葉を聞いて、アスカは目を丸くして驚いた。

そのアスカの表情に少し笑つてシンジは漢字テストの宿題が出ている事を説明した。

「アタシ、外国の生活が長かつたから漢字は読む事も書く事も出来ないのよ」

アスカが困った顔になつてそう言つと、シンジは不思議そうな顔をして尋ねる。

「でも、あの男の人を案内していたじゃないか」

「漢字が読めないから、他の人に教えてもらつてたのよ」

シンジの質問にそう答えたアスカは、憂鬱そうにため息をついた。

「じゃあ、僕が教えてあげようか?」

「本当!? ありがと!」

シンジの言葉を聞いたアスカは嬉しそうに目を輝かせた。

「じゃあ、ちょっと待つて!」

そう言つてアスカは急いで自分の部屋へと戻り、ノートとペンを持ってベランダへとやつて來た。

「これ、持つてて」

「えつ?」

シンジは戸惑つた顔をしながらも、アスカのノートとペンを受け取つた。

そして、シンジの目の前でアスカはベランダの手すりを乗り越えた。アスカのようなかわいい子がそこまですると思わなかつたシンジは驚く。

「ちょっと、こんな所を通らなくても……」

「近道だから、いいじゃない」

アスカは悪びれた様子も無く、シンジにそう答えた。さつさとシンジの部屋に入るアスカの後を慌てて追いかけた。

シンジが教えるとアスカは、すぐに宿題の範囲の漢字を覚えた。アスカは宿題の範囲に含まれていない漢字も、シンジに尋ねて覚えようとする。

そのアスカの学習意欲にシンジはとても感心した。

「凄いね、こんなにたくさん漢字を覚えようとするなんて」「だってこれからずっと日本にいられるんだから、無駄になつたりしないでしょ?」

アスカはそう言って、今まで父親の仕事の都合でどれくらい転校を繰り返したか話し始めた。

同じ学校に通つていられたのは一番長くて6ヶ月。1ヶ月で転校してしまうなんて事もあつたらしい。

「アタシはせつかくできた友達と離れたくないから、何度もパパに転校したくないつてお願いしたわ」

アスカはその時の気持ちを思い出したのか、悲しそうな顔になつた。

「ごめんね、アスカに辛い事を思い出させて」
「別に良いのよ、アタシが話し始めた事だし」

シンジが謝ると、アスカは首を横に振つて話を続ける。

「どうせ悲しい思いをするのなら友達なんて作りたくない、ずっと1人で居ようと思つようになつたの。だから、新しい国に行つても言葉なんか、眞面目に勉強する事も無くなつたわ」

「でも、アスカは日本語の発音とか上手いよね」

「うん、ママも日本人だし、パパもドイツと日本のハーフだから、家ではいつも日本語で話していたのよ」

「だからアスカはわざと人を寄せ付けないようにしてたんだね。だけど、長くここに居られるんだからその必要はもう無くなつたんだね」

「だね」

シンジが笑顔で話しかけると、アスカは突然涙を流し始めた。

驚いたシンジがアスカに慌てて声を掛ける。

「どう、どうしたのー?」

「アタシ、洞木さんや綾波さんにひどい事をしちゃつた……」

「大丈夫だよ、2人とも事情を話せばきっと許してくれるって!」

シンジは泣きじゃくるアスカの手を取つて慰めた。

アスカが落ち着くまで、シンジはアスカの手を優しく握つていた。

「『めんね、すっかり甘えちゃつて。明日、学校に行く勇気が出で来たわ、ありがとう』

「どういたしまして」

泣き止んだアスカがシンジにお礼を言つと、シンジは照れ臭そうに顔を赤くした。

すると今度はアスカの方が、顔を赤くしてモジモジとしながらシン

ジに尋ねる。

「シンジって、好きな子はいるの？」

ドキドキとして期待に田を輝かせるアスカに見つめられて、シンジは胸が痛んだ。

しかし、シンジはアスカにウソをつく事は出来ない。

「うん、僕には好きな子が居るんだ」

シンジがそう言つと、アスカの表情はお通夜のように沈む。

「やつぱり、綾波さん？ アタシとシンジが初めて会つた時も待ち合わせしてたもんね」

「違うよ、名前も知らない女の子なんだ」

「どういう事？」

シンジの言葉を聞いて、アスカは目を丸くして驚いた。

アスカに尋ねられたシンジは、ヒマワリ畑で出会った少女の事を説明し始めた……。

シンジがその少女と出会ったのは、父が勤める研究組織の所有するヒマワリ畑の1つで、松代市にあるものだった。

父ゲンドウに連れられてやつてきたのだが、ゲンドウは仕事の話を始めてしまい、シンジは一人でヒマワリ畑の中をふらついていた。

「ねえ、アタシと一緒に遊ばない？」

ヒマワリの間から姿を現したのは、麦わら帽子をかぶったシンジと同じ年くらいの少女だった。

少女を見た時、赤い髪の毛の色からシンジは外国人の子かと思った。だが、目の前の少女は日本語を話している。

返事をする前に少女に手を引っ張られたシンジはそのままなし崩しにその少女と一緒に遊ぶ事になってしまった。

ヒマワリ畑を2人で駆けて遊んでいる途中に、少女の大きな麦わら帽子は何度もヒマワリに引っ掛けた。

シンジのかぶっている麦わら帽子より明らかに大きい。

不思議に思つて少女に尋ねると、母親の麦わら帽子を借りてかぶつているのだ答えた。

「アタシのパパ達ってどうして、ヒマワリ畑を作つて居るか知つてる？」

「うーん、よく解らないよ」

遊んでいる途中に少女に尋ねられて、シンジは首を横に振つた。

「アタシもよく解らない。でも、ヒマワリ畑を作ればみんなが喜ぶつてパパが言つているの」

「へえ、みんなが喜ぶんだ」

シンジも父親のゲンドウに理由を聞いた事があるが、『土壤浄化』だの『プロジェクト』だの訳の解らない単語を並べられて困ってしまった。

要するにゲンドウはかみくだいて簡単な言葉で説明するのが苦手だったのだ。

「だから、アタシもパパに協力してヒマワリを植える事にしたのー。」

少女はそう言って、ポケットからヒマワリの種を取り出した。その少女も、父親の仕事の内容を正確に理解しているわけでは無さそうだったが、やる気に満ちた明るい笑顔をしているとシンジには思えた。

ヒマワリの種をその小さな手いっぱいにつかんだ少女は、シンジに向かって手を差し出した。

どうやら、シンジにもヒマワリを育てるのを協力しろと言つ事らしい。

少女から笑顔で渡されたヒマワリの種を断る事も出来ず、シンジは受け取ったヒマワリの種をポケットに入れた。

「約束だからね」

「……うん」

少女の言葉にシンジはうなずいた。

それからしばらくシンジが少女と遊んでいると、父親のゲンドウがシンジを探して呼ぶ声が聞こえてきた。

「あつ、お父さんが呼んでるから僕は帰らなきゃ、バイバイー。」

シンジは慌てて少女に手を振って父の元へと戻つて行つた。

そして、シンジは来年の夏にも父親のゲンドウに頼んで松代市のヒマワリ畑に連れて行つてもらつた。

少女に会うためだとは恥ずかしくてゲンドウに言えなかつた。

シンジはヒマワリ畑の中を必死に探しまわつたが、少女の姿を見つける事は出来なかつた。

その時になつて、シンジは少女の名前すら聞いていなかつた事を後悔した。

唯一の手掛かりは松代市のヒマワリ畑のみ。

そんなわざかな偶然にすがつて、シンジはその来年も再来年もヒマワリ畑を訪れたが少女の姿は見つからなかつた。

シンジは、ヒマワリ畑で少女と再会する事は諦めた。

しかし、シンジは少女から貰つたヒマワリの種を植えて育てるのは止めなかつた。

それは自分と少女を結ぶ小さな縁。

ベランダのプランターに植えられたヒマワリを見る事で、シンジは少女の存在を心の中で感じられる気がしたのだ。

シンジが昔の思い出話をしている間、アスカは真剣にシンジの話に耳を傾けていた。

「アスカはそのヒマワリ畑の女の子と似ているんだ。だから、この前アスカに会つた時、その子とアスカのイメージを重ねてしまつて……」

シンジはそう言つてアスカに謝つたが、アスカは黙つて目を閉じた。アスカを怒らせるか失望させてしまつたと思ったシンジは、自分の事を情けないと笑うかのような声でアスカに話し掛ける。

「僕つて未練たらしいよね。いつかヒマワリを育てるのを止めて、
その女の子の事も忘れよつとは思つんだけど」

「……忘れちやダメよ、絶対」

涙声でアスカが言つと、シンジは慌ててアスカにさうに謝る。

「「めん、僕つて自分勝手すぎるよね」

「ううん、これは嬉し涙よ」

「えつ？」

泣き笑いのような表情になつたアスカを見て、シンジは驚いた。

「アタシ感激したわ……たつた1日遊んだだけだったのに、アタシの事を覚えていてくれたなんて」

「じゃあ、アスカが麦わら帽子をかぶつてヒマワリ畑に居た女の子？」

シンジが震える声でアスカに尋ねると、アスカは満面の笑みを浮かべてうなずいた。

すると、シンジの心の中にも激しいものが湧きあがつた。
何年も恋焦がれていた相手に、会う事が出来たのだ。

「アスカあーつ！」

「シンジーーつ！」

シンジがアスカに向かつて飛びかかると、アスカはしつかりとシンジの体を受け止めた。

そして、お互いの存在を幻では無いと確かめるかのように背中に手をまわして固く抱き合う。

さらに嬉しさが増して来たアスカとシンジは、歓喜の声を上げながら手を繋いだままダンスを踊り始めた。

「シンジ、お隣に迷惑になるから静かにしなさい」

そんなシンジの部屋の物音を聞きつけた、コイがシンジの部屋のドアを開けて注意した。

しかし、手を繋いでいるアスカとシンジの姿を見て目を丸くして固まってしまう。

不意をつかれたアスカとシンジも同じ反応だった。

「あっ、お邪魔しています」

「『ごめんなさい』母さん」

顔を真っ赤にしたアスカとシンジが慌てて手を離した。コイはそんな2人を見て穏やかな笑みを浮かべる。

「おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

コイが祝いの言葉を述べると、アスカとシンジはお礼を言った。

「ア、アタシ、シンジに宿題を教えてもらおうと思つて、それで…」

「別にいつ訪ねて来ても構わないのよ。でも、次は玄関から入つて

来てね」

アスカがシンジの部屋に居る言訳をしようとするが、コイはまったく意に介さない様子だった。

「は、はい……」

アスカは恥ずかしそうに消え入るような声で返事をした。

「やうだ、これからシンジが寝坊するよつだつたら、起こしに来て
もうおうかしりつ？」

コイの言葉に今度はシンジが恥ずかしがる番だつた。
シンジの部屋からコイが立ち去ると、アスカとシンジはホッとした
よに息をもらす。

「母さんが怒つて無くて良かつたね」
「アタシが勝手にシンジの部屋に来ちゃつて迷惑をかけてしまつた
と思つたわ」
「そんな、迷惑じや無かつたよ。だつて、アスカがあの麦わら帽子
の女の子だつてわかつたから、信じられないぐらい嬉しいよ」
「まだ疑つているの？ ジヤあ、アタシのアルバムを見てみる？」
「いや、そう言つわけじゃないけど。でも、アスカのアルバムなら
見てみたいな」

アスカはからかうよな表情を浮かべながらシンジに尋ねる。

「もし、麦わら帽子の子とアタシが別の子だつたら、シンジはどつ
ちを選んでた？」
「そんな、意地悪な質問をしないでよ」

シンジが辛そうに顔を歪めると、アスカは慌てて謝る。

「「」あんね、でも麦わら帽子の子を心の中で大切にしてくれぬシン

ジの気持ちは嬉しかったから

アスカはさう言ひと、シンジのほおに軽くキスをして部屋を出て行つた。

シンジはほおに手を当ててぼう然としていた。

そこへドタドタと激しい足音を響かせたアスカが戻つて来た。
玄関から帰りうとしたのだが、サンダルはベランダに置いたままだつたのだ。

「う、さっきのはね、あの……その……」

アスカは顔を赤くしてうなりながらシンジに言い訳をした。
こう言う時は何も言わない方が良いと思つたシンジは、黙つて笑顔でアスカにサンダルを返した。

アスカはシンジからサンダルを受け取ると、コイヒシンジに見送られて玄関から帰つて行つた。

「かわいい子ね。シンジが何年も一途に想つてしまつのも分かるわ」
「ええ、母さんは知つてたの！？」

シンジが尋ねると、ユイはアスカの両親とは以前からの知り合いで話した。

碇家の隣の部屋も元々は惣流家の物だつたが、遠方の地に転勤することになつていたので、他の家族に貸してたのだと云つ。
ユイの話を聞いたシンジはため息を吐いて恨めしそうな顔でユイを見上げる。

「それならもつと早く僕に教えてくれたら良かつたのに」
「だつて、シンジは恥ずかしがつて松代のヒマワリ畑に行く理由も、どうしてヒマワリを育ててているのかハツキリと言わなかつたじやな

い

コイに図星を突かれて、シンジは黙つてつむいた。

「それに、まだ惣流さん達が日本に戻つて来るまで何年もあつたのよ……」

コイの言葉を聞いて、シンジは気が付いた。

アスカの方からシンジに告白してくれたからシンジも勇気を出してアスカに麦わら帽子の女の子の事を話す事ができたのかもしない。また、お互いの素性を知つても遠く離れた場所にいるのでは、疎遠になつて関係が自然に消滅してしまつていた可能性もある。

「だけどね、シンジがアスカちゃんの事が好きだつて分かつたら、母さんも応援するつもりだつたのよ。まさか、引っ越しした日に告白するとは思わなかつたわね」

そういつたコイはシンジを見て楽しそうに笑つた。

「でも、僕とアスカで釣り合いがとれるかな

「もうそんな心配をしてるの？」

「だつて学校でもアスカが明るくなつちやつたら、みんなにもてちやうよ」

シンジの言葉を聞いたコイは愉快そうに笑いながら、[冗談めかしてシンジに]言つ。

「他の人にはどう思われるなんて関係無いの。お母さんとお父さんを見てみなさい」

「何気にひどいぞ、コイ」

リビングでコイとシンジの会話を聞いていたゲンドウが悲しそうにつぶやいた。

そして次の日、寝坊したシンジはコイでは無くアスカに起こされる事になった。

「ふふ、シンジってば可愛い寝顔してるじゃない
「恥ずかしいなあ……」

シンジはアスカに会えた興奮が治まらず、なかなか寝付けなかつたのだ。

アスカと話しながら朝の準備を終えたシンジは、アスカと連れ立つてコンフォート17を出て登校する。

通学路を歩くアスカとシンジの姿を田撲したクラスメイト達は、信じられないと言つた様子で目を丸くした。

アスカとシンジが教室に入ると、トウジとケンスケは大きな驚きの声を上げ、ヒカリは息を飲んだ。

レイは読んでもいた本を机から落としてしまう程だった。

「おい、何があったんや！」

「僕達にも解るように説明してくれないか

「私も聞きたいわ」

トウジとケンスケとヒカリの求めに応じ、シンジはアスカとの事を説明し始めた。

アスカの家族がシンジの家の隣に引っ越して来た事を話すと、トウジ達は息を飲んだ。

そして、シンジがヒマワリ畑の女の子の事を話し始めると、レイは耳を押された。

その先は聞きたくない嫌な予感がしたのだ。

「凄い、惣流さんがヒマワリ畑の女の子だつたなんて…」

しかし、ヒカリが発した感激の声はレイの耳に届いてしまった。シンジがレイを含む他の女の子に興味を示さなかつた理由。相手がヒマワリの花だつたら良かつたのに。

レイは心の奥底で、ヒマワリ畑の少女はシンジの妄想であつてほしいと願つていた。

実在するとしても、2度と出合つてもういたくなかった。せめて、シンジが諦めてしまつまでは。

「ひまわり畑の女の子は、本当に居たのね……」

レイは現実を自分で受け止めようとするかのよし、小さな声でそうつぶやいた。

シンジが説明を終えると、アスカは昨日冷たい態度を取つてしまつた事をヒカリに謝つた。

ヒカリはニッコリと微笑むと、すぐにアスカを許すのだった。

「やうだアタシ、綾波さんにも謝らないと」

アスカはそう言つて、少し離れた席に座つていたレイの元へ近づいた。

レイもいつもはシンジ達の話の輪に混じるのだが、今は立ち上がりないほどのショックを受けていたのだ。

「「めんね、綾波さん」

アスカの謝罪の言葉には昨日の態度を謝る他にも意味が込められている事はシンジには解らなかつた。

「良いのよ」

レイは短くアスカにそう答えて、精一杯の作った笑顔を返した。そのレイの姿を見たシンジはホッと息を吐き出した。しかし、ヒカリはそのレイの笑顔に隠された悲しい気持ちを知つていた。

ヒカリはレイがずっとシンジの事が好きだつたと気が付いていた。

「おやまあ、一体どうなつてゐるのー?」

担任教師のミサトは、教室に入るなりすっかり明るい表情に変わつてしまつてゐるアスカを見て悲鳴に似た声を上げた。シンジとアスカはミサトに事情を説明する事になつてしまつた。2人がミサトと話している間に、ヒカリはそつとレイに近づいて声を掛けた。

「綾波さん、碇君の事……」

「碇君は友達よ」

レイはヒカリにキッパリとそう答えた。

しかし、ヒカリはシンジがレイの事を「綾波さん」から「綾波」と呼ばせるのにレイが努力していた事を知つている。

「綾波さんがもう少し碇君に素直に好きつて言つていれば、関係が変わつていたかもしぬないのに」

ヒカリは言いすぎたと気が付いて思わず口を手で押さえた。レイは悲しそうな顔をして首を横に振る。

「無理よ、碇君の中には惣流さんがずっと前から居たんだもの」

完全敗北を宣言したレイに、ヒカリはそれ以上慰めの言葉を思い付かず、レイの席を離れようとした。

そんなヒカリをレイは腕をつかんで引き止め、ヒカリの体をぐっと側に引き寄せる。

「洞木さんも、回りくどい事をしないで、鈴原君に好きだと聞いた方が良いわ」

「……そうね」

レイの言葉を聞いて、ヒカリはトウジに告白する決意を固めるのだった。

そしてしばらく経った秋の休日。

シンジとアスカ、トウジとヒカリ、レイの5人はピアノコンクールの会場へと来ていた。

アスカとヒカリもデートなのでそれなりにおめかしをしていたが、レイは白いドレスを着ていた。

なぜならコンクール出場者の1人であるレイの彼氏がそのドレスを着たレイの姿を気に入っていたからだ。

「渚君、良い演奏が出来ると良いね」

「ええ」

シンジの言葉にレイはうなずいた。

「渚君なら優勝も狙えるんじゃないかしら」

「緊張して来たわ」

「レイが緊張しちゃって、どうするのよ」

ヒカリの言葉にレイが体を固くすると、アスカがあきれた顔でため息を吐き出した。

司会者から渚カヲルの名前が呼ばれ、シンジ達とは違った中学校の制服を着た少年がステージに姿を現して客席に向けて一礼する。ステージ上のカヲルと視線が合つたレイは顔をポツと赤くした。カヲルの演奏を聴いた後、出場者であるカヲルが出て来るのを待っていると、レイと別れてシンジ達は一足先に外へと出た。

「レイつてば、すっかり渚にくびつたけね」

「いいなあ、惣流さんも綾波さんも、とっても感動的な出会い方をして」

「何や、幼馴染の自分らはつまらん言つとんのか」

アスカの言葉にヒカリが目を輝かせてそう言つと、トウジは不機嫌そうにツッコミを入れた。

「あ、別に、私と鈴原の出会い方に不満があるわけじゃないのよ」

ヒカリが慌てて言い訳をすると、アスカはあきれたように話し掛ける。

「ヒカリつてば、いつまで鈴原を名字で呼んでるのよ。アタシやレインの事も名前で呼び捨てにしてくれないし」

「『』めんなさい、アスカ……さん」

「だからさあ」

すっかり友達として馴染んだアスカとヒカリの話を聞いて、シンジは心が安らぐのを感じた。シンジはそんなアスカにそつと声を掛ける。

「アスカ、友達が出来て良かつたね」

「うん、もう転校することはないし、たくさん作るつもりよ」

そうシンジに答えたアスカの笑顔は、とても輝いて見えたのだった。

夏休みのある日の夜の事。

俺達SOS団の団員達は我らがSOS団団長涼宮ハルヒに呼びつけられ北高校の校門に集められていた。

SOS団とはハルヒが作った宇宙人、未来人、超能力者を探し出して一緒に遊ぶと言うのが目的である部活だ。

宇宙から飛来したヒューマノイドインタフェイスである長門。未来からやって来た朝比奈さん。

特殊な状況で超能力を使える古泉。

お望みのメンバーが集まつたのに当のハルヒ本人は気がついたりしない。

そして最近のSOS団はシーズン」との行事をしめやかに行つ団へと変化しつつある。

俺はハルヒから電話の呼び出しを受けてすぐに家から飛び出したのだが、すでにSOS団の他のメンバーは到着していた。

「遅い！」

ハルヒはいつものように俺に人差し指を突き立てて来やがつた。

「今度はキヨンのおじりだからね！」

やれやれ、次回は競争に参加する権利も無しかよ。
んで、ハルヒは俺達をわざわざ呼び出して何をするつもりだ？
いや、所持品に懐中電灯が含まれている時点で見当はついているがな。

面倒な事にならない事を祈るだけだ。

「それでは、みんな集まつた所で始めるわよ。」

「始めるつて何をだ?」

「肝試しよ!」

「ひえええつ!」

俺の質問に答えたハルヒの言葉を聞いて朝比奈さんが悲鳴を上げた。朝比奈さんはいつも言う話が大の苦手なのだ。

未来でも幽霊の正体は解明されていよいよだ。

「なんといこの学校にはね、七不思議がある事が判明したのー。」

ハルヒは古い冊子を抱えていた。

表紙には文芸部と書かれている。

どうやら昔の文芸部が書いた雑誌のようだ。

俺はハルヒに聞こえないような小さな声で長門に尋ねる。

「おー、ハルヒにあの雑誌を渡したのはお前か?」

「そう」

「どうしてそんな厄介な事をしたんだよ」

おかげで俺の平穏な夏休みが奪われちまつたじゃないか。

「涼宮ハルヒが望んだ事」

長門は表情一つ変えずつぶやいた。

これはとつつく島も無いな。

すると俺を慰めるように古泉が近づいて声を掛けて来る。

「まあ、我々は涼宮さんの精神安定剤なのですから」

「そんな事言って、ハルヒが幽霊や超常現象を目撃などしてみる、

世界の安定が崩れてしまつだろ？

「そつならぬよう、頑張りましょ？」

世界の命運を左右する事をそんなに軽々しく言つた。

「やー、何をいひそと話しているのよ！ 私語は慎みなさい！」

俺と長門と古泉が顔を突き合わせて話していると、ハルヒが怒鳴つた。

ハルヒが決めた肝試しのルールはこうだ。

何とハルヒは昼間のうちに七不思議に関わる場所をチェックポイントとして将棋の駒を置いていたらしい。

いきなり駒が失くなつた将棋部の連中には俺が後で謝つておひづ。チェックポイントに着いた証明として、置かれた将棋の駒を持ち帰る。

さて、チーム分けのくじ引きだ。

もし、朝比奈さんと一緒に組になるのなら全力で守つて差し上げなければなるまい。

長門か古泉と同じ組なら、裏方でハルヒを超常現象から興味をそらす役目に集中し易い。

しかし、くじの結果は俺にとつて最悪のものだつた。

ハルヒと同じ組。

さらに2人きりかよ！

うわっ、ハルヒが滅茶苦茶不機嫌な顔をしてやがる！

長門、古泉、これはどういう事なんだよ。

お前らの仕業か？

俺は2人をにらみつけたが、長門は無反応だし、古泉はいつも通りの爽やかな笑顔を浮かべながら首を振つてやがる。

「では、僕達の組が先に出発ですね」

そう言つて古泉、長門、朝比奈さんの組は校舎へと姿を消した。

俺達は15分経つてから校舎へと入る段取りになつてゐる。

自然と校門でハルヒと2人きりになる。すると、ハルヒは今までのハイテンションとは打つて変わつた神妙な顔になつて黙り込んだ。

俺はハルヒのこんな表情を一度だけ見た事がある。

それは七夕が近づいた部室での事だった。

あの時ハルヒは思い出し憂鬱だと言つていたが、肝試しを前にそんな事があるのか？

「時間だ、そろそろ行くぞハルヒ」

俺がこつちを見ようとしないハルヒの背中に声を掛けると、ハルヒは飛び上がつて驚いた。

「そ、そう？ 遅れずに付いて来るのよ！」

ハルヒは上ずつた声でそう言つと、ズカズカと中へと校舎の中へと入つて行つてしまつた。

何をそんなに緊張しているんだ、ハルヒらしくも無い。

俺達が最初に目指すべき場所は、音楽室だ。

どこの学校でも語り継がれる定番の勝手に鳴るピアノつてやつだ。

どうせ、誰かの聞き間違いかなんかだろう。

しかし、廊下を歩いていた俺は驚いた。

ピアノを弾く音がかすかに聞こえて来る。

「ねえ、何か音が聞こえない？」

ハルヒが超常現象を信じてしまえばそれが現実の物となつてしまつ。

「いやいや、気のせいだろ？」「

俺は全力で否定したい気分になり、激しく首を横に振った。だが音楽室に近づくにつれて音は鮮明になつて行く。

ハルヒは手を輝かせて俺に話し掛ける。

「ほら、やっぱ居たんだわ！ 悲劇の天才少女ピアニストの靈が

！」

「まだ居ると決まったわけじゃないだろ？」「

ハルヒは反論する俺の言葉を無視して俺の手を引っ張り、音楽室へと猛ダッシュを始めた。

「待て、ハルヒ！」「

俺の制止する叫び声も空しく、ハルヒは音楽室のドアを開けてしまつた。

すると音楽室の蓋の閉じたピアノの上に、クロップレイヤーが乗つていた。

スピーカーからは録音されたピアノの演奏音が聞こえて来る。

「どうやら、部活をやっていた連中のイタズラみたいだな」

俺は超常現象で無くて心底ホッとしてため息を吐いた。思わず体の力が抜けて俺は膝を折った。

「何よ、このくだらないオチはー！」「

ハルヒは怒りの全てをぶつけるかのようにそのクロップレイヤーを

かんで振り回した。

おいおい、壊すなよ、それは高すぎて俺には弁償できないからな。しばらく暴れ回った後、ハルヒはCDプレイヤーを勢い良く床に叩きつけた。

強い衝撃を受けたが、幸い壊れてはいないようだ。

「ひつなつたら、次行くわよー。」

ハルヒは俺に人差し指を突き付けてそう宣言した。

全く、前向きなやつだな。

だが、俺はハルヒのこの性格に逆に救われた事に気が付いた。

ハルヒがこのイタズラに対して本気で怒つてしまえば閉鎖空間が発生し、古泉達の『機関』は大変な事になるに違いない。

しかし、古泉達から連絡が無いのは今の所ハルヒは限界に来て居な
いって事か。

俺はハルヒの機嫌を損ねないように急いでハルヒについて行つた。
次の七不思議は、夜に光を放つプールだそうだ。

ハルヒの考えによれば、地球を侵略しに来たエイリアンがプールの
水槽に卵を産み、それが夜に発光して好奇心を持った人間をおびき
だすのだと言う。

じゃあ昼間はどうなつているんだ？ などとツッコミ満載の内容だ
が、俺の話なんぞ聞いちゃいねえ。

「ほら、今プールが光つたわ！」

俺もハルヒに続いて校舎の窓からプールをのぞき込んだ。
信じたくないが俺にもプールの水面が光つたように見えた。
やべえ、今度こそ本物のエイリアンか？

「早く行くわよ、ぐずぐずしていると逃げられちやう！」

「嫌だ、俺はエイリアンに食われたくない！」

目を輝かせて俺の手を引くハルヒに俺は抵抗したが、ハルヒの力は思いの外強かつた。

「もしかして、友好的なエイリアンかもしれないじゃない」

友好的なエイリアンがこっそりと夜の学校で卵を産んだりするか。

「きつとシャイなのよ」

俺はハルヒとバカな会話を繰り広げながらついにプールサイドまで来てしまった。

プールは静かで誰の気配も無い。

しかし、本当にエイリアンの卵なんかがあつたらプールに近づくのはやはり危険だ。

長門、古泉、朝比奈さん、どこかで見てているならハルヒの体を取り押さえるのを手伝ってくれ！

プールサイドでハルヒと押し問答をしていた俺の目に、懐中電灯の明かりが飛びこんで来る。

「やばい見回りだ、隠れろ！」

俺はハルヒを手近な物陰へと連れ込んで身を伏せて隠れた。

懐中電灯を片手に歩いて来るのは我がクラスの担任、岡部教諭だった。

岡部教諭は真面目な性格なのか、プールの水面まで照らして誰か居ないか調べていらっしゃる。

早く立ち去ってくれないか俺は必死に祈っていた。

夜の学校にハルヒと2人きりで居る所など見られたら誤解されて親

の所にまで連絡が行きやつた。

「なるほど、解つたわ！」

岡部教諭が立ち去った後、ハルヒは嬉しそうな顔になつて俺の前で声を上げた。

「何が解つたんだ」

「光るプールの謎よ！ きっと見回りの教師が懐中電灯でプールの水面を照らしているのを見て、誰かがプールが光つていると勘違いしたのよ！」

「あーそつだな、さすがはハルヒだ」

じゃあさつとき校舎の窓から目撃したプールの光は何だつたんだ、岡部がいくら真面目と言つても短期間に2度もプールに見回りに来るとは思えん。

それに地球を侵略しに来たエイリアン説はどうなつたんだ？ ツツ「ミミ一二〇は満載だつたが、ハルヒが勝手に納得して居るんだ、やぶを突いて蛇を出す事も無い。

「次は、涙を流す銅像の話だつたな」

俺はハルヒの気が変わらないうちに、次の七不思議に向かつた。

これもどうせ誰かのイタズラかなんかだろう。

そう思つていたのだが、俺は銅像を見てとても驚いた。

なんと、銅像が青い色の涙を流しているように見えたからだ。

しかし、ハルヒは俺に得意げに説明を始める。

「何よキヨン、こんな事で驚いているの？」

「だつて、ウワサの通り銅像が涙を流しているじゃないか」

「これはね、酸性雨が銅像を溶かしたのよ

「酸性雨だと？」

「そつ、それが銅と化学反応を起こして青くなるわけ、化学の授業で習ったでしょう？」「

「いや、さっぱり覚えていないが

俺がそう答えると、ハルヒはあきれたようにため息をつく。

「授業中に居眠りなんかしているからよ

お前だつて俺の後ろの席で寝ていいんじゃないか。

「あたしは解つていいから良いのよ。それより、SOS団から落第者を出すわけにはいかないんだから、しつかりしなさいよねー！」

「解つた、さあ次のチェックポイントに行こうぜー！」

俺は話題を反らすためにハルヒの腕を引っ張つて銅像を後にした。その後俺とハルヒは残りの七不思議の場所を回つたが、どれもイタズラや勘違いだと解つた。

探索を終えて校門に戻ると、長門と朝比奈さん、古泉の3人が俺達を待つていた。

「どうでした涼宮さん、七不思議の方は？」

「どれもこれも、ちつともたいした事じや無かつたわ

「そうですか、でも肝試しができてよかつたじやないですか

「まあ、そうね

俺は古泉の言葉に満足したように笑うハルヒに驚いた。

七不思議が全部空振りだつたんだぞ、悔しくはないのか？

「それじゃ今日はこれで解散するけど、明日の市内探検では今日見つけられなかつた分を取り返すからねー。」

「おい、ハルヒ……」

「あー、キヨンは明日はおじり決定だからー。」

俺が口を挟む間も無く笑顔のハルヒは姿を消してしまつた。

「では、僕達も帰りましようか」

古泉の言葉に長門と朝比奈さんもうなずき、ぼつ然と立つて居る俺から離れて歩き出した。

「おい古泉、なんだこの終わり方は？ ビラしてハルヒはああも簡単に七不思議を諦めて帰つて行つたんだ？」

俺は古泉に問い合わせたい事がたくさんあつた。

15分先に出発した古泉達でないと出来ない事が色々あつたからだ。

「全では、涼宮さんが望んだ通りに事が運んだのですよ」

「どういう事だ、お前らは何かやつたのか？」

「別に、何もしていませんよ。お疲れさまでした」

「キヨンくん、また明日」

それ以上俺の質問には答えず、手を振つて去つて行く古泉と朝比奈さん、そしていつの間にか姿が消えている長門。

心の中はモヤモヤとした思いでいっぱいだ。

あー、俺の閉鎖空間を誰か消してはくれないのかね。結局、この夜の真実は伏せられたままだつた。

長かつた使徒と人類の戦いもついに最終局面。

使徒の精神攻撃を受け、伏せっていた状態から復活を遂げたアスカの乗る式号機は、エヴァ量産機相手に善戦をしていた。

しかし、直前の戦略自衛隊との戦いでアンビリカルケーブルを切断された式号機の内部電源は無情にも切れてしまった。

アスカにピンチが訪れる。

だが、アスカの窮地を救つたのは遅れてやってきたシンジの初号機だつた。

式号機を取り囲んでいたエヴァ量産機は初号機によつて倒されて行つた。

そして、初号機は圧倒的な強さを見せてエヴァ量産機に勝利した。ここにゼーレの野望は完全に潰えたのだ。

作戦の失敗を知った戦略自衛隊もネルフから撤退し、日本政府もネルフへの侵攻命令を撤回した。

信頼を失つたキール議長率いるゼーレ執行部は、ゼーレのスポンサーから見放されたのだ。

ゼーレがネルフからMAGIを奪う事すら叶わなかつた事を知ると、日本政府はネルフを味方に引き入れる事を考えたのだった。

これによりネルフの危機も去り、生き残つたネルフの職員達は歓声を上げた。

発令所に居た冬月達も安心してため息をついた。

死んでしまつたネルフの職員達の事を考へると素直に喜べないのは確かであつたが。

戦いを終えた初号機と式号機はそのまま戦場に立ち尽くしていた。ネルフの発令所から戦いの終わりを告げる通信が入るとエントリー プラグに居たシンジとアスカは少し安心したが、まだ警戒を緩めるわけにはいかなかつた。

量産機がまた復活してしまったかもしれないし、戦略自衛隊がまた自分を襲つて来るかも知れないと思うと油断は出来ない。

本当に安全になつたと確信するまで初号機は式号機を守るように立ち続けていた。

エントリープラグから出たシンジとアスカは車に乗せられ、並んで後部座席へと座つた。

緊張の糸が切れた2人にどつと疲れが押し寄せる。

そして、シンジはアスカがそつと自分の手を握つて来た事に驚いた。シンジは目を丸くして隣に座るアスカの方に顔を向けると、アスカは満ち足りたような穏やかな笑顔でシンジを見つめ返した。

すると、シンジも微笑んでアスカの手をしっかりと握り返した。

シンジはアスカに謝りたい事はたくさんあつたが、アスカの表情を見てシンジは自分は許されたのかも知れないと思つた。

アスカもシンジに対し感謝したい事がたくさんあつたが、シンジの表情を見て自分の思いは伝わつたのだと思つた。

もう2人の間に言葉は不要だつた。

アスカとシンジは互いの手の感触の温もりを感じながら、ゆっくりと目を閉じて眠りに着いた……。

車で政府関係の建物に案内されたアスカとシンジは、そこで冬月から話を聞かされた。

これから病院で精密検査を受けた後、アスカとシンジはエヴァンゲリオンパイロットの任務から解放され自由の身となれる。話を聞いたアスカとシンジはとても喜んだ。

これからはエヴァに縛られる事の無い平穏な生活を送れるのだ。

それは、使徒との戦いに疲れた2人にとつて願いだつた。

第3新東京市を襲つた使徒の戦禍により、今まで暮らしていたコンフォート17での生活が困難になつたアスカとシンジは、第2新東京市のマンションの部屋で新しい生活を始める事になつた。アスカは別に一緒に構わないと言つていたのだが、厳しい保護者である冬月と伊吹マヤの方針によつて、アスカとシンジの住居は別々とされた。

夏休みが終わつた後、アスカとシンジは第2新東京市の中学校に転入する段取りになつてゐる。

アスカはこれから新しく始まる平凡な中学生としての生活に胸をときめかせていた。

シンジに素直に気持ちを伝えられたのだから、これからは“少し”シンジに優しくしてあげよう。

もちろん、自分の優位性は譲るつもりはないけれど。

アスカはすっかり普通の少女、恋に夢見る乙女となつてゐた。

アスカが自分の部屋の時計を見ると、時間は夕方。

そうだ、今日はシンジと一緒に夕食を作つてみようと言つてみよう。自分が料理を始めると言つたらシンジは驚くけど、喜んでくれると思つ。

そして、2人で買い物に行つて、包丁を初めて握る自分の手をシンジが持つて教えてくれたり……。

アスカは自分とシンジがおそろいのエプロンを付けている所まで妄想を膨らませていた。

エヴァンゲリオンのパイロットだつた時は、そんな事は考えても見なかつたのに。

しかし、アスカはこんな平和ボケしている自分も悪くは無いなと思つていた。

そんな妄想を抱えながらアスカはシンジの部屋へたどり着いた。

アスカがシンジの部屋のインター ホンを押しても返事が無い。

おかしいと思つたアスカがシンジの部屋のドアノブに手を掛けると、

ドアには鍵が掛けていなかつた。

シンジが鍵を掛けないで外出するなんて珍しい事だ。

きっと近所に行つてゐるのだろうと、アスカはシンジの部屋の中で待つ事にした。

部屋の中で自分が待つていれば、シンジは驚くに違ひない。

アスカはその時のシンジの驚いた顔を想像して笑つた。

しかし、テーブルの上に置かれたシンジの書き置きを見ると、アスカは顔を青くした。

* * * * *

僕はトウジを殺して生き延びたんだ。

だから、僕らは幸せになれない、いや、幸せになつてはいけないんだ。

さよなら、アスカ。

* * * * *

「どうして…？ やつとアタシはシンジと普通の生活が出来ると思つたのに…」

アスカは半狂乱になつてシンジの書き置きを丸めた。

「アタシを置いてどこに行つちやつたのよ……」

アスカの目から滝のような涙が流れた。

そして、アスカは自分の携帯電話を取り出すと、ネルフの関係者よりも先にヒカリの家へと電話を掛けた。

シンジの失踪にはトウジが関係していると思ったからだ。

エヴァ参号機が使徒に乗つ取られ、トウジが命を落とした事件から

アスカもヒカリと連絡を取る事はしていなかった。

トウジの死によってアスカもヒカリと顔を合わせ辛かつたのだ。
しかし今のアスカにはそのような事は関係無かつた。
それほどシンジを取り戻そうと必死だったのだ。

「はい、洞木です」

「ヒカリ？」

「アスカ？」

家の電話に掛かって来た相手がアスカだと知ったヒカリは、電話を切つて逃げてしまいたい衝動に駆られた。

しかし、次に聞こえて来たアスカの叫びがヒカリを思い止まらせた。

「鈴原が、シンジを連れて行っちゃったのよー、お願ひヒカリ、鈴原にシンジを返してつて頼んでよー！」

「えつ、それってどう言つ意味なの？ 落ち着いて、アスカ！」

アスカの支離滅裂な言葉、涙声、そして何よりもトウジの名前が出て来た事にヒカリは驚いた。

そして、アスカからシンジの書き置きの内容を聞いたヒカリはアスカに謝る。

「ごめんなさいアスカ、私がもつと早く勇気を出して会つていれば碇君もアスカも苦しませずに済んだのに……」

「それってどういう事よー？ 教えてヒカリー！」

電話の向こうのアスカはかなり興奮してしまっているようだ。

ヒカリはアスカに落ち着くように説得した後、保護者であるマヤ立ち会いの元、アスカの部屋で会つて話す約束をした。

「それでヒカリ、シンジとアタシに伝えるべきだった事つて何？」

アスカの部屋を訪れたヒカリは、久しぶりの再会を喜ぶ間もなく、暗い顔をしたアスカに質問をされた。

落ち着いてはいるが、それだけアスカはシンジの失踪にショックを受けているのだとヒカリは感じた。

「伊吹さん、これをアスカに見せて構わないですよね？」

「ええ」

マヤに確認を取つてから、ヒカリは数通の手紙をアスカに見せた。

「これは……鈴原の遺書なのよ
「えつ……」

ヒカリの言葉を聞いたアスカは伏せていた顔を上げて驚いた。
そして食い入るようにトウジの書いた手紙を読む。

マヤとヒカリはそんなアスカの姿を読み終わるまでじつと見守つていた。

「まさか、鈴原がこんな事を思つていたなんて……」

トウジの手紙を一気に読み終えたアスカは深いため息をついた。

「ごめんなさい、私がもつと早くに鈴原からの手紙を碇君に見せていればこんな事にはならなかつたのに。勇気が無かつた私が全て悪いのよ！」

ヒカリはアスカに向かつて土下座をして謝つた。

しかし、アスカはそんなヒカリの体を持ち上げると抱きしめて、耳

元で優しく囁く。

「もう謝らないで、アタシはヒカリを責めてなんかいないわ。だつてヒカリはアタシの親友だから」

「い、ごめんなさいアスカ」

「言ひべき言葉が違うでしょ？」

「ありがとつ……」

2人の少女が抱き合ひの姿を、マヤはまぶしそうに見つめていた。

「でも、鈴原の手紙の内容をどうやってシンジに伝えればいいの……？」

アスカは困った顔でそうつぶやいた。

シンジは自分の意思で姿を消したのだ。
だからと云つて、指名手配をすると云ひのは乱暴な手段のように思えた。

「やうだ、私に良い考えがあるわ！」

何かを思い付いたのか、マヤはそつと指を鳴らした。

マヤのアイディアは、テレビやラジオ、新聞やインターネットなどのマスメディアを通じてトウジの遺書を公開する方法だった。

シンジがどんな場所に身を隠しているのかはわからない。

しかし、宿泊施設などに居ればきっとシンジの目に触れるはず。

アスカとヒカリもマヤのアイディアに賛成し、マスコミもマヤの要請に協力した。

そして、トウジの書いた遺書はTVのアナウンサーやラジオのパーソナリティによって朗読されたのだった。

新聞の紙面にも遺書の全文が載せられた。

何を書いたらいいんだろう、俺はいきなりネルフの人に遺書を書く
ように勧められて驚いている。

話している時は関西弁だけど、書く時は標準語の方がいいと言わ
れた。

まあ、くだらない前置きは後ににして、俺が遺書を書く事になつたの
は、エヴァンゲリオンのパイロットに選ばれたからだ。

碇や惣流達は拒否したみたいだけど、俺は死んでから他の人に俺が
どんな気持だったんだろうかとかいろいろ憶測されるのは嫌だ。
それに、遺書を書いたのはまだ碇や委員長……いや、ヒカリに伝え
たりない事があるからだ。

直接言うのは凄く恥ずかしいから、こつして手紙にしてしか伝えら
れないけどな。

碇、もし俺が使徒と戦つて命を落とす事があつても、自分を責める
事は止める。

自分の幸福を捨てれば、俺への償いになるなんて勘違いするな。
俺は碇の不幸な面なんて見たつてちつとも嬉しくない。

それよりも、俺の分まで一生懸命生きて夢を追い続ける。

そして、惣流と幸せにな。

隠さなくともいい、俺から見ればお前と惣流がお互い気になつてい
るのは解つてゐる。

ヒカリ、あの日の帰り道に俺達はお互い素直になろうつて約束した
よな。

俺はいつからヒカリを委員長と呼ぶようになったんだろうな。

小さい頃は名前で呼び合つていたのにな。

ヒカリにちよつかいを出してたのは、やっぱりヒカリの事が気にな
つっていたんだ、許してくれ。

今度学校に登校した時、毎飯はパンじや無くてヒカリの弁当が食べ

られるのが楽しみだ。

それと、俺が居なくなつてもずっと湿っぽい顔してんな。

俺はヒカリが笑っている顔が好きなんだからな。

碇だけでなくヒカリにも言うけどな、好きな相手が不幸な面をしてても俺はぜんぜん嬉しくない。

たまに俺の事を思い出してくれるだけでいいんだ。

この放送の効果があつたのか、シンジは翌日の夕方、アスカが待つているシンジの部屋へ姿を現した。

インター ホンのカメラで、シンジの姿を見たアスカは嬉しさに飛び上がつてドアを開けてシンジを迎える。

「……ただいま
「おかえり！」

照れ臭そうに顔を赤くして立つているシンジの胸に笑顔のアスカが飛び込む。

シンジとアスカは夕陽の差す玄関で固く抱き合つた……。

トウジの手紙の内容が公共の電波や新聞などを使って発表された事は、シンジ以外の人々にも影響を与えたのだった。

戦略自衛隊の侵攻の際に生き残つたネルフの職員。

そのネルフの職員を殺めてしまつた戦略自衛隊の隊員。

そして、セカンドインパクトの惨劇を体験した多くの人々。

彼らの中にはシンジのよう、そして加持のように、自分に不幸を強いて人生を送つていた者も多数居たのだ。

放送を聞いた彼らは再び希望を持つ事になり、その事はまた美談としてメディアを通じて報じられた。

「僕は勘違いをして、アスカも不幸に巻き込んでしまう所だったんだね、本当に」

シンジがアスカに謝ると、アスカは首を横に振つて否定した。

「シンジ、それを言うならアタシも同じ立場よ、だってアタシがエヴァに乗つて戦えていれば、ファーストを助ける事が出来たのかもしないしさ……」

「でも、アスカは使徒の攻撃を受けて病気になつていたから仕方が無いじゃないか！」

「それは違うわ、アタシがああなつてしまつたのはぐだらない意地で撤退を済つたせい。アタシがもつと強い心を持つていれば、あの使徒にも適切に対処する事が出来たのよ」

「そんな事を言つたら切りが無いじゃないか」

「そう、だから鈴原も言つてる通り、塞ぎこんでしまうのはもう止めましょうよ」

アスカはそう言つて精一杯の笑顔を作つてシンジに笑いかけた。

「そうだね、悲しくても笑顔にならう

シンジもアスカに笑顔を返して見つめるのだった。

そしてお盆の時期になつたアスカとシンジは、ミサトが葬られた墓地へに墓参りに行く事にした。

戦略自衛隊の侵攻により多くのネルフの職員が亡くなつたので、1人1人の遺体を区別する事は難しかつた。

だから墓石は形式的な物であるが、アスカとシンジはそこにはミサトの魂が眠つていると考えた。

アスカとシンジは花束をそれぞれ1つずつ持つていた。

1つはミサトの分、もう1つは加持の分だつた。

加持はきっとミサトの近くへと帰つてゐる、そう信じたかったのだ。

「僕はトウジの言葉を聞く事が出来て良かつたけど、加持さんはずっと悩んでいたんだね」

シンジは悲しそうな目をして、最後に会つた時の加持の言葉を思い出した。

「謝ろうと思つても、相手が居ないって言つのは辛い事よね」

「うん、許してもらえているのか判らないのは不安だよ」

アスカがつぶやいた言葉に、シンジもうなずいた。

再びアスカの側に戻つた時、シンジは黙つていた加持との最後の会話の事をアスカに話した。

シンジは今のアスカなら受け止められると思つて加持の子供の頃の辛い体験を明かしたのだ。

「本当、加持さんもミサトも大馬鹿よ！ 幸せにならないのが償いだなんて。アタシはそんな馬鹿な大人になんか……なりたくないんだから」

アスカはそう言つと、ミサトの墓石に水を乱暴に掛けた。

それがアスカなりの供養なのだろう。

そしてアスカとシンジは墓に向かつて手を合わせてしばらくの間黙

とつをした。

「また来年会いに来ます、ミサトさん、加持さん」

「じゃあね」

シンジとアスカは生きているミサトと加持に話し掛けのように笑顔であいさつをして墓地を立ち去つて行つた。

そして新学期が始まってアスカとシンジは新しい中学校のクラスで元気に自己紹介をする。

その姿は過去の罪に悩むエヴァンゲリオンパイロットの顔では無い。それは完全にどこにでもいる普通の中年生の少年少女の笑顔だった。

ここはアメリカ西部の小さな街。

ゴールドラッシュに湧く開拓者達が集まって作った集落だ。

この街の町長は碇ゲンドウ。

彼には碇シンジと言つ息子が居た。

町長の椅子に座つたゲンドウは息子のシンジの事を察じていた。シンジが小さい頃に妻を失くしたゲンドウは、彼なりにシンジの事を大切に育てた。

シンジは優しい少年に育つたが、たくましさに欠ける部分があった。特に銃の腕前に関しては悩みどころであった。

シンジは缶などは正確に撃ち抜く事は出来るが、鳥などの動物相手では物怖じしてしまつのだつた。

「碇、入るぞ」

扉を開けて司令室……いや、町長室に入つてきたのは冬月だつた。

「街の様子はどうだ？」

「ああ、すっかり使徒どもに怯えている。また今田も二つの家族がこの街を離れるそうだ」

冬月はゲンドウに尋ねられて深くため息をついた。

”使徒”とは神の使いを名乗る武装集団で、ゲンドウが町長を務めるこの街にも上納金を要求して來た。

ゲンドウが断ると、彼らは街で略奪を始めたのだつた。

要するに使徒とは名ばかりのゴロツキの集団だつたが、それでも街の者は逆らう事が出来なかつた。

「しかし、問題無い。伝説のガンマンと言われる惣流氏を保安官として雇うのだからな」

「本当に大丈夫なのだろうな」

冬月は不安そうにゲンドウに尋ねるのだった。
街で仕事をしていたシンジは、今まで街で見かけた事の無い美しい少女に声を掛けられる。

「ねえ、そこのアンタ、アタシはこの街に来たばかりなんだ、案内してよ」

「えつ、でも僕は父さんに頼まれた仕事の最中だから」「アンタね、こんな麗しいレディが声を掛けているのよ！ 仕事よりエスコートを優先すべきでしょう」

「苦しい……」

少女に胸倉をつかまれたシンジは苦しそうにもがいた。
シンジは少女の迫力に圧され、街を案内する事になってしまった。
少女は自分の名前を惣流アスカと名乗った。

「へえ、君の父さんは凄いガンマンなんだ」

「ええ、だからこの街の保安官として呼ばれたのよ」

アスカは自慢げに胸を張つてそう答えた。

シンジは暗い顔をしてつぶやく。

アスカはシンジが町長の息子だと知ると馬鹿にしたように笑う。

「凄いなあ、僕は父さんの役に立つ事なんて雑用しか出来ないよ

「アンタみたいなさえないのが町長の息子なの？ ちゃんとちやらお

かしいわ」

「う、うるさい！ 射撃の練習は欠かさずしているよー！」
「じゃあ、あそこの木に止まって居る鳥を撃つてみなさいよ」

しかし、シンジはアスカの前で鳥に弾を命中させる事は出来なかつた。

元々、鳥を撃つ事は苦手である。

さらに、こんな可愛い子の前では緊張してしまつていたのだ。

「アハハハ、おかしいー！」

アスカはシンジの下手くそな射撃を見てお腹を抱えて笑つた。
シンジは恥ずかしそうに顔を赤くしてうつむいた。

そうしていると、街の方が騒がしい事に気が付いた。

アスカとシンジは街の通りへと駆け付けた。

すると、そこでは使徒と新しい保安官であるアスカの父親が向き合つていた。

「アタシのパパは凄いんだから、あんなやつならんてすぐやつつけ
ちゃうわ！」

アスカの父親の腕は確かに伝説級だつた。

しかし、相手の使徒も伝説級の腕を持つガンマン、ラミ・エルだつた事が最大の不幸だつた。

銃声が鳴り響き、倒れ伏したのはアスカの父親の方だつた。

「パパつー！」

アスカがたまらず飛び出して父親の体にすがりつく。
すると、使徒がアスカの体を持ち上げて自分が乗つて来た馬へと載

せる。

「一の娘は神への捧げ物として貰つて行くぞ」

使徒は神への捧げ物と言つてゐるが、やつらのアジトに連れていかれたら、ひどい目に会わされるに違ないとシンジは思った。

「助けて、シンジ！」

使徒とアスカを載せた馬はドンドンと小さくなつて行つた。シンジは去つて行く使徒に向かつて銃を構える。

「目標をセンターに入れて、スイッチ！」

何とシンジの撃つた銃弾はアスカを傷つけることなく、一発で馬と使徒の動きを止めた。

肩を撃たれてうめき声をあげる使徒を見ていた街の人々が取り押さえる。

「シンジ、助けてくれてありがとう……」

アスカはシンジに抱きついてキスをした。

見守つていた街の人々にも祝福のムードが漂う。

しかし、拘束された使徒ラミ・エルは不敵な笑みを浮かべる。

「俺が捕まつたら、俺の兄弟達が黙つちゃいないぜ。それに全員が伝説級だ」

ラミ・エルの言葉を聞いた街の人々は恐れをなして散つて行く。シンジとアスカは拘束したラミ・エルを引きつれて町長であるゲン

ドウの所へ向かう。

話を聞いた冬月は血相を変えてゲンドウに話しかける。

「何、それは本当かね！ 確、こうなつたら襲撃を受ける前に街を捨てるべきだ」

「お前達はそうしろ。私はこの街に残る」

「父さん、僕も残るよー」

「何を言つている！」

「町長さん、シンジは凄い腕前なのよ。だつてあの使徒を一発で倒したんだからー。」

「何だと？」

アスカの言葉に、ゲンドウは驚いた顔になった。

シンジは顔を赤くして言い訳をする。

「それは、アスカを助けようと思つて必死だったから」

ゲンドウ達は街が騒がしい事に気が付いた。

逃げる前にもう使徒たちがやって来てしまったのだ。

「シンジ、私はユイが愛したこの街を守る。お前は自分の愛する女を守り抜け」

「うん、分かったよ」

シンジはゲンドウにうなずいて、アスカの手を取った。

そして裏口から逃げたシンジとアスカは、使徒たちがゲンドウに迫るのを見ていた。

使徒たちが銃を一斉に構える。

シンジとアスカは思わずハチの巣になるゲンドウの姿を想像した。しかし、ゲンドウは右手を前に差し出すと、A.T.フィールドを張つ

て銃弾を跳ね返した。

驚いたシンジは思わず叫ぶ。

「それってズルイよ、父さん…。」

シンジが気が付いた次の瞬間、シンジは自分が部屋のベッドで寝ていた事に気が付いた。

あの西部劇のような世界は夢だったのだ。

「まつたく、シンジがテングロンハットなんかお土産に買って来るから変な夢を見たじゃない」

朝に顔を合わせたアスカはシンジにそう文句を言った。

「いつたいどんな夢を見たの？」

「何か西部劇のような、アンタがやたら格好良かった夢……って、何言わせるのよ」

「アスカが勝手に言つたんじゃないか」

「ふん、現実のアンタがあんなにやれるはずないわよね」

アスカは赤くなつたり不機嫌そうになつたり忙しく表情を変えていた。

しかし、シンジはアスカの事よりも気になる事があったのだった。

「司令室まで来て何の用だ、シンジ？」

「あの、父さんに聞きたい事があるんだけど、もしかして父さんってエヴァみたいにATフィールドを張る事が出来たりする？ いや、右手を前に突き出して」

シンジの言葉を聞いたゲンドウは座っていた椅子から落ち、側に立

つていた冬月はしつらをついて倒れ込んだ。

「な、何をバカな事を言つてゐるー。」

「そ、そうだよね」

司令室をシンジが立ち去つた後、冬月は大きくため息をついてつぶやく。

「碇、俺の寿命が縮んだぞ」

高校2年の夏休み、俺達は人混みであふれる海水浴場へ来ていた。去年と同じように古泉の知り合いとされる多丸兄弟の別荘に行くものだと思っていた。

しかし、つい口を滑つて出てしまった俺の一言によつて状況は変わつてしまつた。

俺はハルヒの前で「豪華な別荘で過ごす夏合宿も気持ちが良いが、人混みであふれる海水浴場に居た方が日本の夏の醍醐味を味わえるかもしないな」とつぶやいてしまつたのだ。

ハルヒは気の無い様子で「ふーん」と言つただけだが、どうやら影響を与えてしまつたらしい。

示し合せたようなタイミングで古泉が多丸兄弟が別荘を売り払つてしまつたと話し、仕方が無いから電車で海水浴場に行く事になつてしまつた。

もちろん、家から服の下に水着を着て来る命令も忘れちゃいなかつた。

大きな心配は妹とシャミセンを連れて來た事だつた。

ハルヒはバッグに入れておけばバレないと言つたが、満員電車じゃシャミセンが圧し潰されてしまう可能性だつてある。すると古泉が策を打つてきた。

機関の人間を使って、電車の1両を占領するから問題が無いと言つ事だ。

おいおい、問題ありすぎだろー！

俺は何の罪もないのに迷惑を被る一般人のみなさんに、心の中で謝つた。

そんな機関の手助けもあり、俺達は運良くまとめて電車の座席に座れる事が出来たのだ。

俺はそんな大ことにならぬよう長門に情報操作を頼んだのだが、

物質データを改変するとバグが出やすいので、他の人々の脳内情報を改変するそうだ。

よつするに機関の人間によつて車両から排除された事実もさっぱり忘れてしまう事だ。

やばい、この2人が組んだらハルヒ以上に恐いかもしれんと俺は身震いした。

そして海水浴場につくと、ハルヒは去年の夏に市民プールへ行った時のように嬉しそうな表情になる。

「やっぱり、夏と言えば海の家ね！」

まあ、市民プールに海の家は無かつたからな。
妹の面倒は朝比奈さんが見ると言つてくれたが、2人で迷子になつてしまつた事は容易に予測できた。

しかし、この海水浴場も機関の人間が陰ながら数百人態勢で警備に当たつて居てくれると言つ。

それは安心できるのだが、海水浴場の混雑を増している事に申し訳ないと思つ。

「あなたが気に病む事ではありません。世界の崩壊を防ぎ、70億人の命を救うためなのですから」

「あー、わかつた、勝手にしてくれ」

古泉の話のスケールの大きさについて行けなくなつた俺は開き直る事にした。

「さあ、今日は肌がこんがり焼けるほど遊びつくすわよ！」

この晴れ渡つた天気はやはりお前の望みだつたのか。

まあ、小麦色に焼けた肌のハルヒを見るのも悪い事じやないか。

でも、長門や朝比奈さんはやっぱり白い肌の方が似合つよな。

俺がそんな事を考えながら長門や朝比奈さんを見ていると、俺の顔にビーチボールが直撃した。

「ぐえつー。」

驚いた俺はたまらずしりもちをついて倒れ込んだ。

「キョン、何をボーッとしているのよ、早く新川さん達と合流するわよー。」

日帰りの海水浴ならともかく、今回は合宿と言つ事なので、泊まりだつた。

高校生だけでは親も渋つたから、新川さんに保護者役になつてもらつたのだ。

「皆様、お変わりなさそうですね

「新川さん、今日はお世話になりますー。」

俺達に声を掛けたのはアロハシャツを羽織り、下は海水パンツ一枚の新川さんだつた。

スーツ姿だけでなくこんな姿も板についている新川さんだつた。

ハルヒは元気に新川さんに向かつてあいさつをする。

「悪いですね、保護者役を引き受けてもらつて」

古泉がそつと、新川さんは首を軽く振る。

「いえ、雇い主の多丸様から休暇を頂きました、この海水浴場に来る予定でしたので」

「やつぱり、夏休みと言えば海水浴場よね！」

「そりでござりますな」

新川さんは自分達が確保したスペースに俺達を案内した。

そこに居た機関の数人の人間の中に、俺は森さんの姿を発見した。朝比奈さんよりさらにスタイルの良い森さんの水着姿に、俺は驚いた。

去年別荘で会ったメイド服姿の時もスタイルが良いことは思っていたがこれほどまでは思わなかつたのだ。

「皆様、お久しぶりです」

腕で胸を寄せて頭を下げてあいさつをする森さんの姿に、俺は興奮して目が釘付けになつてしまつた。

そんな俺の後頭部にハルヒのローキックが命中し、俺は砂浜に頭からダイブする事になつた。

「うわあ キヨン君、大丈夫ですか！？」

「あんなバカ、放つて置いて遊びましょう！」

熱をもつた砂に顔を押しつけられた俺は、意識がもうろうとなつた。

「これはいけませんね」

古泉がそう言つて俺の顔に水筒の水を掛けた。

危ない状態は免れたが、俺は起き上がって遊ぶ気力が無くなつた。

仰向けに日陰に寝かされた俺のおでこに冷たいタオルがそつと置かれた。

いつたい誰だろうと目を開ぐと、そこには天使のように穏やかに微笑む森さんがいらっしゃるじゃないですか。

やばい、森さんとの距離が近すぎてまた高揚とした気分になってしまった。

しかし、森さんはそんな失礼な俺に対しても優しげな態度を崩さない。

本当に大人びた女性だ。

すると森さんは屈んで寝ている俺の耳元に顔を近づけて来た。

うわあ、それはヤバいですって！

「実はあなたにお尋ねしたい事があるのですが」

「何ですか？」

俺が続きを聞こうとしたその時、ハルヒの大声が飛びこんで来る。

「こらーっ、いつまで寝ているのよ！ 早く起きなさい！」

「わかつた、じゃあ俺も思いつきり遊ぶぞ！」

俺が勢いよく立ち上がりハルヒに近寄ると、ハルヒは物凄く鋭い目つきで俺をにらみつけた。

うわっ、これはメチャクチャ怒ってるぞ！

「遊ぶですって！？ 雑用係が何を言つてるのよ！」

腕組みをしたハルヒはそう言つと、俺に大量の買い物を押しつけてきやがつた。

とても1人では買えない量だ。

「それなら僕も買い物について行きますよ」

古泉が俺との同行を申し出るとハルヒは認めないと首を横に振った。そして、俺がサボらないように連行すると言つて俺の手を握つて歩

を出した。

「あんた、さつき森さんと何を話していたの?..」

「何か、森さんが俺に聞きたい事があるって話していた「隠すとためにならないわよ!」

「本当にそれだけだつて」

俺がそう答えると、ハルビは追求と握った手の力を緩めた。そして俺は海の家を前にして、多大な出費となるであろう買い物を覚悟していた。

一番近くの店に入った俺とハルビは店員のおじさんご声を掛けられる。

「おやおや、初々しいカッフルさんだね。おまけしておくよ

俺はハルビから手を離そうとしたが、不思議な事にハルビの方が離さなかつた。

店員のおじさんは焼きトウモロコシをせりこんでしおまけしてくれたのだった。

「……しばらくの間カッフルの振りをするだけなんだからね」「分かつてゐるわ」

店を出たハルビと俺は小さな声でわいわいと歩いた。

他の海の家で食べ物を買って行くうちに、俺達は両手に抱えなれば持てなくなり、繋いでいた手を離さなければいけなくなつた。

俺はほつと安心したような、それで居て残念なような気分になつた。

「別に、あたしはガツカリなんかしてないからね!..」

俺の視線を感じたハルヒはそんな言い訳をした。

顔が赤くなっているのは日焼けのせいだけじゃないだろ？

そう思うと俺はハルヒが可愛いやつだと思えて来た。

俺とハルヒはたくさんの食べ物を抱えてみんなの所へと戻ると、驚きをもつて歓迎された。

あれから俺達はいろんな海の家でカップルとして祝福されておまけしてもらつたのだった。

他にもカップルは居るだろ？に、また買わせようつて商売なのか？この時俺は知らなかつたが、俺達の入つた海の家のうち数軒は機関の手が回つていたそうだ。

そして軽食を取つた後に俺達は波打ち際で水遊びをしたのだが、俺が女性陣の水着姿に目移りする度にハルヒから手痛い攻撃を受けていた。

顔にボールをぶつけられたり、水を掛けられたり、露骨にそんな事をしたら周りのやつらにも解つちまうぞ？

でも、森さんの方も確かに様子が変だ。

俺に視線を向けているのを感じるのだが、森さんの方もハルヒの視線に気が付くと俺から離れてしまう。

さて、俺達は海水浴に来たわけだが、ハルヒが言つにはこれはＳＯＳ団の合宿である。

合宿と言つからには俺達はホテルに泊まる予定になつてゐるわけだつた。

今回は多丸氏の別荘に泊まるわけではないので、新川さん達に混ぜてもらう形になつた。

「ハルヒ、日も傾きかけて來たし、そろそろ海から上がらないか？」

「えーっ、もうちょっと遊びたいわよ

「そろそろ行かないとホテルの夕食に間に合わなくなりますぞ」

新川さんがそう言つと、ハルヒはあつさりと引き上げた。

それから俺達はまた電車とバスを乗り継いで新川さん達と田舎のホテルへと着いた。

ここはハルヒが小学生の頃にじいちゃんに連れて来てもらったホテルだそうだ。

「さすがね、あたしが来た時と何にも変わらない！」

褒めているのがバカにしているのか相手の取り方によつては判断の別れる言葉であるが、ハルヒは嬉しそうだつた。
また、ホテル側も長い歴史を持つてゐ事を誇りにしているよつとも見える。

新川さんや森さんにとっても思い出深いホテルらしい。
ゲームコーナーにはインベーダーゲームとか、昔の筐体が並んでいたからな。

しかし、後になつて知つた事だが、俺達が泊まりに行つた後にホテルは大幅リニューアルしたらしい。

新しい客を呼び込むには必要な事かもしかんが、ハルヒは寂しがつていたな。

俺達は夕食を兼ねた「ディナーショー」の時間にギリギリ間に合つた。
そして、ショーが終わつた後にホテルの主催で「ビンゴ大会」が始まつた。

「情報操作は無しだぜ、長門」

「分かった」

俺は他の宿泊客の楽しみを奪つてしまわないよつて念を押した。
しかし、ハルヒの「ビンゴ」は完成しなかつたのだが妹の「ビンゴ」は見事に完成した。

「やつたあ！」

「よつしや妹ちゃん、行つて来なさい。」

妹のやつはステージ上から俺達に向かつて手を振つて来るから恥ずかしかつたな。

「みんな、夜は海底温泉へ行くわよ！」

このホテルには水着で入れる水族館と温泉を合わせた浴場があるやうだ。

ハルヒが以前行つた時は海底温泉は工事中だったようで、念願が叶つたハルヒは妹よりも騒いでいた。

俺はハルヒの無邪気な笑顔は嫌いじゃないぜ。

そして、海底温泉を堪能した俺達は男湯と女湯に別れているふつうの大浴場へと入つた。

「焼けてしまつて体中がヒリヒリとしますね」

古泉の肌はすっかりと赤くはれ上がりついていた。
俺の肌も同じような物だ。

明日になれば肌は黒くなつてゐるんだろうな。

風呂からあがつた俺達は定番コースであるゲームコーナーへ行つた。昔ながらのエアー ホッケーなどを楽しむと、どつと疲れが出て來た。部屋に戻つた俺達は、部屋の様子を気にすることなく、同室になつた新川さんや機関の組織の人間の隣ですぐ寝てしまつた。

2泊3日の夏合宿だつたが、俺達は余すことなく夏の海の遊びを楽しんだ。

嵐によつてクローズド・サークルになつた去年の合宿とはえらい違ひだ。

それだけ鬱憤うっぴんが溜まつていたんだろうな。

だが、2日目になつてから森さんは俺に意味ありげな視線を向ける

事は無くなつた。

俺は思い切つてハルヒが視界から消えたタイミングで森さんに声を掛けた。

「あの、俺に聞きたいたつて何だつたんですか？」
「いえ、もうその必要は無くなりましたから」

森さんは嬉しそうな笑顔を浮かべてそう答えた。

「ふーん、何やら楽しそうに話しているじゃない」

振り返ると、不機嫌そうな顔のハルヒが立っていた。
やばい、そういうハルヒは野球大会の時もこんな感じだった！

「私は涼宮さんから彼氏を盗つたり致しませんので、」「心配なく」「なつ！」

森さんにそう言わるとは思わなかつたのだろう、ハルヒの顔が噴火したように赤くなつた。
ハルヒは全身の力が抜けたようにガックリと崩れ落ちた。

「おいハルヒ大丈夫か、しつかりしろ！」
「これは体の芯から焼けてしまつたかもしませんね」「とんちじやないんだぞ、古泉！」

俺は氣を失つて寝かされたハルヒの側についている事になつた。
ハルヒは日を覚ますと、日焼けする時間が少なくなつたと俺に文句を言つた。

「ハルヒ、もう十分焼けたじやないか」

するとハルヒは胸に手を当てて「そうね」とつぶやいて大人しく座り込んでしまった。

俺はそんなハルヒの隣に座つて、静かに海が夕焼けに染まり始めるまで一緒に眺めていたのさ。

その日は俺も胸焼けがひどかっただしな。

ハルキヨンLAS彌シユヌス3点セツト短編2 冷たくしなさい！～ホットな

涼宮ハルヒの憂鬱SS

ハルキヨンVer・サブタイトル『新妻ハルヒの陰謀』

夫婦ハルキヨン設定です。特にネタばれはありません。

俺が仕事を終えて家に帰ると、リビングにハルヒの姿が無い。すると、テーブルには俺とハルヒの食事の用意の他にメモ帳が置かれていた。

『冷たくしなさい！』

上方に一行だけハルヒの字で書かれているだけで後は白紙。なるほど。

俺は寝室に隠れて様子をうかがっているであろうハルヒを気にせずに飯を食べ始める。

すると、いらだつた顔でハルヒが寝室から出て来て怒鳴る。

「ちょっと、何を平然とした顔で『飯を食べ始めてるのよー』

「冷たくしろって書いたのはお前だろ？』

「ちょっと、そう言う意味じゃ無くて……』

俺はハルヒのおでこを引いてソッピンではじいた。

「勝手に俺のボールペンをすり替えた罰だ」

「あ、
ばれてた？」

「気が付かなかつたらこすつて手帳が真つ黒になる所だつたぞ」

俺は昨日、会社の同僚から摩擦熱で文字が消せるボールペンを貰った。そして俺はハルヒが猫のように目を光らせていた事を見逃さなかつた。

あれは何か企んでしる表情だった。

俺は高校の時からずっとハルヒの顔を見ているからな、間違いない。
俺はハルヒの書いたメモを冷凍庫に入れて、ハルヒと食事をしながら待つ事にした。

取り出されたメモには、ハリビの俺に対する愛のメッセージが浮かび上がっていた。

「お前の考へてゐる事なんてすつかりお見通しだ」

「向むかひのうへたまひなまへたじきなまへ

じゃあ俺からのサプライズはこれだな。

俺はハルヒがとがらせた口に自分の唇をいっきに近づけた。

英雄伝説 空の軌跡SS ヨシュエスVer. サブタイトル『ハートも冷やしたい』

「ヨシコア、見て見て！」

エステルは嬉しそうに叫び声を立て、ヨシコアの前にペンを突き付けた。

「どうしたのエステル、そんなに興奮して？」

「オリジンさんに貰つたの、何するだけで文字が消える魔法のペンだつて！」

「へえ」

多分オリジンの仕事道具だらうな、ヒヨコアは思った。

「これで、書き間違いをしても紙を無駄にしなくて済むよね！」

「その前に、書き間違いを減らす努力をしようよ」

「そうだね」

ヨシコアの言葉に、エステルは舌を出して謝った。

それからじづくじづく経つたある日のこと、ブレイサー手帳を開いたエステルは真っ白になつたページを見て悲鳴を上げる。

「きやああ！ 書いた文字が全部消えちゃつてる！」

「暑い所に居たからね。なるほど、摩擦熱で文字が消える仕組みだつたのか」

「ヨシコア、感心していいで何とかしてよー」

「大丈夫、冷やせば元の文字が出て来ると思つよ」

多分その特徴がオリジンの仕事に役立つて居るのだろうヒヨコア

は考えた。

「冷やすつて、”ダイヤモンドダスト”のアーツを詠唱するとか？」

「それは過激すぎるよ。涼しいヒンヤリとした場所に行けばいいと思つよ。そうだ、鍾乳洞へ行つてみない？」

「なるほど、それはグッドアイディアね！」

それからエスティルとヨシュアの2人はツアイスの街の近くにある鍾乳洞へ行き、付近を散歩する事にした。

冷えた空気が心地良い。

「仕事以外で来ると不思議な感覚だね」

「……これつて、なんかデートみたいよね？」

エスティルがつぶやくと、2人の間に微妙な空気が流れた。
魔獣達のすみかである鍾乳洞だったが、不思議と姿は見えなかつた。
静かな鍾乳洞に響くのは2人の足音だけ。

「もうそろそろ大丈夫だと思つけど、手帳を開いて確かめてみない？」

「まだ手帳は冷えていないわよ」

エスティルはヨシュアの言葉に首を横に振つて手帳を取り出すのを拒否した。

(……手帳を取り出すのはあたしの熱くなつたハートが冷えてからよー)

エスティルは心の中でそつとぶやくのだった。

新世紀エヴァンゲリオンSS

LASVer. サブタイトル『不器用な告白』

(ラブ・ラブ・アスカシング)

「//サトビツしたのよ、そんなに頭を抱えて?」
ミサトの執務室を訪れたアスカは、困った顔をして頭を抱えてしまつている//サトを見て声を掛けた。

「手帳に書いたスケジュールや報告用のレポートがね、消えてしまつたのよ」

そう言つて//サトはアスカに真っ白になつた手帳のページを見せた。

「どうしてこんな事になつたの?」

「それがね、リックに擦ると消えるボールペンつて言つのを貰つたんだけどさ」

ミサトはアスカの目の前でメモ帳の切れ端にボールペンで文字を書くと、文字を擦つた。

すると、文字は綺麗に消えて無くなつた。

「ふーん、面白い仕組みじゃない」

「摩擦の熱で消えるらしいわ。でも耐熱装備の実験棟から戻つて手

帳を開けたらこの有り様よ

ミサトの答えを聞いたアスカはポンと手を叩く。

「それなら、冷やせば文字が出て来るんじゃない？」

「ナイスアイディア、アスカ！」

ミサトは指を鳴らして、手帳をビニールに包んでビール用の冷蔵庫の冷凍庫の中に入れた。

そしてしばらく待つて取り出すと、見事に手帳に書かれた文字は復活したのだった。

「やつたわアスカ、ありがとー！」

ミサトはアスカを抱き締めて大喜びした。

「苦しいってば

「あ、ごめん、ごめん」

ミサトは軽く謝つてアスカの体を解放した。

ボールペンに興味を持ったアスカは、ボールペンを手にとつてミサトに尋ねる。

「ねえ、このボールペン、貸してくれない？」

「いいわ、どうせならそのボールペンはあげるわよ。仕事の邪魔になりそうだし」

「へへっ、何に使おうかしり

ボールペンを入手したアスカは嬉しそうにつぶやいた。家に戻ったアスカはボールペンの使い道を考えていた。

「驚かせる相手と言えば……シンジよね」

そうつぶやいてアスカはどうしてもシンジが相手なのだらうと考えた。ミサトの家でシンジと同居するようになつてから、何かと言えばシンジの事が思い浮かぶ。

どうして最近はシンジがこんなにも気になるんだらう、とアスカは思つた。

あんなに好きだつた加持さんよりも、と。

アスカは、シンジの居ない生活を考えてみる。

そうすると、アスカは世界が色を失つたような感覚になつた。

「アタシ、シンジの事が好きになつてしまつたのかもしれないわ……」

胸に手を当てたアスカはそうつぶやいた。

そして、勇気を出してシンジに手紙を書き始めた。顔を合わせると照れ臭くて言えないシンジへのたくさんの「ありがと」の感謝の言葉。

しかし、最後に「シンジが好き」と書いてしまつたアスカはやはり照れ臭くなつてしまつた。

部屋を出て台所に行くと、レンジの中に手紙を入れて加熱する。

「アスカ、何をしているの？」

背後からシンジに声を掛けられたアスカは驚いて飛び上がつた。何と間の悪い事にミサトも一緒に家に帰つて來たのだ。

「ダメじゃない、レンジにこんな物入れてイタズラしちゃあ

そしてアスカの手紙は一ヤケ顔のミサトに取り上げられてしまった。

「あら、こんなに熱くなっちゃって。これは冷やさないとねー。」

「やめて、ミサト！」

シンジはアスカとミサトのやり取りの意味が分からずボーッとしている。

「あ、アタシ、ちょっと外の空氣を吸つてくるー。」

「アスカ？」

顔を真っ赤にしたアスカは慌てて葛城家を飛び出した。

そして、しばらくした後。

家に帰り辛くて公園のベンチに座っていたアスカの前に、迎えに来たシンジが訪れたのだった。

SOS団恒例行事となつた市内不思議探索を終えた次の日月曜日、俺は寝不足でスッキリしない頭を抱えながら登校した。

まったく昨日のハルヒはいつもより輪をかけて張り切つていた。市内を隅々まで調べ回るとハルヒは宣言し、俺達は学校を中心とした市内全体を歩かされた。

休憩無しで歩かされた俺や朝比奈さんはグロッキー寸前だった。いつも涼しい顔をしている古泉でさえ辛そうに無理に笑顔を作つている感じだつたぜ。

お前の体力についていけるのは地球外生命体の長門ぐらいなもんだ。さらに俺が宿題が残つていると愚痴ると、夜まで俺の家に押し掛け来やがつた！

ハルヒは俺のためだと抜かして遅い時間まで俺に勉強を教えた。お袋が心配して俺にハルヒを家まで送らせたから、さりげに寝る時間は遅くなつちました。

しかし、俺の後ろの席に座るハルヒは疲れ果てた俺よりも元気が無いように見える。

「どうした、思い出し憂鬱がぶり返したのか？」

こいつは七夕の時期になると今年も去年に続いて憂鬱そうになつたからな。

夏休みも近づいてまたテンションも戻つて来たと思ったんだが……塞ぎ込んでいるハルヒほど見ていて悲しくなる物はない……いや、不気味だからな。

「違う、そんなんじゃないわよ」「じゃあ、どうしたんだ？」

「別に……」

ハルヒは顔を伏せたまま俺の方を見ようともしない。

触らぬ神に祟り無し、まあ放課後にはケロッとしているだろ。

俺はそう考えてホームルームが始まるのを待つた。

担任の岡部教諭が入つて来て、俺を、いや俺の後ろにいるハルヒの方を辛そうな表情で見つめた。

なるほど、岡部教諭にたつぱり絞られでもしたか。

だがその程度でハルヒがこれほど凹んだりするのか？

そんな俺の疑問は教壇に立つた岡部教諭の言葉でぶつ飛んだ。

「えー、涼宮の事だが、親の都合で今学期を持つて韓国の学校に転校することになった」

「何だつて！？」

俺以外のクラスメイト達からも驚きの声が上がった。

ホームルーム中だというのに、あつという間にハルヒの周りに集まる。

入学当初は問題児として避けられていた涼宮ハルヒだが、折り返し地點に入ろうとするまで続いた学校生活を通じて理解者も増えたのだ。

今ハルヒに声を掛けている阪中さんもその一人だ。

「涼宮さん、いつ頃から転校するってわかつてたの？」

「話を聞いたのは2週間ぐらい前かしらね」

なんてこつた、アレは七夕の思い出し憂鬱じゃなかつたのかよ。

ハルヒの観察かけては古泉に負けないぐらいになつたと思っていた

俺はショックを受けた。

「どうして転校することを黙つていたの？」

「みんなあたしに気を遣うでしょ？ 湿っぽくなるのが、嫌だつたのよ」

「でも話してくれた方が、お別れの準備ができたと思つたのよね」

ハルヒが答えると、阪中さんはとても悲しそうな顔でつぶやいていた。

今学期までここに居るといつても今田が終業式。

送別会なんて出来っこない。

いやそれ以前にハルヒが居なくなつてしまつ事を受け入れられない自分が居る。

気が気でなくなつた俺はハルヒに話し掛けることができないままこの終業式に出席した。

「キヨン、先に部室に行つてて。あたしも後で行くから」「ああ」

ハルヒが転校してしまつと、さはあつといつ間に学校中に広まり、岡部教諭のホームルームの最中から教室には多数の生徒が押し掛けていた。

まるでアイドル並みの人気ぶりだ。

ハルヒを敵視しているはずのコンペ研の部長氏や生徒会長まで来てやがる。

授業が終わるヒドッと乗り込んでハルヒを取り囲む。

あれじやあ抜け出すのに苦労するだろつ。

以前のハルヒだつたら怒つて追い散らすところなんだろつが、ハルヒの方も話をするようになつたのだ。

俺は全速力でSOS団の部室へと向かつた。

そこにはきっとハルヒ以外のメンバーが揃つてゐるはずだ。何しろSOS団発足以来の緊急事態だからな。

俺が部室のドアを開けると、長門、古泉、朝比奈さんの3人が待っていた。

だが部室の空気は重苦しく、まるでお通夜のようだ。

「キヨン君、涼宮さんが転校するって本当ですか？」

「ええ、岡部先生から聞いた話なんで『冗談じゃないと思いますよ』

目に涙を溜めた朝比奈さんに對して、俺はきつぱりと答えた。

「せんせ、あんまりです」

朝比奈さんのような美少女に抱きつかれるのは普段なら嬉しことなるのだが、今はそもそも言つてられない。

心当たりのある俺は「ひひひひひ」と見つめている長門を見つめ返して尋ねる。

「長門、これはあの“長門”的仕業じゃないのか

一度ある事は二度あるって言葉が俺の頭の中をよぎった。

しかし長門は表情一つ変えずに俺の言葉を否定する。

「違う。“彼女”的はあなたの一度田の遡行により果たされた
はず」

「となるとこの転校は涼宮さんの願望によるものとなりますね」

「何だと…？」

俺は古泉の発言に思わず叫んでしまった。

ハルヒはここでの生活に退屈したから転校するなんて言つ出したのか？

いや、それは無い。

俺達SOS団が力を合わせてハルヒに楽しい生活を送りせしやうに
と努力して来たのに、今さら否定されてたまるか！

俺は怒氣を含んで古泉に向かつて叫ぶ。

「古泉、そんな事はあり得ない、あつてたまるか！」

「それでは、涼宮さんの転校は運命のイタズラって事になりますね

「くそっ、どうにかならないのかよ……」

古泉の言葉に俺は悔しげにつぶやいたが、誰も答えはしなかつた。

重苦しい沈黙が部室を支配する。

そして部室にハルヒがやつて来てしまった。

いつもとは違い、静かに落ち着いた様子でドアを開けて自分の席に座る。

「みんな、聞いているとまは思ひたゞ、あたしは転校することになつたから。SOS団も解散するわよ」

淡々と話すハルヒの言葉を聞いて、部室の空気が凍りついたような思いがした。

「ど、どうこう事ですか？ SOS団が無くなつちやうなんて」「だつて、団長のあたしが居なくなるんですもの、当然でしょ？」

朝比奈さんの質問に冷静に答えるハルヒの姿を見て、俺は無性に腹が立つて来た。

抑えていた感情を爆発させて、俺はハルヒに向かつて叫ぶ。

「ふざけんな、俺は解散なんか認めないぞ！」

「良いのよ無理しないで。あんたはあたしに引きずり込まれてSOS団に入ったんでしょう？」

「違う、今となつてはお前が居て、長門や朝比奈さん、そして古泉が居るこの部室が俺にとっては必要なんだよー。」

「キヨン君……」

朝比奈さんは嬉しさと驚きが入り混じった顔で俺を見つめていた。

「だから、いつか戻つて来いよ。俺達はSOS団を続けてお前を待つてる」

俺が諭すように声を掛けると、ハルヒは目から涙を流し始めた。

「あたしも、転校先の学校で、あんたが驚くような面白い物を見つけて、せぬわよ……」

ハルヒは耐え切れなくなつたのか、部室を駆けて出て行ってしまった。

思えばハルヒの喜怒哀楽のつむぎ、笑顔や怒つた顔や楽しそうな顔は見たことはあるが、嬉し泣きは初めて見たかもしれません。

映画の撮影の時は怒り泣きだったか。

「僕達が言いたかった事をすべてあなたが言つてくれて助かりました」

「涼宮さん、とっても喜んでいましたね」

古泉と朝比奈さんに賞賛されて恥ずかしい気持ちになつた。

「鞄」

長門に指摘されて団長席に田をやると、ハルヒの鞄が残されていた。仕方無い、ハルヒの家は解つてるんだ、届けてやるか。

俺はハルヒの家に向かう道中、ハルヒとの学校生活を思い返していった。

SOS団設立を思いついた時、文芸部室を乗っ取った時、コンピ研からパソコンを強奪した時、野球大会の時……。

俺の脳裏に浮かぶのは無邪気なハルヒの笑顔だった。

どんな厄介なトラブルに巻き込まれた後も、あいつの笑顔を見るとなぜか許せてしまう。

これから先、ハルヒの笑顔を見ることができなくなると思うと、俺は胸が痛んだ。

俺がハルヒの家のインターフォンを鳴らすと、驚いた様子でハルヒが出てきた。

インターフォンに付いていたカメラで俺の姿を見たようだな。

「ハルヒ、鞄を忘れて行つたぞ」

「あ、ありがと」

俺がハルヒに鞄を渡した後、俺達は玄関先で無言で見つめ合つた。

「さよなら、キヨン
「待てつ、ハルヒ！」

悲しげな顔をして家の中に戻ろうとするハルヒを、俺はドアを強引に開けて呼び止めた。

「どうしても、転校しなければならないのか？」
「親の都合だもの、仕方無いじゃない」
「例えばだな、お前だけがこここの家に残るとか……」
「高校生の一人暮らしだなんて、ラノベやマンガじゃあるまいし、簡単に許してもらえると思ってるの？」
「じゃあ俺の家にでも来るか？」

「アニメの見過ぎね、あんた、常識つてものをわきまえなさい」「お前に常識を諭されるとはな……」

俺は自分の馬鹿さ加減にもあきれてため息をついた。

そして俺はそれ以上何も言つことができず、ハルヒと別れた。

帰り道、ハルヒがいつ向こうに行つてしまつのか聞くのを忘れてしまつた事に気が付いた。

だが、引き返して聞く氣にもならないし、俺からハルヒのケータイに電話する氣にもならない。

俺の胸は憂鬱な気分で満たされていた。

部屋に戻つても、俺は気分が晴れずにベッドで横になつていた。妹が部屋に入つて来て話し掛けても完全無視だ。

「キヨンくん、電話が鳴つてるよー？」

俺が机の上に放置したケータイに誰から掛かつってきたようだが、俺は誰とも話す気にはなれなかつた。

すると、妹が勝手に俺のケータイを取つて応答する。

「もしもーし、あつ、ハルニゃん？」
「ハルヒからだと!？」

俺は妹からケータイをもぎ取つてハルヒに答えた。すると、ハルヒはいつもの調子で俺を怒鳴りつける。

「ちょっとキヨンー 団長のあたしの電話に出ようとしてしないなんていい度胸じゃないの!」
「すまん、こうして出てんだから許せ」

ハルヒから話を聞いた俺は驚いてケータイを落としそうになつた。

何とハルヒの転校は取りやめになつたところだ。

ハルヒの父親が勤める会社は、韓国支社を立ち上げようとして準備していたのだが、状況の変化により計画は中止されることになつたらしい。

その状況とは様々な社会情勢が関係しているらしいが俺にとってはどうでもいい事だ。

「まったく、恥ずかしきつたらありやしないわ。どの面下げて新学期に登校すればいいのよ」

「お前、そんな事を気にするタマだつたか？ 堂々としてればいい、素直に話せば誰も怒りはしないさ」

「あんたに言われるなんて落ちたものね」

ケータイから聞こえてくるハルヒの声は嬉しさに満ちていた。

俺もそつだつたに違いない。

そしてその夜、俺は古泉からの電話での変わり者のメッカである公園へと呼び出された。

夏休みの無限ループの時も集まつたあの場所だ。

案の定、古泉、長門、朝比奈さんが俺を待つていた。

「どうも」

「俺に何の話があるつて言つんだ？ どうせハルヒ絡みだと思つが」

「察していただいて話が早くて助かります」

「涼宮ハルヒが力の発現を行つた」

「それは、ハルヒが転校を帳消しにしたつて事か？」

俺が尋ねると、長門は無言でうなずいた。

「でもハルヒは世界を崩壊させる力を持っているんだから。そのくらい簡単にできそつな事だが」

「それが、前にもお話したと思いますが、涼宮さんの力は以前に比べて弱まっているのです」

「だから涼宮さんが、とても強く願わないと力が発生しないようになっているんです」

「と言つ事は、ハルビは何としても転校したくないと思ったわけか」

「そしてそれはあなたせい」

「俺が！？」

長門の言葉に俺は驚いた。

俺は何の力も持たない一般人だ。

世界を変える力なんて持ち合わせていない。

「あなたは、部室の僕達の前でSOS団を続けると言いましたね？ そして涼宮さんが戻つて来るのを待つているとも」

「ああ」

「きつと涼宮さんは、キヨン君がもしかしてSOS団に加入のを嫌がつてゐるんじゃないかなって、不安になつたんだと思います」

「まさか、あいつは自分のためなら他人の気持ちなんて無視するようなやつですよ」

俺は朝比奈さんの言葉を聞いてあきれてそう答えた。

あいつが自分に迷いを感じるようなことなんて、断じてないはずだ。

「だからハルビは転校騒ぎなんか起こしたつていうのなら、本当に迷惑なやつですね」

俺は岡部教諭の困つた顔を思い浮かべて同情してつぶやいた。

「でも涼宮さんの意思に関係ない偶然と言つ可能性もありますけど

ね

「確かに事は涼宮さんが転校したくないって思つたことです」

「あなたは鞄を届けに涼宮さんの家へ行つた時に、彼女に告白でもしたのではないですか？」

「ほ、本当なの、キヨン君？」

古泉の言葉を聞いて朝比奈さんが顔を赤くして俺のことを見つめた。

「あのな、俺はそこまでは言つてない。まあ、引き留めはしたけどな」

「これで確信しましたよ

「何をだ？」

「僕は世界は涼宮さんを中心に動いているのだと思いました。でも涼宮さんを動かしていたのはあなただったんですね」

ああ、確かにハルヒがSOS団なるものを作つたのは過去にハルヒと出会つた俺が原因かもしれないけどな。

だからつて俺が朝倉涼子やあの佐々木団に狙われるつて言つのか、バカバカしい。

「話はそれだけか、俺は帰るぞ」

古泉の話を聞いていて不快感を覚えた俺は古泉の返事を待たずに公園を後にした。

宇宙人、未来人、異世界人なんて関係ねえ、俺は充実した高校生活を送りたいだけだ。

ハルヒやSOS団のメンバーと一緒にな。

この作品は私の作品『第十八使徒・涼宮ハルヒの憂鬱、怒流アスカの溜息』の没となつた過去のネタを涼宮ハルヒの憂鬱の短編（クロス無し）として書き直した物です。

クロスオーバー無しです（新世紀エヴァンゲリオンのキャラクターは出て来ません）。

後半部分の内容は思い切り変えてあるので書き直しより新作に近いかもしません。

＜北高校 部活棟 SOS団（元文芸部）部室＞

本来、休日で誰も居るはずの無い学校のSOS団の部室に、ハルヒをはじめとするSOS団のメンバーは集まっていた。

団長席に座るハルヒの腕章はいつもの”団長”ではなく”超先生”に変わっている。

そして、ハルヒの手にはペンが握られていた。

「休日も部屋に籠つて原稿を書くとは、まるでプロみたいだな」「外は雨なんだし、ちょうど良いじゃない」

ため息交じりのキヨンの皮肉に、ハルヒは平然とそう答えた。

今日は文化の日、キヨンはのんびりと休日を過ごしたいと思つていたのだが、こうしてアシスタントとして雑用に明け暮れてい。

「ハルヒの思い付きで漫画を書く事になつたが、長門はそれでかまわないのか？」

「問題無い」

キヨンの質問に有希はそう答えた。

「キヨンもしつこいわねそんなに漫画を描きたくないの？」

「長門さんは楽しそうに描いてますよ」

ハルヒの言葉に古泉も調子付いた。

「だがなあ、俺はハルヒのアシスタントばかりで何も描けていないんだぞ」

キヨンは1ページも描けていない自分の原稿を見てため息をついた。ハルヒが編集長になつてSOS団で漫画雑誌を書く事になつた経緯は、コンピ研の部長が自分の描いたWeb漫画を自慢し始めた事だった。

自分の才能が恐ろしいなどと言つている部長に対して、ハルヒは自分達の方が面白い漫画を描けると言い放つた。

「これはチャンスよ、小説より漫画の方が幅広い層の読者に読んでもらえると思わない？」

「お前は小説を読まない年齢層までターゲットにするつもりなのか？」

「あたしはSOS団の名をもつと世界に知らしめたいのよー！」

漫画を描くと言つてもハルヒ達は全くの素人。

そこで講師役を引き受けたのは、謎の万能メイド、森さんだつた。機関が短期間で森さんに漫画のノウハウを仕込んだのか、それとも森さんの言つ通り学生時代に同人誌を描いていたのかキヨンには解らなかつた。

「森さんって清楚なメイドって感じだけど、昔ハードな漫画を描いていた反動だつたりして？」

「さあ、それはどうでしょ？」

「頼むハルヒ、俺の中の森さんのイメージを壊さないでくれ」

以前に小説で書いた時と同じように、くじでそれぞれが書く漫画の内容を決める事になった。

くじをキヨンは悲鳴をあげる。

「恋愛少女漫画だとっ！」？

「わ、私は熱血格闘漫画ですかー！」？

「SFホラー……」

「僕は社会風刺漫画です」

「引き直しは認めないからね！」

「それで、お前はどんな漫画を書くつもりなんだ？」

キヨンに質問されて、ハルヒは椅子の上に立つて堂々と答える。

「あたしはちよつと非日常的な学園ストーリー漫画よー。」

ハルヒはSOS団の活動目的である、宇宙人、未来人、異世界人などを探して楽しく遊ぶ事を説明する事を目的とした漫画を書く事を宣言した。

さらに、読む側も楽しめるようなフィクションを加えてエンターテイメント性を高めるとの事だった。

「おい、まさか宇宙人や未来人、異世界人などが登場するんじゃないだろうな」

「フィクションだから、ありえない事ではないわ」

嫌な予感がしたキヨンは、古泉にそつと耳打ちする。

「おい古泉、今のうちに止めないとヤバいんじゃないか？」

「ですが涼宮さんに漫画を書く事を諦めさせれば閉鎖空間が発生します」

「じゃあどうすればいいんだ？」

「今はこのまま成り行きを見守るしかないでしょう」

キヨンは世界の命運と、自分の原稿と言つゝ重苦を抱えてしまい疲れた顔でため息を吐き出した。

世界に何事も起こらなくとも恋愛少女漫画を描かなければならぬ。白紙のまま描こうとしないキヨンに対して、ハルヒはアシスタントの仕事を押しつけた。

ハルヒの原稿が進んで行くうちに、キヨンはますます顔色が悪くなつて行く。

宇宙人・長門ユキ、未来人・朝比奈ミクル、超能力者・古泉イツキとキャストが固まる、キヨンは古泉に声を掛ける。

「雲行きが怪しくなつて來たぞ、今のうちに手を打つた方が良くな
いか？」

「ここの程度なら、映画の撮影の時と同じ対処療法で足りますよ」

古泉は涼しい顔でキヨンに答えたが、嫌な予感がしたのかキヨンはハルヒに食つてかかる。

「おいハルヒ、手近な人間をモデルにするのは手抜きじゃないのか
？」

「あつ、キヨンは平行世界からトリップして來た異世界人に決まつ
たから…」

笑顔で言い放つハルヒ。キヨンは何も言ひ返せずにため息をつくだけだった。

「北高校 1年5組 教室」

次の日、学校に登校したキヨンは戸惑っていた。クラスの席順が以前と違っていたのだ。

「おはよう」
「よひ」

平然と朝のあいさつをしてくる国木田と谷口に、対してキヨンは何とかあいさつを返したが、自分の席が分からぬ。

「なあ、俺の席つてどこだ?」
「キヨン、お前何を言つてんだよ」

キヨンと谷口が話していると、ハルヒが教室に入つて來た。ハルヒはキヨンと谷口の様子がおかしい事に気が付くと不思議そうに尋ねる。

「何をキツネにつままれたような顔をしているのよ?」
「キヨンが自分の席を忘れちまつたんだとか。笑えない[冗談だろ]つ?」

「谷口、俺は[冗談で]言つてるわけじゃなくてだな……」
「あはは、まるで記憶喪失にでもなったみたいだね」

国木田の言葉にハルヒが目を輝かせるのを見て、キヨンは青い顔になつた。

「あんた、本当に記憶喪失なの？」

「い、いや、別にそんな事は無いが」

「おいおい涼宮、記憶喪失だったら、俺達の事もすっかり忘れてるはずだろ」

谷口はもつともらじい事を言つてハルヒの考えを否定した。

ハルヒは反論しかけたが、担任の岡部教師が入つて来てキヨンはハルヒに強引に手を引かれて自分の席へと着席した。

どうやらキヨンの席はハルヒの前のよつだ。

授業中も休み時間もハルヒは真剣に何かについて考えているようだつた。

紙に謎の図形を描いているその姿をキヨンは不気味そうに見つめていた。

「キヨン！ もしかしてあんたは平行世界から来たんじゃない？」

「何だと…？」

ハルヒに突然声を掛けられて、キヨンは驚きの声をあげる。以前もハルヒが消失した平行世界に迷い込んだ経験のあるキヨンはすぐに思い当たつた。

「その反応、図星みたいね」

しまつたとキヨンが思つた時にはすでに遅し、放課後になりSOS団の部室に連行されたキヨンはハルヒから紹介される。

「みんな聞いて、ついにキヨンが異世界人になつたわよ！」

古泉が嬉しそうな顔でキヨンに近づいて握手をする。

「あなたが来てくれて助かりました、歓迎しますよ」

「よかつた、規定事項通りに来てくれて」

「朝比奈さんは未来入つて事をハルヒに言つてしまつて大丈夫なんですか？」

「ええ、涼宮さんにはなるべくシナリオ通りに行動してもらっています」

わらひと言つて放つみくらはキヨンは悪寒を覚えながらも続けて質問する。

「じゃあ、俺はこれからずっとこの世界で暮らす事になるんですか？」

「それは答えられません。私に知らされる規定事項は時間の範囲が制限されてるので、直近の出来事しか指示されないんです」

みくらはキヨンに泣きそうな顔で謝つた。

「何をしょぼくれてこるのはキヨンー。今田はあなたの歓迎会をしてあげるんだから、楽しみなさいー！」

ハルヒの提案で部室でキヨン歓迎パーティが始まり、キヨンは様々な芸を見せられる事になった。

「では、定番ですがスプーン曲げをお見せいたしましょー、……曲つが～れつー！」

イツキがそう叫ぶと、イツキの持つていたスプーンがグニャリと曲

つた。

「次は念力でスプーンを浮かせますよ……」

スプーンはイックの手を離れて、フワフワと浮上した。キヨンは目を丸くして、信じられないと言つた表情でそれを見ていた。

そんなキヨンの反応を見て、ハルヒはニヤニヤしている。

「私は宇宙空間で収集した物をあなたに見せる」

ユキはわざと、キヨンの前にたくさんのお石を積み上げた。

「河原に転がっているよつた石ころばかりに見えるぞ？」

「違う、これは月の石、それは金星の石、あれはM8星雲の小惑星の石」

「この世界では実在するのか、ウトラマンが！？」

「ええ、週に1回は日本に出現した怪獣とバトルを繰り広げているわ」

ハルヒは楽しそうにキヨンの言葉に答えた。

みくるが披露したのはキヨンが選んだカードを並てるマジックのようなものだった。

「これは透視能力ですか？」

「違います」

「……もしかして、小規模な予知能力ですか？」

「やつぱり、わかつちゃいました？ 私、数秒先ぐらいうまく細かい規定事項まで教えてもらえるんです」

「微妙に役立つか分かりにくい能力ですね」

ミクルの出し物が終わつた後、ハルヒは団長の椅子の上に立つて上機嫌でキヨンに向かつて宣言をする。

「どう、驚いた？ この世界のSOSの団は凄いでしょ。」

「ああ、度肝を抜かれたよ」

キヨンの言葉にハルヒには満足したようにうなずいた。
そしてキヨンの歓迎会もお開きになり、SOSの団員達は部室を出で行か、部室の中はハルヒとキヨンの2人きりになつた。

「ハルヒ、もう十分楽しんだらう。早く俺を元の世界に返してくれ」

キヨンがそう言つと、ハルヒは慌てた顔になつてキヨンの腕を取つて止める仕草をする。

「ねえ、じつちの世界では面白い事があるんだしさ、もつもつとゆつくりして行きなれこよ。 たつき言つたよつて謎の怪獣が暴れたりしてこるのよ。」

ハルヒはさう言つて怪獣が映し出されたところをキヨンに見せた。

「そうだ、明日辺りその怪獣みたいなのが出そつて、避難警報が出でるのよ。だから明日一緒に見に行きましょ。」

だがキヨンは嫌悪感をむき出しつて顔で言つ返す。

「俺はそんなもの見たくない、お前が俺を呼び寄せたつて言つながら、今すぐ俺を前の世界へと戻せ！」

「嫌よ、せっかく異世界人と会えて楽しくなつて来たといひなのに！」

「怪獣やウーラーラマンを地球に呼び寄せて、喜んでいたいから世界のお前には共感できん。人の迷惑を考えた事は無いのか、非常識わざわざなや」

キヨンがそう言つと、ハルヒはさうに不機嫌な顔になる。

「あんたは向ひの世界に居るあたしの方が良いって言ひつの？」

「ああ、この世界に居る長門や古泉、朝比奈さん達は、面白い能力を持つてゐるが俺の知つているやつらじやない。俺は自分の世界に居るやつらと一緒に居たいんだ」

キヨンにそう言われたハルヒはショックを受けたのか、顔を伏せて体を震わせている。

「俺が」のままずつといの世界に居たら、今までずつとお前の側に居た俺はどうなる？ 高校に入学して、SSSの団員としてお前と一緒に思い出を作つて来た俺じゃないんだぞ？」

ハルヒは下を向いたまま、小さい声で何かをつぶやいた。

「ん？ 何を言つたんだハルヒ、聞こえなかつたぞ」

「団長に偉そつと説教する雑用係なんて、クビよ！」

「クビか……じゃあ俺はこの世界から追い出されるつて事だな」

そう言つたキヨンの輪郭がブレて薄くなつて行つた。

「さうよ、今まで居たキヨンの方がマシだつたわ！」

「じゃあ、一度と俺を呼ぶ事は無いのか

「あんたなんかもつ呼ばないからねー。」

ハルヒの叫びと共に、キヨンの姿は霧のよつにかき消えて行つた。

「さよなら、もつ一人のキヨン……」

ハルヒは小さな声でキヨンに別れを告げる。
そのハルヒには涙が光っていた。

↖北高校 部活棟 SOS団（元文芸部）部室↖

次の日、学校に登校したキヨンはクラスの席順が元に戻つているのを見てホッとした。

「よかつた、無事に戻れたみたいだな。あっちの世界のハルヒはこっちの世界の俺まで巻き込んで、大変だつたぜ」

自分の席に座ろうとしたキヨンはハルヒが髪型をボーネールにしている事に気が付いた。

そして、窓の方を向いてたそがれている。

「なんだ、また思い出し憂鬱か？」

「昨日の夜、変な夢を見ちゃつたのよ」

ハルヒは振り返らずにキヨンにそう答えた。

「登校するといつもと違つた雰囲気で、有希が宇宙人、みくるちゃんが未来人で、古泉が超能力者、果てにあんたは異世界人になつて

んのよ」「

「ほ、ほ、そりゃあ夢の中でも願いが叶って良かつたじゃないか」「わつとも良くない！」

怒つて机に拳を叩きつけたハルヒはキヨンをにらみつけて人差し指を突き付ける。

「あたしが楽しそうに尋ねると、ハルヒは顔を赤くして横を向いてしまった。

「俺がどうしたって言つんだ？」

「ど、とにかく、早くあなたの分も完成させなさい。」

キヨンが不思議そうに尋ねると、ハルヒは顔を赤くして横を向いてしまった。

自分の原稿がさつぱり浮かんでいないキヨンは、授業中もアイデイアを必死に捻りだそうとしていた。

「多分、あなたが迷い込んでしまったのは涼宮さんの夢の世界なのでしょう」

「……やっぱり、ハルヒのやつが能力を使つたのか」

放課後、ハルヒが来る前の部室でキヨンがイツキに事情を話すと、イツキはいつもの穏やかな笑顔を浮かべながらそう答えた。

「ですが、こちらの世界に居る涼宮さんが能力を発現したとも限りません。あなたが向こうの世界で会つた涼宮さんに呼ばれたと言つ推理も可能性の一つです」

「だが、ハルヒが人騒がせな存在なのは変わりないだろ？」「

「ええ、ですからあなたには何としても漫画を完成させて頂かなないと困ります」「

古泉は部室に置かれているハルヒの描きかけの漫画の原稿に視線を送った。

ハルヒの原稿はほとんど完成し、アシスタントの仕事は必要なさそうだ。

キヨンはウンザリした顔で頭をかきむしる。

「そんな事を言われてもな、俺は漫画なんて描けんぞ？」

「小説の時のように自分の体験を書けばよろしいではありませんか」

キヨンはイツキの提案に田をむいて反論した。

「馬鹿言つな、あんな体験が何回もあつてたまるか

それまで部屋の隅で本を読んでいたユキが顔を上げてさう言った。

「それにして、俺とハルヒの見た夢が一致しているって事は俺は平行世界に飛んだって事か？」

「実のところ、平行世界が存在するかどうかは確実ではありません

「古泉、それはどうこうことだ？」

「その世界は涼宮ハルヒの夢が作りだした精神世界だと云ひ事もあり得るから」

ユキの答えを聞いたキヨンは頭を抱える。

「何だかややこしい話になつてきたな。じゃあハルヒが寝ぼけて世界を変えてしまつと言ひ可能性もあるのか？」

「その確率はゼロとは言えない」

キヨンはコキにやつされ、疲れ果てたようにため息をついた。

「そんなに悲観する事はありません、今回も改变された世界を元の姿に戻せたようではありますか？」

「他人事のように言つた、世界を守るのはお前の仕事だろ？」
「でも、僕が出る幕は無かつたようです。それとも、あなたは涼宮さんと今さら無関係になるのですか？」

「乗りかかった船だ、やってやるぞ」

「素直じやありませんね」

「ひむれー」

世界の危機は救う事は出来たが、漫画が描けない事の方がキヨンにとってはピンチなのだった。

アタシは惣流・アスカ・ラングレー、エヴァンゲリオン式号機のパイロットだった。

過去形なのはすでに式号機がこの世に存在していないから。

戦略自衛隊とエヴァ 量産機の侵攻によつて戦場となつた第三新東京市は廃墟に変わつた。

使徒を倒すと言う表向きの目的を果たした特務機関ネルフは解体され、ネルフの職員達は政府の組織へと移つた。

……ゼーレの悪事に関わつた人間と、あの戦いで命を落としたミサト達を除いて。

そして助かつたアタシは破壊を免れたコンフォート17を買い取り、エヴァのパイロットの報酬としてもらつた給料で暮らしている。

ネルフの無くなつた第三新東京市は再建もされず見捨てられているから、アタシは時間を掛けて一番近い街の学校に通つている。

第三新東京市は廃棄地区に指定されて近くにお店もないから不便を強いられていた。

通学に時間が掛かるから友達も出来ず、クラスでアタシは孤立していた。

アタシがどうしてそんな生活を続けるのかと言つと、アタシはずつとアツイを待つてゐるからだ。

この家の持ち主であるミサトは戦略自衛隊の襲撃で死んだと聞いている。

アタシもミサトが死んでしまつたなんて信じたくなかったけど、実際にネルフ本部に居て紅い世界から帰還したのはみんな戦略自衛隊の凶刃をギリギリ逃れて生き残つたわずかな人達だつた。

発令所に居た副司令、マヤ、日向さんと青葉さん……アタシが特に知つてゐるネルフの生き残りの人はそれだけ。司令やリック、ファーストやミサトも帰つて来なかつた……そして

シンジも。

夕食を食べる時、空になつたミサトとシンジの席を見るだけで悲しみがあふれてくる。

だけど、アタシが辛い思いを抱えながらこの場所で待つているのはシンジに対する贖罪の気持ちがあるからだ。

あの紅い空の広がる世界で体中に鋭い痛みを感じたアタシが叫び声を聞いて目を覚ますと、シンジは泣きながらアタシの体から流れる血を止めようとしていた。

だけど包帯もないのに人間の手で血を止められるわけがない。

「アスカごめん、僕が助けに来るのが遅すぎたせいで……」

シンジのせいじゃない、エヴァ量産機は並みの強さじゃなかつた。アタシはシンジが助けに来てくれただけで嬉しかつた、けれどアタシには声を出す力も残されて居なかつた。

うつすらと目を開けられた事さえ奇跡だつたのだろう。

「アスカ、アスカーーー！」

シンジの叫び声を聞きながら、アタシはゆっくつと目を閉じた。

でもアタシは死ななかつた、ジオフロンの跡地に出来た大きな湖の側で気を失つて倒れている所を発見されて保護された。

そして不思議な事に死にそうなほど重体だったアタシは健康体へと回復していた。

ミサトの死、そしてシンジの行方不明を聞かされたアタシは言葉にできないほどの悲しみに押しつぶされそうになつて、逃げるようこ思い出の場所であるコンフォートへと向かつた。

しばらく前に家出してヒカリの家に転がり込んでからの久しぶりの帰宅。

自分がエースだと思つてのぼせあがつていたアタシのプライドは、シンジにシンクロ率を抜かされた事で砕けてしまつた。

さらにミサトに優しくされるシンジを見て、アタシは細かい事にも疑いの目を向けるようになつてしまつていた。

才能を開花して急成長したシンジだけがミサト達に評価されている、そしてシンジもアタシを見下していると思い込んでしまつた。

アタシの方からシンジを遠ざける態度を取つてしまつたんだから、アタシはシンジに嫌われて当然だと思つていた。

あの紅い空の広がる世界でアタシの名前を必死に叫んでいるのシンジの声を聞くまでは。

誰も居なくなつたミサトの家でアタシは楽しかつた思い出の欠片を集めようと、いろいろな場所を調べ回る。

そしてシンジの部屋の中を調べた時、アタシは息が止まりそうになるほど驚いた。

シンジの机の上有る卓上カレンダーを見ると12月4日、つまりアタシの誕生日に印が付いていたのだ。

こんな冷たい性格のアタシでもシンジは受け止めてくれるのか、それともアタシの明るい面に憧れていただけなのか……。

期待と不安が入り混じつた気持ちに急かされてアタシがシンジの机をさらに調べると机の中から様々な通信販売の雑誌が出て来た。アタシの過去の記憶の糸をいくらたどつてもおかしいと思う、ミサトと暮らしていた頃はシンジは女性誌に興味を示さなかつたはず。

むしろ派手に買い物をするアタシを無駄遣いと非難していた程だったのに。

ならばシンジが雑誌を買い込んだのはアタシが家出をした後になる。雑誌を開くと「ティベア、オルゴール、ティーカップなど様々な品物に印が付けられていた。

アタシにどんなプレゼントを贈ろうと思いついたのか、シンジの姿が思い浮かぶと同時に胸が熱くなる。

シンジはアタシに手を差し伸べようとしてくれていたんだ……！ けれど嬉しさと同時に湧きあがつて来る激しい自己嫌悪。

ずっと前に向き合えるチャンスはあったはずなのに、心を閉ざしてしまっていたアタシはシンジの気持ちに応える事はしなかった。

あの時使徒との戦いに敗れてアタシは負けたくないと思つていたフーストに助けられたと言う屈辱感で胸がいっぱいだつた。だからシンジに優しい言葉を掛けられても、アタシは全て好意的には受け取れなかつた。

「良かつたね、アスカ」

シンジはアタシの無事を純粋に喜んでそんな言葉を掛けたのだと思う。

けれどその時のアタシはシンジの声の明るく軽い響きが他人事で言つているように聞こえたのだ。

アタシは使徒の攻撃を受けた時、ミサトの退避命令に逆らつた。

連敗続きのアタシは式号機のパイロットから降ろされたくない気持ちが強かつた。

その反面アタシはワガママだと自覚しながらも、あの時のようにシンジが助けに来てくれるとなれば期待を抱いていた。

だけど、結局最後まで初号機は出撃しなかった。

シンジに理由を問い合わせたら、父さんの命令だから仕方無いと答えるのは目に見えてる。

でも、アタシは参号機が使徒化した事件の時、初号機で鈴原を殺してしまいそうになつた事を知つたシンジは司令に反抗したのを知つている。

アタシは別に鈴原にヤキモチを焼いているわけじゃないけど、同じぐらいシンジは怒つてくれても良いんじゃないかと思つた。さらにシンジはアタシにダメ押しとなる言葉を投げかける。

「アスカ、次があるんだから、その時に頑張れば良いじゃないか」「何ですって！？」

これでアタシの短かつた堪忍袋の緒が切れてしまった。

「何よ、その上から目線の言い方は！ シンクロ率でアタシに勝つたからって、天狗になつてるのね？」

「別に僕はそんなつもりじゃ……」

「何が『頑張れ』よ！ アタシはアンタより長くエヴァの訓練を受けてるのよ！」

「アスカ……」

シンジが反論しようものなら、アタシは3倍にして叩き返してやつた。

今思えば、同じ年のシンジに加持さんのような寛容さを求めたアタシの方に非があった。

アタシは自分の臆病さを隠すために差し伸べられた手を振り払つてしまつたのよ。

シンジから逃げ出したアタシはヒカリの家へと転がり込んだ。

突然の訪問にもかかわらず、ヒカリは何も言わずに暖かく迎え入れ

てくれた。

そしてアタシが話したくなるまで、ヒカリは黙つてアタシの側で待つってくれていた。

もしヒカリがしつこくアタシに声を掛けたたら、アタシは居た堪れない気持ちになつていていたと思う。

そのヒカリの心づかいが嬉しかったアタシは、ヒカリに正直に今まで何があつたのかを洗いざらい話した。

ヒカリはアタシの勝手な言い分を否定する事無く聞いてくれた、そしてアタシにシンジやミサトと仲直りすべきだと急かして来る事もしない。

アタシが家に帰りたくないと言つと、ヒカリはアタシに尋ねる。

「アスカは碇君や葛城さんの事が嫌いなの？」

「嫌い、嫌い、大嫌い！ 同じ部屋の空気を吸つていいだけで気持ち悪くなつてくるわ！」

「そつか、じゃあアスカの好きなだけここに居て良いよ」

ヒカリの言葉を聞いて、ここを追い出されたら他に行く所が無かつたアタシは心の底からホッとした。

だけど、アタシはヒカリにもウソをついていた。

アタシが一番嫌いなのはミサトでもシンジでも無く今のアタシ自身だつたのよ。

シンジやファーストと顔を合わせるのが嫌だつたアタシは学校に行かずにはヒカリの家に引きこもつた。

ヒカリが学校に言つている間、アタシはヒカリに教えてもらつたよう掃除、洗濯などの家事をする。

アタシがミサトの家に居た頃はシンジに押し付けていた家事に今頃になつて励むのは、家事をしている間は寂しさを忘れる事ができるから。

そして、ヒカリから感謝の言葉を聞くのも楽しみになつた。

でも、そんな日も長続きしなかった。

新たな使徒が襲来して来たのだ。

招集命令を受けたアタシは応じないわけにはいかない、アタシはエヴァのパイロットだから日本に居られるんだもの。

だけど気の進まないアタシはかなり遅れてネルフ本部に到着したから、すでにシンジとレイは出撃準備を終えていた。

アタシは制服のまま急いで式号機に乗り込む事になった。初号機は碇司令の命令で凍結中だつたから、零号機と式号機で使徒を迎撃する事になった。

「アスカ、レイ、ATTフィールドを展開して使徒をパレットガンで攻撃、いいわね？」

「了解」

「アスカ、聞こえているの？」

「聞こえているわよ」

アタシはミサトに対してぶつきらぼうに返事をした。エヴァが地上へと射出され、アタシはエヴァを移動させて近くの兵装ビルに用意されたパレットガンを取りに走ろうとした。だけど式号機は全く反応を示さなかつた。

「式号機、シンクロ率がほぼ0%です！」

マヤの報告を聞いてアタシはショックを受けた。

ミサトの判断により、式号機はケージへと回収された。

地上ではファーストと使徒との戦いが始まつた、そしてファーストがピンチになると司令はすぐに初号機の出撃を命じた事にアタシは

さらにショックを受けた。

司令にとつて、ナルフにとつて、ファーストの方がアタシより大切な存在なのか。

だけど、ファーストはその使徒との戦いで自爆した。

ファーストに激しい嫉妬を燃やしていたアタシはこの時はファーストの死を悲しむ気持ちなど全然持てなかつた。

そしてそれは戦えるエヴァが減つてしまつた事を意味する。

ミサトはアタシを立ち直らせようとして必死に起動実験を続けたけどアタシのシンクロ率は上がる事は無かつた。

アタシには解つていた、アタシにエヴァに乗る事を拒否する気持ちが芽生えてしまつたからだ。

表面に出していいその気持ちを式号機は敏感に感じ取つてているのだろう。

やがて司令がやつて来てアタシのシンクロテストの中止を宣言する。

「これ以上の実験は時間の無駄だ」

「しかし、アスカにもう一度チャンスを与えては頂けませんか?」

「シンクロ率ゼロのチルドレンなど使い物にならん、代わりを手配する」

司令の死刑宣告を聞いたアタシは、何かの糸が切れたような気がした。

そしてアタシの意識は闇に飲まれて行つた……。

次にアタシが気が付いたのは、式号機のエントリープラグの中だつた。

シンクロ率ゼロを宣告されていたアタシはどうせ動かせないだろうと思いながら式号機を操縦するレバーを握つた。

やつぱつ光輝機は何の反応を示さなかった。

「どうせアタシは生きている価値の無いロボのチルドレンなのよ…
…もう生きているなんて嫌、消えててしまいたい…」

そつづぶやいてアタシがレバーから手を離そつとした時、アタシの
目の前に突然イメージが広がった。

それはアタシが小さい頃ママとピクニックに行つた懐かしいヒマワ
リ畑。

あれから10年近く経つた今までもアタシはたまに独りでヒマワリ
畑の中に立つている夢を見る。

ずっとアタシは独りぼっちで、いつまで待つてもママは迎えに来て
くれなかつた。

でも、今回はいつもと違つて待つててアタシの所にママがやつて
来てくれたのよ……！

アタシは現れたママの胸に飛び込んで泣きじゅぐ、ママもそんな
アタシを黙つて優しく抱きしめてくれた。

この感覚は式号機とシンクロした時に感じる安心した気持ちに似て
いる……そつか、式号機がアタシを拒絶したんじやない、アタシの
方から式号機の心、ママの愛情を遠ざけていたのよ。

「ママ、ありがとう。アタシ、もう一度頑張つてみるー。」

アタシがママから体を離してやうやく、ママは何も言わずに微笑
んでアタシをそつと送り出してくれた。

式号機とのシンクロ率が戻つたアタシは攻めて来た戦略自衛隊を軽
く蹴散らし、アンビリカルケーブルを切断されても恐れる物は何も
無かつた。

だけど、敵はエヴァ量産機を9体も投入して來た。

シンジの初号機がアタシを助けに來た時は、すでにアタシの乗る式

号機は量産機の武器によつて機体をズタズタにされていた。

乗つていたアタシも無事では済まなかつた。

鋭い痛みと共に体中から血が流れ出し、だんだんと体が冷たくなつて行くのをアタシは感じながら意識を薄れさせて行つた……。

そして再び意識が戻つたアタシはあの紅い世界でシンジの叫びを聞く事になる。

そんなシンジにアタシは自分の気持ちを何も伝える事が出来なかつた……。

マヤはシンジが帰つて来ないのは死んでしまつたのではないかと言うけど、アタシはあの赤い世界でシンジが生きているのを見ている。重体だつたアタシが生きているのだからシンジが死んでいるはずは無い。

アタシの方からシンジを探して連れ戻そつとも考えたけど、今のアタシにはシンジの気持ちも理解できる。

こちらからシンジを追い回す事は、シンジを余計に追い詰めてしまう事になる。

ヒカリもママもアタシに向かつて無理に頑張れとは言わないでじつと見守つてくれた。

生きていればシンジはきっとこの場所へ帰つて来ると考えたアタシは、ここでシンジを迎えるつもり。

ヒカリはアタシと同じ街で暮らせない事を寂しいと言つてゐるけど、アタシの気が済むまで頑張れと応援してくれた。

アタシは暖かい思い出の詰まつたコンフォートーハのこの場所でシンジに自分の気持ちを伝えたいと思つ。

けれど、アタシは独りでこの家に居ると寂しくてたまらなかつた。シンジやミサトとの思い出はアタシの心を温めてくれるけど、冷めてしまつた時に寒さが余計に身にしみる。

使徒との戦いを繰り広げた夏が終わり、秋がになつてもシンジは姿を現さなかつた。

気が付けばもう12月、秋が終わり冬が始まる季節だ。

11月までは暖かい日もあつたけど、12月になると気温もぐんと下がる。

天気予報を見ると、夕方から雪が降り始めるみたいだ。

毎朝ベッドから出るのも気合が要るよつになつた。

そう言えど、アタシはいつも朝起きるのをグズつてシンジを困らせていたつけ。

あれはシンジに對して素直になれないアタシのシンジへの甘えだつた。

さらにアタシはわざと露出の多いネグリジェなどを着て下着を見てあわてるシンジをからかつたりした。

だめだ、シンジとの楽しい思い出を思い返すと心が温かくなるけど、またすぐに寂しさがぶり返す。

今日は休日だからこのまま起きずベッドの毛布に包まつてこようかと考えていると、アタシの元に小包が届いた。

驚いたアタシはあわててヒカリに電話をすると、ヒカリはその小包はアタシへの誕生日プレゼントなのだと告げた。

言られてカレンダーを見ると今日は12月4日、アタシの誕生日だつた。

どうしてヒカリがアタシの誕生日を知つているのかと尋ねると、マヤがヒカリに教えたらしい。

マヤは仕事が忙しくてアタシに構つてあげられない代わりに、ヒカリにアタシを元気付けるように頼んだと言つ。

小包を開けるとその中にはフリルのついた女の子向けの服と、真つ赤なりボンが入つていた。

そして箱にはヒカリからのメッセージカードもあつた。

『15歳の誕生日おめでとう、アスカ。たまにはオシャレもしない

と、碇君に嫌われちゃうわよ。』

言われてみれば、アタシは新しく通い始めた学校の制服以外、洋服を買ひ事はしなかった。

近くにお店は無いし、生活必需品の事しか頭に無かった。アタシはヒカリがプレゼントしてくれた洋服に着替えてみた。

そう言えど、アタシはラフな格好ばかりしていたから、フリルやリボンのついた白いブラウスを着るのは初めてかもしない。鏡に映つた自分の姿を見ると、いつもと違つた感じがする。でも、こういう格好をした自分も悪くないかなと思つて、ヒカリに感謝した。

シンジだつたら、こんなアタシを見てどう思ひだらつと考えてアタシはまた悲しくなつた。

気が付くとアタシはシンジを半年近く待ち続けて居たのだ。

「シンジ……シンジに会いたいよ……」

自然とアタシの口からそんな言葉が出て來た。

明日にはシンジが帰つて来て欲しいと思つた事は何度もある。

今までずっと耐えて抑えて來た気持ちが涙となつてあふれ出して來た。

インターフォンが鳴らされたけど、どうしても泣くのを止められず、応対する事はできなかつた。

それでも相手はアタシが家に居る事を確信しているのか、インターフォンはしつこく鳴らされた。

アタシは腕で強引に顔をこすつて涙を拭いて玄関のドアを開いた。するとアタシの目に飛び込んで来たのはプラグスースを着たシンジの後ろ姿だつた。

「シンジ、行かないで！」

アタシが呼び止めると、シンジは驚いた顔で振り返った。

それから、アタシを見て少し戸惑った表情になつて、シンジに向かってアタシは笑顔を作つて告げる。

「……おかれり」

「……ただいま」

アタシの言葉を聞いたシンジは嬉しそうな笑顔になつた。

それ以上アタシとシンジの間にさらなる言葉は必要なかつた。アタシを避けずにじつと真つ直ぐ見つめてくれるシンジの目を見れば、アタシの気持ちがシンジに伝わった事が分かるから。疑心暗鬼になつてシンジを傷つけてしまつた事をずっと謝りたいと思つていたアタシの願いはかなつたのだ。

そしてシンジは照れ臭そうな顔になつてアタシに話す。

「アスカ、誕生日プレゼントだけど何が良いのか思い付かなかつたんだ」

「別にいいわよ、アタシはシンジが帰つて来てくれただけで他に何も要らない」

アタシはそう言つてシンジの胸に飛び込んだ。

外では予報通り雪が降り始めたけど、アタシの心はとても温まつっていた……。

シンジとアスカは今日、子供達の七五三だと書いた事で朝から大忙しだった。

アスカが鏡の前でポーズをとつて悩んでいる横で、シンジは元気良く走りまわる男の子を追いかけている。

「ひら海^{カイ}、じつとしてないと靴下^{カイ}が履けないじゃないか」

シンジがそう言つてもカイは動きまわるのを止めなかつた。

「まったく七五三は子供が主役だつて言つたが、アスカがおめかしてビタリあるのよ」

ミサトが苦笑しながらアスカに声を掛けた。

そのミサトの側では今年七歳になるミサトの娘、アカリが三歳になるアスカの娘、愛美^{エミ}の事をあやしていた。

自分の娘がちょうど七五三を迎えるのでカイとエミと一緒に近くの神社で記念写真を撮る事にしたのだ。

「だつて一生に一度のイベントだし、恥ずかしい写真が残つたら嫌じゃない。やっぱりドレスじゃ無くて着物の方が良かつたかな? ねえねえ、ドレスと着物、両方撮るつて言つのはどう!-?」

「ちよつと、あんたねえ……」

着物姿のミサトはあきれた顔でため息を吐いた。

ネクタイを締めてスーツを着たシンジは11月だと書いたのに汗だくになつて助けを求める。

「アスカもカイに靴下を履かせるのを手伝つてよ、ミサトさんでも良いからさ」

「あはは、カイ君は私の事をポンポンと叩くから苦手なのよ。その点、女の子は良いわよね扱いやすくて」

ミサトは笑顔でそう言つてHIMIの頭を撫でた、シンジを助けようとする気は無いようだ。

「ミサトは歳を取りすぎてカイの面倒を見るのには荷が重すぎるわね。40代後半突入となると腰とか辛いんじゃない？」

「バカ言いなさい、私は元戦略自衛隊の士官よ、体力には自信があるわ。息子のユウキも今のアスカ達とそんなに変わらない歳の頃に産んで育てるんだし」

ユウキとは今年10歳になるミサトの長男で、ミサトが30歳、アスカとシンジが15歳の時に生まれた元気で明るい男の子だ。

今日は友達とサッカーをする約束をしているので、妹のアカリの七五三に付き合つのは断つたそうだ。

シンジはやつとカイを捕まえて靴下を履かせ、準備万端と行きたい所だったが今度はトイレに行きたいと言い出した。

HIMIは三歳でまだおしめをしているのだが、カイは幼稚園に行くようになつておしめをとつていたのだ。

しかし、トイレに行くのが遅れてリビングのカーペットを濡らした事は何回もある。

「んもう、仕方無いわね！」
「ママ怖ーーー」

苛立ちを隠さないアスカの様子にHIMIが怯えた仕草をした。アスカはいそそとカイを抱えてトイレと入つて行った。

「アスカママは怒鳴つたりして怖いわよね、じゃあササギお母さん
の子になる?」

ミサトはさう言つてHIMI元微笑みかけるが、HIMIはぶつつと横を向
く。

「バアバは嫌」

「振られちゃいましたね」

HIMI即座に拒否された事と年寄り呼ばわつされてダブルショック
で凹むミサトにシンジは慰めの声を掛けた。
カイがトイレから出た後、アスカ達は慌ただしく玄関で子供達に靴
を履かせる。

「HIMI、カイ! お座りしないと靴が履けないとショウ...?」

HIMIでもやんちゃ盛りのカイに座りせるだけで一苦労だ。
靴を履かせたと思つたら蹴り飛ばしてしまつ事もあつててんてこ舞
いだつた。

神社まではシンジの運転する車で慎重に向かつた、やつぱりミサト
の運転は荒っぽく、酔つてしまつ事があるからだ。

七五三の参拝をする神社に到着したシンジはカイの手を引いて社務
所へと顔を出す。

予約の時間までしばらく待たれることになつたシンジはカイが暴
れて服を汚してしまわないようにお菓子でご機嫌をとつていた。
アスカは他の参拝客から娘のHIMIと共に褒められてまんざらでもな
い顔をしている。

自分を含めて自分の娘は可愛いと言つて当然だと思つのがアスカ
らしさ。

そしてシンジ達の順番になり祝詞を上げてもらうために本殿に入つたのだが、アスカは一礼するのを忘れてミサトに注意される。

「そんなことじや神様に嫌われちゃうわよ？」
「う、ごめんなさい」

ミサトは冗談めかして言つたのだが、アスカは見ている方が恥ずかしくなるほど真剣に謝つた。

祝詞の儀式が終わつたシンジ達は帰りに神社のお参りをする。アスカはためらいも無く5,000円札を取り出し、たい銭箱に入れて鈴を鳴らして何度もお辞儀をした。

「アスカ、そんなにお祈りしなくたつて神様は願いを聞き入れてくれるよ」

「普段からそれぐらい神様に感謝していれば慌てる必要は無いのにね」

「だつてさ、大切な事じやない」

ミサトに言われて、アスカは少しむくれた表情でそう答えた。

「ほら、今度は記念写真を撮るんだからそんな顔をしていや無しだよ」

「そうね」

シンジに言われてアスカはしかめつ面をするのをやめた。予約をしていた『スタジオ リ』は神社の向かいにあつた。売り上げの30%が七五三シーズンと言われている評判の写真館。入口に飾られた七五三写真を見てアスカは期待に満ちた表情になる。

「うーなら、カイヤエミを可愛く撮つてくれそうね」

「アカリも居るのよ、忘れないでちょうだい」

自分の家の子供しか目に入っていないアスカに、ミサトは釘を刺した。

ミサトの長男ユウキが生まれた時は中学三年生、ミサトの長女アカリが生まれた時は高校三年生だったシンジとアスカは良く二人を可愛がった。

だからアカリはアスカに懐いていたのだが、エミが生まれてから自分の子を猫かわいがりするようになると温度差を感じてしまつているようだ。

その後エミとカイ、アカリの三人が姉妹のように並んで写真を撮影した。

元気良く駆け回っていたカイもこの時は緊張してひきつた笑みを浮かべている。

写真を撮り終つて緊張から解放されたカイはシンジにおねだりを始める。

「パパ、マリオー」

「分かつてゐる、約束だからね」

シンジは七五三のお祝いに『スーパー・オブ・ラザーズ』をカイに買ってあげる約束をしていたのだ。

「はいはい、解つてゐつて。エミにも『リキュア』を買ってあげるから」

不安げに見つめるエミに向かつてアスカは微笑んだ。

「しつかし、最近キュア ディとかジュエル トとか色々増え
て覚えきれないたらありやしない、そう思わない?」

「別に覚えられますけど」

「それってやつぱりミサトが年寄りって事じゃないの？」

共感を得ようとしたミサトはシンジとアスカに言われて思い切り凹んだ。

そんなミサトを娘のアカリが慰めている。

帰りにシンジ達は車でテパートに寄りおもちゃを買って帰宅した。

「やあシンジ君、『苦勞だったね』

シンジの家ではミサトの夫となつた元ネルフのオペレータ、日向マコトが料理を完成させて待つていた。

日向はシンジ達が神社に行つている間にスーパーで材料を買って料理を作つてくれていたのだ。

使徒戦で加持リョウジが命を落として落ち込んだミサトを励まして、いた日向が耐えきれずに自分の気持ちを打ち明けると、ミサトは日向のプロポーズを受け入れて夫婦となつた。

アスカは加持の事をすぐに忘れてしまつていいのかとミサトに反対したが、今はミサトと和解している。

結婚してもミサトの家事能力はアレだったので、日向が料理などを率先して行つてこらのだった。

「うわあ、おこしちうね。日向さん、ありがと。ほら、カイもエミも日向さんにお礼を言つのよ」

「ありがと……」

「ありがとー」

エミは日向に笑顔を向けてお礼を言つたが、カイはそっぽを向いてブツブツとお礼を言つた。

どうやら買つてもらつて手に持つているマ オの最新ソフトの方に

夢中になつてゐるようだ。

「はは、どう致しまして」

田向はそんなカイの様子に苦笑しながらそつ返した。
そして田向の作った料理で賑やかな食事が始まる。

「カイ、 しつかつと落ち着いて食べなさい。 食べなことマ オはお
もぢや屋さんに返しあげつわよ」

アスカがカイをあやしながら食べさせようとする。

H///ヒアカリは言われ無くても料理をたくさん食べていた。

「これで七五三のお祝いは無事に出来たね」

「うそ、 カイとH///にはずっと幸せで長生きしてもらいたいわ」

シンジとアスカはそつと見つめ合つた。

七五三は子供の幸福と長寿を願う大切な行事。
自分達がしてもらつた事の出来なかつた分だけ、 シンジとアスカは自
分の息子と娘に七五三をしてあげられてとても嬉しかつたのだ。

「記念写真が出来上がるのが楽しみね、 きっとH///は可愛いくてつて
いに違ひないわ」

「アスカ、 そんなに可愛いってH///はちゃんを持ち上げると、
将来自信過剰になつちゃうわよ」
「アカリちゃんみたいに?」

アスカとシンジもH///サトの娘のアカリが小さこ頃にはしゃがん可憐
いともてはやしたものだった。

七歳になつた今でも将来モデルさんになると自信のほひをつかがわ

せている。

「それじゃあ、あんまり可愛い」とほめるのも考え方のなかな……」

「何を言つているのよシンジ、HIIは本当に可愛いんだから問題無いじゃない！」

「どこのまでも娘を溺愛するアスカなのだった。できあご

おまけ超短編

- - - - -

いつものようにアスカと連れ立つて登校したシンジは自分の席に着くと机からピンクの便箋がはみ出しているのが見えた。

「何だこれ？」

「不幸の手紙かいな？」

「バ、バカじゃないの、不幸の手紙がそんなかわいい便箋に入つている訳が無いじゃないの！」

アスカは少し慌てた様子でトウジに指摘をした。

シンジが便箋を開けて中を開くと、『話したい事があるので、放課後に体育館裏へ来て下さい』と書かれた紙が入つていた。

「これってラブレターだよな？」

「ラ、ラブレターですって！？ ど、どこのシンジなんかを好きになる物好きがいるのかしら？」

ケンスケの言葉を聞いて、アスカはそう叫んだ。
アスカの大声に教室中の視線が集まる。

「これを書いたのはアスカだよね？」

「どうして、そ、そんな事言うのよ！」

「そんなに顔を真っ赤にしてたらバレバレやないか」

沸騰しているアスカに対してシンジは至つて冷静に話し掛けた。

「どうせ僕をからかうつもりだつただろう」

「そ、そ、う、よ、ア、アタシがシンジに恥ずかしくて告白できないからつてラブレターなんて書いて、朝早くシンジの机に入れておくなんてするはずないじゃない」

もはやただ漏れになつていてるアスカの態度を見て、シンジも顔を赤らめる。

「えつ、もしかしてアスカは本当に僕の事を……？」

「だ、だからシンジまでどうして赤くなるのよつ！」

「放課後じや無くて、今この場で告白してしまえよ、惣流」

ケンスケに言われてアスカはノックダウンして倒れてしまった。

「まったく、アスカつてばウソがつけない性格だつて自覚していいのかしら」

保健室にアスカを運ぶ事になつてしまつたヒカリはため息をついてそつぼやくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n11331/>

(11/14 エヴァ更新)エヴァ、ハルヒ、空の軌跡短編集

2011年11月17日17時10分発行